The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	都市生活においてオフィスワーカーが構築する『場所』に関する環境行動論的研究
Author(s)	林田, 大作
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2435
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

工甲 9897

都市生活においてオフィスワーカーが構築する『場所』に関する環境行動論的研究

2004 年

林田　大作

都市生活においてオフィスワーカーが構築する
『場所』に関する環境行動論的研究

2004 年

林田　大作

目　次

第１章　序論

1.1. 研究の背景、目的、意義

1.1.1. 場所が無い都市 ・・・1

1.1.2. 建築および都市の計画者・デザイナーと都市生活者の乖離（GAP） ・・・2

1.1.3. 都市生活における『場所構築』 ・・・5

1.1.4. オフィスワーカーとサードプレイス ・・・6

1.1.5.『場所構築』の過程とアフォーダンス ・・・7

1.2. 研究の方法 ・・・7

1.3. 用語の定義 ・・・8

1.4. 論文の構成 ・・・9

注 ・・・12

参考・引用文献 ・・・13

第２章　『場所構築』研究の課題と既往研究

2.1. 本章の目的 ・・・15

2.2. 本研究に関する主な論点と既往研究

2.2.1. 都市生活の質 ・・・15

2.2.2. 都市生活の質の向上を目指すデザイン論 ・・・16

2.2.3. サードプレイス ・・・16

2.2.4.「サードプレイスが無い」という都市生活者の感覚 ・・・17

2.2.5.『場所構築』というとらえ方 ・・・18

2.2.6. 場所の概念 ・・・19

2.2.7.『場所』における人間－環境関係 ・・・21

2.2.8. 人間-環境関係への認知心理学的アプローチ ・・・23

2.2.9. 人間-環境関係への生態学的アプローチ ・・・28

2.2.10. 本研究における『場所』へのアプローチ ・・・29

2.3. 本研究における課題 ・・・30

注 ・・・32

参考・引用文献 ・・・34

第３章　職場周囲に構築される『場所』

3.1. 本章の目的 ・・・39

3.2. 調査対象の概要

3.2.1. 神田および品川の地域・職場の概要 ・・・39

3.3. 調査の概要

3.3.1. 調査方法 ・・・41

3.3.2. 予備調査の概要 ・・・41

3.3.3. 本調査の概要 ・・・45

3.4. 本調査結果と考察
3.4.1. 職場周囲に構築されるサードプレイス ・・・48
3.4.2. 両地域の代表的なサードプレイス ・・・53
3.4.3. 職場周囲の歩きまわりルートと代表的なサードプレイスの関係 ・・・56
3.5. まとめ ・・・59
注 ・・・61
参考・引用文献 ・・・62

第4章　環境移行に伴う職場周囲の『場所構築』の変容
4.1. 本章の目的 ・・・63
4.2. 調査対象・調査方法 ・・・63
4.3. 調査結果と考察
4.3.1. 考察の方法 ・・・63
4.3.2. 職場周囲のサードプレイス構築の変容 ・・・66
4.3.3. 職場周囲の歩きまわり行動の変容 ・・・72
4.4. 認識された環境変化から見た職場周囲の生活の変容 ・・・77
4.5. 個人状況の変化と職場周囲の生活の関係
4.5.1. 生活優先度の変化 ・・・80
4.5.2. 業務繁忙度の変化 ・・・82
4.5.3. 個人状況の変化と職場周囲の生活の変容 ・・・84
4.5.4. 個人状況の変化とサードプレイス構築の関係 ・・・84
4.6. まとめ ・・・86
注 ・・・88
参考・引用文献 ・・・88

第5章　オフィスワーカーの生活圏に構築される『場所』
5.1. 本章の目的 ・・・91
5.2. 調査対象・調査方法
5.2.1. 調査対象 ・・・91
5.2.2. 調査方法 ・・・91
5.3. 調査結果と考察
5.3.1. 考察の方法 ・・・93
5.3.2. 建築・都市施設用途から見た「居心地の良い場所」 ・・・96
5.3.3. 生活圏における「居心地の良い場所」の位置 ・・・98
5.3.4.「居心地の良い場所」と居住年数の関係 ・・・100
5.3.5.「居心地の良い場所」を訪れる頻度 ・・・106
5.3.6.「居心地の良い場所」における滞在時間 ・・・108
5.3.7.「居心地の良い場所」における同伴者 ・・・111
5.4. まとめ ・・・113
注 ・・・114
参考・引用文献 ・・・114

第 6 章　『場所構築』のきっかけと環境への働きかけ

6.1. 本章の目的 ・・・115
6.2. 調査対象・調査方法 ・・・115
6.3. 調査結果と考察
6.3.1. 「居心地の良い場所」を構築するきっかけ ・・・118
6.3.2. 「居心地の良い場所」における環境への働きかけ ・・・122
6.3.3. 慣れるための工夫における働く環境への働きかけ ・・・126
6.4. まとめ ・・・128
注 ・・・129
参考・引用文献 ・・・130

第 7 章　『場所』の様態表現に関する基礎的考察

7.1. 本章の目的 ・・・131
7.2. 調査対象・調査方法 ・・・131
7.3. 調査結果と考察
7.3.1. 考察の方法 ・・・134
7.3.2. 自由記述表現における「する」「なる」「である」 ・・・136
7.3.3. 代表的キーワードにおける「居心地の良い場所」の人間 - 環境関係 ・・・143
7.3.4. 居心地が良い理由における「する」「なる」「である」 ・・・149
7.3.5. 『場所』の様態表現における『場所のアフォーダンス』 ・・・157
7.4. まとめ ・・・157
注 ・・・159
参考・引用文献 ・・・160

第 8 章　総括および今後の課題

8.1. 各章の要約 ・・・163
8.2. 本研究の成果 ・・・164
8.3. 今後の課題と展開 ・・・165

参考・引用文献一覧 ・・・167
研究業績 ・・・174
付録 ・・・177
謝辞 ・・・195

第１章　序論

1.1. 研究の背景、目的、意義

1.1.1. 場所が無い都市

今日、わが国の都市整備は一段落したと言われる。すまいとしての住宅、生活に必要なものを購入する商業施設、職場としてのオフィスや工場、学校・病院等の公共的な施設、交通に必要な駅や道路などは、いずれも「都市生活を支えるための基本的な場所」であり、戦後の高度成長期からバブル期に至る数十年間に急激に整備されてきた。今日、これらの場所が都市の生活環境に整備されているために、都市生活者は利便性の高い都市生活を送ることができる。しかし、実際に都市生活を送ってみると、依然として「場所が無い」という感覚を抱くことが多く、「都市生活は決して快適とは言えない」と実感することが多い。

「場所が無い」という感覚は、以下の異なる３つのレベルがあり、都市生活者それぞれの立場・状況・ライフスタイルなどによって性質が異なると考えられる。

①基本的な場所が整備されていない。
②公共的な場所が整備されていない。
③整備されていても場所にならない。

①は、上述の「都市生活を支えるための基本的な場所」が整備されていないレベル[注1]であり、最も優先して考えられるべきであろう。

②は、基本的な場所があるだけでは快適感を得られないレベルである。人々が集まり、種々の社会的活動が行われる駅前や商業地、オフィス街などには、ある程度の規模や公開性・公共性が必要である。日本の都市は欧米の都市と比べ、公共空地の割合が低いと言われ、公園・広場・街路などの物的な整備は未だ十分とは言えない[注2]。また、ラッシュアワーにおける公共交通機関や街路の混雑、週末における繁華街の混雑を見ると、公共施設の物的な狭隘さ、動線処理のつたなさを感じる[文2]。本来の公共空地や公共施設は、公開性・公共性を持ち、都市生活において自分の周囲の「見知らぬ人」と空間を共有しながら居る機会を与えてくれる「公共的な場所」でなくてはならない。Gehl[文3]は、「公共的な場所では低い濃度のふれあいが達成される」と述べ、都市生活における公共的な場所の重要性をふれあいの点から指摘している。わが国においても、近年はオープンカフェや都市の水辺など、公開性・公共性を担保する施設や設備も見直され、都市の中に「公共的な場所」が増えてきたが、都市生活において日常的に見つけられ、たやすく利用できる状況とは言いがたく、その場所の使い方や都市生活における意味なども十分に議論されているとは言えない。

①や②は、主に物的な都市整備によって、ある程度まで解決が図られるレベルであるが、③は社会的・文化的な環境のあり方や、都市生活者の心理や行動を十分考慮する必要があるレベルである。例えば、駅や電車内、図書館、浴場などの公共的な場所で頻繁に見かけるマナーに関する注意書（「他のお客様の迷惑にならないよう、注意しましょう」など）は、

その場所が快適な場所として成立するためには、そこに居る人のマナーが不可欠であることを示している[注3]。また、美術館・博物館における学芸員（スタッフ）や公園の警備員、店のオーナーなどがその場所に常駐してサービスを提供する場合、彼等の存在はその場所の性質を形成していると言えよう。その他、「一人で居たいのになかなか一人で居る場所がない」「ちょっと一息つきたいのに一息つく場所がない」などの感覚は、都市生活の中で日常的に抱く感覚であるが、「物的にはなんらかの整備がなされているが、私はそこではそうする気になれない」などという対物的な感覚と、「他の人がその場所に居て、なんらかの行為を行っているために、そうする気になれない」などという対人的な感覚が入り混じっていると考えられる。

鈴木は、都市の中に人（人々）が居る場面を、「居方」という概念で論考している[文5]。都市の公共的な場所は、そこに居る人（人々）を含めた周囲の環境、および主体とがある関係性を持つ場合、感動的な視覚的体験を与えてくれる。本来、都市はそのような可能性を持っており、それが都市の面白さでもある。

しかし現代の都市は、このような体験を与えてくれる場所が少なく、整備されても場所にならない状況でもあると考えられ、このことは、都市の場所に関して質的な議論を進める必要性を示していると考えられる。

本論文は、主に前述の②、および③のレベルを取り扱い、「都市生活者が豊かな場所を持てる」ための建築および都市の計画・デザインの知見を抽出することを目的とする。

1.1.2. 建築および都市の計画者・デザイナーと都市生活者の乖離（GAP）

建築および都市の計画・デザインに携わる者は、これまで数多くの建築物や都市の整備に取り組み、実績を上げてきた。交通渋滞・悪い住宅事情・大気汚染・騒音・自然環境の少なさや、防災や治安の面で問題を残す未整備の密集市街地など、いわゆる「都市問題」にも取り組み、物的な都市整備に関連して、社会的・環境的な活動も数多く行ってきた。

しかし、これら計画・デザインされた空間で都市生活者が生活する際に、「計画者の想定しない使われ方」が見られることは珍しくない。都市生活者が不満を感じている場合もあれば、特に意識されない場合もある。「L字形歩道に見られるショートカット」「横断歩道を渡らず、渡りたい経路で道路を横断する」「一休みする空間がない一直線の街路」「遠回りしなくてはならないスロープ」「座るために計画されながら、誰も座らないベンチ」などはその典型である[注4]。「目的地が見えているのにわざわざ遠回りさせられるわずらわしさ」「座るには配置や座り心地が悪すぎるベンチ」は、計画・デザインされた空間への不満を募らせる。生活者の生活に貢献しない計画・デザインは、もはや本来の意義を失っており、計画者・デザイナーへの信頼を損なわせる[注5]。「竣工後、大量にサインや案内を壁や柱に取り付けなければならない、わかりにくい建築物」「通路として計画・設計されたが、竣工後、ラウンジとして使用される」なども、計画者の意図と生活者の活動との乖離（GAP）を示す例である。

一方で、むしろ計画のはざまに埋もれ、計画・デザインされなかった空間が、図らずも場所として成立している場面によく出会う。「橋の下の日陰」「電柱と壁の間」「車止めのU字ポール」などは、子供や子連れの主婦などが遊び場やお喋りの場として好み、「外部階段」「屋上」「腰の高さの壁」などは、天候によって、また灰皿・携帯電話などの持ちこみによって、「交流の場」として成立していることもある。

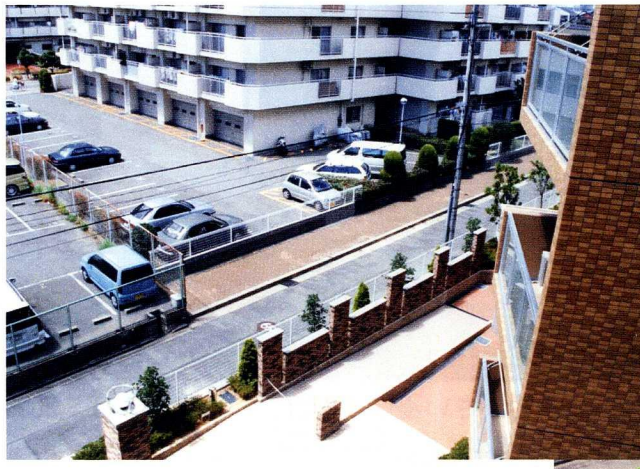
（上）写真１−1、（下）写真１−2　乖離（GAP）が比較的小さい場所の例（さいたまひろば，2000 年）

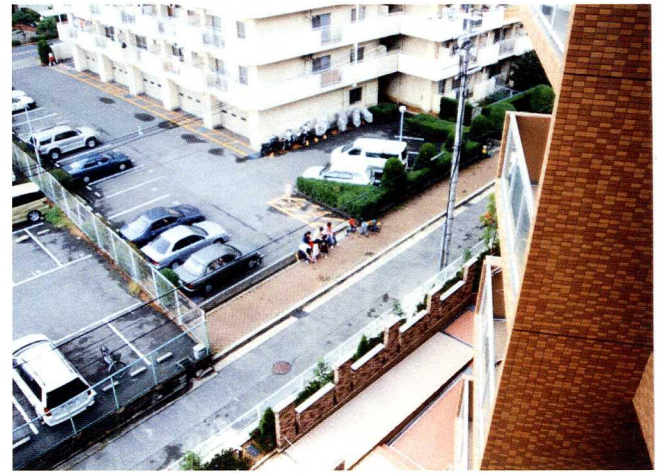
写真１−3　乖離（GAP）が比較的大きい場所の例（吹田市北千里，2002 年）

これらの乖離（GAP）は、予め「空間の機能」を設定し、その機能に応えるという「機能主義的な計画手法」が、その間接的なプロセスにおいて有する特質でもあり、建築および都市の計画・デザインの現場に色濃く残っている。

Min は、この乖離（GAP）の解決に向けて「One Community 理論」を提唱し、計画者・デザイナーと生活者の一体化を提案している[文8]。しかし、現実の建築および都市の計画・デザインの現場においては、ある程度の専門性や職能が必要とされ、また立場の相違が避けられないとすれば、計画者・デザイナーの側が、その専門性と職能の中に、これらの乖離（GAP）の解決策を取り入れるべきであろう。具体的には、「設計し尽くさない設計手法[注6]」「修正の余地を残した設計[注7]」などが計画者・デザイナーの間で議論されており、近年では POE（Post Occupancy Evaluation）などによって、建築物を実際に使う生活者の意見が計画・デザインへフィードバックされている。また、既存建物の用途変更（コンバージョン）も研究され、その知見を「将来のコンバージョンを予め見こんだ計画」に応用する取り組みも成されている。

本論文は、これらの乖離（GAP）、および乖離（GAP）の解決策が議論されていることを踏まえ、都市生活者の側から望まれる都市の場所の姿を明らかにする。



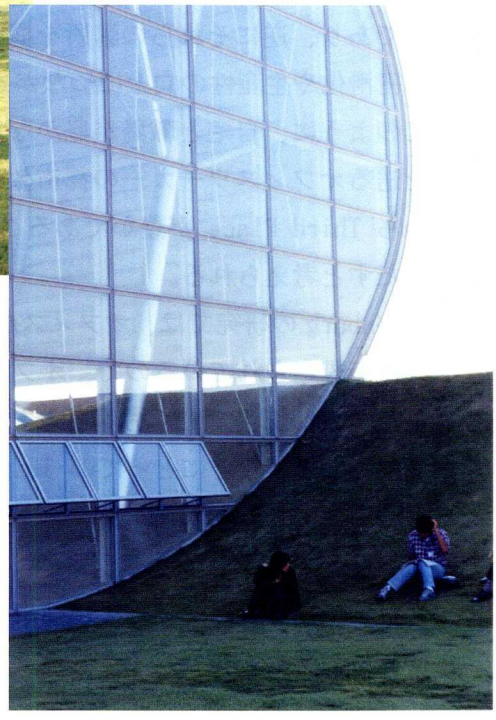


（左上）写真１−４
マンション敷地の通り抜け防止用にフェンスが設置されたため、周辺住民だけではなく、当該マンション居住者の使用にも供されなくなった歩道。
（右上）写真１−５、（右下）写真１−６
以前は子供のキャッチボールの場所であり、子連れの主婦の談笑の場所でもあった。
（キャッチボールに程よい空間の広さ、腰掛けるのにちょうど良い高さの縁石、一部が切り欠かれ、通り抜けられるようになっている縁石、などに着目されたい。）
（大阪市鶴見区，2002 年）

1.1.3. 都市生活における『場所構築』

前項で述べた「計画されなかった空間が、図らずも場所として成立している場面」は、建築および都市の計画・デザインに携わる者からは、乖離（GAP）としてとらえられるが、実際の都市生活者がそのような乖離（GAP）を意識せず、ごく自然に行動し、そこに生き生きとした場所を作っている場面に出会うこともある。計画者・デザイナーが、乖離（GAP）の存在を意識し、その解決に取り組むことは重要であるが、一方で都市生活者が作る場所に関する研究を行い、都市生活者の側からの建築および都市の計画・デザインの知見を得ることはさらに重要であると考える。

このような場所は、都市生活者が生活環境の中に、なんらかの「可能性」を発見し、その「可能性」を使いこなすことで成立していると考えられる。すなわち、都市生活者の活動が場所を形作っていると考えられる。本論文では、このように都市生活者が主体的に場所を作る行動を、環境行動論[注8]の立場から『場所構築』と定義し、構築された場所および『場所構築』に関連する要因の考察を行う。都市生活者が都市に多くの場所を構築でき、個々の場所が「居心地が良い」ことは、都市生活の質が豊かであることにつながると考えられる。建築および都市の計画・デザインは、物的環境の整備を通して都市生活の質の向上に寄与すべきであり、本論文では都市生活の質の向上に資する『場所構築』に関する知見の抽出を行うことを目的とする。



（左上）写真1−7　（吹田市万博記念公園，1996年）
（右下）写真1−8　（滋賀県立大学，1996年）
都市生活者が、自然に、生き生きとした場所を作っている例。「木陰で涼める」「敷物を敷けば寝転がれる」「座れる」「本を読める」などの「可能性」を発見し、使いこなしていると考えられる。

1.1.4. オフィスワーカーとサードプレイス

都市生活者には、子供から大人まで、働く人も働いていない人も、もちろん含まれる。本来は、これら全ての都市生活者の『場所構築』を研究し、また全ての都市生活者に共通する「公共的な場所」を研究すべきであるが、本論文では、通勤生活を送るオフィスワーカーが、最も都市を日常的かつ頻繁に動き回っており、『場所構築』が最も活発であるという認識に立ち、オフィスワーカーの『場所構築』に焦点をあてて研究を進める。

建築および都市の計画・デザインの分野において、オフィスワーカーの『場所構築』は、子供、高齢者、主婦などのそれに比べて、これまで取り上げられることは少なかった。また、居住環境整備を最終的な目的とした研究や、社会的・身体的なハンディキャップに対応する人に優しいまちづくり（ノーマライゼイションなど）を目指す研究は多いが、「都市を日常的に動き回る普通の都市生活者」という人間像を設定し、「働く人々」にとっての環境のあり方を提示する研究は少なく、研究の独自性の点からも意義があると考える。

Oldenburg[文11]は、「人間には、住む場所＝第一の場所、働く場所＝第二の場所、遊び心にあふれ、家庭のように快適で楽しめる場所＝第三の場所（Third Place）が必要」と述べ、具体的に「カフェ、書店、バー、ヘアサロン、その他の行きつけの場所」などを挙げている。Oldenburg が論じる Third Place は、既にわが国のオフィスワーカーが日常的、かつごく自然に構築する場所となっており、既に馴染みのある場所の概念でもある[注9]。オフィスワーカーの都市生活を『場所構築』の観点から考えると、自宅での生活、職場での生活、それ以外の場所での生活が考えられる。自宅および職場がどんなに豊かな場所であっても、オフィスワーカーはこれら以外の場所でも生活しなくてはならず、したがって第三の場所が必要であると同時に、その場所が豊かであることが望ましい。また、自宅や職場から少しの間逃れられるような場所や、一人になる場所も、現代のオフィスワーカーにとっては必要であり、逆にそれらの場所を構築していることによって、自宅や職場における人間関係の円滑化や生産性の向上につながる場合さえある。

このように、自宅と職場が豊かな場所であることはもちろん重要であるが、特に通勤生活を送るオフィスワーカーの都市生活の質を議論する場合、これら以外の第三の場所、すなわち Third Place が豊かであることが重要であり、自宅や職場での生活を補完する役割も果たすと考えられる。

Oldenburg の研究では、オフィスが「第二の場所」としてとらえられ、通勤生活を送る生活者像が設定されているので、オフィス以外で働く人々（自営業の人、SOHO など自宅に職場を持つ人、工場で働く労働者など）や、職業を持たない人々（学生、主婦、リタイアした高齢者など）などにとっての Third Place がどのようなものであるのか議論の余地はあるが、少なくともわが国のオフィスワーカーの『場所構築』に関する研究には適用できる場所の概念であると考える。

わが国において、建築および都市の計画・デザインの分野において、Third Place を扱った研究は充分な蓄積があるとは言えず、研究の余地がある。本論文では、オフィスワーカ

ーが都市生活において構築する、自宅および職場以外の場所を、Oldenburgにならい、サードプレイスと定義する。Oldenburgは都市社会学の視点からThird Placeを論じたが、本論文は、建築および都市の計画・デザインの立場からサードプレイスに関する調査を行い、オフィスワーカーが実際にどのようなサードプレイスを構築しているかを明らかにする。また、都市の中に多様なサードプレイスを構築しやすくする要因を把握し、都市生活の質の向上に資する知見の抽出を行う。

1.1.5.『場所構築』の過程とアフォーダンス

都市の中にサードプレイスを構築する過程において、オフィスワーカーは生活環境に対して様々な認知活動を行っていると考えられる。例えば、ある人がある空間に「居る」ためには、ある人がその空間を「居られる」と認知し、実際に「居られる」ことが必要である。例えばある人が、その空間の「混雑」や「携帯電話などで話している他の人」に着目して、「居られない」と判断すれば、その人にとって「居られない空間」と認知されていると言える。しかし、その空間から「富士山が見える」ことを発見し、「混雑」や「携帯電話などで話している他の人」にも関わらず、そこで「富士山を見る」という活動が出来れば、その空間はその人にとって「富士山を見る場所」として認知され、意味づけられている。さらに人の居ない早朝にわざわざそこへ行って「元気な気持ちになる」とすれば、その空間は「元気な気持ちになれる場所」として認知され、意味づけられていると言えよう。

このように、オフィスワーカーは、生活環境における認知活動の結果、「～できる」「～という気持ちになれる」などの「可能性」を発見し、その「可能性」を使いこなし、意味づけることで『場所構築』を行っていると考えられる。このような意味で、オフィスワーカーによって発見され、使いこなされる「可能性」を、本論文では『場所のアフォーダンス』と呼ぶ[注10]。オフィスワーカーが都市生活において、「～したい」「～という気持ちになりたい」という生活要求を持ち、それに対応する『場所のアフォーダンス』を発見し、使いこなすことが出来れば、オフィスワーカーの生活要求が満たされ、そのように意味づけられる場所が構築され、都市生活の質の向上に貢献するであろう。

本論文では、『場所構築』の過程をこのように想定し、『場所のアフォーダンス』がオフィスワーカーによってどのように表現されるかを調査し、考察する。『場所構築』の過程において発見され、使いこなされる『場所のアフォーダンス』に関する知見は、建築および都市の計画・デザインのあり方に新たな視座を与えると考える

1.2. 研究の方法

本論文では、都市生活を送るオフィスワーカーが構築する場所、およびオフィスワーカーから見た都市の場所についてのデータを収集する必要がある。そのため、実際に都市生活を送っているオフィスワーカーに調査を依頼し、ヒアリングおよびアンケートを行った。

都市生活者の生活圏は、東京を中心とする「東京圏」(横浜市、川崎市、千葉市、さいたま市などの政令指定都市を含む首都圏)、大阪を中心とする「大阪圏」(神戸市、京都市などの政令指定都市を含む関西圏)を選定し、そこでオフィスワーカーとして働く人々を調査対象とした。東京圏に関しては、東京都に本社を置く特定の企業を選定し、その企業の本社の移転をとらえて詳しい調査を行った。

ヒアリングは、調査者を含めて2～3名の少人数でのフリーディスカッションを採用したが、調査対象者に現在だけでなく過去の生活も効果的に思い出してもらう必要があったことから、「発想の手掛かり」となる項目や、都市地図などを用意した。ディスカッションの内容は全て録音し、ヒアリング記録を作成した。

アンケートは、直接、または知人を介しての手渡しにより配布し、調査対象者の属性と質問に対する回答を収集した。回答形式は選択式ではなく記述式とし、文章のほか、簡単な絵や略図も記入された。

データの考察方法は、データを紙片に書き写し、類似するデータを寄せ集めて名前(見出し)をつける「KJ 法」を援用した。また、文章データを表計算ソフトウェアに入力し、適宜コード化やソートを行うことでタイピング(類型化)する方法も行った。この他、地図データの作成・考察には CAD を使用し、個人データの考察や調査協力者全員の重ね合わせ図の作成も行った。

1.3. 用語の定義

本論文では、以下の用語を頻繁に取り扱う。その意味や用法は、本論文の目的に沿って、限定して取り扱うものとする。本項では、これらの用語の定義を行い、本章以降はこの定義に基づいて研究を進める[注11]。

『場所』:

「居心地の良い場所」「お気に入りの場所」「よく行く(使う)場所」「寄り道する場所」「リフレッシュする場所」「自分の場所」「～と会う場所」「～を見る場所」などのように、オフィスワーカーが都市生活の中で豊かな意味を付与している空間を指す。『場所』においてはオフィスワーカーと環境は相互不可分の関係とし、そこで起こっている現象や状況は一体的なものとして扱う。

サードプレイス:

オフィスワーカーが都市生活を送る上で、自宅および職場以外に、意味のある『場所』とみなし、使いこなされている『場所』を指す。

『場所構築』:

オフィスワーカーが、快適な都市生活を送る上での「スキル」として、生活環境の中に「可

能性」を発見し、使いこなし、自分なりに意味づけることによって『場所』を作る行動を指す。

『場所表現』:

オフィスワーカーによって構築された『場所』が表現・記述されること、および表現・記述された内容を指す。具体的には「場所の名前」、場所の「自由記述表現」、「理由」などの質問によって得られた回答を指す。

『場所』の様態表現:

構築された『場所』において、「あなたが何をしているか」「周りの様子はこんなふうだった」などの自由記述文を指す。

『場所のアフォーダンス』:

『場所構築』および構築された『場所』において、オフィスワーカーによって発見され、使いこなされる『場所』の「可能性」の総称を指す。具体的には、オフィスワーカーが生活環境の中に「～できる」「～という気持ちになれる」などの「可能性」を発見し、その「可能性」を使いこなすことで『場所』が構築されている場合、この意味での「可能性」を『場所のアフォーダンス』と呼ぶ。

建築および都市の計画・デザイン:

建築計画、建築設計、建築デザイン、都市計画、都市設計、都市デザイン、などの広範な意味での建築と都市を作り出す過程の総称として取り扱う。

都市生活の質:

オフィスワーカーが生活圏に多くの『場所』を構築できるか否か、また構築しやすい生活環境であるか否かを指す。本論文においては、『場所』が構築でき、構築された『場所』の性質が豊かである場合に「都市生活の質が豊かである」と判断する。

1.4. 論文の構成

本論文は、8章から構成され、大きく3つの流れがある（第3、4章の流れ、第5、6章の流れ、および第7章の流れ)。各章の構成と調査の位置づけを図1−1に示す。

第1章は序論であり、研究の背景、目的、意義を論じ、研究の方法を示すとともに、用語の定義を行い、本論文の構成を示した。

第2章では、本研究に関する主な論点と既往研究の整理を行い、本研究における課題を抽出する。

第 3 章では、オフィスワーカーが構築する『場所』のうち、職場（セカンドプレイス）周囲に構築されるサードプレイスに焦点をあて、東京都千代田区神田司町（神田）、および東京都港区港南（品川）の二つのオフィスでの勤務経験を有するオフィスワーカーへの調査（<調査 1>）を行い、二つの職場周囲に構築される『場所』を比較・考察する。

第 4 章では、職場移行・職務移行・人生移行・個人状況変化などの環境移行によって、職場周囲における『場所構築』がどのように変容するかを考察し、環境行動論的な知見の抽出を行う。

第 5 章では、職場周囲に構築される『場所』から、生活圏に構築される『場所』へ、研究の焦点を移す。東京圏、および大阪圏に居住・勤務するオフィスワーカーに対する「居心地の良い場所」のアンケート調査（<調査 2>）を行い、オフィスワーカーの生活圏に構築される「居心地の良い場所」の調査・考察を行う。また、構築された「居心地の良い場所」と生活圏上の位置、「居心地の良い場所」における頻度、滞在時間、同伴者との関係について論じる。

第 6 章では、「居心地の良い場所」を構築するきっかけと、「居心地の良い場所」における環境への働きかけを論じる。また、第 3 章で論じた職場移行の例を再度取り上げ、オフィスワーカーが新環境へ慣れるために行う工夫を考察し、働く環境へ働きかけについても論じ、「居心地の良い場所」における環境への働きかけとの比較を行う。

第 7 章では、『場所』の様態表現に関する基礎的考察を行う。「居心地の良い場所」における自由記述表現、および居心地が良い理由を、「する」「なる」「である」という分類軸を設定して考察し、「居心地の良い場所」表現における人間－環境関係を論じ、「居心地の良い場所」のタイプ分類を試みる。また、『場所』の様態表現における『場所のアフォーダンス』を考察し、評価的な「居心地の良い場所」のタイプ分類を試みる。

第 8 章では、各章の要約を行い、本研究の成果、今後の展開、および課題を示す。

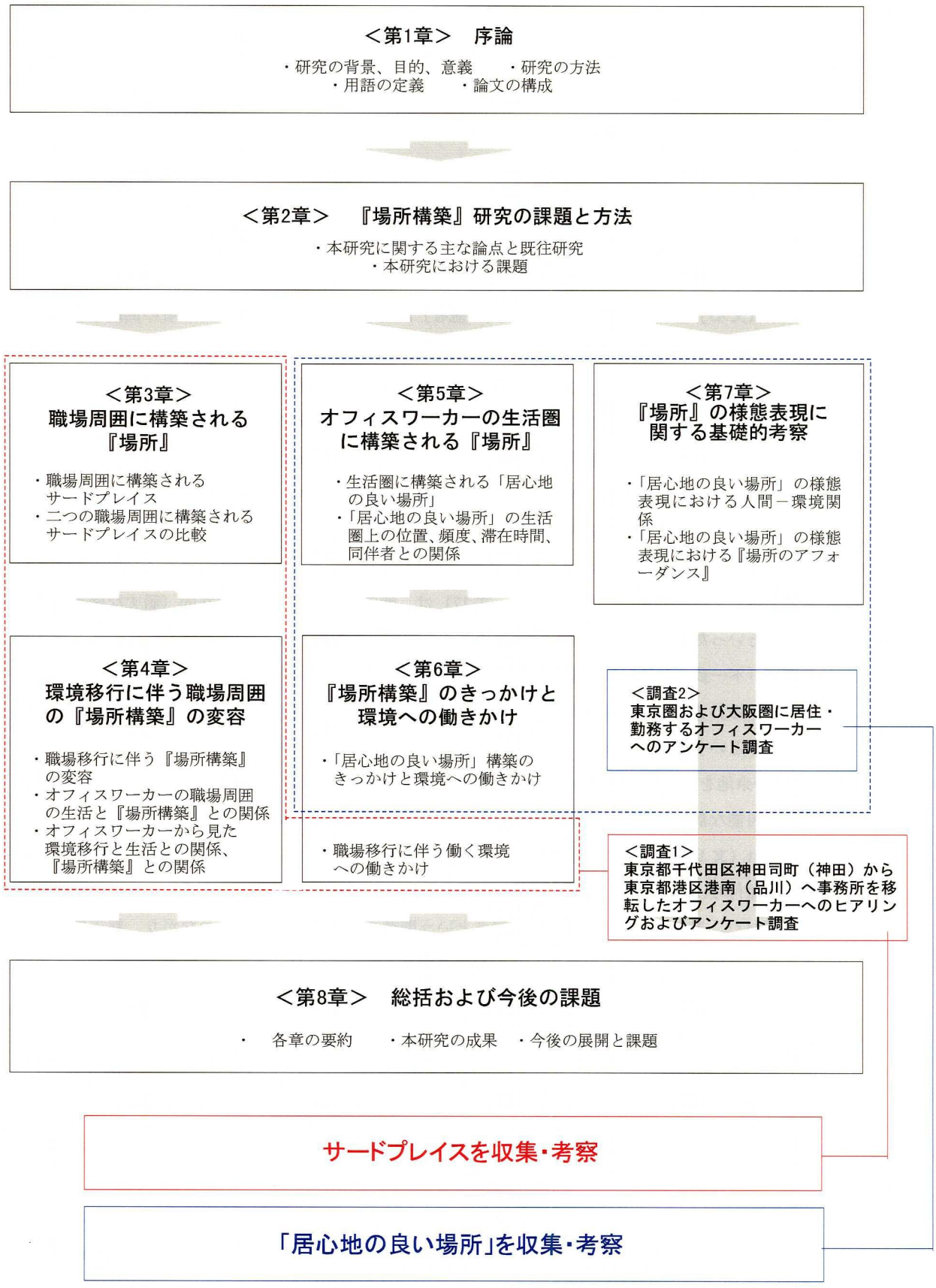


図 1－1.　各章の構成と調査の位置づけ

注

注１）いわゆる「ホームレス」などの「食べる場所」や「寝る場所」などの生活上の基本的な場所を持たない人々や、「居場所の無い子供達」などの基本的な「身の置き場」の無い人々は、このレベルに属し、早急な対策が必要とされる。

注２）わが国の都心部においては、主に民有地に対して総合設計制度や再開発地区計画など、公共空地・を担保する政策が施されているが、もともと公有地の多い欧米のレベルには未だ達していない（文１）。

注３）近年、公共の場所でのモラルが低下したと言われる。また、公共心の低下の問題は、「仲間以外はみな風景（文4)」という言葉で表現される、「他者」に対する感覚を失っている若者の問題も含み、複雑である。

注４）Hall（文６）や、Whyte（文７）らは、計画・設計・デザインされた建築および都市の空間が、生活者の使用に適していない状況の例を挙げ、計画者・設計者・デザイナーを批判している。

注５）Norman（文９）も認知科学者の立場から、サイン、建築空間、家具・什器、製品などが、非常に使いづらく、使用者を惑わせ、使用者が自分の失敗だと思いこんでいる状況の例を挙げ、やはり計画者・設計者・デザイナーを批判している。

注６）Hertzberger（文18）は、「設計しつくさない設計」をパブリックスペースのデザインガイドラインとして示している。また、Hall（文６、文17）は、建築家が作る「固定相空間（頑丈な壁や床や窓や建具といった容易には動かせない要素によって囲まれたもの)」においてしばしば生活者と建築家の間に「不一致」が見られ、「固定相空間」が「多くの行動の鋳られる鋳型」となっていることを指摘している。また、「半固定相空間（内装があちこち動かせるもの)」では談話や読書などの行動が増加するという報告も行っている。

注７）「修正の余地を残した設計（Open-ended design)」は、システム全体の一定の部分だけ設計を決め、予測不可能な部分も含め、自然発生的に生じてくる部分を見込んでおく設計の一形態であり、Amos Rapoport（文19）によって提唱された。この設計方式においては、「ある程度の曖昧さや、個人化による意味付与、さらには、環境内における異なる価値、欲求、ライフ・スタイルの表現の余地を見込んでおく。それは設計過剰による窮屈さという問題を克服することにもつながり、都市環境はさまざまな異なる集団や個人が使用しうるものとなる。都市の中で、後から引き継いで使用する集団が、空間や時間、意味やコミュニケーションの機構を容易に改造できる。」とされる。また、関連する取り組みとして、「アダプタブル・デザイン(adaptable design)」「フレキシブル・デザイン(flexible design)」が挙げられ、前者は「レイアウトを変えることなしに多くの活動を可能にするデザイン」、後者は「異なった活動を可能にするために容易に変化させることができるデザイン」とされる。

注８）舟橋（文 10）は、環境行動論の基本的な立場と目的について、「「人間と環境の相互関係を研究し、政策・計画・デザイン・教育を通じて生活の質の改善に応用する」と表現されるのが通例である。」と述べている。また、「現代日本の居住環境形成に関わる課題」として、個人の“より良い生活の質”とそれを担保する環境を求める、比較的新しい視点の例として、「Place」「Placeness」「環境移行」を挙げている。

注9）例えば、スターバックスコーヒーは、自社の店舗をサードプレイスと呼び、「毎日の生活の中で受けるプレッシャーから逃れて休息する場所、オアシス」、「自宅と職場の間というポジション」などと位置づけている（文12)。スターバックスコーヒーの店舗は、サードプレイスの一例に過ぎないが、すでに日本のオフィスワーカーの生活に非常に馴染んでおり、このような場所はオフィスワーカーの都市生活に必要であると考えられる。

注10）アフォーダンスは Gibson（文13)による造語である。アフォーダンスの概念は、今日、様々な研究に応用され、「環境が動物に提供する価値（文14)」「環境が備えている行動的ポテンシャル（文15)」などと解釈されている。本論文では、場所の様態表現を研究する意図から、「～する」「～なる」の可能表現である「～できる」「～なれる」などを『場所のアフォーダンス』に関する表現と見なし、オフィスワーカーが場所の中にそれらの「可能性」を見出していると解釈する。

注11）『場所』『場所構築』『場所表現』『場所のアフォーダンス』は、本論文において特に重要な概念であり、本論文に特化した意味で用いるので、本項以降、『　』つきとして取り扱い、一般的な用法と区別する。

参考・引用文献

文1）都市計画教育研究会編：都市計画教科書　第2版，彰国社，1995年

文2）岩田紀：快適環境の社会心理学，ナカニシヤ出版，2001年

文3）Jan Gehl，北原理雄　訳：屋外空間の生活とデザイン，鹿島出版会，1990年

文4）宮台真司：まぼろしの郊外：成熟社会を生きる若者たちの行方，朝日新聞社，1997年

文5）鈴木毅：人の「居方」からの環境デザイン，建築技術，1993年07，09，1994年02，04，06，08，10，12，1995年02，04，06，10，12

文6）Edward T. Hall，日高敏隆・佐藤信行　訳：かくれた次元，pp148-157，みすず書房，1970年

文7）William H. Whyte，柿本照夫　訳：都市という劇場，日本経済新聞社，1994年

文8）日本建築学会編：人間－環境系のデザイン，pp52-53，彰国社，1997年

文9）Donald A. Norman，野島久雄訳：誰のためのデザイン？，新曜社，1990年

文10）舟橋國男：環境行動論の視点から，建築雑誌/Vol.112，No.1407，pp.008－011，日本建築学会，1997年

文11）Ray Oldenburg : The Great Good Place，MARLOWE&COMPANY NEW YORK,1999

文12）小石原はるか：スターバックスマニアックス，p.68，小学館文庫，2001年

文13）James J. Gibson，古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻　訳：生態学的視覚論，サイエンス社，1985年

文14）佐々木正人：アフォーダンス－新しい認知の理論，pp60，岩波書店，1994年

文15）日本建築学会編：建築・都市計画のための空間計画学，pp81，井上書院，2002年

文16）Jon Lang，高橋鷹志　監訳，今井ゆりか　訳：建築理論の創造　環境デザインにおける行動科学の役割，鹿島出版会，1992年

文17）Edward Krupat，藤原武弘　監訳：都市生活の心理学，p158，西村書店，1994年

文 18) Herman Hertzberger，森島清太　訳：都市と建築のパブリックスペース，鹿島出版会，1995 年
文 19) Edward Krupat，藤原武弘　監訳：都市生活の心理学，pp235-236，西村書店，1994 年

第 2 章　『場所構築』研究の課題と既往研究

2.1. 本章の目的

本章では、『場所』および『場所構築』に関連する既往の文献、研究の成果と方法を確認し、本論文における課題、調査・考察の方法を設定する。

2.2. 本研究の課題に関する主な論点と既往研究

建築および都市の計画・デザイン、および環境行動論の立場から、既往の文献・研究を参照し、本研究の課題を導いた。

2.2.1. 都市生活の質

本論文は、オフィスワーカーが都市生活において構築する『場所』を調査・考察し、建築および都市の計画・デザインに有用な知見を抽出し、「都市生活の質の向上」に貢献する知見の抽出を目指すものである。舟橋[注1]は「環境行動論において「生活の質の向上」は重要な課題である。」と述べており、既に多くの取り組みがあるが、その多くは子供や高齢者、ハンディキャップを有する人々を対象とし、建築用途別で見ても住宅や高齢者施設、住宅地などの住環境が主な研究対象となっている。したがって環境行動論に関連する分野においても、都市を比較的自由に動き回る人々にとっての都市生活の質は、充分に議論されているとは言えない。

都市生活の質は、一つの尺度や指標によって決定できるものではなく、多次元的にとらえられなくてはならない。岩田[文2]は、「都市の快適性を促進する要因」として、「生活水準の高さ」「充実した社会資本」「便利な生活」「他人に干渉されない生活」「豊富な文化・娯楽施設」「恵まれた教育の機会」「多様な就労の機会」「多い社交の機会」の8項目を挙げている。また、Liu は、「都会の全ての住人の生活に関連すると判断した5つの大きな領域」として、「経済的要素」「政治的要素」「環境的要素」「健康と教育に関する要素」「社会的要素」を挙げている[文3]。

本論文では、都市生活の質を議論するにあたり、このような多次元性を踏まえるが、これらの尺度や指標を総合的に取り扱う方向ではなく、オフィスワーカーが都市に多くの『場所』を構築でき、それらの『場所』の性質が豊かであることが、都市生活の質の向上につながると考える[注2]。

また、本論文ではそれぞれの『場所』における「居心地の良さ」が、その都市の「住み心地の良さ」につながると考える。「居心地が良い」という表現は、「あなたにとって「居心地の良い場所」とは」などのように一般的であり、「「居心地の良い場所」を目指す」などのように、建築および都市の計画・デザインの目標に関しても頻繁に使用される。また、都市景観のような視覚的体験だけでなく、「その場所に居る」という全身体的な体験も含み、場所』における様々な心の動きを含む心理的な概念でもある。したがって、本論文の調査において『場所』を収集・考察する際にも「居心地が良い」という概念を用いる。

2.2.2. 都市生活の質の向上を目指すデザイン論

建築および都市の計画・デザインの立場から、都市生活の質を扱い、デザイン論を展開する文献は多数ある。Gehl[文4]は、日常の活動を「必要活動」「任意活動」「社会活動」に分けている。都市生活は、社会活動に分類されると考えられるが、ここでは低い濃度のふれあいの重要性が論じられている。さらに人々の様々な活動や出来事が人々をひきつけ、それを支援する物的環境のあり方が論じられている。Alexander[文5]は、「Pattern Language」という相互に関連のある言語体系の組み合わせを手がかりに、生活者が環境を把握し、環境のデザインに参画できる可能性を示唆している。Marcus、Francis、Sarkissian[文6,文7]は、豊富な実例や調査をまとめ、「設計勧告」や「設計検討チェックリスト」を交えながら屋外環境のデザインのガイドラインを提示している。Hertzberger[文8]も同様に、デザインのガイドラインを示しているが、同時に「空間をつくり込みすぎないで残しておくこと」により生活者の解釈の自由度が広がることや、「ふとした佇みの場」を作っておくことで、そこが場所になることを示している。

これらのデザイン論は、建築や都市などの物的環境をどのようにデザインするかに主眼が置かれており、生活者の活動を支えるデザインのあり方が詳しく示されている点で意義深い。しかし、都市を比較的自由に動き回る都市生活を考えた場合、「都市のどこにどのような『場所』をもち、どのような活動をしているのか」、「その『場所』と都市生活者の生活スタイルとの関係はどうなっているのか」など、都市生活者それぞれの生活にまで立ち入った視点に欠けている場合が多い[注3]。また、住宅や病院などの居住施設や住宅地域、学校に関する議論が多く、対象も子供と高齢者に多くのウエイトが割かれている。オフィスワーカーは、子供や高齢者に比べ「通勤」という活動によって日常的に都市を動き回るが、このようなオフィスワーカーの都市生活に焦点をあてた建築や都市のデザイン論は未だ充分ではないと考える。

2.2.3. サードプレイス

一方、都市社会学の分野では、オフィスワーカーの都市生活に焦点を当てた研究が見られる。Whyte[文9]は、「Street Corner Society」と呼ばれる路上活動にこそ都市の面白さがあり、どのようにしたらそのような活動が起こりやすくなるかを実例を交えて示している。

また、Oldenburg[文10]は、都市社会学の立場から通勤生活を営むオフィスワーカーにとっての場所を論じている。Oldenburgは、自宅（ファーストプレイス）でも、職場（セカンドプレイス）でもない、第三の場所（サードプレイス）が必要であると述べ、「カフェに代表されるサードプレイスは、他の二つの場所と共に安定のかなめになっている[文11]。」と述べている。

わが国においても、磯村[文12]が「マスの場においては、家庭や職場におけるように、それぞれの status にもとづく、フォーマルな role-actions を要求されない。地位も身分も教養も問題にされない、あくまで匿名をおし通せる、その意味できわめて＜自由＞で＜平等

＞な人間関係の場である。」と述べ、「卑近な例ではあるが」と前置きした上で、「通勤時間だけがわずかにサラリーマンを開放している。」と描写した中村武志の小説「目白三平の四季」の一節を引用している。この議論は、後に「第三空間論」と呼ばれ、「家庭（第一空間）でも職場（第二空間）でもない、盛り場のような家庭からも職場からも自立した秩序を持つ第三の空間。そこは匿名性であるがゆえに家庭や職場から開放されていて、より「自由」が味わえる空間である。しかし「自由」とはいえ、秩序は生まれる。そこには＜なわばり＞が生じ、＜なじみ＞ができる[文13]。」などと議論されている。

また、都市環境デザインの分野でも、鳴海[文14]が「現代の子供には、家庭・学校・塾が基本的な生活空間であり、大人の盛り場に類する空間が不在である。」と述べ、「第三の環境の必要性」を論じている。

「第三空間論」や「第三の環境」が指し示す都市生活上の意味は、サードプレイスのそれと非常に類似しており、いずれも自宅・職場・学校・塾などの基本的な生活の拠点から一時的に逃れられ、しかし安定的で、無くてはならない重要な場所を意味している。

近年、わが国のオフィスワーカーの都市生活に定着した感のあるスターバックスコーヒーが、自社の店舗をサードプレイスと呼んでおり[文15]、既にこの用語は耳新しい言葉では無くなっている。

オフィスワーカーにとって、自宅（ファーストプレイス）と職場（セカンドプレイス）はどちらも重要な生活の拠点である。しかし、これら二つの拠点を持ち、それらが一定の豊かさを保っているとしても、それでもなお都市生活においては第三の場所＝サードプレイスが必要となり、むしろ活発に都市を動き回る生活スタイルであればあるほど、サードプレイスの質や、サードプレイスの構築のしやすさは、都市生活の質を左右すると考えられる。

本論文では、このような立場からオフィスワーカーが構築するサードプレイスを研究する。

2.2.4.「サードプレイスが無い」という都市生活者の感覚

前項で述べたように、オフィスワーカーは都市生活の中でサードプレイスを必要としているが、第１章で述べたように、現代のわが国の都市においては、「場所が無い」と感じることが少なくない。自宅や職場という生活の拠点を既に持つオフィスワーカーは、②「公共的な場所が整備されていない」、③「整備されていても場所にならない」といった意味での「場所の無さ」を感じていると考えられる。

これらのレベルにおける「場所の無さ」は、第１章で述べたように、「～する場所が無い」「～できない」などの「活動の不可能性」、「～という気持ちになる場所が無い」「～という気持ちになれない」などの「心理的な不可能性」が、日常的・感覚的に認識されていると考えられる。

本論文では、このように「サードプレイスが無い」と感じられる都市の状況において、オ

フィスワーカーはどのようなサードプレイスを必要としているのかを研究する。

2.2.5.『場所構築』というとらえ方

このように、現代のわが国の都市においては「サードプレイスが無い」と感じられる状況にあるが、そのような都市においても、現実にはそれなりに生活しているオフィスワーカーが多い。就職によって、初めて東京や大阪などの大都市に転居し、慣れない通勤生活を送り始めた若年オフィスワーカー（いわゆる新入社員）でも、2～3 年経てばそれなりに順応し、自分の行動に工夫を加え、自らの都市生活を快適なものに仕立てる技＝「都市生活スキル」を身につけていく。年長のオフィスワーカーや、子供の頃から都市生活に慣れている都市部出身の人々は、さらに長い都市生活の経験があり、無意識に「都市生活のスキル」を身につけていると考えられる。

Wirth は、1930 年代のシカゴの都市生活の考察から、都市の規模・密度・都市住民の多様性（異質性）に着目し、都市生活の本質を「社会と個人の荒廃」ととらえている[文16]。Wirth の提示した都市生活のモデルは、ストレス・匿名性・疎外・個人と社会の崩壊等、短所が目立つ描出となり、「そのような都市環境に適応できるか否か」が重要な論点である。

一方、Fischer [文17]は、都市の人口の大きさに着目し、それが類似性・可能性・機会を生じさせるとし、巨大な数の人間がいるからこそ、多様な下位文化が都市の中で存続すると述べている。

Wirth の主張と Fischer の主張は好対照であるが、どちらも現代のわが国の都市生活にある程度当てはめることができる。しかし、実際に都市生活を送るオフィスワーカーは、これらの問題や特質を日常生活の中で自分なりに受け止め、生活に工夫を加えるといった、「都市生活スキル」を身につけて、いわば「何とかしている」のではないだろうか[注4]。さらに、そのような「都市生活スキル」の一部として、「自分なりの『場所』を作る行動」が存在するのではないだろうか。

本論文では、第 1 章で、オフィスワーカーが、快適な都市生活を送る上での「スキル」として、生活環境の中に「可能性」を発見し、使いこなし、自分なりに意味づけることによって『場所』を作る行動を『場所構築』と定義した。『場所構築』に関連する最近の研究として、西田ら[文18-文22]の環境行動的研究が挙げられる。西田らは、「メンテナンス」「カスタマイズ」などの活動を定義し、それらの活動によって生活環境を構築していく過程を図式的に説明している。また阿部ら[文23]は、住宅地において環境移行初期に、地域内での『場所構築』がどのように進んでいくかをパタン化して考察している。

さらに、厳ら[文24-文30]は高齢者施設における『場所構築』を「なじみ」の視点から研究し、橘ら[文31]は「場の許容性」の概念を導入し、対照的な地域に住む高齢者の行動環境と行動のモデルを明らかにしている。また、橋本ら[文32-文34]は単身居住者が住居以外に 4 つの基本的な「場」を持ち、それらを使い分けながら都市生活を送る実態などを報告し、永峰ら[文35]は単身居住者の居場所を調査し、住居と都市の居場所との関係を考察している。

このように、『場所構築』に関連する研究は、子供や高齢者を対象としてある程度の蓄積が見られるが、オフィスワーカーを対象にした研究はほとんどなく、オフィスワーカーにとっての都市環境のあり方や働く環境のあり方を提案する研究も不足しており、本論文には独自の意義があると考える。

本論文では、身近な生活環境や働く環境の中に、多くの豊かな『場所』を構築できることが、オフィスワーカーにとっての都市生活の質の向上につながるとの視点に立ち、研究を進める。

2.2.6. 場所の概念

場所に関する概念的な議論、すなわち「場所とは何か。」という議論は古くから存在し、今なお、議論の対象となっている。広辞苑（第5版）によると、「①ところ。場。位置。②いどころ。場所。」となっており、日本語においては、①の意味で「場」が、①および②の意味では「居場所」が類似する言葉として挙げられよう。

Lewin[文36]は、行動 *(B)* は、人 *(P)* と環境 *(E)* の函数であることを示す $B=F\ (P,\ E)$ という定式を導き、「人 *(P)* とその環境 *(E)* とは、各々相互依存している変数であり、相互に依存していると考えられる共在する事実の全体が、場（field）と呼ばれる。」と述べ、行動は人間と環境の状態や状況による産物であるとしながら、「場」は人と環境によって構成された生活空間の総体であると述べている。Lewin が研究対象とした「場（field)」は、社会的な場における「雰囲気」と訳される場合もあり[文37]、必ずしも物的環境を含めた場所を意味するものではない。むしろ、物理学における電場や磁場などに近い概念として用いられることも多い[注5]。

Canter[文38]は、場所を「行為と物理的形態が融け合う一連の体験」ととらえ、「(場所の)記述には、互いに関連する二つの構成要素がある。すなわち、その場所についてどう感じる（feel）かという要素と、その場所で何をする（do）かという要素である。」と述べ、場所の記述方法は大きく「～する」と「～を感じる」があると述べている。

Relpf[文39]は、現象学の立場から、「地理的リアリティは、第一に誰かがいる場所として、また、思い出の対象になるような場所や景観として認識すべきである。」と述べ、場所を研究する際の経験と認識の関係の重要性を示している。また、Tuan[文40、文41]は「親密な場所とは、人が適切な栄養と保護をあたえられて健康に生きていく場所である。活力に溢れた大人でも、子供の頃に味わった種類の居心地のよさに束の間憬れることがある。」と述べ、親密な場所を「居心地の良さ」という感覚で表現している。

Hayden[文42]は、「共有された土地の中に共有された時間を封じこめ、市民が持つ社会の記憶を育む力」としての場所の力に着目し、都市デザインに活用する方法を提案しており、Hall[文43]は「人間とその延長物とは一緒になって、一つの相互に関連しあったシステムを作り上げている。」と述べ、人間とその環境や文化の一体性を論じるとともに、身体の外延まで人間の場所がテリトリーとして広がっていることを示している。また多木[文44]は、「日本

人は部屋の中央を使い、西洋人は周辺に家具を配置する。」としたHallの観察を受けて、「われわれの家の胚種は、片隅の空間にではなく、われわれの身振り（しぐさ）のなかにひそんでいる。」「日本の空間は使用が規定し、使用とは別のいい方をすれば出来事であり、われわれにとって空間とは出来事から生じている。」「床によってつくりだされているのは、西洋的な意味で閉じられ実体的にうけとられる「空間」ではなく、出来事のための「場所」にほかならない。」と述べている。多木は「建築家がつくりだす作品」としての空間と「生きられた家」としての空間を明確に区別した上で、特に日本の建築空間において、そこに住む人間の使用、活動、出来事、すなわち生活が場所を形成し、そのような場所の連鎖によって「家」という「生きられた空間」が形作られるとしている。間宮[文45]も同様に、「人が住み、生活を営んでいくなかで、場所は形成されていく。」「人間と場所との関係は人間と土地のように外在的な関係ではなく、場所の占め方がすなわち生活となるような相互不可分の内在的な関係である。生活するとはいわば場所を生きることである。だから個人としても人々の共生としても、いい生活を送るということはいい場所をもつことと同じである。」と述べ、場所を構築することが生活であり、良い場所を構築することは、すなわち生活の質の向上を指すことを示唆している。

中村[文46]は「場所としての身体は、拡張された身体を通して、各人にとって自己の刻印を帯びた空間を自己のまわりに作り出す。」と述べ、「基体としての場所論」を展開し、金森[文47]は「霧のようにあいまいで茫漠とし、絶えず漏れ続ける心。そしてその漏れた心が溜まる、というより、漏れて近隣に漂っているような特殊な空間そのもの、それを一種の場所だと考える。」と述べ、「霧心論」を展開している。

場所の概念は、それぞれの研究者によって、それぞれに定義され、取り扱われているが、人間の生活や活動によって場所は生起し、場所においては生活者と生活環境が相互不可分の関係であると言えよう。また、「居心地の良い場所」「親密な場所」「出来事のための場所」「思い出の対象となるような場所」などの呼び方がされるように、場所は生活者の意識に深く刻まれるものであると言える。

本論文においては、オフィスワーカーが構築する『場所』を、「オフィスワーカーのある生活活動やある心理状態によって、その人の周りに広がっている、その人が意識している領域。」ととらえ、そこで起こっている現象や状況を一体的に取り扱う。

また、オフィスワーカーが都市生活において構築する『場所』も、「居心地の良い場所」「親密な場所」「思い出の対象となるような場所」などのように、それぞれのオフィスワーカーによって意味を付与されていると考えられる。本論文では、『場所』を調査・収集する際に、「実際にあなたが訪れた場所で、「居心地の良い場所（または「お気に入りの場所」）」を教えてください。」という質問形式でアンケートを実施する。

なお、本項の冒頭で触れたように、『場所』に類似する言葉として、「場」のほかに、「居場所」がある。生活環境の中に「居場所」を構築することは、生活の質の向上を考える上でも重要であるが、近年の「居場所」という言葉には、「安心できる」「他者から受容され

る」といった心理的および対人的な意味、およびニュアンスが強く、特に子供の「居場所」が議論される背景には、増加する不登校児の存在がある[注6]。また、「場面（scene)」も『場所』と類似した言葉であろう。広辞苑（第５版）によれば、「場面」は「①（事の行われている）その場のようす。光景。②芝居や映画などの情景。シーン。④人の個々の行為を成り立たせている環境・状況。」とされる。Barker が頻繁に用いた「Behavior Setting」という語（2.2.9 で述べる）は「行動場面」と訳される場合もある[文49]。この意味で用いられる「場面」と本論文で用いる『場所』を区別することは容易ではないが、本論文では「場面」という言葉をオフィスワーカーが構築した『場所』を、研究者が外部から観察し、画像や映像として記述（記録）した場合に限って用いることとする[注7]。

2.2.7. 『場所』における人間－環境関係

Lang[文50]は「環境と行動の間の関係については、４つの基本的な立場を確認することができる。」とし、「自由意志論的アプローチ、可能論的アプローチ、蓋然論的アプローチ、決定論的アプローチ」を挙げている。このうち、「蓋然論的アプローチ」について、「(蓋然論者は）人間の行動の起こる基盤であり、また環境デザイナーが活動する基盤となるシステムの不確かさを認めるが、人間の行動は完全な気まぐれではないと考えている。蓋然論的立場は、行動と環境デザインの関係についての最近のほとんどの研究の基礎になっている。」と述べている。

また、Krupat[注8]は、“環境における個人”に関して、「環境を作るのは個人という見方、人間の行動を決定するのは環境という見方、そして、この中間に位置する、人間－環境関係の相互的あるいは力動的交換アプローチがある。」と述べ、それぞれ「環境実現論（possibilism)」「環境決定論（determinism)」「相互交流論（probabilism)」と呼んでいる。Krupat は、自身の立場が「相互交流論」であることを示した上で、「人間と環境とは切り離して考えられず、むしろ１つのシステムを構成しているものであり、人間と環境との関係性は、静的というよりは動的なものであり、たえずギブ・アンド・テイクをしている。」と述べている。

さらに、高橋[文52]は、人間－環境系研究において人間－環境関係を理解する際に、「人間－環境関係における「関係」には、その様態、質、時間の三つの側面がある。」と述べ、人間－環境系の枠組みとして図２－１を用いている。また、人間－環境系研究においては、トランザクショナリズムの考え方が強調され、人間と環境とを互いに独立し、一方が他方を規定するという存在と見なす決定論、相互作用論ではなく、双方が分離できない一体として過去から未来にわたって変容していく状態として把握することを特性としている。」と述べている。

『場所』における人間－環境関係を研究した例として、隅谷ら[文53、文54]、および松本ら[文55]の研究が挙げられる。隅谷らは、「好きな場所」の調査・考察から「自分の世界－他の世界」という図式を導き、その両極の間にある「他の世界と触れ合う場所」を重要な場所として

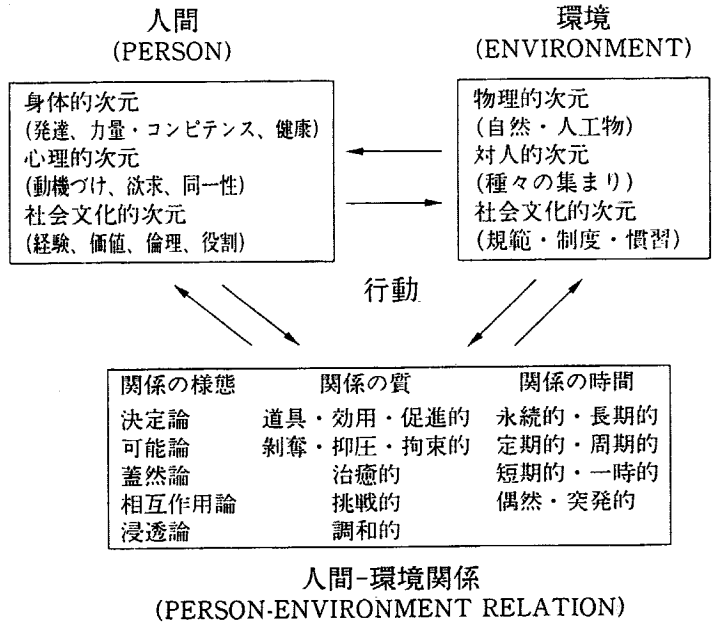


図1　人間-環境系モデル

人間、環境の各次元は山本多喜司「有機体発達論からの人間-環境システムモデル」より作成[2)]

図2−1　人間−環境関係のとらえ方

（出典：人間−環境系のデザイン，p24，彰国社，1997年）

抽出し、松本らは他者との関わりを構成する視点として（1）他者の様子、(2) 他者の枠組みと自己の定位、(3) 他者とのふれあいを挙げ、公共の空間において他者との関わり方やイメージに個人的なばらつきがあることを明らかにしている。

本論文では、『場所』における人間－環境関係のとらえ方として、両者を相互に不可分な一体的なものとして取り扱う。また、『場所』における人間－環境関係の先行研究を参考に、まずオフィスワーカーによって構築された『場所』を収集し、『場所』における人間－環境関係を考察する。

さらに、本論文では、都市生活において多くの豊かな『場所』を構築できることが、都市生活の質の向上につながると考えた（2.2.5.）が、そのためには構築された『場所』において、良好な人間－環境関係が形成される必要がある。Krupat [文56] は、「人々と環境との間に“よい適合”があれば、人々は幸福で、仕事がよくでき、満足を感じるであろう。しかし、人々と環境との適合の程度が低下するにつれて、満足度と生産性のレベルも低下する。」と述べ、人間－環境関係は、生活者の満足度や幸福感に影響することを示唆している。

本論文では、2.1.1. で述べたように、『場所』における良い人間-環境関係を「居心地の良い場所」という質問によって収集する。建築および都市の計画・デザインの立場からは、物的環境のデザインの方法を提示しなくてはならず、図 2－1 における環境の物理的次元と人間の行動の関係に焦点を当てる必要がある。

2.2.8. 人間－環境関係への認知心理学的アプローチ

Krupat [注9] は、「人間は都市において、職場に通う道のような小さな決定であれ、留まるか引っ越すかといった大きな決定であれ、収集（知覚）・符号化（認知）・判断（評価）した情報をもとにして行動する。個人の行動を非常に直接的に決定するのは、状況についての個々人の解釈や評価である。」と述べ、都市生活者の環境への解釈や評価が行動に影響すると述べている。人間の情報処理の過程は、上述のように「知覚、認知、評価」という過程があると考えられており、このような情報処理過程の側面から人間－環境関係を考えることが認知心理学的アプローチの特徴の一つである。

構築された『場所』における人間－環境関係を認知心理学的に考える場合にも、知覚や認知はもとより、「良し悪しなどの評価」も行われていると考えられる。また、建築および都市の計画・デザインの際にも、都市生活者の評価、すなわち「良い（と評価される）建築」「良い（と評価される）都市」を論じなければならず、建築や都市に対する人々の「評価」を認知心理学的に扱うことは重要な研究領域である。

林田 [文58、文59] は、讃井 [注10] が開発した「レパートリーグリッド発展手法」と呼ばれる認知心理学的手法を用いた面接調査を行い、河川景観の評価構造の階層性を明らかにしている。面接調査（図 2－2）では、まず評価対象である写真を「好ましさ」の順番に分類させ、次に「好ましいと判断した理由」を質問している。この時点で得られた言葉は、「評価項目」として扱われる。さらに、「ラダーリング [注11]」と呼ばれる方法によって、「上位かつ抽象的

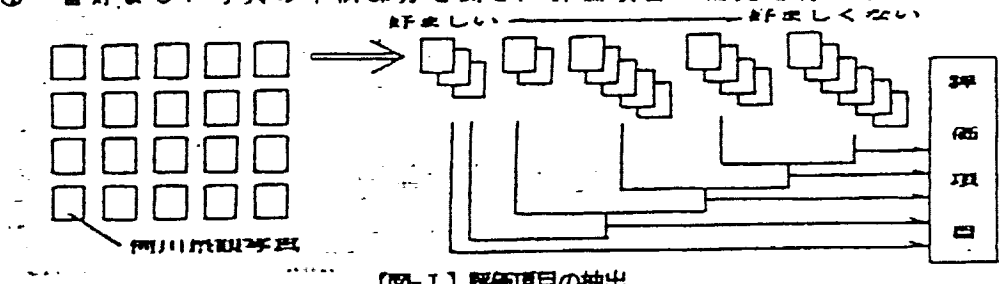
STEP１：評価項目の抽出

①20枚すべての写真を被験者に提示し、「好ましさ度合い」で５段階評価させて、分類させる。

②【図－Ⅰ】のような組み合わせで評価の低いものから順番に、被験者にとって、重要な評価基準を聞き出し、評価項目として記録する。
「この写真（群）より、この写真（群）の方が好ましいということでしたがそう判断された理由のうち、あなたにとって重要だと思われるものを一つずつ言ってください。」

③被験者が評価項目を言い出せなくなったら次の評価項目に移る。

④一番好ましい写真の不満部分を聞き、評価項目の補完を行なう。



【図-Ⅰ】評価項目の抽出

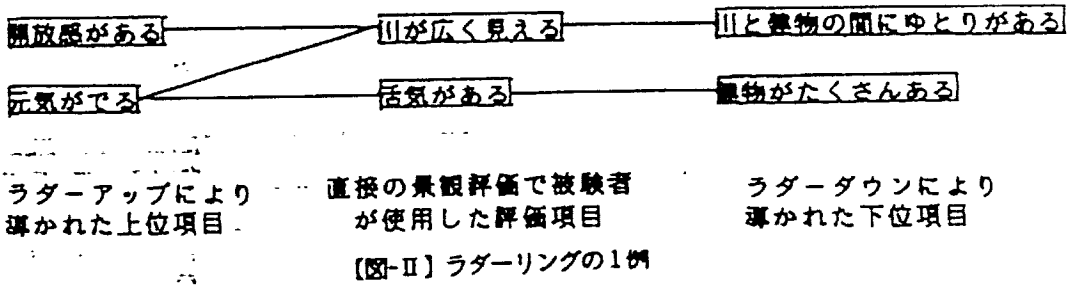
STEP２：ラダーリング

①ラダーアップ－上位項目の抽出
「・・だと良いということでしたが、あなたにとって、・・だとどうして良いのですか。その理由を教えてください。」

②ラダーダウン－下位項目の抽出
「・・だと良いということでしたが、あなたにとって、具体的に何がどうなれば、・・なのですか。・・である条件を教えてください。」

③ラダーアップは一次のみ抽出し、ラダーダウンは、被験者が容易に言葉を見出だせなくなったら、終了する。その際、終了は被験者の自己申告とする。

④以上の手順で、被験者個人個人について、論理的因果関係を示すデータを作成する。【図－Ⅱ】はラダーリングの１例である。



【図-Ⅱ】ラダーリングの１例

図２－２　レパートリーグリッド発展手法の概要

（出典：河川景観評価構造の解明におけるレパートリーグリッド法の有用性　認知心理学的手法を用いた河川景観評価構造の解明（その１），日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）F-1，pp137-138，1993 年）

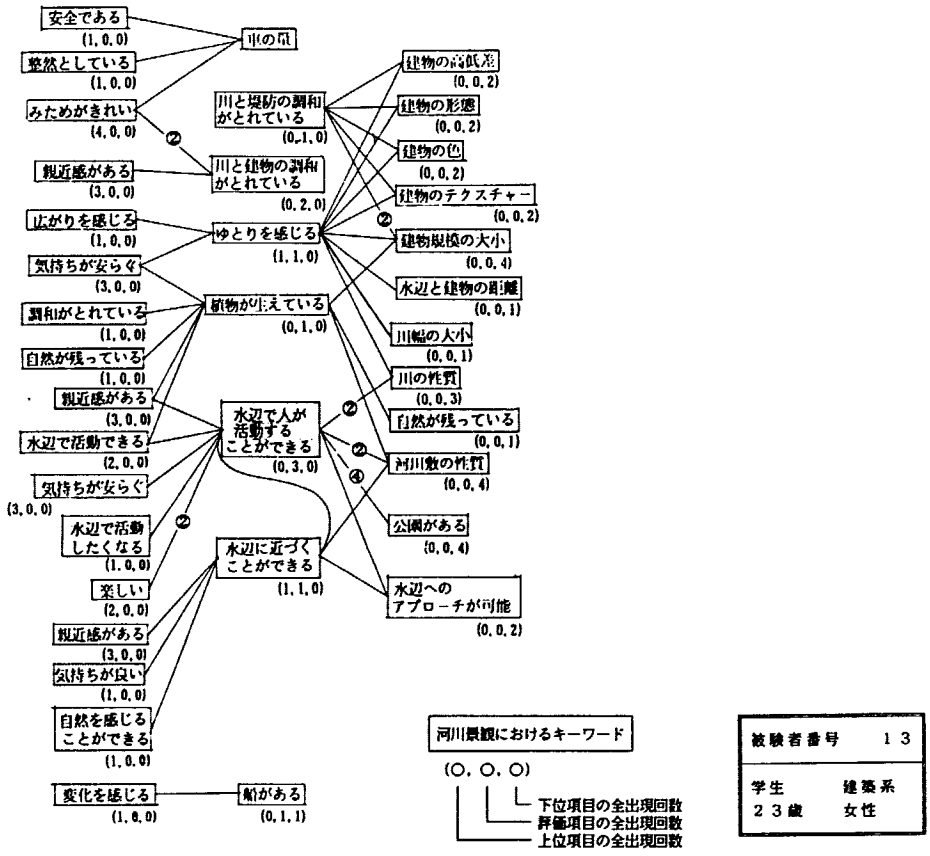


図2−3　レパートリーグリッド面接調査による河川景観の評価構造図の例−1

（出典：認知心理学的手法を用いた河川景観評価構造の解明，p117，東北大学修士学位論文，1993年）

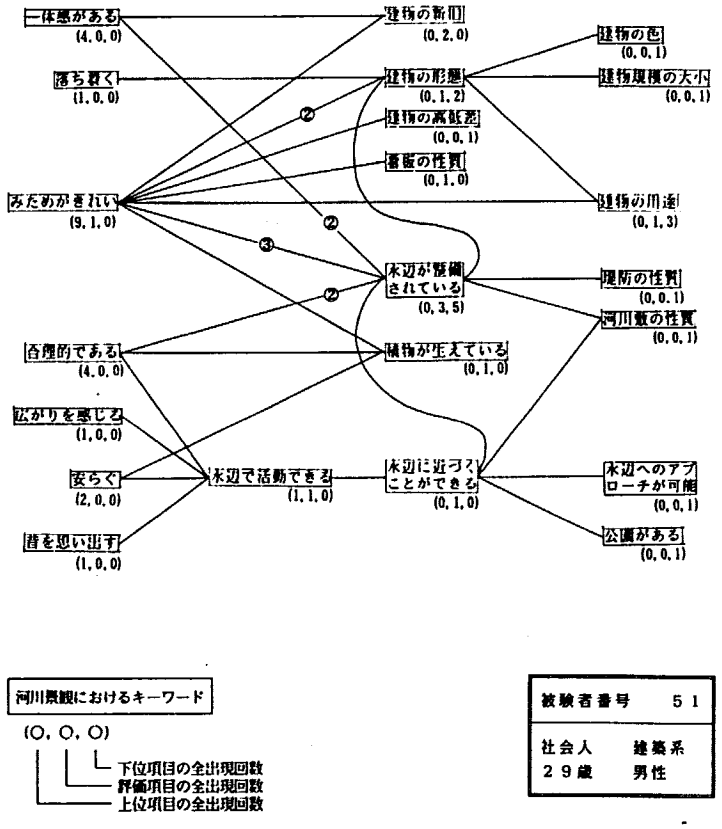


図2−4　レパートリーグリッド面接調査による河川景観の評価構造図の例−2

（出典：認知心理学的手法を用いた河川景観評価構造の解明，p129，東北大学修士学位論文，1993年）

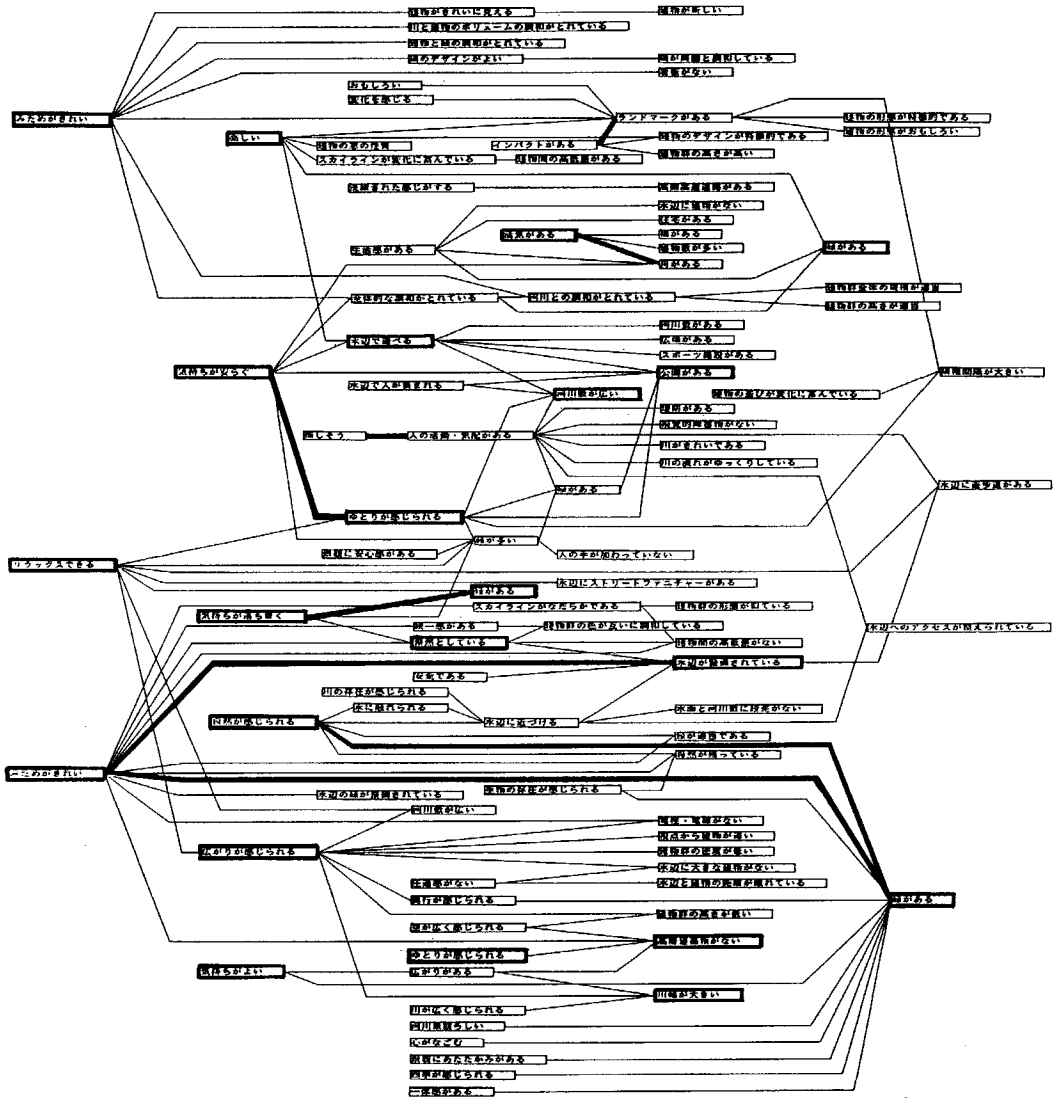


図３－１７　サブキーワードにおける河川景観評価構造モデル

（被験者が面接調査時に関連させた全てのキーワードの内、度数３以上のものを記述。太線は、その度数が７以上あることを示し、サブキーワードの太枠は総出現度数が35度数以上あったことを示す。）

図２－５　協力者全員（53名）の評価構造図

（出典：認知心理学的手法を用いた河川景観評価構造の解明，p93，東北大学修士学位論文，1993年）

な評価項目」、および「下位かつ具体的な評価項目」を得ている。前者は、先に得た「評価項目」に対して、「～だとなぜ良いのですか？」と質問する（ラダーアップと呼ばれる）ことによって得られ、後者は「～であるためには何が必要ですか？」と質問する（ラダーダウンと呼ばれる）ことによって得られる。

この一連の手続きを繰り返すことにより、図 2－3 および図 2－4 のような評価構造図が得られ、協力者全員の評価構造図を重ね合わせることにより、図 2－5 のような全体の評価構造図が得られることが分かっている。これらの項目は、河川景観評価の際のキーワードであり、キーワード間には論理的な上位―下位の関係が存在する。この方法の有用性は、「環境の何に着目しているのか」を生活者自身の言葉によって得ることが出来ることであり、さらに、評価する理由をラダーリングによって階層的に抽出できるところにある。

小橋[文64]によると、「レパートリーグリッド発展手法」の原型である「レパートリーグリッド法」は、Kelly が提唱する「個人的構成体理論（Personal Construct Theory）[注12]」に基づいた面接手法であり、「個人的構成体は、ある事象をたとえば、「確実」か「不確実」か、「男性的」か「女性的」かといったように、二分法的カテゴリーに整理する道具であり、人間はこの個人的構成体によって自己および世界を知覚し、解釈し、概念化し、予期する。」とされている。また、「個人的構成体の内容を知るためには、個人的構成体について本人に直接問いかけてみなければならず、この問いかけのために個人的構成体理論が提供する技法を総称して、レパートリーグリッド法（repertory grid technique）、あるいは省略してグリッド法と呼ぶ。」とされる。

また、Neisser[注13]は、「知覚者は図式（schemata）と名づけられる認知構造を持っていると仮定し、図式とは環境が提供する情報を抽出する働きをするものである。」と述べ、知覚・認知・評価の過程において「図式」の介在を論じている。

Kelly の述べる「個人的構成体」や、Neisser の述べる「図式」は、いずれも「人々が環境を認識する際の内的な道具」として位置づけられる「認知構造」と呼ばれるものであり、人間－環境関係への認知心理学的なアプローチのもう一つの特徴は、「認知構造を媒介として認知された環境を扱う。」ところにあると考えられる。

都市生活者が『場所』を構築する際にも、半ば無意識に評価は行われ、「居心地が良い」などの良い評価を与えるからこそ『場所構築』されると考えられる。さらに、なぜ「居心地が良いのか」などの理由を質問することによって、上位かつ抽象的な評価が得られることが予想される。認知心理学的アプローチにおいては、都市生活者へのアンケートなどの調査により、『場所』の「可能性」に着目して「～できるから」「～という気持ちになれるから」などの評価を理由として得ることができ、これらの言葉を考察することにより、都市生活者によって認知された『場所』における、評価的な人間－環境関係を把握することができると考える。

2.2.9. 人間－環境関係への生態学的アプローチ

人間－環境関係への認知心理学的アプローチは、人間の情報処理過程、とりわけ評価を主な考察の対象とし、「認知された環境」を扱うが、一方で生態学的なアプローチは、「ありのままの人間の行動」を扱う視点を有するところが特徴的である。

Gibson[文66]は、心理学における知覚の問題、とりわけ視知覚を生態学的に扱い、アフォーダンスという語を造り、「環境のアフォーダンスとは、環境が動物に提供する（offer）もの、良いものであれ悪いものであれ、用意したり備えたりする（provide or furnishe）ものである。」と述べている。

Gibson 以後、アフォーダンスの概念は、建築および都市の計画・デザインの分野において様々に用いられているが、その用法は一様ではない。Lang[文67]は、「もののアフォーダンスは、対象の物質・非物質に関わらず、特定の方法で特定の種またはその種の個人メンバーが使用できるためにその対象が持つ資質である。特定の形態の構築環境によって、ある活動もしくはある解釈がある人々には与えられていても、別の人々には与えられていないことがある。」と述べている。

Gibson 以外にも、アフォーダンスと同様の意味の言葉を用いて、人間の活動のために環境が備える資質を説明した例がある。建築家の Louis Kahn は、「効用（availability)」という用語を、ランドスケープ・アーキテクトの Lancelot Brown は「可能性（capability)」という用語を、それぞれアフォーダンスとほぼ同じ意味で使っている[文68]。また、Lang[文69]は、「フィット（fit)、アフォード（afford)、シノモルフィ（synomorphy)、コングルエンス（congruence）といった言葉はすべて、ある行動のパターンとある物理的環境のパターンとの間の関係を記述するのに使われてきた。これらは全て質的な意味合いにおいて使うことができる。」と述べている。さらに、Koffka も対象物には「要求特性（demand)」もしくは「誘引する性質（invitational quality)」があると示唆しており[文70]、Lewin も「誘発特性（invitation character)」、「誘発性（valence)」という用語を造っている[文71]。

Barker は都市における場面を、「行動セッティング（Behavior Setting)」という語を用いて説明している。「行動セッティング」とは、食事をする、講義をするなどのお決まりの行動パターンが生じるような、個別の物理的セッティング（例えばレストラン、教室）のことであり、Barker は「都会の日常経験の重要な決定因は、その人が利用できる行動セッティングの数とその行動セッティングに“配置”できる人数である。」と述べている[文73]。Barker の提示した都市における人間－環境関係の決定因は、比較的都市化されていない環境における研究から導かれたものであり、都市の場所における人間－環境関係を考察する場合に、Barker の図式を単純に当てはめることは困難も伴う。Krupat[文74]は、都市におけるセッティングを扱う際には、「適所を見つける可能性」と「多種多様な活動の機会が存在する場合、行動と場所の関係の変化を考慮する必要がある」ことを指摘している。

また、鈴木[文75]は「居方」という概念を用いて、都市空間に人が居る場面の様子および人間－環境関係を生態学的に取り扱っている。この場合、「居方」とは、「ある場所に人が居

るときの様子、そのときに周囲の環境や他者ととっている関係」の総称とされている。鈴木は、日本の都市に居場所が無いことを問題とし、「日本の都市の物理的な空間自体、そしてその背景にある都市の公共空間についての計画概念に問題があるように思う。」と述べている。

前項および本項において、人間－環境関係へのアプローチとして２つの方法があることを述べた。このことに２つのアプローチに関して、Krupat [文76]は、次のように述べている。「Craik や Rapoport らの「主観主義派」の関心の一つとして『人々がいかに行動するのか』という点があり、考慮すべき最も直接的な規定因は人々の知覚、認知、そして評価である。それは物理的に記述されたり、客観的に特徴づけられたりした環境の特性にかかわりなく、人々は種々の評価・選択の後に行動に移る。人が異なれば利用できる情報の種類も異なるし、さらにその情報の処理の仕方も異なるために行動は人によって変わるであろう。つまり行動は、環境が“現実に”どうあるかの結果としてではなく、人々がその環境を認知的にどのように評価しているかの関数として生じている。」主観主義派の主張は、上述の人間－環境関係への認知心理学的アプローチと同じ遡上にあり、一方、主観主義とは異なるアプローチ、すなわち客観的記述を重んじるアプローチは、上述の生態学的アプローチと同じ遡上にあると言える。これら異なるアプローチの仕方について、Krupat [文77]は「主観的記述と客観的記述は、両者の間の相互作用（ずれや一致の程度）のため、実際は最も有効な記述の仕方になり、基本的にはこの両者の方向性は、相補的関係にある。」と述べている。

したがって、人間－環境関係への２つのアプローチは、その方法は違うが、実際には両面から課題をとらえることが望ましいと考えられる。本論文においても、オフィスワーカーが構築する『場所』をとらえる場合に、双方のアプローチを相補的に取り入れることが望まれる。

2.2.10. 本研究における『場所』へのアプローチ

上野[文78、文79]は、認知心理学のキー概念であった知識表象、コンテクスト、個人、社会、認知的な道具などを「状況論的アプローチ」によって問い直し、さらに「そもそも、相互行為やコンテクストの組織化や道具のアレンジと対象のアフォーダンスの構成は切り離すことができない。あるいは、アフォーダンスも、また、自然の中にあらかじめ与えられたものであるとは言えず、むしろ、環境やコンテクストをつくりあげる中ではじめて浮かびあがってくるものである。」と述べ、アフォーダンス概念の問い直しも行っている。上野は、旋盤加工という行為を例にとり、「こうした旋盤による金属切削の状況的行為は、コンピュータ・プログラムのようなもので置きかえることはできない。」と述べ、このような「局所的に行われ、ものに依存した状況的行為」が有するテクノロジーは、「状況的行為を再組織化する可能性のある新たなリソースと考えるべきである。」と述べている。

Gibson は、「環境のアフォーダンスとは、環境が備え、用意し、提供するもの」と述べ、この視点では、『場所のアフォーダンス』も人間－環境関係における環境側に位置するもの

としてとらえられる。しかし、本論文では、1.1.5.で述べたように、オフィスワーカーが生活環境の中に「～できる」「～という気持ちになれる」などの「可能性」を発見し、その「可能性」を使いこなすことで『場所』を構築すると考えており、この意味での「可能性」を『場所のアフォーダンス』と呼んでいる。したがって、『場所』を構築する上で、また構築された『場所』において、オフィスワーカーが『場所』になんらかの「可能性」を発見し、使いこなす「状況」が、『場所』の豊かさを左右する重要な課題であると言える。既に2.2.7.において、『場所』における人間－環境関係を「両者を相互に不可分な一体的なもの」として取り扱うことを述べた。この見地からも『場所のアフォーダンス』が、環境側にあるかどうかを論じるよりも、『場所のアフォーダンス』は、『場所構築』の過程、および構築された『場所』において、オフィスワーカーによって発見され、使いこなされる『場所』の性質として理解されるのが妥当と考える[注14]。このようなアプローチは、上述の認知心理学的アプローチと生態学的アプローチが統合された形のアプローチでもあり、両者がともに課題としている人間－環境関係を『場所』、および『場所構築』という状況として一体的に取り扱う視座であるとも言える。

2.3. 本研究における課題

これまで、既往の文献・研究の成果や特徴・問題点に対応して、本論文におけるいくつかの指針を示した。本項では、これらの指針に基づいて本論文が取り組むべき課題を以下の通りに整理した。

課題①「どこに、どのような『場所』を構築しているのか。」
課題②「異なる環境下では、『場所構築』はどのように違うのか。」
課題③「『場所構築』および『場所』の性質を左右する環境行動論的な要因は何か。」
課題④「構築された『場所』の様態はどのように表現され、整理されるべきなのか。」

＜課題①＞

オフィスワーカーの生活拠点である自宅（ファーストプレイス）、職場（セカンドプレイス）の周囲には、都市生活上の必要性から、様々な『場所』が構築されていると考えられる。また、これらを含む、さらに広域な生活圏にも『場所』が構築されていると考えられる。これらの『場所』の位置、および『場所』の名称や建築・都市施設用途がまず明らかにされるべきである。また、『場所』を訪れる頻度、『場所』における滞在時間、同伴者なども明らかにされるべきである。本課題に対しては、第3章および第5章にて取り組む。

＜課題②＞

同一のオフィスワーカーによる複数の地域の比較や、実際にある地域から別の地域へ移転

した場合の変化は、異なる環境下での『場所構築』の違いを把握する上で重要な着眼点である。本課題に対しては、第4章で取り組む。

＜課題③＞

『場所構築』や『場所』の性質を左右する要因として、課題①で挙げた「その『場所』での活動、様子」のほか、「その『場所』をどこで知ったのか」などのきっかけ、「その『場所』での工夫・対処行動」などの環境への働きかけが明らかにされるべきである。本課題に対しては、第3章、第5章および第6章で取り組む。

＜課題④＞

課題①で述べた『場所』の名称や建築・都市施設用途（美術館、近所の公園など）は、ある程度まで「どのような『場所』なのか」を表現するが、「その『場所』でオフィスワーカーが何をしているのか」「周りはどんな様子なのか」などの『場所』の詳しい様態は充分表現されているとは言えない。しかし、構築された『場所』の性質は、このような様態によって左右されると考えられ、『場所』の名称や建築・都市施設用途などと次元を異にした『場所』の分類軸が求められる。また、これらオフィスワーカーによる『場所表現』を考察し、『場所』のタイプ分類を行い、『場所』における人間－環境関係、『場所のアフォーダンス』に関する基礎的知見を得ることは、環境行動論の視点からも、建築および都市の計画・デザインの立場からも重要であると考える。本課題に対しては、第7章で取り組む。

注

注１）舟橋（文１）は、環境行動論の基本的な立場と目的について「人間と環境との相互関係を研究し、政策・計画・デザイン・教育を通じて生活の質の改善に応用する。」と表現されるのが通例であると述べている。

注２）舟橋（文１）は、環境行動論から見た「個人の“より良い生活の質”とそれを担保する環境を求める視点」のうち、比較的新しい視点の例として、「Place」および「Placeness」を挙げている。都市生活における『場所』、『場所』のあり方を議論することは、環境行動論における重要な課題である。

注３）建築および都市のデザイン論的な文献に広く見られる特徴であるが、建築や都市における生活者の活動や行為に焦点があたっていても、「生活者の属性（プロフィール）には触れられていない」場合や、「生活者が何時に、何時間その場所に居て、どこから来てどこに行くのか触れられていない」場合、さらには「生活者がその場所でそのように活動・行為する理由について触れられていない」場合も散見される。これらの論点は、建築および都市の計画者・デザイナーに対する「物的環境デザインのガイドライン」というこれらの文献の役割や意図から逸脱するものであり、現実には建築および都市のデザインは職能分化された状況にあるので、計画者・デザイナーが扱うことが困難な「生活研究の領域」である。本論文においては、このような建築および都市の計画・デザイン上の課題を意識しながら都市生活の研究を行う。

注４）Milgram は、都市生活における「過剰負荷の概念」を論じ、都市生活者の持つ「環境に適応・対処し、打ち克つ能力」を指摘している（文３）。また、適応・対処の例として、「人と出会う時間を少なくする」「優先順位を決める」などの行動を挙げている（文３）。さらに Proshansky は「どうしても会うことが避けられない多様な人々や環境が存在するからこそ、都市住民は融通性のある人間になれる」と述べ、Krupat（文３）も「都会人は、その手がかりに対する鋭い感性を養うことによって、他者の行動を予測し、他者との交流においても、その場にふさわしい敬意、形式的儀礼、関心などを表現できるようになる」と述べている。これらはいずれも都市生活者が身につける「都市生活スキル」に着目したものである。

注５）Lewin（文 36）は「社会科学における場の理論」を構成する段階で、物理学における場の概念を参照し、物理学において定式が用いられるように、心理学や社会科学においても、定式によって場が議論されるべきであると述べている。本論文では、場は社会的雰囲気とも混同されるとの懸念から、場という言葉の使用を避けることとする。

注６）住田ら（文 48）によって、既に子供の「居場所」が研究されている。住田は「最近、居場所という言葉は、本来の語義に安心、安らぎ、寛ぎ、あるいは他者の受容、承認という意味合いが付与され、そこに居るとホッと安心して居られるところ、自分のありのままを受け入れてくれるところ、居心地の良いところ、心が落ち着けるところというような意味に用いられるようになってきた。」と述べている。また、「子供の居場所が問題とされるようになってきた背景には、近年の不登校の児童・生徒の増加現象があり、この文脈において居場所は、「学校的価値に囚われることなく（むしろ学校的価値に否定的・対立的である）、安心して居心地よく居られて自由に活動できるような場所」という意味にとらえられている。本論文が課題としているオフィスワーカーの『場所』の意味やニ

ュアンスは、「居場所」のそれとは異なり、議論の背景も異なっている。ヒアリングやアンケート等の実践的調査の遂行において、言葉の持つ意味やニュアンスは充分考慮されるべきであるとの考えから、本論文では「居場所」という言葉の使用を避けることとする。

注7）「場面」をこのように定義すると、例えば「食事をする場所」「リフレッシュする場所」は、それらが画像や映像として記述（記録）された場合は「場面」として扱われることになる。しかし、この場合においても、研究者が外部から「食事をしている」「リフレッシュしている」と「みなした」場面であることが予想される。特に後者のような生活者の心理は、外部からの観察が難しく、厳密には「本当にリフレッシュしているかどうか」は観察では判断し得ない。本論文は、オフィスワーカーが構築する『場所』を扱うが、『場所』はすべてアンケートおよびヒアリングによって収集され、調査対象者が「食事をする」「リフレッシュする」と表現した『場所』を扱っているので、外部観察では判断し得ない心理を扱えるという利点を持つ。(2.2.8で詳しく述べるが、) 本論文が扱う『場所』はこのようにオフィスワーカーによって「認知された『場所』」「経験された『場所』」であり、この点において外部から観察され、記述（記録）された現実の「場面」と区別して扱っている。

注8）ここで「環境実現論（possibilism)」は「目標への努力を通して選択し、物事をなしとげる能力が、人間の重要な特性とみなされ、環境のほうが個人によって影響を受け、形作られる見方」とされ、「環境決定論（determinism)」は「外的な力が反応の仕方を指示し、人々に特定のやり方で行動せよと要求するという見方」とされる（文51)。

注9）Krupat（文 57）は、知覚・認知・評価という心理的プロセスについて、「知覚は、刺激または環境からの直接的な感覚的体験を意味し、人は知覚によって環境についての情報を獲得し、収集する。」「認知はより多くの意味を含み、取り入れられた情報が体制化され、構造化される過程を指す。認知によってそのときの情報が分類され、検索され、意味のある配置に置き換えられる」「評価はさらに一段上にあり、構造化された認知に価値（values）や好み（preferences）を付加することにかかわっている。」と述べている。

注10）讃井（文60、文61）は、臨床心理学の分野で治療を目的に開発された「レパートリーグリッド法」を改良発展させ、「レパートリーグリッド発展手法」を開発し、住環境評価研究に応用している。この手法は、その後も環境評価研究で頻繁に用いられ、実務ベースでの利用も見られ、現在は「評価グリッド法」と改称されている。この手法の最大の特徴は、回答者にさまざまな環境を提示し、これらを比較しどちらが好ましいか判断させ、その評価判断の理由を尋ねる形式であり、評価項目を回答者自身の言葉として抽出できる点にある（文62)。

注11）ラダーリングとは、D. N. Hinkel によって開発された、上位のコンストラクトと下位のコンストラクトを抽出するための手法である（文58)。

注12）個人的構成体理論（Personal Construct Theory）は、讃井（文63）によると、「人間は経験を通じて構築されたコンストラクト・システムと呼ばれる各人に固有の認知構造を持ち、その認知構造によって環境およびそこでのさまざまなできごとを理解し、またその結果を予測しようと努めている。」と解釈されている。

注13）Neisser（文65）によると、「図式は知覚循環全体の一部であり、それは知覚者個人の内的過程であ

って、経験によって修正を受け、そのときに知覚されているものに固有のものである。図式は感性面に有効に働きかける情報を受入れ、その情報によってまた変化を受ける。図式はまた、さらに多くの情報を手に入れるための運動や探索活動を方向付づけ、それによって得られた情報によりさらに修正される。」とされる。

注 14) 本論文では、アンケート調査の回答から、「構築された『場所』のどのような「可能性」に着目し、何ができると表現しているか。」を考察する。Gibson（文 72）は「対象が我々にアフォードするものは、我々が通常注意を払っているものである。」と述べている。本論文のアンケート調査において記入されたものは、オフィスワーカーが注意を払っているものと考えられ、この点で Gibson の述べるアフォーダンスと整合する。

注 15) 室（文 80-83）は、住宅の内観写真を提示し、その記述文を書いてもらう実験的研究を行い、その中で「環境に対する記述には、既に評価の意味合いが含まれている。」と述べている。(2.2.12 で詳しく述べるが、) 本論文においても、アンケート調査時に、「理由」のほかに『場所』の自由記述をオフィスワーカーに記入してもらい、それらを『場所表現』として取り扱う。

参考・引用文献

文１）舟橋國男：環境行動論の視点から，建築雑誌/Vol.112，No.1407，pp.008－011，日本建築学会，1997 年

文２）岩田紀：快適環境の社会心理学（現代応用社会心理学講座２），pp33-35，ナカニシヤ出版，2001 年

文３）Edward Krupat，藤原武弘　監訳：都市生活の心理学，西村書店，1994 年

文４）Jan Gehl，北原理雄　訳：屋外空間の生活とデザイン，鹿島出版会，1990 年

文５）Christopher Alexander，平田翰那　訳：パタン・ランゲージ，鹿島出版会，1984 年

文６）Clare Cooper Marcus and Carolyn Francis，湯川利和・湯川聰子　訳：人間のための屋外環境デザイン，鹿島出版会，1993 年

文７）Clare Cooper Marcus and Wendy Sarkissian，湯川利和　訳：人間のための住環境デザイン，鹿島出版会，1989 年

文８）Herman Hertzberger，森島清太　訳：都市と建築のパブリックスペース，鹿島出版会，1995 年

文９）William H. Whyte，柿本照夫　訳：都市という劇場，日本経済新聞社，1994 年

文 10) Ray Oldenburg：The Great Good Place，MARLOWE & COMPANY New York，1999

文 11) Ray Oldenburg：国際シンポジウム　新・都市の時代―都市のリ・デザイン/行ってみたい都市の形成―　報告書，財団法人千里文化財団，2002 年

文 12) 磯村英一：都市社会学研究，pp.68-92，有斐閣，1959 年（鈴木広，高橋勇悦，篠原隆弘　編集：リーディングス日本の都市７　都市，pp.38-50，東京大学出版会，1985 年より）

文 13) 町村敬志・西澤晃彦：都市の社会学，有斐閣アルマ，2000 年

文 14) 鳴海邦碩，他：都市のリ・デザイン，学芸出版社，1999 年

文 15) 小石原はるか：スターバックスマニアックス，小学館文庫，2001 年

文 16) 岩田紀：快適環境の社会心理学（現代応用社会心理学講座２），ナカニシヤ出版，2001 年

文 17) Claude S. Fischer，松本康，前田尚子　訳:都市的体験，未来社，1996 年

文 18) 西田徹：犬の散歩を通してみる地域空間の価値　新潟市における環境行動的研究　その２，日本建築学会大会学術講演梗概集，1997 年

文 19) 西田徹・大橋昌毅・阿知波修二：新潟市における環境行動的研究　その３　―最適化行動が居住環境に果たす役割と可能性―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年

文 20) 阿知波修二・西田徹・大橋昌毅：新潟市における環境行動的研究　その４　―育児をきっかけとした生活の拡張に関する研究―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1997 年

文 21) 西田徹・稲井智子：新潟市における環境行動的研究　その４　―郊外に居住する大学生の生活の拡張について―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年

文 22) 稲井智子・西田徹：新潟市における環境行動的研究　その５　―ちょうどいい関係の構築とそれが果たす役割―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1999 年

文 23) 阿部美佳子，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：転居初期における生活環境資源認識に関する研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，1999 年

文 24) 厳爽，石井敏，外山義，橘弘志，長澤泰：グループホームにおける空間利用の時系列的変化に関する考察　「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究（その 1)，日本建築学会計画系論文集　第 523 号，pp. 155－161，1999 年

文 25) 厳爽，石井敏，橘弘志，外山義，長澤泰：介護体制と入居者の生活構成の関わりに関する考察　「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究（その 2)，日本建築学会計画系論文集　第 528 号，pp. 111－117，2000 年

文 26) 外山義，厳爽，橘弘志，石井敏，長澤泰：入居者の空間利用の時系列的変化　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 1)，日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年

文 27) 橘弘志，厳爽，外山義，石井敏，長澤泰：介護体制が入居者の生活に与える影響　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 2)，日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年

文 28) 厳爽，石井敏，橘弘志，外山義，長澤泰：異なる環境におけるなじみの形態　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 3)，日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年

文 29) 外山義，厳爽，橘弘志，石井敏，長澤泰：なじみの定着とその様態　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 4)，日本建築学会大会学術講演梗概集，1999 年

文 30) 橘弘志，厳爽，外山義，石井敏，長澤泰：痴呆レベルと空間利用傾向の関わり　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 3)，日本建築学会大会学術講演梗概集，1999 年

文 31) 橘弘志，高橋鷹志：地域に展開される高齢者の行動環境に関する研究―大規模団地と既成市街地におけるケーススタディー，日本建築学会計画系論文集　第 496 号，pp. 89－95，1997 年

文 32) 橋本都子，翠川智子，高橋公子，大石経子，高橋鷹志，児平亜由子，宮城紀子：在宅高齢者の日常生活と地域環境との関わり　生活圏の環境行動に関する研究（1)，日本建築学会大会学術講演梗概集，1997 年

文 33) 翠川智子，橋本都子，高橋公子，大石経子，高橋鷹志，児平亜由子，宮城紀子：在宅高齢者の対人関係と生活像　生活圏の環境行動に関する研究（2)，日本建築学会大会学術講演梗概集，1997 年

文 34) 橋本都子，高橋鷹志：都市単身居住における行動場面の多層性―都市居住の機能と役割の再考―，人間・環境学会第 9 回発表論文集，人間・環境学会，2002 年
文 35) 永峰麻衣子，小谷部育子，高橋鷹志，橋本都子，岩佐明彦：「現代東京人」の居場所について―都市単身居住者の環境行動に関する研究―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1999 年
文 36) Kurt Lewin，猪股佐登留　訳：社会科学における場の理論，pp. 73，誠信書房，1956 年
文 37) S. A. Mednic，J. Higgins and J. Kirschenbaum　著，外林大作，島津一夫編著：心理学概論 行動と経験の探究，誠信書房，1979 年
文 38) David Canter，宮田紀元・内田茂　訳：場所の心理学，彰国社，1982 年
文 39) Edward Relph，高野岳彦，阿部隆，石山美也子　訳：場所の現象学，ちくま学芸文庫，1999 年
文 40) Yi-Fu Tuan，小野有五・阿部一　訳：トポフィリア　人間と環境，せりか書房，1992 年
文 41) Yi-Fu Tuan，山本浩　訳：空間の経験，ちくま学芸文庫，1993 年
文 42) Dolores Hayden，後藤春彦，篠田裕見，佐藤俊郎　訳：場所の力，学芸出版社，2002 年
文 43) Edward T. Hall，日高敏隆・佐藤信行　訳：かくれた次元，みすず書房，1970 年
文 44) 多木浩二：生きられた家　経験と象徴，岩波現代文庫，1984 年
文 45) 間宮陽介：同時代論，岩波書店，1999 年
文 46) 中村雄二郎：場所トポス，弘文堂思想選書，1988 年
文 47) 金森修：漏れた心、溜まる場所，感性哲学２　「住む」の哲学，日本感性工学会感性哲学部会
文 48) 住田正樹：子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在，平成 10 年度～平成 12 年度科学研究費補助金基盤研究（A）（1）研究成果報告書，p1，2001 年
文 49) 日本建築学会編：人間環境学，pp67，朝倉書店，1997 年
文 50) Jon Lang，高橋鷹志　監訳，今井ゆりか　訳：建築理論の創造　環境デザインにおける行動科学の役割，pp133-134，鹿島出版会，1992 年
文 51) Edward Krupat，藤原武弘　監訳：都市生活の心理学，pp. 13-14，西村書店，1994 年
文 52) 高橋鷹志，日本建築学会　編：人間－環境系のデザイン，pp22－26，彰国社，1997 年
文 53) 隅谷維子，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：環境との関わり方からみた場所の意味とその構造に関する研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，1998 年
文 54) 隅谷維子，鈴木毅,木多道宏，舟橋國男：好きな場所にみる環境との関わり方の研究，人間・環境学会第 6 回発表論文集，人間・環境学会，1998 年
文 55) 松本康寛，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：他者との関係に着目した居方と都市の場所に関する研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，2000 年
文 56) Edward Krupat，藤原武弘　監訳：都市生活の心理学，西村書店，1994 年
文 57) Edward Krupat，藤原武弘　監訳：都市生活の心理学，p12 および pp79-80，西村書店，1994 年
文 58) 稲田直樹，近江隆，北原啓司，林田大作：河川景観評価構造の解明におけるレパートリーグリッド法の有用性　認知心理学的手法を用いた河川景観評価構造の解明（その 1），日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）F-1，pp137-138，1993 年
文 59) 林田大作，近江隆，北原啓司，稲田直樹：サブキーワードにおける個人の評価構造モデルの解明　認

知心理学的手法を用いた河川景観評価構造の解明（その 2），日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）F-1，pp139-140，1993 年
文 60）讃井純一郎，乾正雄：レパートリーグリッド発展手法による住環境評価構造の抽出―認知心理学に基づく住環境評価に関する研究（1）―，日本建築学会計画系論文報告集，No.367，pp.15 - 22，1986 年
文 61）讃井純一郎，乾正雄：個人差および階層性を考慮した住環境評価構造のモデル化　認知心理学に基づく住環境評価に関する研究（2）―，日本建築学会計画系論文報告集，No.374，pp.55 - 60，1986 年
文 62）日本建築学会編：環境心理調査手法入門，p57，技報堂出版，2000 年
文 63）同上，p13
文 64）小橋康章：決定を支援する（認知科学選書 18），東京大学出版会，1988 年
文 65）Ulric Neisser，古崎敬・村瀬旻　訳：認知の構図，サイエンス社，1978 年
文 66）James J. Gibson，古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻　訳：生態学的視覚論，p137，サイエンス社，1985 年
文 67）Jon Lang，高橋鷹志　監訳，今井ゆりか　訳：建築理論の創造　環境デザインにおける行動科学の役割，pp106 - 107，鹿島出版会，1992 年
文 68）同上，pp107 - 108
文 69）同上，p156
文 70）同上，p108
文 71）James J. Gibson，古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻　訳：生態学的視覚論，p150，サイエンス社，1985 年
文 72）同上，p140
文 73）Edward Krupat，藤原武弘　監訳：都市生活の心理学，p57 および pp72-74，西村書店，1994 年
文 74）同上、pp66 - 68
文 75）鈴木毅：人の「居方」からの環境デザイン，建築技術，1993 年 07，09，1994 年 02，04，06，08，10，12，1995 年 02，04，06，10，12
文 76）Edward Krupat，藤原武弘　監訳：都市生活の心理学，p51，西村書店，1994 年
文 77）Edward Krupat，藤原武弘　監訳：都市生活の心理学，pp51 - 52，西村書店，1994 年
文 78）上野直樹　編著：状況のインターフェース，p1 および p4，金子書房，2001 年
文 79）上野直樹：仕事の中での学習　状況論的アプローチ，東京大学出版会，1999 年
文 80）室恵子，須永修通，伊藤直明：言語選択法と評定尺度法による温熱環境評価の比較　心理評価の抽出方法に関する研究（1），日本建築学会計画系論文報告集，No.489，pp.81 - 88，1996 年
文 81）室恵子，須永修通，伊藤直明：温熱環境評価における言語選択報の有効性に関する検討　心理評価の抽出方法に関する研究（2），日本建築学会計画系論文報告集，No.511，pp.61 - 67，1998 年
文 83）室恵子，須永修通，伊藤直明：居住環境を対象とした評価用語の選定に関する基礎的検討，心理評価の抽出方法に関する研究（3），日本建築学会計画系論文報告集，No.524，pp.61 - 68，1999 年

第３章　職場周囲に構築される『場所』

3.1. 本章の目的

オフィスワーカーにとっての「職場」は仕事をする場所であると同時に、自宅（＝ファーストプレイス）に次ぐ、「第二の生活の拠点＝セカンドプレイス」である。勤務日は職場での仕事を中心に生活が展開され、職場周囲でも気分転換や私事を行っており、このような姿はオフィス街で日常よく見かけられる。

本章では、「オフィスワーカーにとって生活の拠点となる職場の周囲には、生活に必要なサードプレイスが構築されている。」と仮定し、調査・考察を行った。

オフィスワーカーが構築するサードプレイスのうち、セカンドプレイス周囲のサードプレイスを調査し、考察を行うことは、「働く環境」をオフィスワーカーの視点からとらえ、「働く環境」に関する建築および都市の計画・デザイン上の知見を抽出する上で重要と考えられる。

調査対象は、東京都千代田区神田司町（以下、神田と呼ぶ。）から、東京都港区港南（以下、品川と呼ぶ。）へ、平成11年1月に事務所を移転した0社（建設業）の一部署（以下、0社当該部署と呼ぶ。）の部員の一部とした。神田はいわゆる「下町的な界隈性を有するまち」であり、品川は「計画的に大規模再開発された新しいまち」である。このような対照的な地域の両方で勤務経験のある0社当該部署の部員は、両地域をオフィスワーカーの立場から比較・評価できるという点で、きわめて貴重な集団であり、調査対象者として適当と考える。

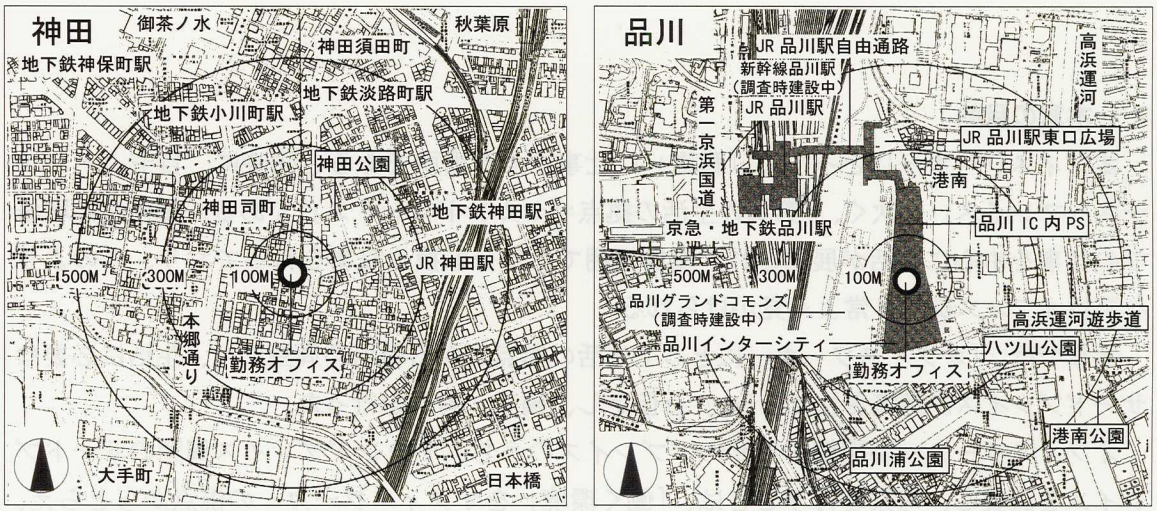
本章では、この調査・考察により、オフィスワーカーが職場周囲にどのようなサードプレイスを構築しているかを明らかにし、構築されたサードプレイスによってオフィスワーカーの職場周囲の都市生活の質がどのように形成されているかを考察する。

3.2. 調査対象の概要

3.2.1. 神田および品川の地域・職場の概要

神田における0社当該部署の勤務オフィスは、フロア面積約200㎡、8階建のビルであり、約60名が3階～5階に勤務していた。また、周辺には0社の他部署が入居するビル（以下、自社オフィスと呼ぶ。）が多数存在していた。品川への移転後、当該部署はフロア面積約3,000㎡、31階建のビルの17階の一部分を使用し、神田の自社オフィスも同じビルへ統合された。

品川の勤務オフィスは、延べ面積約337,000㎡の複合再開発「品川インターシティ（以下、品川ICと呼ぶ。）」の一部であり、低層部に商業施設・スカイウェイ・パブリックスペースなどが整備されている。神田における勤務オフィスと自社オフィス、品川における勤務オフィスと品川IC内の『場所』は、両地域において、0社の所有もしくは0社の会社業務のための施設であり、まちにおける「自社の領域」という観点から「自社ビル内の『場所』」と呼ぶことにする。



			神田	品川
職場の環境	勤務オフィス	ビルの階数および使用フロア	8階建ビルのうち、3～5階を使用	31階建ビルのうち、17階の一部を使用
		フロア面積	約200㎡	約3,000㎡
		付帯施設	－	社員食堂・図書室・ラウンジなど
		オフィスの位置付け	神田周辺に多数存在する 0社の小規模オフィスビルの一つ	複合再開発「品川インターシティ」 の一部である大規模高層オフィス
職場周囲の環境	地理条件	最寄駅までの距離	300～500M	300～500M
	交通条件	500M以内の鉄道駅の数	JR1（2路線）/地下鉄3（3路線）	JR1（4路線）/私鉄（地下鉄）1（1路線）
	パブリックスペース（PS）	500M以内の公園	神田公園	八ツ山公園/港南公園/品川浦公園
		500M以内の広場	－	JR品川駅東口広場
		500M以内のその他のPS	－	品川IC内PS/高浜運河遊歩道
	まちの位置付け		近代的界隈性を残すまち	計画的に再開発された現代的なまち

図 3－1　神田および品川の概要

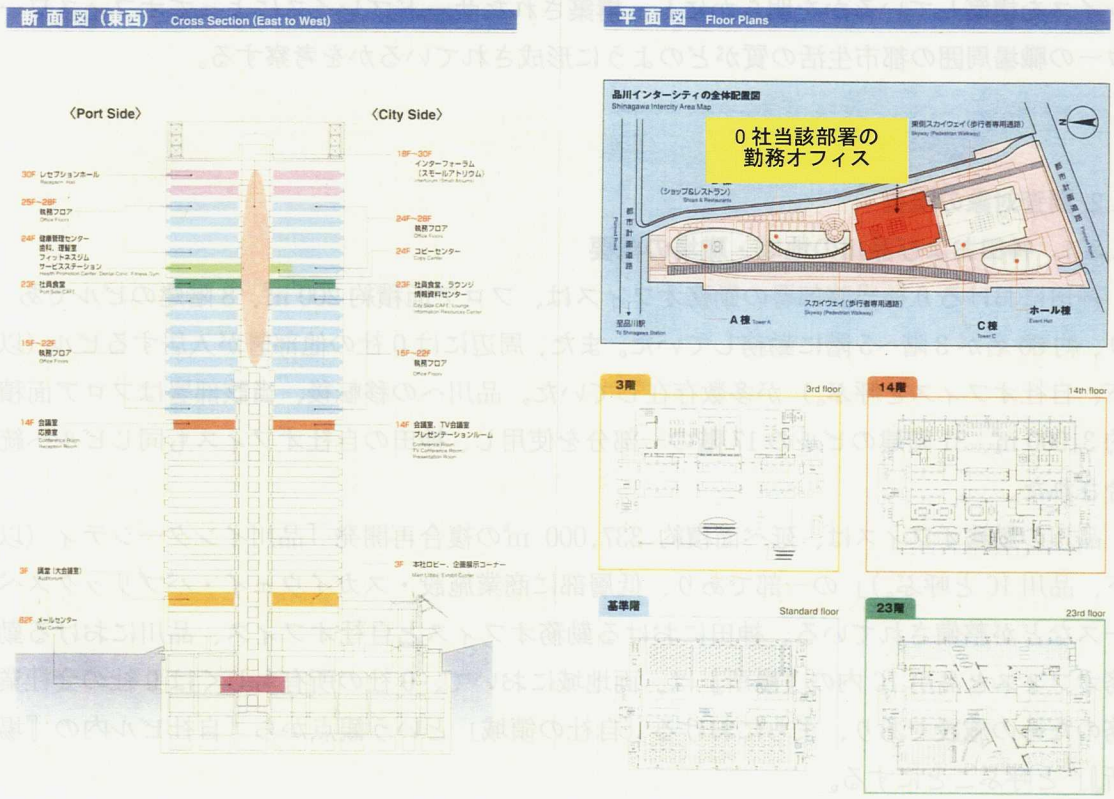


図 3－2　品川インターシティ（品川 IC）および 0 社の勤務オフィス（B 棟）の概要

また、勤務オフィスから最寄駅までの距離や勤務オフィスから500M以内の駅の数は、神田はJRが1駅、地下鉄が3駅であり、品川はJRが1駅、地下鉄が1駅で神田の方が多いが、500M以内の公園・広場などのパブリックスペースは、神田が「神田公園」のみであるのに対し、品川は「八ツ山公園」「港南公園」「品川浦公園」「JR品川駅東口広場」「品川IC内パブリックスペース」「高浜運河遊歩道」などがあり、品川の方が整備されている。神田の職場周囲には古い街並みも見られ、近代的な界隈性を残しているが、品川は品川駅東口を中心として計画的に再開発されている。

3.3. 調査の概要

3.3.1. 調査方法

調査は、予備調査と本調査で構成し、予備調査は平成14年1月に、本調査は同年8月に行った。予備調査では、0社当該部署職員のうち7名にヒアリングを行い、両地域の写真撮影を行った。本調査では、予備調査で得られた結果に基づき、アンケート調査を行った。

0社当該部署の業務内容は都市開発関係であり、神田では部員数約50名で、7割が技術職、3割が事務職であった。40歳以下の部員が7割を占め、この年齢層での男女比はほぼ同じであった[注1]。組織の改編、人事異動、個々の部員の加齢等により、当該部署の人数・属性は一定ではないが、神田から品川への職場移行に伴って人数・属性、および業務内容が大きく変わることはなかった[注2]。

本章では、0社当該部署の中でも比較的若年のオフィスワーカーの方が、職場周囲での『場所構築』が活発であるとの考えから、当該部署の関係者の中で調査時に40歳以下、かつ両地域での勤務経験のある部員に限定して調査を行った[注3]（表3−1，表3−2）。

3.3.2. 予備調査の概要

予備調査では両地域の差異、職場周囲での生活に着目した項目（58項目）[注4]（図3−3）と都市地図（縮尺1：9,000）[注5]（図3−4）を提示し、7名の協力者とフリーディスカッションを行った（表3−1）[注6]。ディスカッションは全て記録し、後日テープおこしを行うとともに、「両地域の特徴」「職場周囲での活動」などを表現する発言を紙片に書き写し、KJ法的に分類・整理[注7]した。その結果、「職場および職場周囲の生活のモデル」として図3−5を得た[注8]。図3−5において（神）に続く「　」内の発言は、神田に対する発言であり、（品）に続く「　」内の発言は、品川に対する発言である。

両地域において、「働く環境」は物理的要素・社会的要素・生活的要素に分けられ、生活的要素は職場での生活と（ｳ）職場周囲での生活に分けられた。さらに、（ｳ）職場周囲での生活は、（ｴ）～（ｹ）の活動および（ｺ）頻度・滞在時間により表現され、活動の場として（ｻ）パブリックスペース、（ｼ）お店、などが挙げられた。勤務オフィスはセカンドプレイス、（ｻ）パブリックスペース・（ｼ）お店は、サードプレイスの候補と考えられる。

また、神田から品川への職場移行により、(ｽ) 物理的要素の変化、(ｾ) 社会的要素の変化、(ｿ) 生活的要素の変化が起こるが、職場移行以外の(ﾀ)個人状況の変化も、「働く環境の移行」に含まれることが示唆された。

さらに、そのような「働く環境の移行」に対しては、(ﾁ) 慣れ・馴染みが関係し、自分なりに(ﾂ)使いこなしを行って『場所』を構築する行動が関係することが示唆された。また、予備調査において、具体的に行く『場所』や歩くルートを都市地図上に示してもらった結果、職場周囲の活動の範囲は両地域とも最寄駅を含み、勤務オフィスより約 800M 以内の範囲であることがわかった。

表 3－1　予備調査協力者属性

調査段階	協力者番号※4	性別	年齢	職掌	入社年度	勤続年数※1	神田勤務年数※1※2	品川勤務年数※1※2
予備調査	001	男	35	技術系	1991	11	7	4
	003	女	32	技術系	1993	9	6	3
	008	女	33	事務系	1991	11	8	4
	009	女	33	技術系	1992	10	7	4
	013	女	30	技術系	1997	5	1	4
	014	男	33	技術系	1994	8	4	4
	016	女	32	技術系	1992	10	7	2
全体※3	男	2名	34	技術系	2名	10年	6年	4年
				事務系	0名			
	女	5名	32	技術系	4名	9年	6年	3年
				事務系	1名			

※1 6ヶ月未満を切り捨て、6ヶ月以上を切り上げ。
平成14年7月の本調査時点での数値。

※2 転勤・出向・産休等で勤務しなかった期間は除く。

※3 年齢、勤続年数、神田・品川勤務年数は平均値。

※4 協力者番号は、本調査の協力者番号と同じ。
016は予備調査のみご協力頂いた。

- □ 神田は好きですか？
- □ 神田のどういうところが好きですか？
- □ 神田は面白いですか？
- □ 神田と品川、どっちが面白いですか？
- □ なぜ、神田のほうが品川より面白いのですか？
- □ なぜ、品川のほうが神田より面白いのですか？
- □ 品川には慣れましたか？
- □ 神田には今でも行きますか？
- □ 神田に慣れるまでどのくらいかかりましたか？
- □ 神田ではどういう場所によく行きましたか？
- □ 神田ではどういうことを良くしましたか？
- □ 昼食はどこによく行きましたか？
- □ 朝食はどこによく行きましたか？
- □ 夕食はどこによく行きましたか？
- □ 飲み会はどこによく行きましたか？
- □ 休みの日にも神田に来ましたか？
- □ 仕事がつらくなったとき、ぬけて出て行く場所・サボる場所はありましたか？
- □ 品川ではどうですか？
- □ 神田は自分にとってどういう場所ですか？
- □ 神田でデートに使った場所はありますか？
- □ 神田に友達が来た時に、行く場所はありますか？
- □ 神田に大切な人が来た時に、行く場所はありますか？
- □ 先輩に連れて行ってもらった場所はありますか？
- □ 後輩を連れて行く場所はありますか？
- □ 神田で便利な場所はどこですか？
- □ 神田でなじみの場所はどこですか？
- □ 通勤途中はどこに立ち寄りますか？
- □ 帰宅途中にどこに立ち寄りますか？
- □ 神田にこんな場所があればいいなあと思う場所はありますか？
- □ 憩いの場所はありますか？
- □ ストレス発散の場所はありますか？
- □ いやな場所はありますか？
- □ その場所は意識的に避けますか？
- □ 神田で特に好きな場所はありますか？
- □ 神田で知り合った人はいますか？（会社以外）
- □ その人に対してどう思いますか？
- □ 神田でのエピソードはありますか？
- □ 自分で「お決まりのコース・定番」にした場所はありますか？
- □ そこにはどういうときに行きますか？
- □ 神田の人ってどう思いますか？
- □ 神田のどういうところが好きですか？
- □ 自分は神田に詳しいと思いますか？
- □ どういうときにそれを実感しますか？
- □ 何がきっかけで神田が面白くなりましたか？
- □ 最初、神田が好きでしたか？
- □ 最初、神田はどういうイメージでしたか？
- □ 神田でおすすめの場所はありますか？
- □ 神田探検をしましたか？
- □ 誰と神田探検をしましたか？
- □ 人にも神田のことを教えましたか？
- □ 神田で偶然知人に遭遇したことはありますか？
- □ 偶然知人に遭遇することはどう思いますか？
- □ 神田商店街についてどう思いますか？
- □ 神田の中心部はどこだと思いますか？
- □ 神田のまちにあなたはなにか影響を与えましたか？
- □ 神田のまちからあなたはどんなものをもらいましたか？
- □ 通勤ルートのバリエーションはどのくらいですか？
- □ そのような神田の都市生活と比較して品川はどうですか？

図３－３　両地域の差異、職場周囲での生活に着目した項目

神田

品川

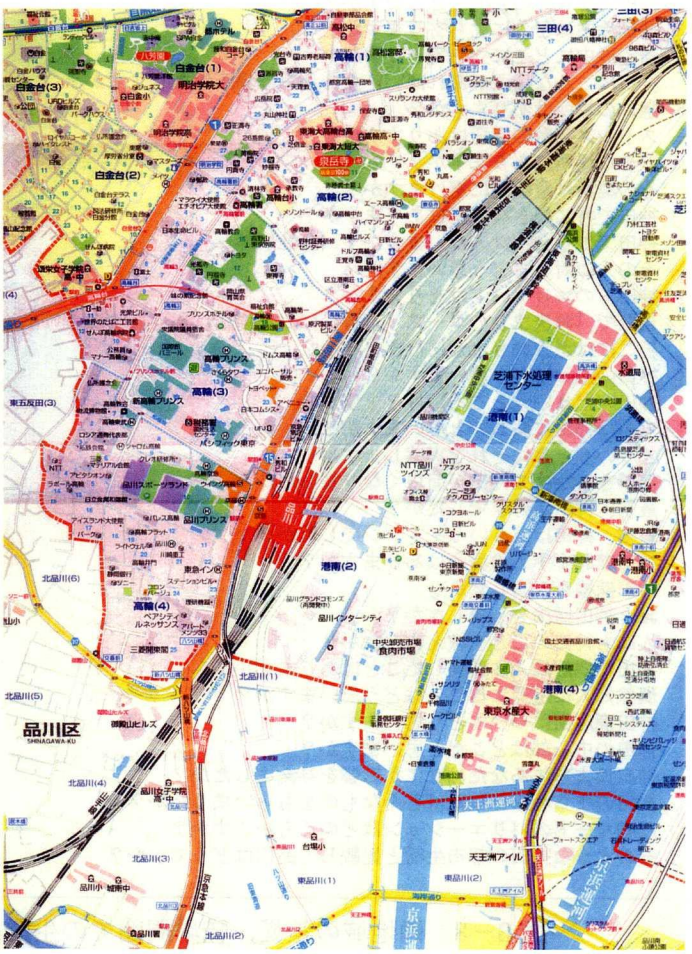


図３－４　両地域の都市地図（ヒアリング時には A3 版、縮尺 1:9000 を用いた。）

3.3.3. 本調査の概要

予備調査の結果である図 3−5 は図 3−6 のように簡略化でき、これを研究上の枠組み[注9]として、本調査のアンケートを作成した（表 3−3）。予備調査では（ｵ）ﾘﾌﾚｯｼｭ（ｷ）通勤（ｸ）歩きまわりなどの活動に関連する発言の種類が多かった（図 3−5）。また、『場所』における（ｺ）頻度・滞在時間は、『場所構築』に基本的な影響力をもつと考えられる。これらを、「職場周囲での生活の質に影響を及ぼす要因」と考え、本調査ではこれらの要因を中心にアンケートを作成した。すなわち、表 3−3 の（1）（2）は職場および職場周囲での活動の優先順位や（ｴ）仕事の繁忙度等の基本的な生活を把握する質問であり、(3)（4）は「よく行く場所」とよく行く理由から『場所構築』を（ｺ）頻度・滞在時間の側面から把握する質問である。また、(5)（6）は（ｷ）通勤のルートを把握する質問であり、(7）は（ｸ）歩きまわりのルートとその際に「寄り道する場所」を把握する質問である。(8）は（ｵ）「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」を把握する質問であり、(9）は上記の他、職場周囲において特に個人的な使いこなしが行われている『場所』を確認する質問である。(ｹ）交流、(ｶ）昼食も、(1）の活動の選択肢に採り入れ、これらの活動のために「よく行く場所」も調査した（表 3−3 の「対応する図 - 2 の記号」参照)。(10）～（13）は、(ｽ）物理的要素の変化、(ｾ）社会的要素の変化、(ｿ）生活的要素の変化、(ﾀ)個人状況の変化などの「働く環境の変化」を把握する質問であり、(14）～（16）は、(ﾁ）慣れ・馴染み、(ﾂ)使いこなしなどの「働く環境への働きかけ」を把握する質問である。

予備調査において、職場周囲での活動の範囲は両地域とも勤務オフィスより約 800M 以内の範囲であることがわかったので、この範囲を本調査のベースマップ（縮尺 1：2,500、A1 版）[注10]とした。アンケートは 19 名に配布したところ 15 名から回答があり、これらの回答者を本調査の協力者（表 3−2）[注11]とした。また、調査対象期間は、事務所移転直前の 4 年間および事務所移転直後の 4 年間、計 8 年間の勤務日とした。

表 3−2　本調査協力者属性

調査段階	協力者番号※4	性別	年齢	職掌	入社年度	勤続年数※1	神田勤務年数※1※2	品川勤務年数※1※2
本調査	001	男	35	技術系	1991	11	7	4
	002	男	36	技術系	1991	11	4	2
	003	女	32	技術系	1993	9	6	3
	004	女	34	技術系	1991	11	8	4
	005	男	35	技術系	1991	11	4	4
	006	男	39	技術系	1987	15	11	4
	007	女	36	技術系	1993	9	6	3
	008	女	33	事務系	1991	11	8	4
	009	女	33	技術系	1992	10	7	4
	010	女	34	技術系	1990	12	9	1
	011	男	33	事務系	1994	8	3	1
	012	女	40	技術系	1987	15	6	3
	013	女	30	技術系	1997	5	1	4
	014	男	33	技術系	1994	8	4	4
	015	男	36	技術系	1992	10	6	4
全体※3	男	7名	35	技術系	6名	11年	6年	3年
				事務系	1名			
	女	8名	34	技術系	7名	9年	6年	3年
				事務系	1名			

※1 6ヶ月未満を切り捨て、6ヶ月以上を切り上げ。
平成14年7月の本調査時点での数値。

※2 転勤・出向・産休等で勤務しなかった期間は除く。

※3 年齢、勤続年数、神田・品川勤務年数は平均値。

※4 協力者番号は、本調査の協力者番号と同じ。
016は予備調査のみご協力頂いた。

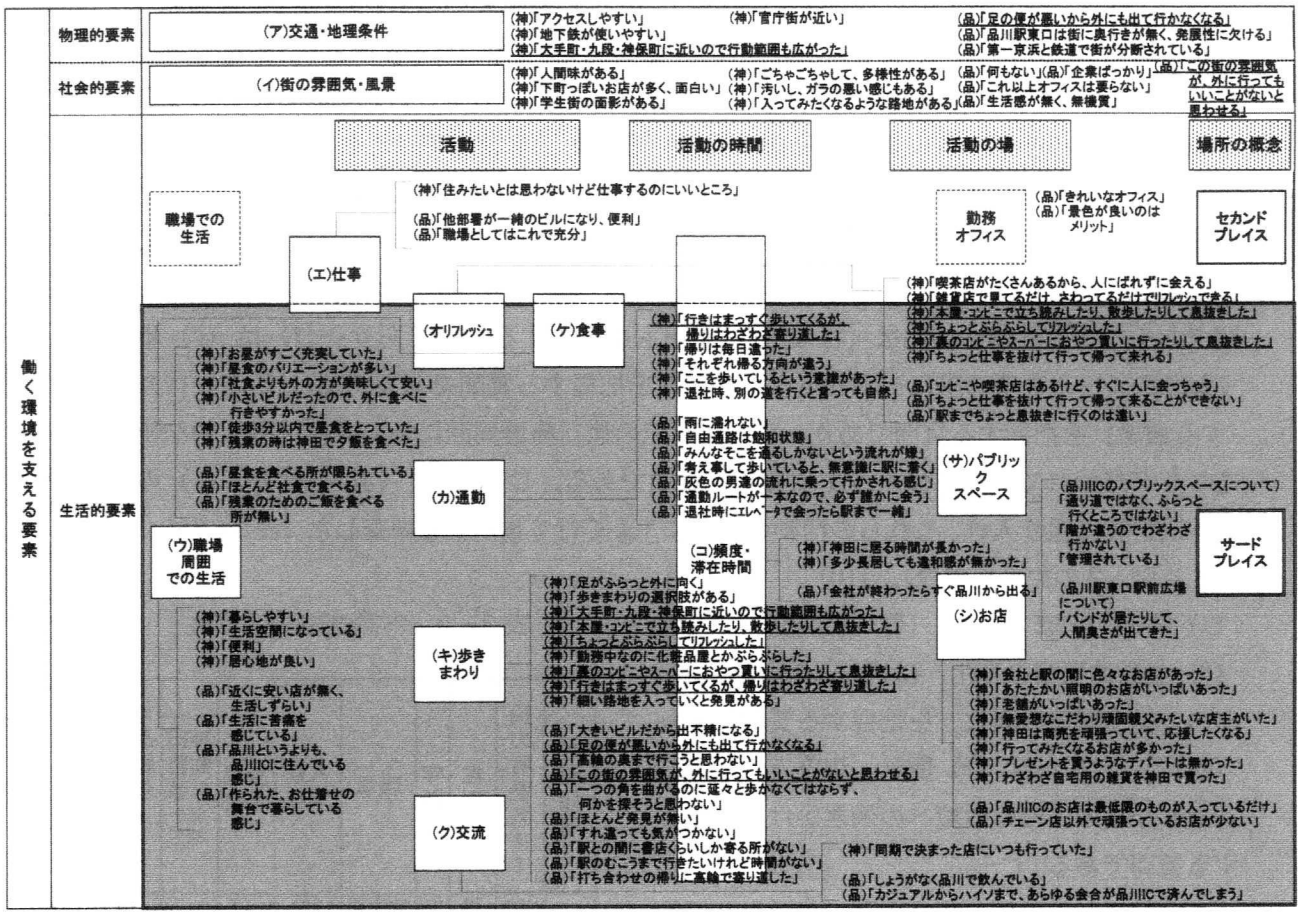


図 3－5　職場および職場周囲の生活のモデル

表3−3　本調査におけるアンケートの構成

番号	アンケート項目	回答形式	対応する図3−6の記号
(1)	日常生活における活動の優先順位	各年度ごとに、9つの活動から選択※2	(ウ)
(2)	1週間の生活パタン	1週間の平均勤務時間数を記入	(エ)
(3)	よく行く場所	ベースマップ※3にプロット※4	(コ)
(4)	よく行く理由	自由記述	(コ)
(5)	主な通勤ルート	ベースマップに記入	(キ)
(6)	その他の通勤ルート	ベースマップに記入	(キ)
(7)	歩きまわりのルート・寄り道する場所	ベースマップに記入・プロット	(ク)
(8)	リフレッシュする場所	ベースマップにプロット	(オ)
(9)	自分の場所	ベースマップにプロット	−
(10)	引越し直後の変化	自由記述	(ス)(セ)(ソ)(タ)
(11)	引越し直後のストレス	自由記述	(ス)(セ)(ソ)(タ)
(12)	引越しによって得たもの	自由記述	(ス)(セ)(ソ)(タ)
(13)	引越しによって失ったもの	自由記述	(ス)(セ)(ソ)(タ)
(14)	慣れた/慣れない	自由記述	(チ)
(15)	慣れるためにかかった期間	自由記述	(チ)
(16)	慣れるために工夫したこと	自由記述	(チ)(ツ)

※1　網掛け：本章の考察対象としたアンケート項目
※2　「1会社業務」「2会社の人との交流」「3会社以外の人との交流」「4自分の時間」「5家族・恋人との交流」「6昼食時間」「7アフター5」「8通勤時間」「9その他」から選択
※3　アンケート票には、ベースマップ（縮尺1：2，500）を添付した
※4　(1)の優先活動ごとに「よく行く場所」をプロット

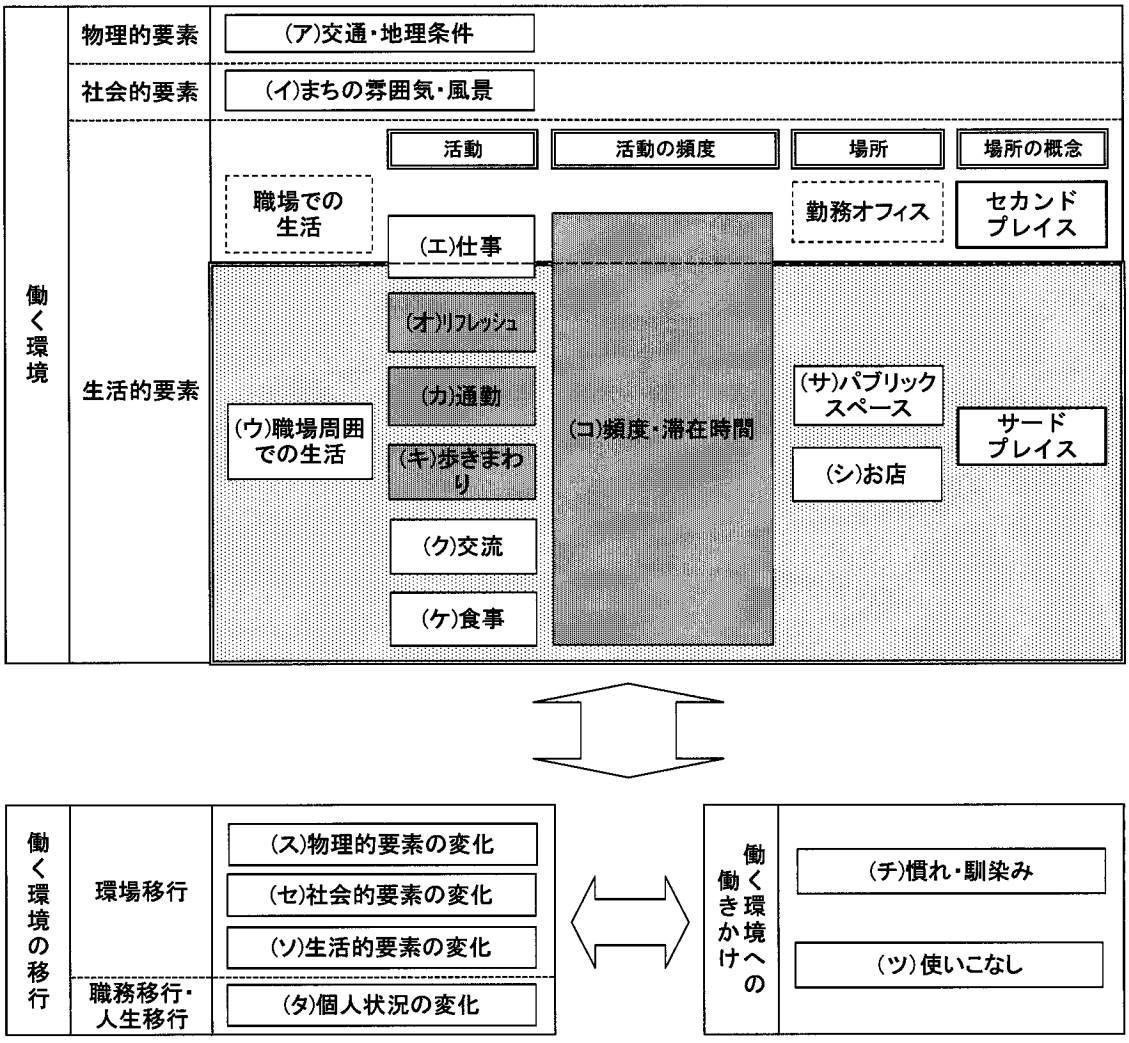


図3−6　働く環境・働く環境の移行・働く環境への働きかけ

3.4. 本調査結果と考察

3.4.1. 職場周囲に構築されるサードプレイス

本調査で得られた「よく行く場所」「寄り道する場所」「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」「自分の場所」および「通勤ルート」「散歩ルート」から職場周囲に構築されるサードプレイスを考察した。職場である「勤務オフィス」はセカンドプレイスであり、その他の『場所』は働く人によってそれぞれの活動により使いこなされている『場所』であるので、職場周囲に構築されたサードプレイスと考えられる。

「よく行く場所」は、神田で29種類169ヶ所、品川で17種類103ヶ所得られ、度数・場所数とも品川より神田が多かった（図3−7)。また、両地域で得られた『場所』は9種類にとどまり、神田のみで得られた『場所』は20種類、品川のみで得られた『場所』は8種類であった。「雑貨店」「菓子店」「文化施設」「ｽｰﾊﾟｰﾏｰｹｯﾄ」「文具店」等、神田特有の下町的な『場所』が、神田ではよく行く『場所』として挙がる一方、「ホテル」「百貨店」「物販店」等、品川特有の『場所』は品川においてそれほど挙がらない。これは、勤務オフィスを取り巻く交通・地理条件の違いも関係していると考えられる。両地域で上位を占める「飲食店」「書店」「喫茶店」は、神田ではそれらが全てまちの中に存在するが、品川では自社ビル内に存在する割合が高い。0社当該部署の協力者にとって、神田の職場周囲は「様々な『場所』へよく行く、多様で開放的な環境」であるが、品川の職場周囲の環境は「主に自社ビル内の限られた『場所』に集中して行く、限定的で自閉的な環境」であると言える。

「寄り道する場所」は両地域共、「書店」が圧倒的に多く、次いで神田では「雑貨店」「ｽﾎﾟｰﾂ・ｱｳﾄﾄﾞｱ専門店」、品川では「百貨店」が多い(図3−8)。これは神田では西口商店街や神保町が近いこと、品川では駅前に商業集積があることが理由であると考えられる。寄り道する『場所』の総数でも神田が品川を大きく上回っており、また品川では自社ビル内で寄り道をするケースが目立った。

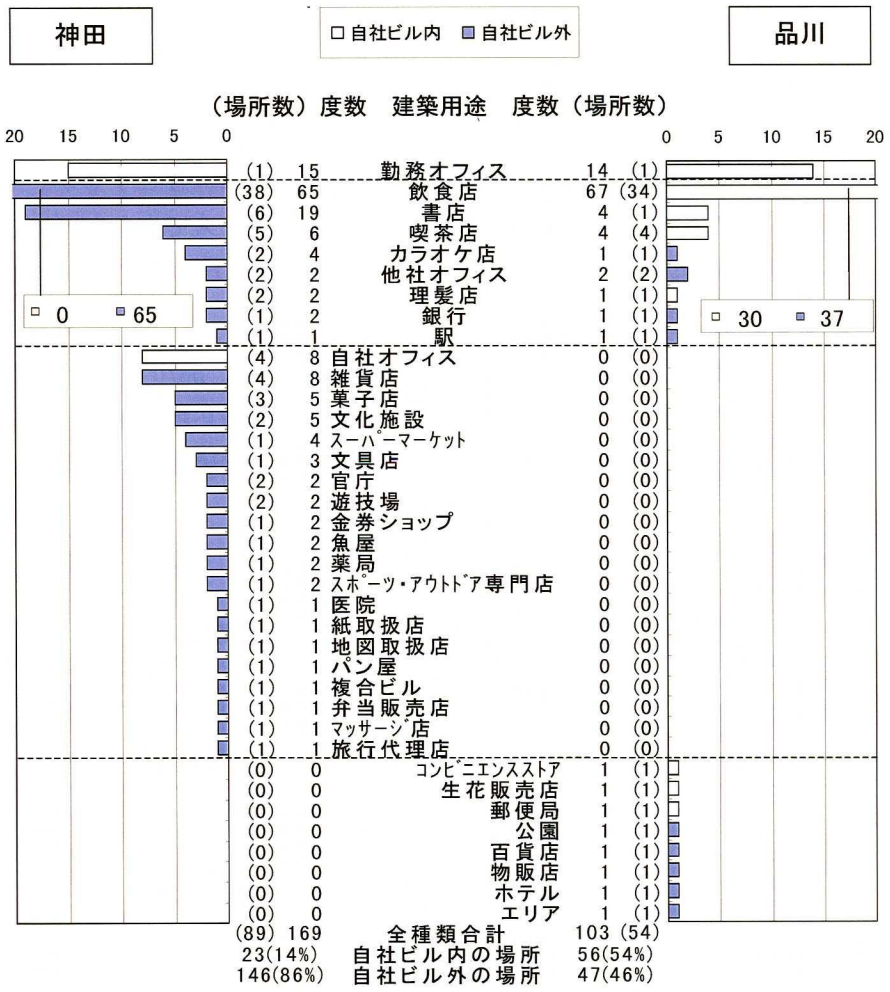


図3−7 「よく行く場所」の建築用途別度数・場所数

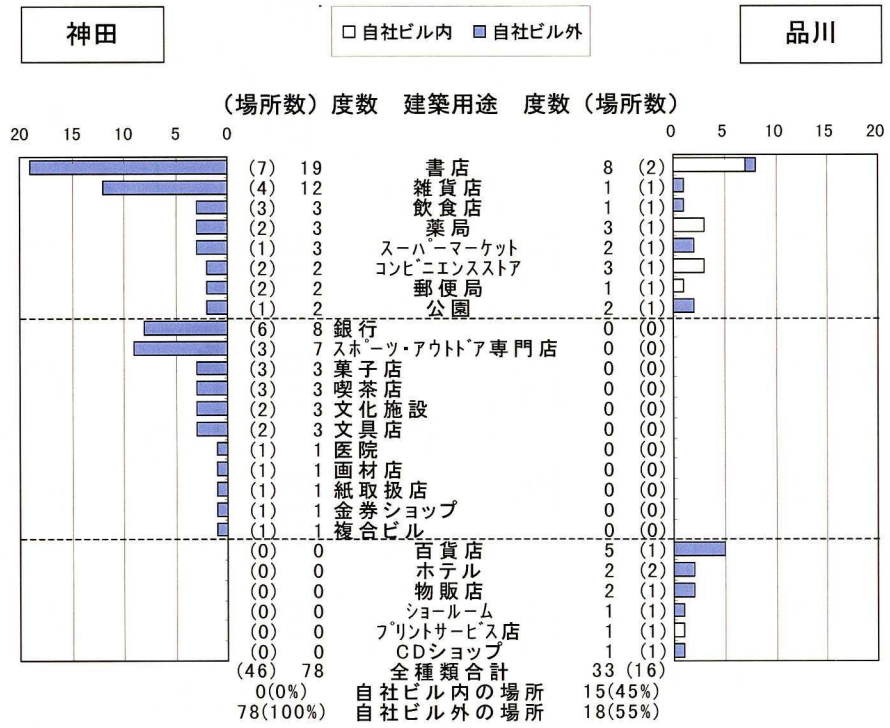


図3−8 「寄り道する場所」の建築用途別度数・場所数

「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」も品川より神田が多く、「書店」「喫茶店」「雑貨店」等がその役割を担っている(図3−9)。品川にも「書店」「喫茶店」が自社ビル内に存在するが、その度数は低く、むしろ「勤務オフィス」の度数の方が高い。「勤務オフィスで充分ﾘﾌﾚｯｼｭできる」ことや、自社ビル内では「ﾘﾌﾚｯｼｭにならない」こと、自社ビル外は「遠くてわざわざ行く気にはならない」などが主な理由と考えられる。

神田では「書店」「飲食店」「雑貨店」「菓子店」「喫茶店」を、品川では「勤務オフィス」を「自分の場所」として認識している(図 3−10)。「自分の場所」は、度数・場所数とも神田の方が高く、神田は品川と比較して多くの「自分の場所」が職場周囲に構築されている。

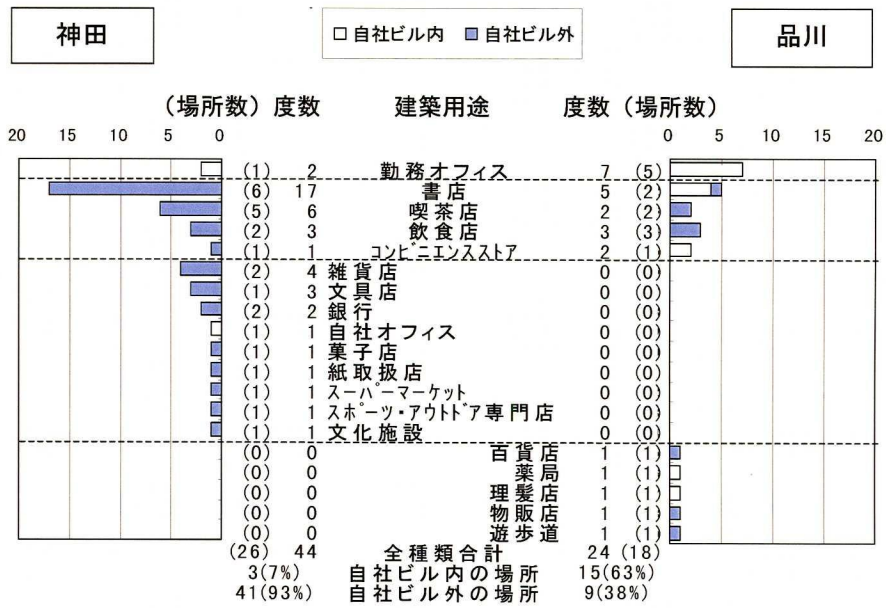


図3−9 「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」の建築用途別度数・場所数

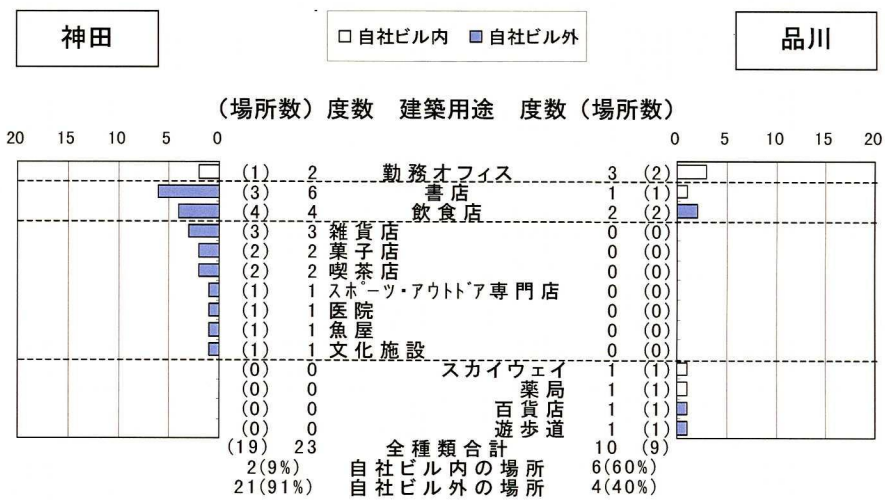


図3−10 「自分の場所」の建築用途別度数・場所数

注) 図3−7〜10は、表-2の(3)(7)(8)(9)でプロットされた具体的な『場所』を建築用途別に集計したものであり、図-2〜5間で重複する具体的な『場所』が存在する。

これらの結果を見るといずれのサードプレイスにおいても、場所数・建築用途数の総数で神田が品川を上回っており、神田では多様なサードプレイスが構築されていると言える。神田の「書店」は「よく行く場所」「寄り道する場所」「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」「自分の場所」の全てで場所数が多く、幅広い活動を支えている。その他、「菓子店」「文化施設」等も神田特有のサードプレイスである。品川のサードプレイスは、「飲食店」がほとんどであり、神田で場所数が多い「喫茶店」「雑貨店」「銀行」等は、品川ではあまり多くなく、サードプレイスとして構築されにくいことがわかる。また、「百貨店」「物販店」「ホテル」等は品川特有のサードプレイスである。さらに、品川ではセカンドプレイスである「勤務オフィス」が、「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」「自分の場所」として構築されていることが特徴的である。図3－11は「よく行く場所」へ行く「理由」であるが、神田は「1 会社業務」のために行く理由として「仕事ができる」が多く、勤務オフィス以外の職場周囲にも仕事ができる『場所』が多く構築されている。また、「4 自分の時間」のために行く理由は両地域で著しく異なっており、「買い物できる」「居心地が良い」「興味がある」「ボーッとできる」ようなサードプレイスは品川には構築されていない。品川における「2 会社の人との交流」のために行く理由の多さ、「3 会社以外の人との交流」のために行く理由の内容を見ると、「職場周囲の飲食店で社内外の人との交流ができる」という一応の評価がうかがえる。「5 家族・恋人との交流」、「6 昼食時間」、「7 ｱﾌﾀｰ5」のために行く理由は両地域で共有される理由が少なく、『場所構築』の様子が両地域で異なっていると言える。

このように、職場周囲に構築されるサードプレイスは、神田が「多数かつ多様」であり、理由も豊かであるのに対し、品川は「少数かつ限定的」で、理由も画一的ある。また品川では、飲食店に代表される、自社ビル内に構築された、限られたサードプレイスに集中して行く傾向が見うけられる。これらのサードプレイスは、「職場とは違う第三の場所」を指向しながらも、職場の延長としての性質が強く、都市の中に職場から独立して構築される本来のサードプレイスとは区別して取り扱われるべきである。このようなサードプレイスを、本研究ではセミサードプレイスと呼び、取り扱うこととする。

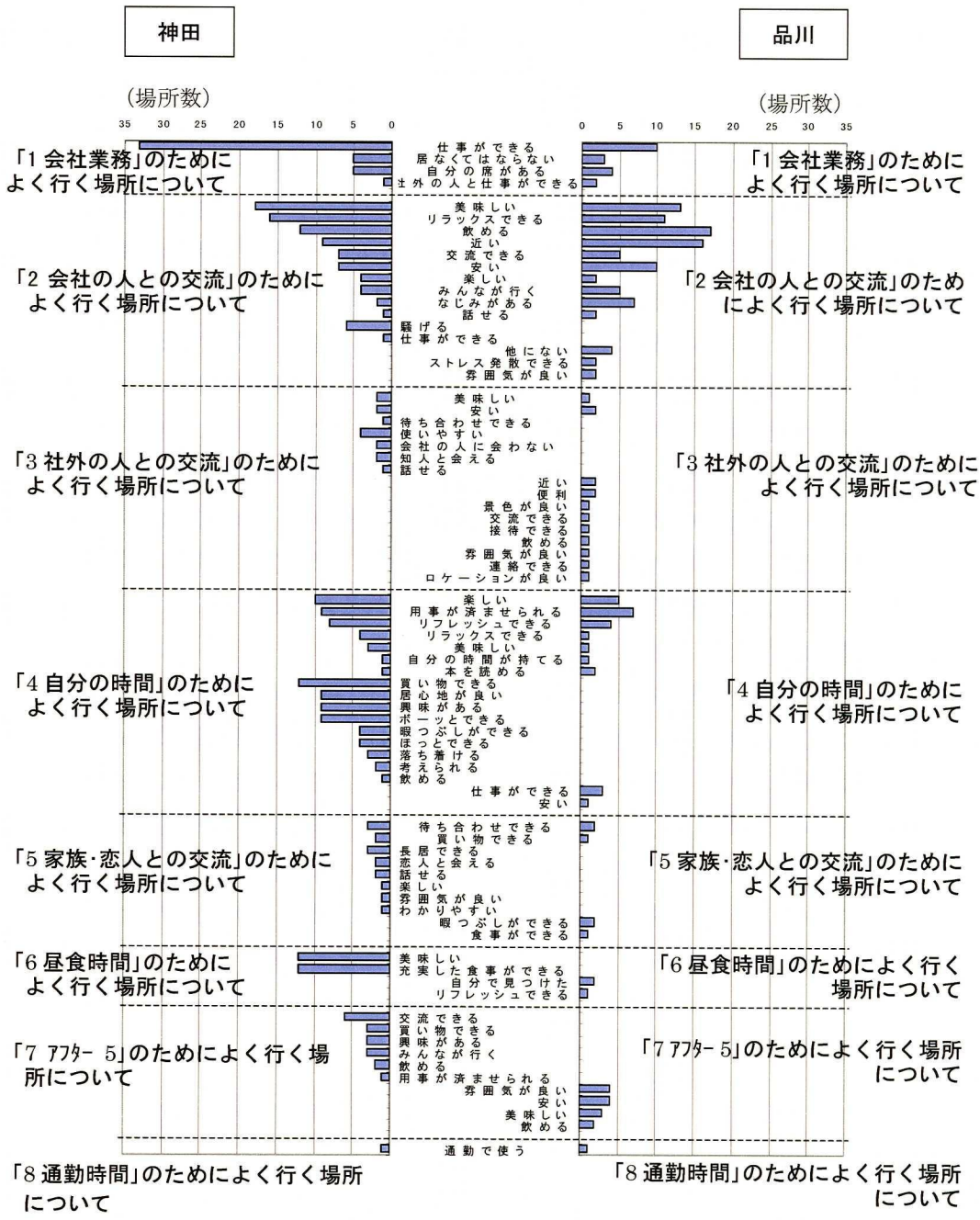


図 3－11　「よく行く場所」へ行く理由

3.4.2. 両地域の代表的なサードプレイス

3.4.1.で得られたサードプレイスのうち、高い割合で得られた具体的なサードプレイスを「代表的なサードプレイス」として考察を行った。集計上の基準は、①全種類の合計度数の10%以上を占める『場所』の種類、または②15人中4人(約27%)以上が挙げた具体的な『場所』、として抽出を行った（表3−4)。また、「よく行く場所」での活動と、よく行く理由に関しても、高い割合のものを『場所』の建築用途ごとに集計した(図3−12)。

これらのサードプレイスの建築用途および代表的なサードプレイスは、両地域における職場周囲の都市生活の質を形成している。例えば、神田の「書店」は、「よく行く場所」「寄り道する場所」「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」「自分の場所」の全てで高い割合であり、そこでの活動やよく行く理由も多様である。特に、神田の「書店」は「仕事ができる」ことが特徴的であるが、品川の「書店」は神田ほど豊かな場所として構築されていない。むしろ、職場から近い位置にあり、「暇つぶし」「待ち合わせ」等、神田とは違った意味で利用されている。また、品川の「飲食店」は、品川の中では最もよく構築されているサードプレイスであるが、そこでの活動は「2会社の人との交流」にほぼ限定され、神田のように「4自分の時間」「5家族・恋人との交流」という目的で構築されることはない。一方、神田の「飲食店」は、「充実した食事ができる」等、豊かな「6昼食時間」も支えている。神田の「雑貨店」は「寄り道する場所」「自分の場所」でもあり、買い物以外の憩いのためのサードプレイスにもなっている。神田の「文化施設」「ｽｰﾊﾟｰﾏｰｹｯﾄ」も品川にはないサードプレイスであり、いずれも「4自分の時間」が過ごせることが重要である。

神田で11個所、品川で8箇所抽出された代表的なサードプレイスは、神田は全て自社ビル外に、品川はほとんど自社ビル内に構築されている(表 3−4)。また、品川の勤務オフィスは、社内外の交流・自分の時間など、多様な活動が見られ(図3−12)、「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」（社員食堂・図書室・喫煙ルーム・自席など)、「自分の場所」（自席・トイレなど）としての割合も高い(表 3−4)。品川のサードプレイスはほとんど自社ビル内と勤務オフィスに構築され、これらはセカンドプレイスの延長的性質を持つセミサードプレイスであるが、神田のサードプレイスはセカンドプレイスとの明確な境界を持ち、職場周囲のパブリックなまちの中に構築されている。

表3−4　セカンドプレイスと代表的なサードプレイス

		よく行く場所			寄り道する場所			リフレッシュする場所			自分の場所		
場所の種類		度数	全体%		度数	全体%		度数	全体%		度数	全体%	
セカンドプレイスおよび具体的なサードプレイス	自社ビル内	度数	全体%	種別%	度数	全体%	種別%	度数	全体%	種別%	度数	全体%	種別%
神田													
勤務オフィス		15	9%		−	−		2	5%		2	9%	
勤務オフィス	○	15	9%	100%	−	−	−	2	5%	100%	2	9%	100%
飲食店		65	38%		3	4%		3	7%		4	17%	
飲食店-1		4	2%	6%	−	−	−	−	−	−	−	−	−
飲食店-2		4	2%	6%	−	−	−	−	−	−	1	4%	25%
飲食店-3		4	2%	6%	−	−	−	−	−	−	−	−	−
飲食店-4		4	2%	6%	−	−	−	−	−	−	1	4%	25%
飲食店-5		4	2%	6%	1	1%	33%	−	−	−	−	−	−
書店		19	11%		19	24%		17	39%		6	26%	
書店-1		8	5%	42%	8	10%	42%	9	20%	53%	4	17%	67%
書店-2		5	3%	26%	1	1%	5%	2	5%	12%	−	−	−
喫茶店		6	4%		3	4%		6	14%		2	9%	
雑貨店		8	5%		12	15%		4	9%		3	13%	
雑貨店-1		4	2%	50%	5	6%	42%	3	7%	75%	1	4%	33%
雑貨店-2		2	1%	25%	5	6%	42%	−	−	−	1	4%	33%
文化施設		5	3%		3	4%		1	2%		1	4%	
文化施設-1		4	2%	80%	2	3%	67%	−	−	−	−	−	−
スーパーマーケット		4	2%		3	4%		1	2%		−	−	
スーパーマーケット-1		4	2%	100%	3	4%	100%	1	2%	100%	−	−	−
銀行		2	1%		8	10%		2	5%		—	—	
百貨店		—	—		—	—		—	—		—	—	
薬局		2	1%		3	4%		—	—		—	—	
全種類合計		169	100%		78	100%		44	100%		23	100%	
品川													
勤務オフィス		14	14%		−	−		7	29%		3	30%	
勤務オフィス	○	14	14%	100%	−	−	−	7	29%	100%	3	30%	100%
飲食店		67	65%		1	3%		3	13%		2	20%	
飲食店-1	○	6	6%	9%	−	−	−	−	−	−	−	−	−
飲食店-2	○	5	5%	7%	−	−	−	−	−	−	−	−	−
飲食店-3	○	5	5%	7%	−	−	−	−	−	−	−	−	−
飲食店-4		5	5%	7%	−	−	−	−	−	−	−	−	−
飲食店-5		5	5%	7%	−	−	−	−	−	−	−	−	−
飲食店-6	○	4	4%	6%	−	−	−	−	−	−	−	−	−
書店		4	4%		8	25%		5	21%		1	10%	
書店-1	○	4	4%	100%	7	22%	88%	4	17%	80%	1	10%	100%
喫茶店		4	4%		—	—		2	8%		—	—	
雑貨店		—	—		1	3%		—	—		—	—	
文化施設		—	—		—	—		—	—		—	—	
スーパーマーケット		—	—		2	6%		—	—		—	—	
銀行		1	1%		—	—		—	—		—	—	
百貨店		1	1%		5	16%		1	4%		1	10%	
百貨店-1		1	1%	100%	5	16%	100%	1	4%	100%	1	10%	100%
薬局		—	—		3	9%		1	4%		1	10%	
全種類合計		103	100%		33	100%		24	100%		10	100%	

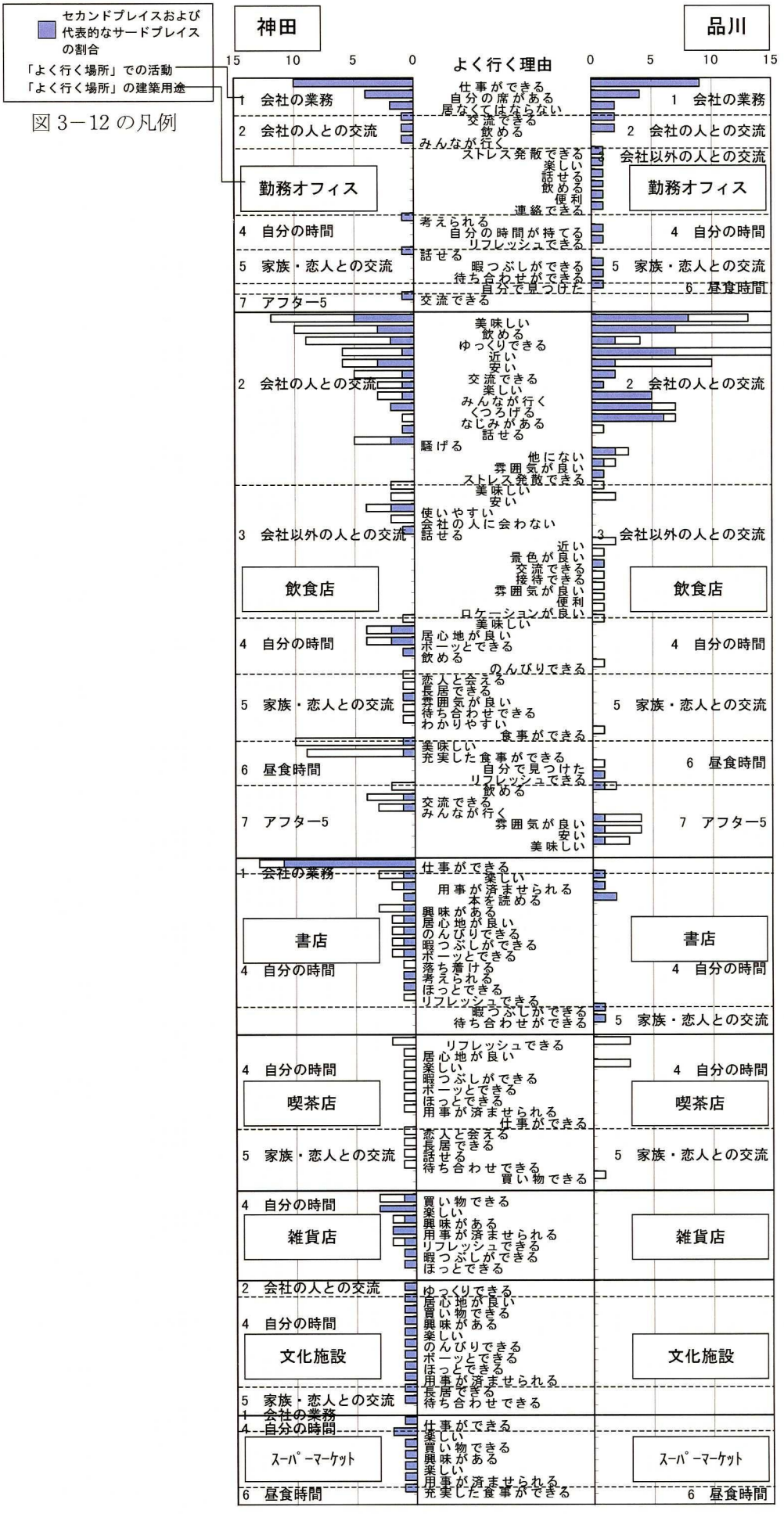


図3−12　代表的なサードプレイスへよく行く理由

3.4.3. 職場周囲の歩きまわりルートと代表的なサードプレイスの関係

両地域とも、JR・地下鉄駅が勤務オフィスから300M～500Mに位置し、最寄駅から徒歩で通勤できるが、歩きまわりルートは大きく異なっている。神田では約4本のメイン通勤ルートと、多数のサブ通勤ルートが網状に構築されているが、品川では協力者全員によって唯一のメイン通勤ルートが構築されている（図3－13、図3－14）。神田は通勤ルートの選択性が高く、品川は選択の余地がほとんど無いという物理的な要因も関係している。また、神田は職場周囲の歩きまわり行動が多く、多様な歩きまわりルートが構築されているが、品川では歩きまわり行動が少なく、歩きまわりのエリアもほぼ品川駅東口周辺に限られている（図3－15、図3－16）。両地域とも具体的なサードプレイスは、歩きまわりルートの終着点や途上に位置し、通勤ルートには面していない。（品川の飲食店-1,2,3,6は通勤ルートとレベル差がある）サードプレイスは日常動線とは少し離れたところに構築される傾向にあると言える。

歩きまわりルートの構築は、サードプレイスへ行く行動や立ち寄る行動の表れと考えられ、神田においては「書店-1,2」「雑貨店-1,2」「文化施設-1」「ｽｰﾊﾟｰﾏｰｹｯﾄ-1」等の代表的なサードプレイスが、「職場以外での仕事」や「勤務時間中の自分の時間」を支えているので、「自然とそこへ足が向く」生活環境が構築されている。一方、品川においては、職場周囲の代表的なサードプレイスが「2会社の人との交流」しか支えていないこと、自社ビル内にセミサードプレイスが構築されていることなどから、職場周囲へ「足が向かない」生活環境が構築されている。品川ではあまり歩きまわりが見られず、従ってサードプレイスを構築するきっかけも少ないと考えられ、両者は相補的な関係と考えられる。

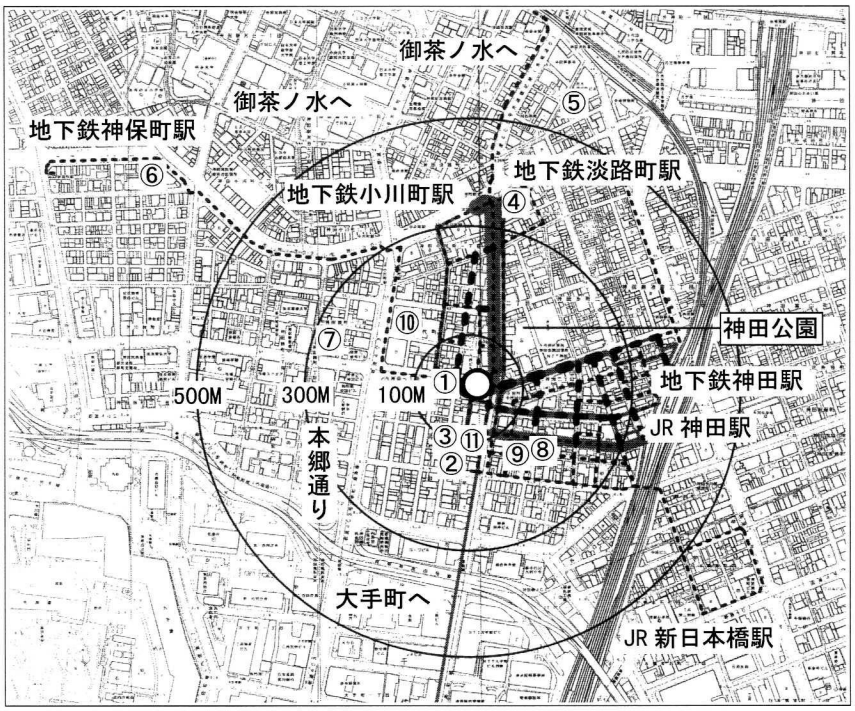


図 3－13　通勤ルートと代表的なサードプレイス（神田）

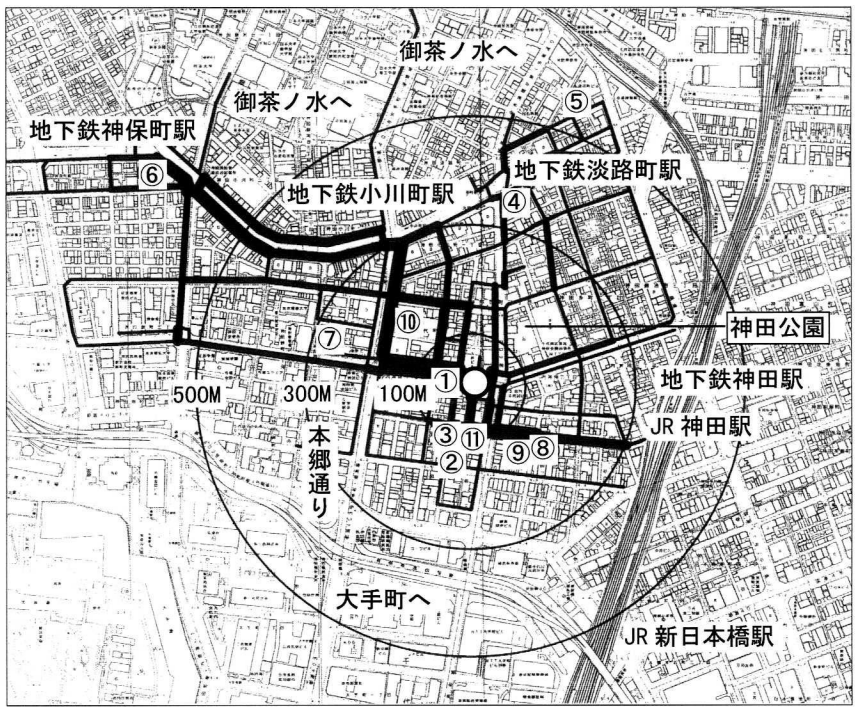


図 3－14　歩きまわりルートと代表的なサードプレイス（神田）

○ 勤務オフィス	1 会社業務(16)	仕事ができる(12)
		自分の席がある(3)
		居なくてはならない(1)
	2 会社の人との交流(3)	つきあい(2)
		お酒が飲める(1)
	4 自分の時間(1)	考えられる(1)
	5 家族・恋人との交流(1)	話せる(1)
	7 アフター5(1)	つきあい(1)
① 飲食店−1	2 会社の人との交流(3)	美味しい(1)
		ゆっくり食事ができる(1)
		お酒が飲める(1)
	3 社外の人との交流(1)	使い勝手が良い(1)
	4 自分の時間(2)	居心地が良い(1)
		ボーッとできる(1)
	6 昼食時間(2)	美味しい(1)
		充実した食事ができる(1)
② 飲食店−2	2 会社の人との交流(3)	美味しい(1)
		ゆっくり食事できる(1)
		安い(1)
	3 社外の人との交流(1)	使い勝手が良い(1)
	4 自分の時間(2)	居心地が良い(1)
		ボーッとできる(1)
③ 飲食店−3	2 会社の人との交流(6)	美味しい(1)
		お酒が飲める(1)
		騒げる(1)
		安い(1)
		近い(1)
		つきあい(1)
	7 アフター5(1)	つきあい(1)
④ 飲食店−4	2 会社の人との交流(6)	美味しい(1)
		お酒が飲める(1)
		騒げる(1)
		安い(1)
		くつろげる(1)
		つきあい(1)
	7 アフター5(1)	つきあい(1)
⑤ 飲食店−5	2 会社の人との交流(4)	美味しい(1)
		くつろげる(1)
		楽しい(1)
		話せる(1)
	3 社外の人との交流(1)	話せる(1)
	4 自分の時間(1)	飲める(1)
	5 家族・恋人との交流(2)	美味しい(1)
		雰囲気が良い(1)
⑥ 書店−1	1 会社業務(6)	仕事ができる(6)
	4 自分の時間(11)	本を読める(1)
		考えられる(1)
		興味がある(1)
		用事が済ませられる(2)
		楽しい(1)
		居心地が良い(1)
		ボーッとできる(1)
		のんびりできる(1)
		ほっとできる(1)
		暇つぶしができる(1)
⑦ 書店−2	1 会社業務(5)	仕事ができる(5)
⑧ 雑貨店−1	4 自分の時間(6)	用事が済ませられる(1)
		楽しい(2)
		リフレッシュできる(1)
		ほっとできる(1)
		暇つぶしができる(1)
⑨ 雑貨店−2	4 自分の時間(4)	用事が済ませられる(2)
		楽しい(1)
		興味がある(1)
⑩ 文化施設−1	2 会社の人との交流(1)	ゆっくり食事できる(1)
	4 自分の時間(5)	用事が済ませられる(2)
		楽しい(1)
		興味がある(1)
		ほっとできる(1)
	5 家族・恋人との交流(2)	待ち合わせできる(1)
		長居できる(1)
⑪ スーパーマーケット−1	1 会社業務(1)	仕事ができる(1)
	4 自分の時間(5)	用事が済ませられる(2)
		楽しい(2)
		興味がある(1)
	6 昼食時間(1)	充実した食事ができる(1)

凡例
：主な通勤ルート
：その他の通勤ルート
：歩きまわりルート
線の太さ：そのルートを選んだ人数
：1・2 人　：9・10 人
：3・4 人　：11・12 人
：5・6 人　：13・14 人
：7・8 人　：15 人
：主なパブリックスペース

セカンドプレイスおよび代表的なサードプレイス	「よく行く場所」での活動	よく行く理由
	＊( )内は度数	＊( )内は度数

図 3－13～16 の凡例

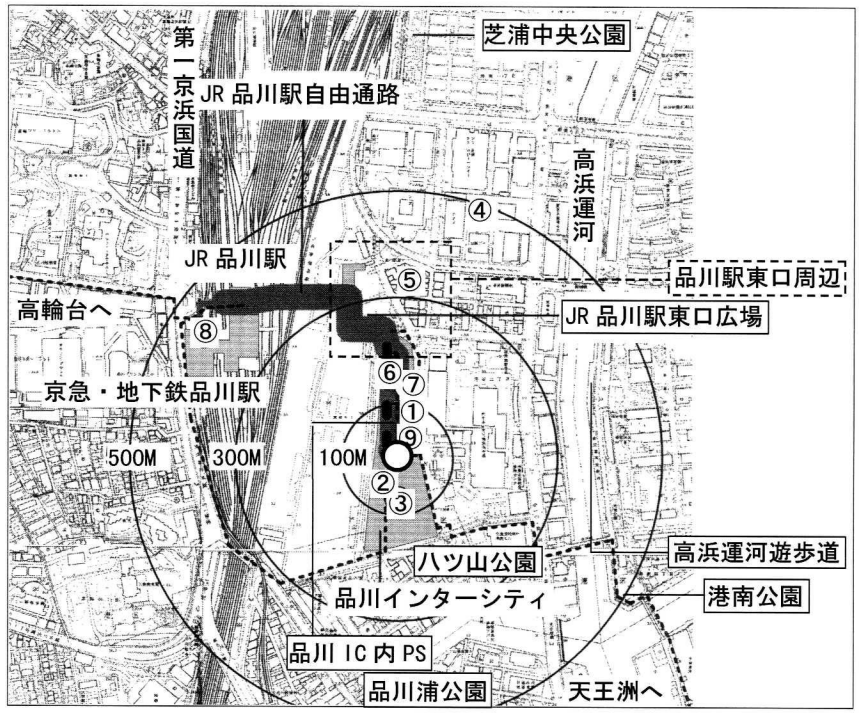


図 3－15　通勤ルートと代表的なサードプレイス（品川）

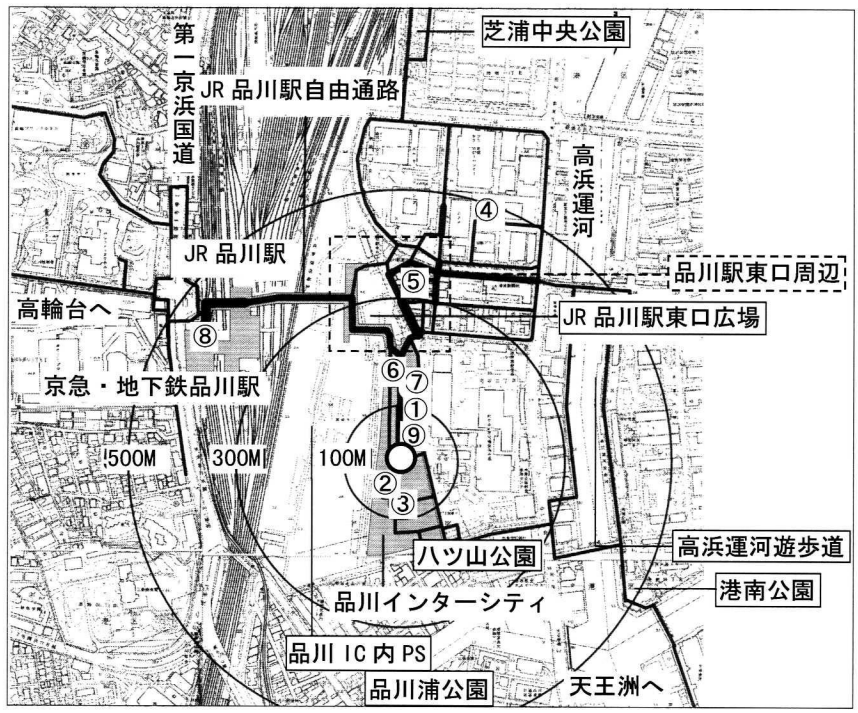


図 3－16　歩きまわりルートと代表的なサードプレイス（品川）

セカンドプレイスおよび代表的なサードプレイス	「よく行く場所」での活動 ＊( )内は度数	よく行く理由 ＊( )内は度数
○勤務オフィス	1 会社業務(15)	仕事ができる(9) 自分の席がある(4) 居なくてはならない(2)
	2 会社の人との交流(7)	つきあい(2) お酒が飲める(2) 話せる(1) 楽しい(1) ストレス発散(1)
	3 社外の人との交流(3)	お酒が飲める(1) 便利(1) 連絡が取れる(1)
	4 自分の時間(2)	リフレッシュできる(1) 時間がとれる(1)
	5 家族・恋人との交流(2)	待ち合わせできる(1) 暇つぶしができる(1)
	6 昼食時間(1)	自分で見つけた(1)
①飲食店-1	2 会社の人との交流(9)	美味しい(1) ゆっくり食事できる(1) お酒が飲める(1) 近い(2) いつも行く(1) つきあい(2) 他にない(1)
②飲食店-2	2 会社の人との交流(8)	美味しい(2) ゆっくり食事できる(1) お酒が飲める(1) くつろげる(1) 近い(1) いつも行く(1) つきあい(1)
③飲食店-3	2 会社の人との交流(8)	美味しい(2) お酒が飲める(1) くつろげる(1) 雰囲気が良い(1) 近い(1) いつも行く(1) つきあい(1)
	3 社外の人との交流(1)	交流できる(1)
	6 昼食時間(1)	リフレッシュできる(1)
④飲食店-4	2 会社の人との交流(9)	美味しい(1) お酒が飲める(2) 楽しい(1) くつろげる(1) ストレス発散(1) 近い(1) 安い(1) つきあい(1)
⑤飲食店-5	2 会社の人との交流(9)	美味しい(1) お酒が飲める(1) くつろげる(1) 近い(2) いつも行く(1) つきあい(1) 他にない(1) いつのまにか(1)
	7 アフター5(3)	美味しい(1) 雰囲気が良い(1) 安い(1)
⑥飲食店-6	2 会社の人との交流(6)	美味しい(1) お酒が飲める(1) くつろげる(1) 安い(1) いつも行く(1) つきあい(1)
	7 アフター5(1)	お酒が飲める(1)
⑦書店-1	4 自分の時間(4)	本を読める(2) 楽しい(1) 用事が済ませられる(1)
	5 家族・恋人との交流(2)	暇つぶしができる(1) 待ち合わせできる(1)
⑧百貨店-1	4 自分の時間(2)	用事が済ませられる(1) 楽しい(1)

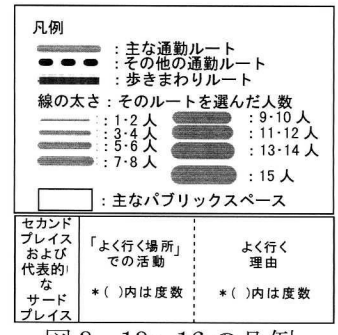


図 3－13～16 の凡例

3.5. まとめ

本調査の考察および予備調査から、0社当該部署から見た神田および品川の働く環境をまとめた（表-4）。両地域には、環境の物理的側面・社会的側面で差異があるが、共通するサードプレイスとして、「飲食店」「書店」「喫茶店」が得られた。これらは、異なった職場周囲においてもある程度一致して構築されることから、オフィスワーカーにとって基本的なサードプレイスであると言える。その一方で、「雑貨店」「菓子店」「文化施設」「ｽｰﾊﾟｰﾏｰｹｯﾄ」「文具店」などの神田特有のサードプレイス、「ホテル」「百貨店」「物販店」などの品川特有のサードプレイスも見られた。0社当該部署の協力者からみた職場周囲の環境は、神田は多様/解放的、品川は限定的/自閉的となったが、これは品川の勤務オフィスが高度に整備されているため、セカンドプレイスの延長的性質を持つセミサードプレイスが自社ビル内に構築されやすく、職場周囲のパブリックなまちの中へ生活が拡張しにくいこととも関係している。

また、サードプレイスの構築と自由な歩きまわり行動の相補的関係も示唆された。神田においては通勤ルートがメイン・サブあわせて多数構築されているのに対し、品川ではメインの一本しか構築されていない。また歩きまわりルートはさらに差が激しく、神田における多様さは品川には見られない。これらの歩行ルートの構築と職場周囲のサードプレイス構築が相補的に関係しながら、両地域の職場周囲の生活の質的差異を形成している。

さらに、予備調査時点では(ｻ)パブリックスペースはサードプレイスの候補と考えられ、オフィスワーカーを含む都市生活者のために計画されたと考えられるが、本調査でプロットされることは少なかった。特に品川は、計画されたパブリックスペースが神田よりも多く存在する(図-7～10)。職場から至近にありながら、サードプレイスとして構築されないこれらのスペースについては、今後も建築計画、および都市計画的な検討を加える必要がある。

表3－5　0社当該部署の協力者からみた神田および品川の働く環境

					神田（千代田区神田司町）	品川（港区港南）
働く環境	物理的環境	地理条件	最寄駅・勤務オフィス間の距離		300～500M	300～500M
		交通条件	500M以内の駅		JR1/地下鉄5	JR1/私鉄2
		パブリックスペース(PS)	500M以内の公園		神田公園	ハツ山公園/港南公園/品川浦公園
			500M以内の広場		-	品川駅東口駅前広場
			500M以内のその他のPS		-	品川IC内PS/高浜運河遊歩道
	社会的環境				近代的界隈性を残すまち	大規模再開発された現代的なまち
	生活環境	構築された『場所』	セカンドプレイス	フロア面積	約200㎡	約3,000㎡
			セミサードプレイス	オフィス内	-	社員食堂/図書室/喫煙ルーム
				自社ビル内	-	品川IC内飲食店/書店/美容
			『場所』が支える生活の質		-	リフレッシュ/会社の人との交流
			サードプレイス	代表的なサードプレイス	飲食店・書店・喫茶店	
					雑貨店/文化施設/ｽｰﾊﾟｰﾏｰｹｯﾄ	百貨店
				数	多い	少ない
				種類	多い	少ない
			『場所』が支える生活の質		多様/開放的 会社業務/会社の人との交流 自分の時間/リフレッシュ/寄り道	限定的/自閉的 会社の人との交流
		構築された歩行ルート	通勤ルート	数	メイン4本＋サブ多数	メイン1本
				方向性	多方向	一方向
			歩きまわりルート	数	メイン2本＋サブ多数	メイン2本+サブ少数
				方向性	多方向	一方向

なお、品川においては、品川 IC と JR 線および京浜急行線の間に、平成 15 年春に「品川グランドコモンズ」がオープンし、同年秋には新幹線品川駅が開業し、計画されたまちが姿を整えつつある。本論文で行った調査は品川のまちの整備途中に行ったものであり、まちの整備が完了した後、職場周囲の『場所構築』がどのように変容するのか、今後も注視する必要がある。さらに、品川駅東口周辺の低層密集地域は、神田と同様、近代的な界隈性を残しており、品川における数少ないサードプレイスとして構築されていたが、このような近代的な界隈性が失われた場合、この地域におけるオフィスワーカーの『場所構築』がどのように変容するのかについても、今後も注視すべきであろう。

Rapoport [注12] は建築および都市を設計する上で、「修正の余地を残した設計」の必要性を強調しており、現代的で機能主義的な計画でまちが埋め尽くされた場合の『場所構築』の貧弱さは、本章で述べた知見からも容易に予想できる。これら予想される事態に対しては、建築および都市の計画・デザイン上の対策を早急に講じることが望まれているのではないだろうか。

注

注１）調査協力者は、総じて品川より神田の勤務年数が長く（表 3－1)、両地域間で調査協力者の地理情報に差異があることも予測されるが、環境移行後の地理情報獲得は比較的早期になされるため、移転後 4 年目の調査時点では、品川での地理情報が少ないとは必ずしも言えない。また、移転による通勤時間の増減や、その他の生活条件変化に対応する行動なども『場所構築』に影響すると考えられるが、近距離通勤のために転居する人も居る等、それら要因の変化も一様ではない。本章ではサードプレイスの構築そのものの考察に重点を置き、表 3-3、図 3-6、および結論に示すように、それらの要因については第 4 章で述べることとする。

注２）神田から品川への職場移行に伴い、当該部署の人数・属性、および業務内容が大きく変わることはなかったが、調査期間における部署の人数・属性は緩やかではあるが変化している。また、この期間内には組織の改編もあり、業務方針等の変化もあったと考えられる。さらに、各オフィスワーカーは、調査対象期間中にも、結婚・出産、転居等の人生移行的変化を経験していると考えられ、多年にわたるオフィスライフ、および業務の中で「都市生活スキル」を身につけているとも考えられる。環境移行は、これら経年的な変化や緩やかな変化、個人的な変化や環境への働きかけも含むものであり、これら職場移行以外の変化と『場所構築』との関係についても検討の余地があるが、これらについては第 4 章および第 6 章で述べることとし、本章では比較的ドラスティックな環境移行である「職場移行」に焦点を当てて考察を行う。

注３）調査対象者を選定する際に、「調査時において 40 歳以下」「職場移行調査が成立すると考えられる一定の期間（概ね 1 年以上)、両地域に勤務経験がある」という条件を設定した。この条件を満たす現在の当該部署の部員、およびかつて当該部署に在籍していた部員は約 30 名確認できたが、このうち実際に「調査可能な社員」は 20 名となった。

注４）予備調査の目的は、「両地域の職場周囲の環境の違い」「両地域における生活の実態」に関する発言を収集することであり、調査協力者に神田在勤当時の生活を効果的に思い出してもらい、現在の品川での生活と比較しやすいよう配慮する必要があった。そのため、「昼食はどこによく行きましたか？」「神田（品川）のどういう所が好き（嫌い）ですか？」などの項目を「発想の手掛かり」として用意した（図 3－3)。これらの項目は、オフィスワーカーの職場周囲における生活行動場面を想定して考案した。

注５）予備調査時には、職場周囲のどの程度の範囲で生活行動が見られるかを把握する必要があった。そのため、勤務オフィスを中心として、最寄駅以遠の広い範囲を含む地図を、注４）と同様の理由で用意した（図 3－4)。

注６）予備調査は、多大な時間とボリュームが予想されたので、注３）の「調査可能な社員」20 名のうち 8 名に調査内容を説明し、7 名の承諾を得て行った。

注７）分類・整理にあたっては、KJ 法（文１、文２）を援用した。予備調査のディスカッションの録音記録から、「両地域の特徴」「職場周囲での活動」「活動の頻度や活動が継続する時間」「活動の場」などを表現する発言を紙片に書き写し、類似する発言を寄せ集め、一行見出しをつけた。本研究では、これらのグループを「働く環境」、「働く環境の移行」、「働く環境への働きかけ」に分類・整理した

後に、一行見出しの表記を統一したので、完全なKJ法とは言えず、「KJ法的」と記した。

注8）図3−5の作成過程では、「人間−環境系モデル」（文3）を参考にした。

注9）本調査に先立って予備調査を行い、両地域の差異および職場周囲での生活の把握を試みた結果、「職場および職場周囲での生活モデル」として図3−5を得た。

注10）本調査のベースマップの範囲である「勤務オフィスから800M以内の範囲」を「職場周囲の範囲」とする。また、本調査のベースマップには予備調査時に撮影した両地域の街並みの写真を貼付した。

注11）本調査では、注3）の「調査可能な社員」20名全員にアンケートの協力を依頼したところ、19名の承諾を得た。この19名に配布・説明を行った結果、15名から回答を得た。このように本研究の調査は、対象者の状況を勘案し、調査のボリュームを説明し、依頼して承諾を得た部員の協力によって行ったので、考察対象者を「協力者」と記している。

注12）Amos Rapoportは、「新しい都市や住宅団地がどれくらい全面的に設計し尽くされているかを問うかわりに、設計や決定の必要のないものは何かを問うべきである。」と述べている（文4）。

参考・引用文献

文1）川喜田二郎：発想法,中公新書，1967年

文2）川喜田二郎：続・発想法,中公新書，1970年

文3）日本建築学会　編：人間−環境系のデザイン，p24，彰国社，1997年

文4）Edward Krupat，藤原武弘　訳：都市生活の心理学　環境と人間行動シリーズ2，pp235，西村書店，1994年

文5）Ray Oldenburg：The Great Good Place，MARLOWE & COMPANY New York，1999

文6）町村敬志・西澤晃彦：都市の社会学，有斐閣アルマ，2000年

文7）高橋勇，他：21世紀の都市社会学，学文社，2002年

文8）磯村英一：都市社会学研究，有斐閣，1959年

文9）鳴海邦碩，他：都市のリ・デザイン，学芸出版社，1999年

文10）小石原はるか：スターバックスマニアックス，小学館文庫，2001年

文11）佐藤将之,高橋鷹志：園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察〜園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究　その1〜，日本建築学会計画系論文集 第562号,PP151−156，2002年

文12）橘弘志，高橋鷹志：地域に展開される高齢者の行動環境に関する研究—大規模団地と既成市街地におけるケーススタディー，日本建築学会計画系論文集　第496号，pp.89−95，1997年

第４章　環境移行に伴う職場周囲の『場所構築』の変容

4.1. 研究の目的

本章では、前章に引き続き、職場周囲に構築されるサードプレイスが、勤務オフィスの移転に代表される職場移行により、どのように変容するかを、協力者一人一人の『場所構築』のデータの変化を考察し、明らかにする。また、前章の図3−5、図3−6に示したように、「働く環境の移行」とは、事務所の移転などの「職場移行」のほか、部署の異動や忙しさの変化などの「職務移行」、結婚・出産・転居などの「人生移行」も含み得る（図4−1）。本章では、これら「個人状況の変化」に対しても考察を行う。

これらの考察を通して、環境移行・職務移行・人生移行・個人状況を含む「働く環境の移行」に伴って、職場周囲の『場所構築』がどのように変容するかを明らかにし、職場周囲における建築および都市の計画・デザイン上の知見の抽出を行う。

4.2. 調査対象・調査方法

調査対象・調査方法は、第3章で行った＜調査1＞を用いる。神田から品川へ平成11年1月に事務所を移転した0社当該部署に対して行った本調査のアンケート結果を考察する。

4.3. 調査結果と考察

4.3.1. 考察の方法

前章では、主に職場周囲に構築されるサードプレイスを考察し、対照的な都市的性質を持つ神田と品川において、どのようなサードプレイスが構築されるかを把握した。考察の過程においては、協力者15名の『場所構築』や歩きまわり行動を集約して取り扱い、職場周囲の生活と対応させ、働く環境の差異を明らかにした。

本章では、協力者一人一人の『場所構築』および歩きまわりがどのように変容するかに着目する。前章では、協力者全員のデータの集約を行ったので、一人一人の『場所構築』の変容、および個性的な『場所構築』や希少なデータは、ある面では見過ごされている。表4−1は、本調査の協力者15名の属性を表しているが、平成11年1月に一斉に品川へ移転したため、品川での勤務年数の長短はあまり幅がないが、それまでの神田での勤務年数は年齢・入社年度によってまちまちである。また、同じ部署での勤務経験のある15名でも、『場所構築』に全く違いが無いとは言えず、実際にどのようなパタンがあり得るのかを把握し、そのパタンが職場移行によってどう変容するのかを確認する必要がある。

また、アンケート番号（10）～（13）の結果を考察し、オフィスワーカーにとって、神田から品川への職場移行によって「働く環境」はどのように変化したのかを明らかにする。

さらに、調査対象期間とした8年間の間には、会社組織の改編やそれに伴う業務方針等の変化もあったと考えられ、協力者自身もその期間に業務および都市生活スキルを向上させていると考えられる。さらに、結婚や出産、転居等の人生移行的・個人的変化も経験して

いると考えられる。このような職場移行以外の変化が『場所構築』にどのように影響しているかを考察することは、「働く環境の移行」と「職場周囲の生活」の関係をつかむ上でも重要な視点であると考える。図 4−1 および表 4−2 は、このような考察の視点、および研究の枠組みにおける位置づけを表している。

表 4−1　協力者属性

調査段階	協力者番号※4	性別	年齢	職掌	入社年度	勤続年数※1	神田勤務年数※1※2	品川勤務年数※1※2
本調査	001	男	35	技術系	1991	11	7	4
	002	男	36	技術系	1991	11	4	2
	003	女	32	技術系	1993	9	6	3
	004	女	34	技術系	1991	11	8	4
	005	男	35	技術系	1991	11	4	4
	006	男	39	技術系	1987	15	11	4
	007	女	36	技術系	1993	9	6	3
	008	女	33	事務系	1991	11	8	4
	009	女	33	技術系	1992	10	7	4
	010	女	34	技術系	1990	12	9	1
	011	男	33	事務系	1994	8	3	1
	012	女	40	技術系	1987	15	6	3
	013	女	30	技術系	1997	5	1	4
	014	男	33	技術系	1994	8	4	4
	015	男	36	技術系	1992	10	6	4
全体※3	男	7名	35	技術系	6名	11年	6年	3年
				事務系	1名			
	女	8名	34	技術系	7名	9年	6年	3年
				事務系	1名			

※1 6ヶ月未満を切り捨て、6ヶ月以上を切り上げ。
平成14年7月の本調査時点での数値。

※2 転勤・出向・産休等で勤務しなかった期間は除く。

※3 年齢、勤続年数、神田・品川勤務年数は平均値。

※4 協力者番号は、本調査の協力者番号と同じ。
016は予備調査のみご協力頂いた。

表4−2　本調査におけるアンケートの構成

番号	アンケート項目	回答形式	対応する図4−1の記号
(1)	日常生活における活動の優先順位	各年度ごとに、9つの活動から選択※2	(ウ)
(2)	1週間の生活パタン	1週間の平均勤務時間数を記入	(エ)
(3)	よく行く場所	ベースマップ※3にプロット※4	(コ)
(4)	よく行く理由	自由記述	(コ)
(5)	主な通勤ルート	ベースマップに記入	(キ)
(6)	その他の通勤ルート	ベースマップに記入	(キ)
(7)	歩きまわりのルート・寄り道する場所	ベースマップに記入・プロット	(ク)
(8)	リフレッシュする場所	ベースマップにプロット	(オ)
(9)	自分の場所	ベースマップにプロット	−
(10)	引越し直後の変化	自由記述	(ス)(セ)(ソ)(タ)
(11)	引越し直後のストレス	自由記述	(ス)(セ)(ソ)(タ)
(12)	引越しによって得たもの	自由記述	(ス)(セ)(ソ)(タ)
(13)	引越しによって失ったもの	自由記述	(ス)(セ)(ソ)(タ)
(14)	慣れた/慣れない	自由記述	(チ)
(15)	慣れるためにかかった期間	自由記述	(チ)
(16)	慣れるために工夫したこと	自由記述	(チ)(ツ)

※1　網掛け：本章の考察対象としたアンケート項目
※2　「1会社業務」「2会社の人との交流」「3会社以外の人との交流」「4自分の時間」「5家族・恋人との交流」「6昼食時間」「7アフター5」「8通勤時間」「9その他」から選択
※3　アンケート票には、ベースマップ（縮尺1:2, 500）を添付した
※4　(1)の優先活動ごとに「よく行く場所」をプロット

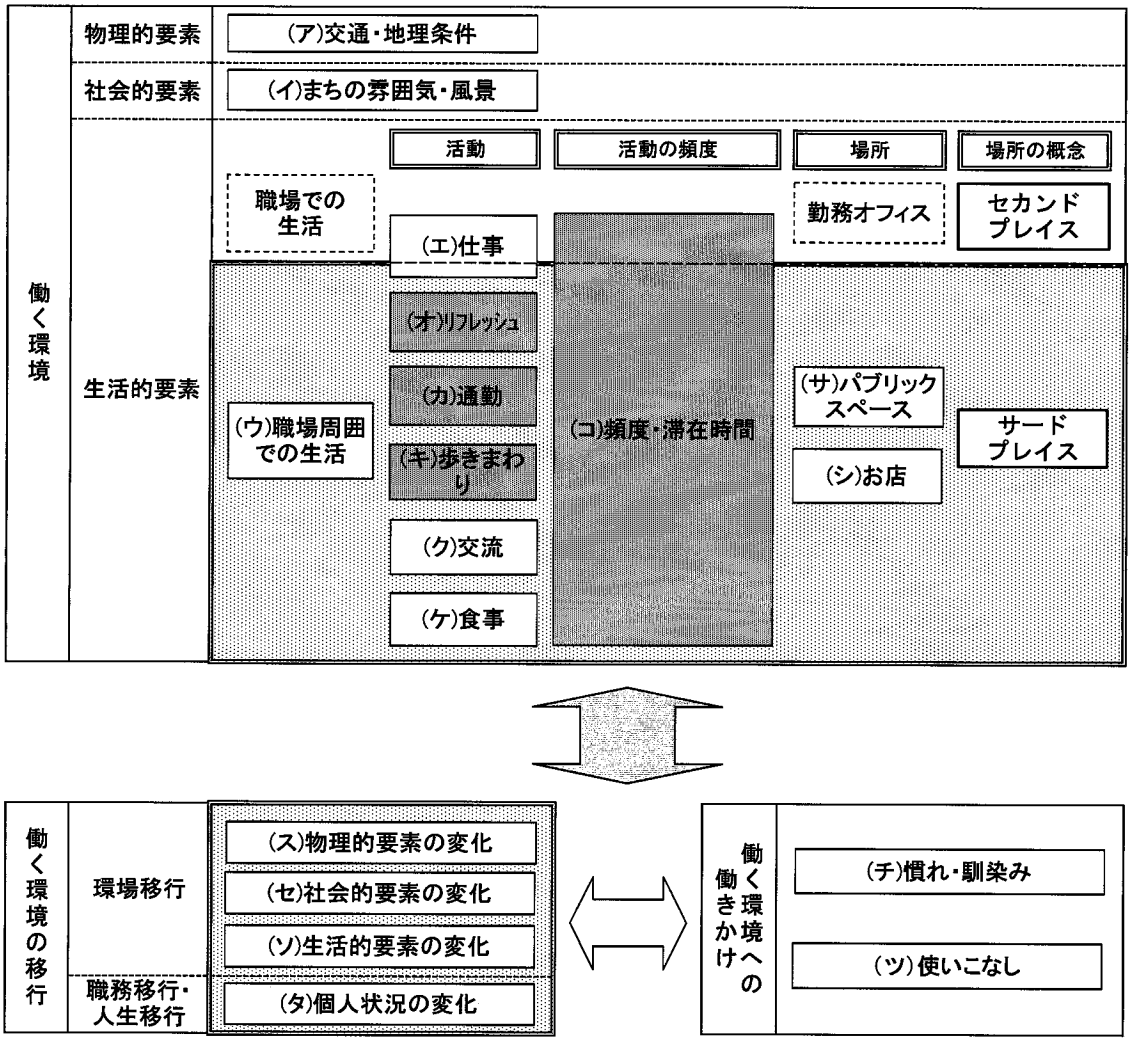


図4−1　働く環境・働く環境の移行・働く環境への働きかけ

4.3.2. 職場周囲のサードプレイス構築の変容

図4−2〜図4−5は、協力者それぞれの「よく行く場所」「寄り道する場所」「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」「自分の場所」の場所数・建築用途数の変化である。職場移行により、ほとんどの協力者において場所数・建築用途数ともに減少し、特に009、012、010、011、008（三桁数字は協力者番号を示す、以下同様。）は「よく行く場所」が激減し、職場周囲での活動が限定されたことが分かる。また、003は「寄り道する場所」「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」が、001、004は「寄り道する場所」「自分の場所」がともに激減し、008、014、002は「寄り道する場所」が、014、012は「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」が激減し、これらの活動が限定されたことがわかる。一方、013、014は、職場周囲での活動は拡張傾向にある。013、014は協力者の中でも若年で勤続年数が少なく、013は神田勤務年数が特に少ない（表4−1）。職場周囲での『場所構築』に到る以前に、勤務生活自体への適応や、その地域におけるある程度の勤務年数が必要であることも示唆された。

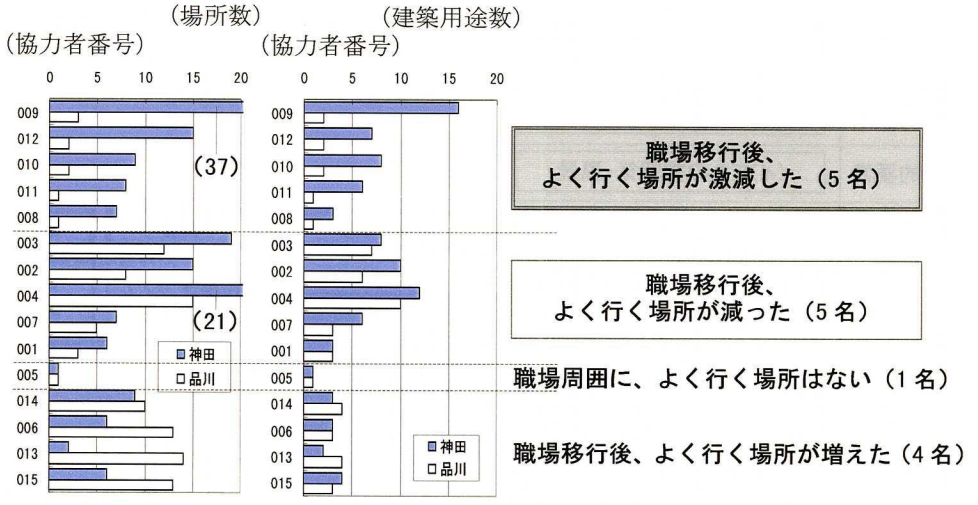


図4−2　「よく行く場所」の場所数・建築用途数の変化

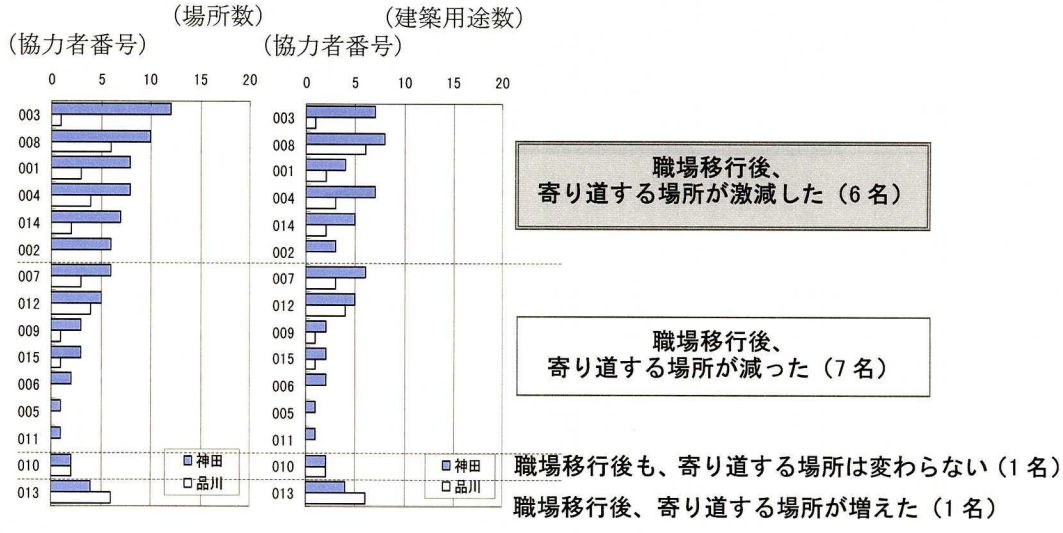


図4−3　「寄り道する場所」の場所数・建築用途数の変化

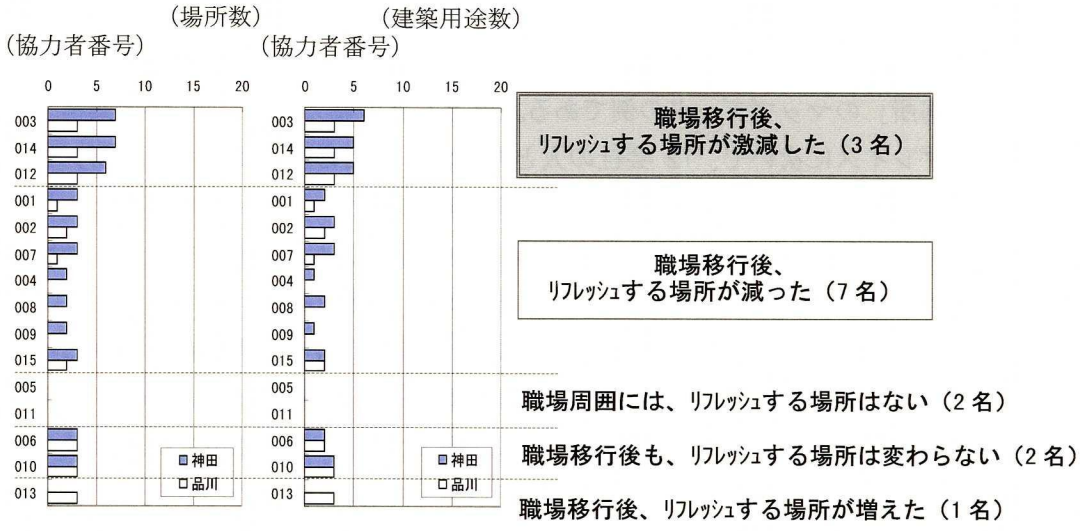


図 4－4　「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」の場所数・建築用途数の変化

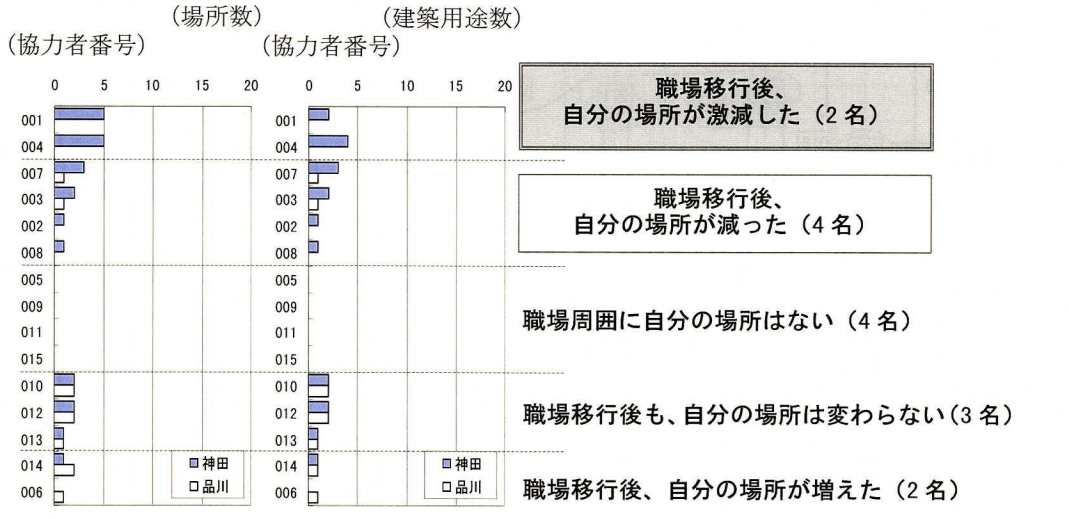
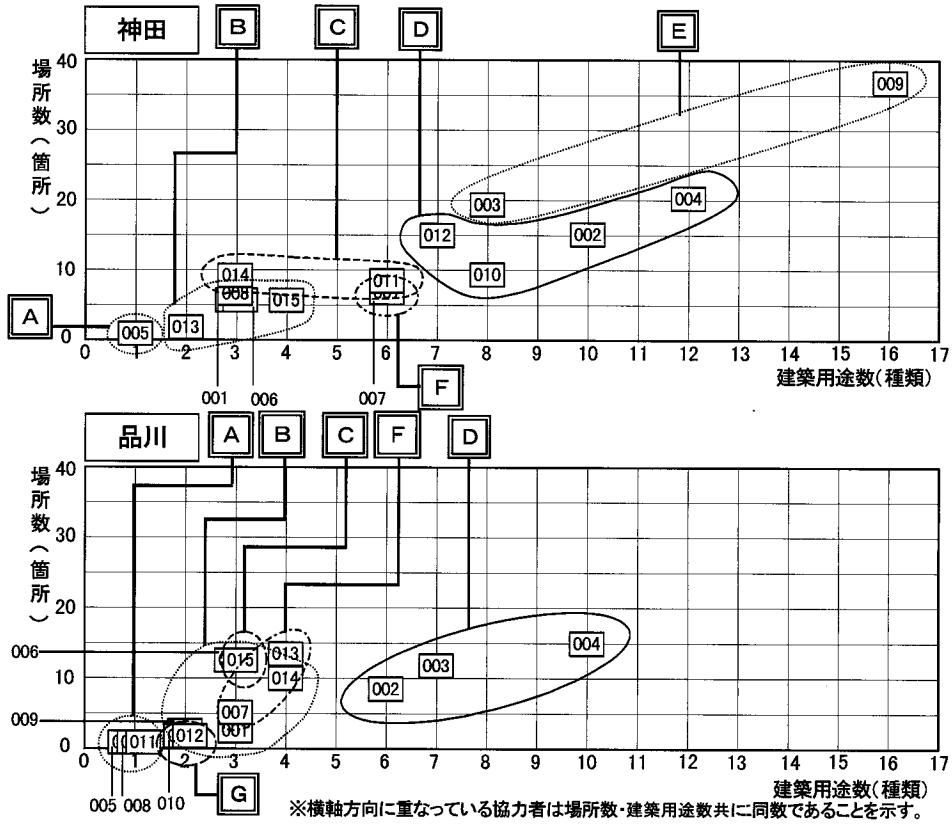


図 4－5　「自分の場所」の場所数・建築用途数の変化

さらに、「よく行く場所」に関して、協力者全員のマップデータを、場所数を縦軸、建築用途数を横軸とした座標にプロットし、アンケート項目（1）（表 4−2）の日常生活における活動の優先順位を加味して分類を行ったところ、神田で 6 種類、品川で 6 種類、延べ 7 種類の「よく行く場所」の構築パタン[注1]が見出された（図 4−6、図 4−7、および表 4−3）。表 4−3 においては、各協力者が両地域で属するパタンの変化も示した。図 4−8〜図 4-11 は「よく行く場所」のマップデータの例である。ほとんどの協力者が、「1 会社業務」のためのセカンドプレイスに次いで、「2 会社の人との交流」のための「よく行く場所」を職場周囲に構築しており、これはオフィスワーカーの基本的なサードプレイスと考えられる。また、D、E は職場周囲に多くの「よく行く場所」を構築しているパタンであり、神田においては仕事がはかどるサードプレイス（書店など）が多く構築され、サードプレイスへの「仕事の持ち出し」が見られた。一方、F は一つの『場所』で様々な活動が行われるパタンであり、セカンドプレイスへの「仕事以外の活動の持ち込み」が見られる。009、010、012 は構築パタンの変化が特に激しく、職場周囲での生活が激変した。品川では約半数の協力者がパタン A、B に属し、職場周囲では「2 会社の人との交流」のための飲食しか行わなくなっている。職場周囲で「よく行く場所」がない協力者（パタン A）も 1 名から 3 名に増加し、職場移行により職場周囲での『場所構築』が全体的に縮小し、活動が限定的になったと言える。



（上）図 4−6　「よく行く場所」の構築パタン（A〜G）（神田）
（下）図 4−7　「よく行く場所」の構築パタン（A〜G）（品川）

表 4−3　「よく行く場所」の構築パタンの特徴と生活像

パタン	特徴	職場周囲での生活像	神田 該当する協力者	神田 人数	品川 該当する協力者	品川 人数
A	「1会社業務」のみを勤務オフィスで行う。 「3会社以外の人との交流」、「4自分の時間」は生活上の優先活動であるが、そのためのサードプレイスは職場周囲に構築されない。	職場で仕事のみを行い、職場周囲に仕事以外の活動を求めない。仕事が終われば、まっすぐ家路に就く。	005	1	005 008 011	3
B	「2会社の人との交流」のためのサードプレイスが職場周囲に構築されている。 勤務オフィスの他に、兼務等で自社オフィスに「1会社業務」のためのセカンドプレイスが構築されている場合がある。 「2会社の人との交流」、「4自分の時間」、「5家族・恋人との交流」は生活上の優先活動であるが、そのためのサードプレイスは職場周囲に構築されない。 サードプレイスは飲食店、遊技場」等で建築用途数はそれほど多くない。	職場で仕事をするとともに、職場周囲で飲んだり食べたりして、会社の人との交流を楽しむ。	001 006 008 013 015	5	001 006 009 014	4
C	「3会社以外の人との交流」のためのサードプレイスが職場周囲に構築されている。 「2会社の人との交流」のためのサードプレイスが構築されない場合がある。 「3会社以外の人との交流」のためのサードプレイスは飲食店、社外オフィス等で建築用途数はそれほど多くない。	職場では仕事をするが、職場周囲では必要以上に会社の人との交流を図らず、それよりは会社以外の人との交流を図る。	011 014	2	015	1
D	「2会社の人との交流」に加え、「4自分の時間」のためのサードプレイスが職場周囲に構築されている。 「1会社業務」のための『場所』が勤務オフィス以外に、職場周囲に構築されている。 「5家族・恋人との交流」のためのサードプレイスが構築されている場合がある。	職場で仕事をするとともに、職場周囲で会社の人との交流を楽しむ。それに加え、職場周囲で自分の時間を持ち、仕事を職場から「持ち出す」場合もある。	002 004 010 012	4	002 003 004	3
E	「2会社の人との交流」、「3会社以外の人との交流」、「4自分の時間」に加え、「5家族・恋人との交流」や「6昼食時間」のためのサードプレイスが職場周囲に構築されている。 様々な活動のための、多くの多様なサードプレイスが職場周囲に構築されている。 優先活動の種類が多く、そのためのサードプレイスがほとんど職場周囲に構築されている。 「1会社業務」のための『場所』が勤務オフィス以外に、職場周囲に構築されている。	職場で仕事をするとともに、職場周囲で会社の人との交流を楽しむ。また、職場周囲で自分の時間を持ち、仕事を職場から「持ち出す」場合もある。さらに、職場周囲で家族・恋人等の大切な人との時間を持ち、昼食も楽む。	003 009	2	−	0
F	場所数は少ないが、建築用途数は比較的多く、一つのサードプレイスで複数の優先活動を行う。 優先活動の種類が多く、そのためのサードプレイスが全て職場周囲に構築されている。 勤務オフィスにおいて、「2会社の人との交流」、「4自分の時間」、「5家族・恋人との交流」のためのセミサードプレイスが構築されている。	職場で仕事をするとともに、会社の人との交流や自分の時間、家族・恋人等の大切な人との時間を持ち、仕事以外の活動を「持ち込む」場合もある。職場周囲においても数は少ないが、一つの『場所』で会社の人との交流や自分の時間、家族・恋人等の大切な人との時間を持つ。	007	1	007 013	2
G	「4自分の時間」のためのサードプレイスが職場周囲に構築されている。	職場では仕事をするが、職場周囲では必要以上に会社との交流を図らず、それよりは自分の時間を大切にする。	−	0	010 012	2

※ [ ] および ⟶ は、図4-8～図4-11にマップデータを例示。

※ 網掛け部分は、両地域において多く見られたことを示す。

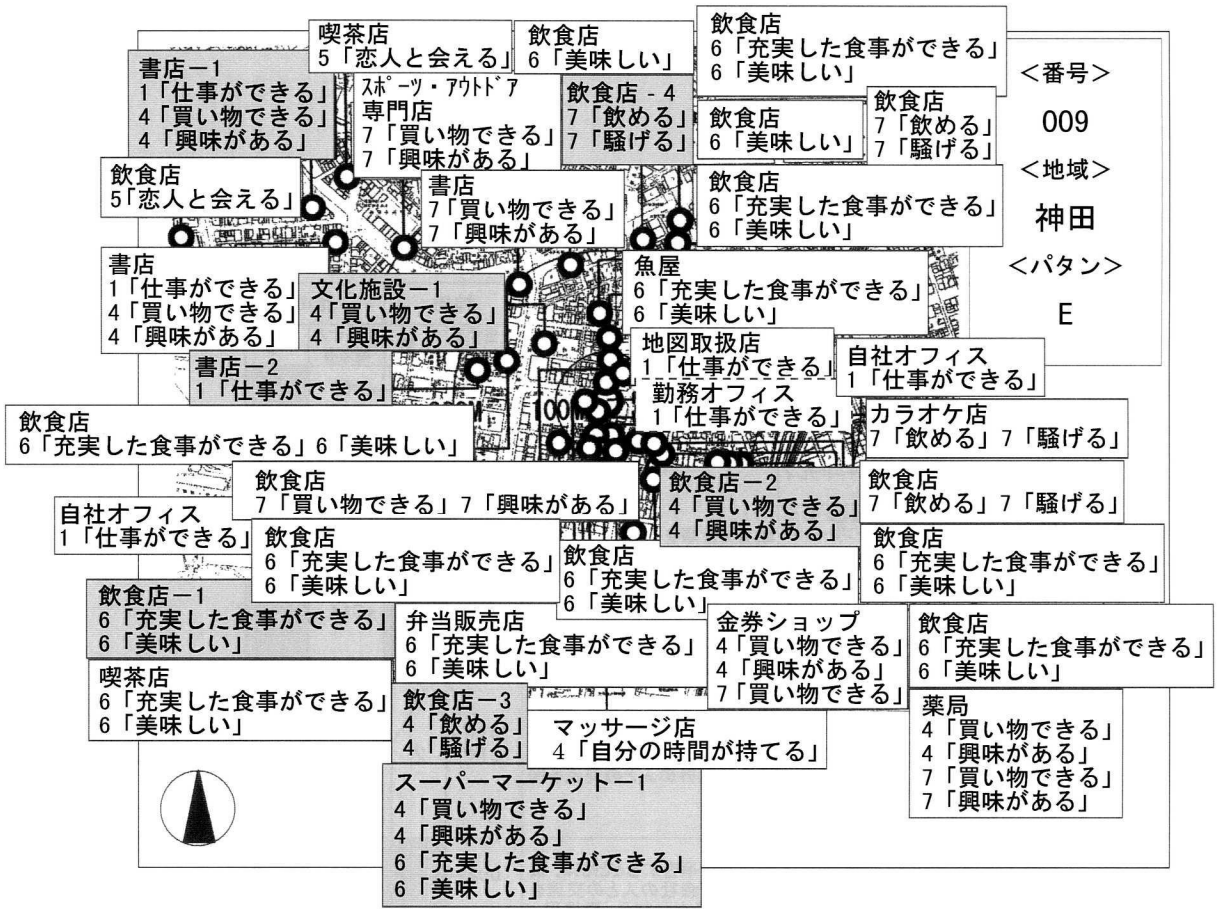


図４－８　「よく行く場所」のマップデータの例①（神田）

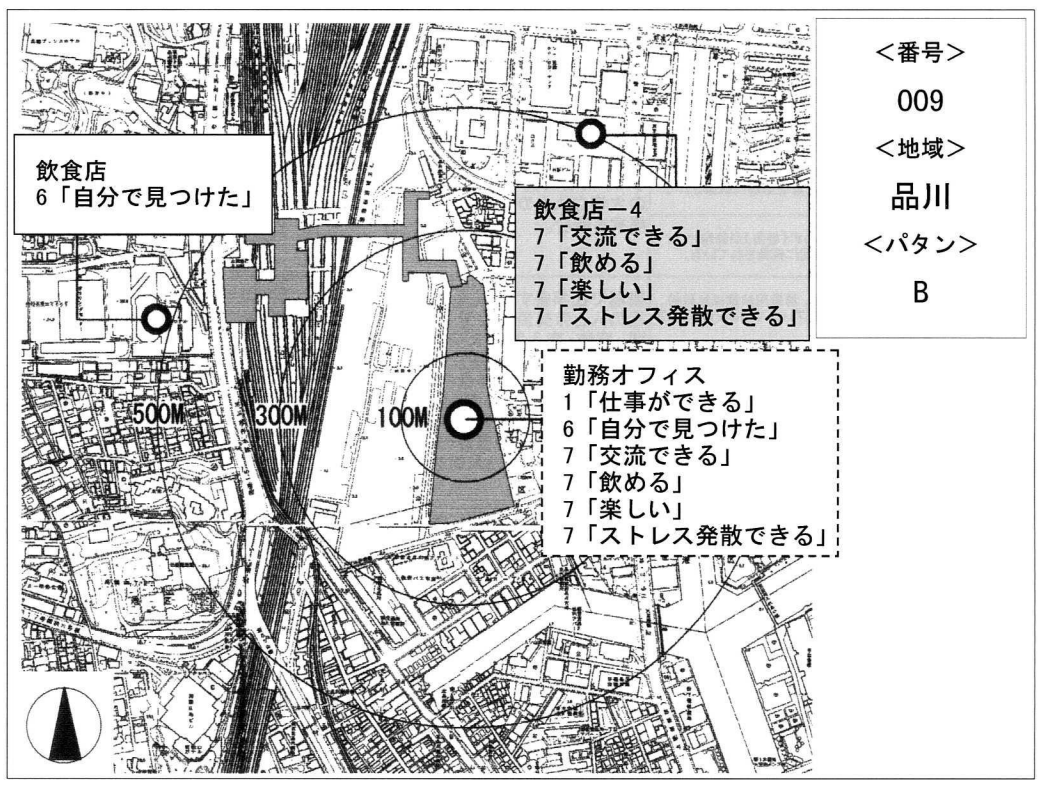


図４－９　「よく行く場所」のマップデータの例②（品川）

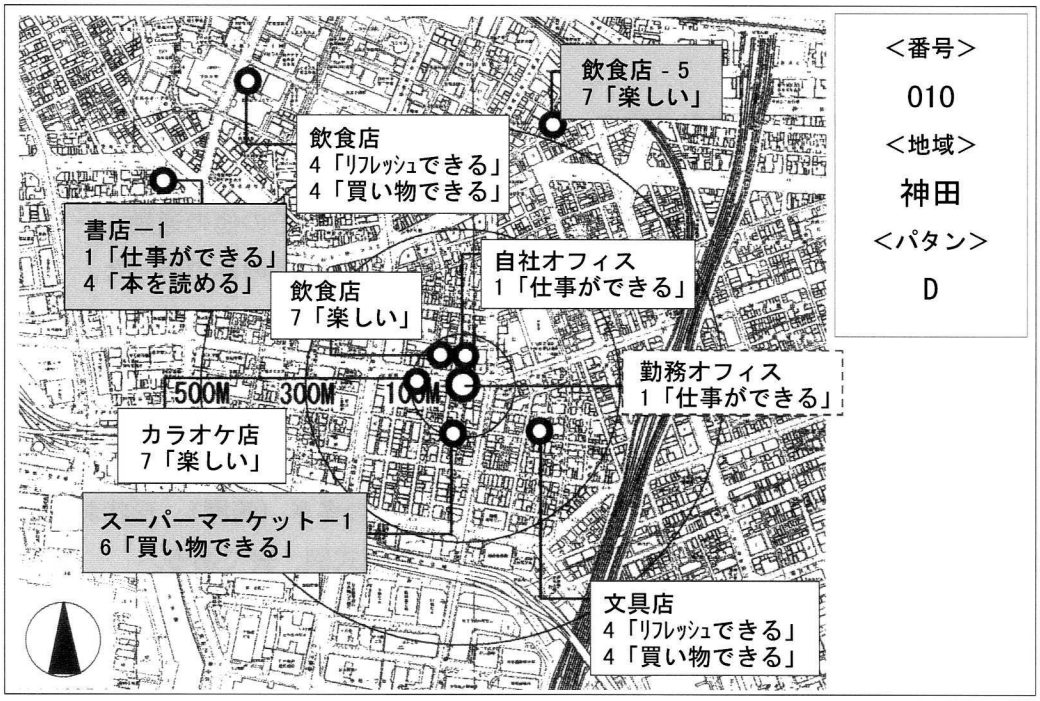


図4－10　「よく行く場所」のマップデータの例③（神田）

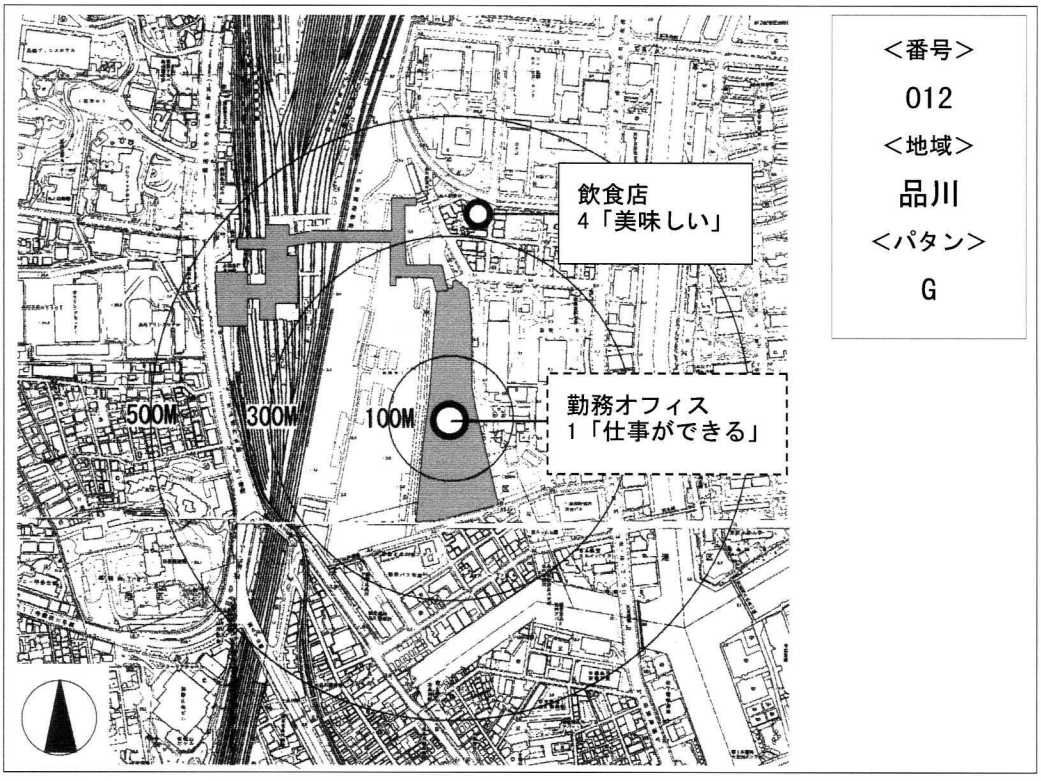


図4－11　「よく行く場所」のマップデータの例④（品川）

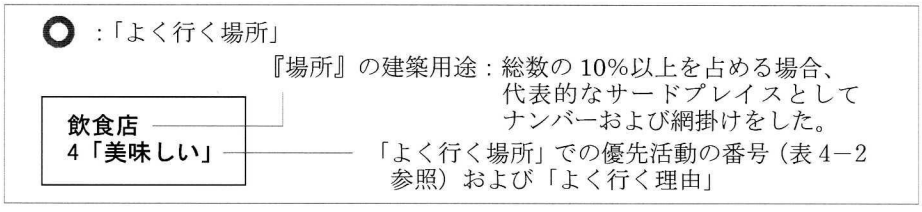
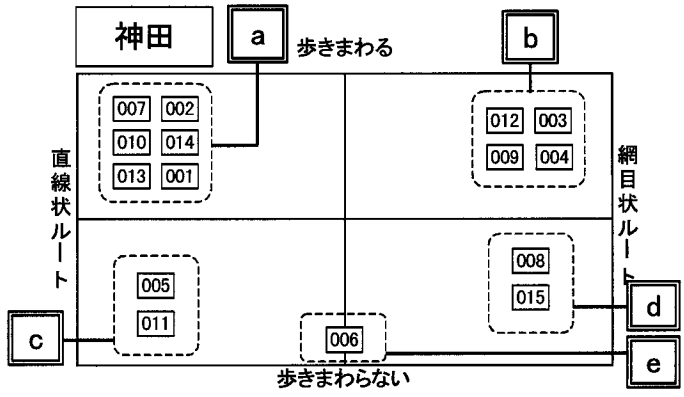
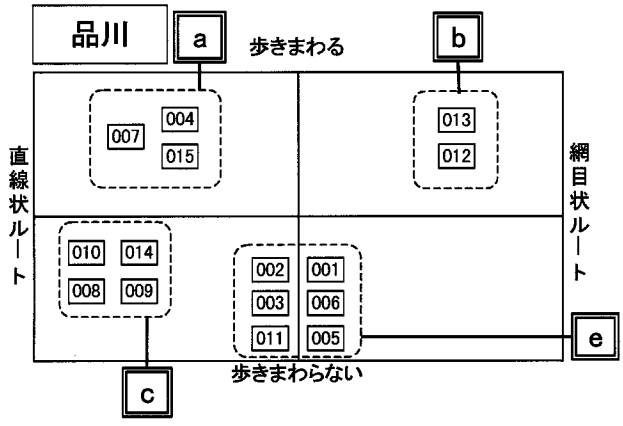


図4－8～図4－11の凡例

4.3.3. 職場周囲の歩きまわり行動の変容

第 3 章で述べたように、アンケート項目（5）（6）（表 4−2）で記入された職場周囲における通勤ルートは、神田では 3 本の主な通勤ルートと網目状のその他の通勤ルートが構築されていたが、品川には 1 本の主な通勤ルートが構築されているのみであった。これは、協力者全員の集約であり、両地域での歩きまわり行動の概要を示すものだが、本項では個人の通勤ルートおよび歩きまわりルートについて、「よく行く場所」と同様に、パタンを見出すことを試みた。図 4−12、図 4−13、および表 4−4 は、アンケート項目（5）～（9）（表 4−2）で記入された、協力者全員の通勤・歩きまわりルートおよび「寄り道する場所」「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」「自分の場所」のマップデータを、ルートの多さ（範囲）、形状および構築されたサードプレイスの建築用途からパタン分類[注1]した模式図、表である。





（上）図 4−12　職場周囲の歩きまわりパタン（a～e）（神田）

（下）図 4−13　職場周囲の歩きまわりパタン（a～e）（品川）

神田では、職場周囲をよく歩きまわっているパタンa、bが多く見られ、目的のサードプレイスへまっすぐ伸びる直線状のパタン a と、目的のサードプレイスを含みながらそれ以外の道もぶらぶらと歩く網目状のパタンbが見られた。一方、品川ではa、b両方のパタンが見られるものの、比較的歩きまわらないパタン c が多くなり、職場周囲を全く歩まわらないパタンeが1名から6名に増え、職場周囲の歩きまわり行動は全体的に減少していると考えられる。また、神田では職場周囲の比較的近い範囲を網目状に歩くパタン d が見られたが、品川ではこのパタンは見られず、職場の至近における無目的的なぶらぶら歩きは少ないと考えられる。

両地域とも歩きまわりルートが多い協力者の方が、サードプレイスを多く構築している。地域差を見ると、神田では網目状の無目的的な歩きまわりルートが構築され、多くの多様なサードプレイスが構築されている場合が多い（例えば003、図4−16）が、品川では直線的な通勤ルートが構築されているだけで、歩きまわりルートはあまり構築されず、通勤ルート途上の自社ビル内にセミサードプレイスが構築されている場合が多い（例えば003、図

表4−4　職場周囲の歩きまわりパタンの特徴と生活像

パタン	特徴	職場周囲での歩きまわりと生活像	神田		品川	
			該当する協力者	人数	該当する協力者	人数
a	セカンドプレイスから目的のサードプレイスに向かって直線状に歩きまわりルートが構築されている。 直線状の歩きまわりルートの終点にサードプレイスが構築されている。 多くの多様なサードプレイスが構築されている。	職場周囲の広範囲でさかんにリフレッシュ、寄り道、個人的な使いこなしを行い、それらのサードプレイスに向かってまっすぐ歩く。	001 002 007 010 013 014	6	004 007 015	3
b	セカンドプレイスから、目的のサードプレイスを含み、網目状に歩きまわりルートが構築されている。 網目状の歩きまわりルートの内部にサードプレイスが構築されている。 多くの多様なサードプレイスが構築されている。	職場周囲の広範囲でさかんにリフレッシュ、寄り道、個人的な使いこなしを行い、それらのサードプレイスに向かう道以外も、無目的的にぶらぶら歩く。	003 004 009 012	4	012 013	2
c	セカンドプレイスから、目的のサードプレイスに向かって直線状に歩きまわりルートが構築されている。 直線状の歩きまわりルートの終点にサードプレイスが構築されている。 サードプレイスの数は少なく、職場から離れて構築されている。 通勤ルートに沿ってセミサードプレイスが構築されている（品川）。	職場から少し離れたところで寄り道を行い、そのサードプレイスへ向かってまっすぐ歩く。職場近くでは、あまりリフレッシュ、個人的な使いこなしは行わないが、通勤途中の寄り道は行う。	005 011	2	008 009 010 014	4
d	セカンドプレイスから、目的のサードプレイスを含み、網目状に歩きまわりルートが構築されている。 網目状の歩きまわりルートの内部にサードプレイスが構築されている。 サードプレイスの数は比較的多く、職場至近に集中している。	職場近くの限られた範囲でリフレッシュ、寄り道を行い、それらのサードプレイスへ向かう道以外も無目的的にぶらぶら歩く。あまり遠くまでは歩きまわらない。	008 015	2	-	0
e	職場周囲に歩きまわりルートは構築されていない。 サードプレイスの数は少なく、職場至近に集中している。 通勤ルートに沿ってセミサードプレイスが構築されている（品川）。	職場近くの限られた範囲でリフレッシュ、寄り道を行うが、職場周囲を歩きまわることはない。	006	1	001 002 003 005 006 011	6

※ [ ] および ⟶ は、図4-14～図4-17にマップデータを例示。

※ 網掛け部分は、両地域において多く見られたことを示す。

4-17 および 008、図 4－15)。さらに、神田では通勤ルートと全く関係ない方向へ歩きまわりルートが伸びていて、それに添ってサードプレイスが構築されている場合が多い（例えば 001、図 4－14）が、品川では通勤ルートから大きく逸脱しないところに歩きまわりルートが構築され、サードプレイスが構築されている場合が多い（例えば 008、図 4-15)。

神田では歩きまわっていた協力者でも、品川では歩きまわらなくなる現象も見られた（001、002、003、005、011、010、014、009 など、表 4－5)。品川においても変わらず歩く 007、012、013、004（表 4－5）においては、「よく行く場所」「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」は減少傾向であるが、「寄り道する場所」「自分の場所」は減少するも比較的維持されるか、あるいは増えており（図 4－2～図 4－5)、職場周囲の歩きまわり行動が、サードプレイスの構築、とりわけ「寄り道する場所」「自分の場所」の構築を補助していると考えられる。

全体的にも、職場周囲を歩きまわるa,bパタンの方が、歩きまわらないc,d,eパタンより、職場周囲に多くのサードプレイスを構築している。また、目的的で直線的な歩きまわりパタン a,c より、無目的的で網目状の歩きまわりパタン b,d の方が、多くのサードプレイスを構築している。

パタン d においては、全く歩きまわらなくても職場至近にサードプレイスが構築されている場合がある。職場至近にサードプレイスが構築された場合は、歩きまわる必要が少ないと考えられる。一方、パタン c は e よりも歩きまわるパタンであるが、サードプレイスが職場至近に構築されていない。比較的遠くにサードプレイスが構築された場合は、歩き方も目的的になってくると言える。

以上から、品川は神田に比べて歩きまわり行動が縮小しており、歩き方においても変化が見られた。歩きまわりという主体的な行動とサードプレイス構築、特に「寄り道する場所」「自分の場所」の構築との間には相補的な関係があり、さらに目的に向かってまっすぐ歩くより、無目的的にぶらぶら歩く方が、サードプレイス構築の可能性があることがわかった。一方、日常的な通勤行動と通勤ルート途上のセミサードプレイス、特に「寄り道する場所」の構築との間にも相補的な関係があり、これらの関係と通勤ルートの数等の物理的な環境条件が、神田の『場所構築』に見られる開放性と、品川の『場所構築』に見られる自閉性を形成していると言える。

表 4－5　職場周囲の歩きまわりの変容

協力者番号	歩きまわりのパタンの変化			職場周囲での生活像の変容
	神田	品川	変化の有無	
001	a	e	－	職場移行後、職場周囲を全く歩かなくなった(5)
002	a	e		
003	b	e		
005	c	e	－	
011	c	e		
010	a	c	変化あり	職場移行後、職場周囲をあまり歩かなくなった(3)
014	a	c		
009	b	c		
006	e	e	－	職場周囲は歩きまわらない(1)
007	a	a	変化なし	職場移行後も、職場周囲を歩きまわる(4)
012	b	b		
013	a	b	変化あり	
004	b	a		
008	d	c	変化あり	職場移行後、歩きまわるようになった(2)
015	d	a		

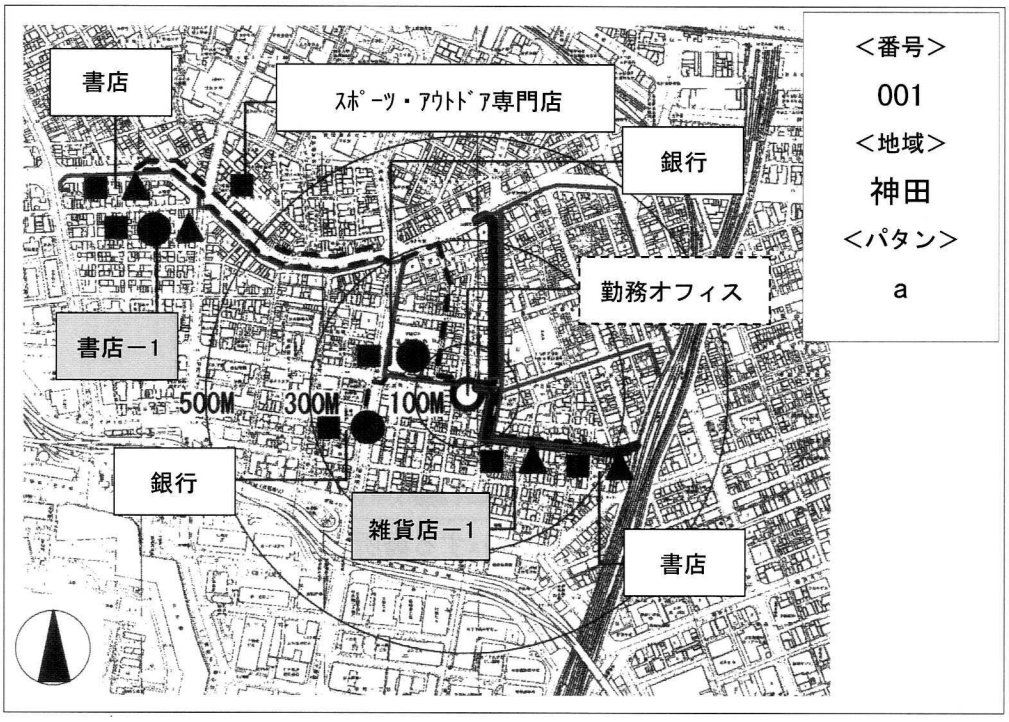


図4－14　「寄り道する場所」「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」「自分の場所」、および
通勤ルート・歩きまわりルートのマップデータの例①（神田）

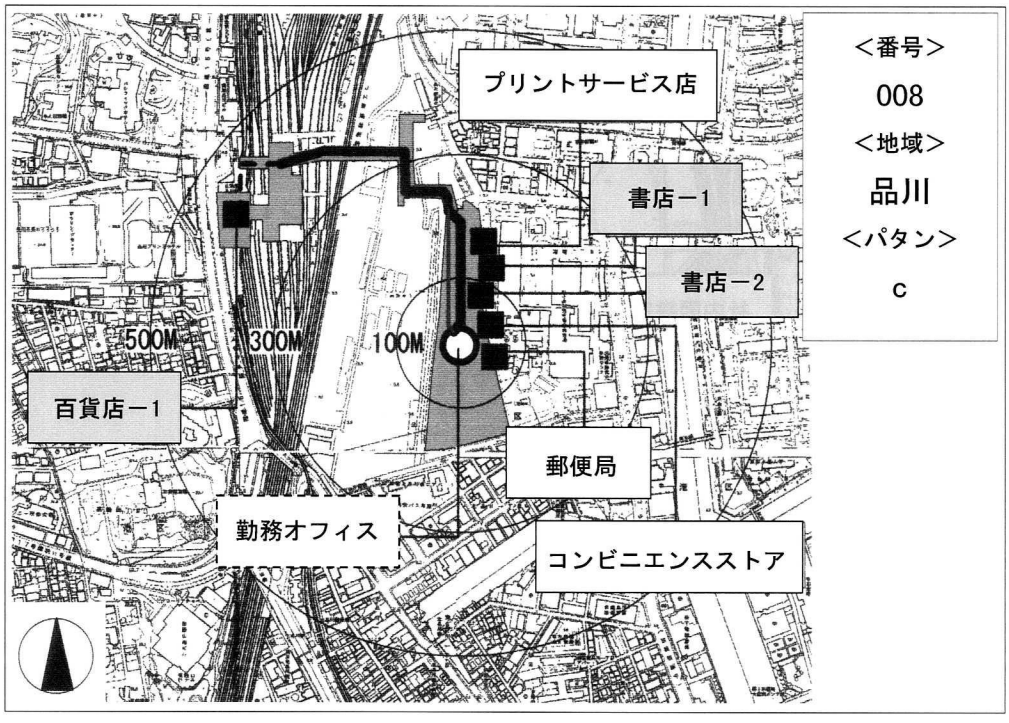


図4－15「寄り道する場所」「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」「自分の場所」、および
通勤ルート・歩きまわりルートのマップデータの例②（品川）

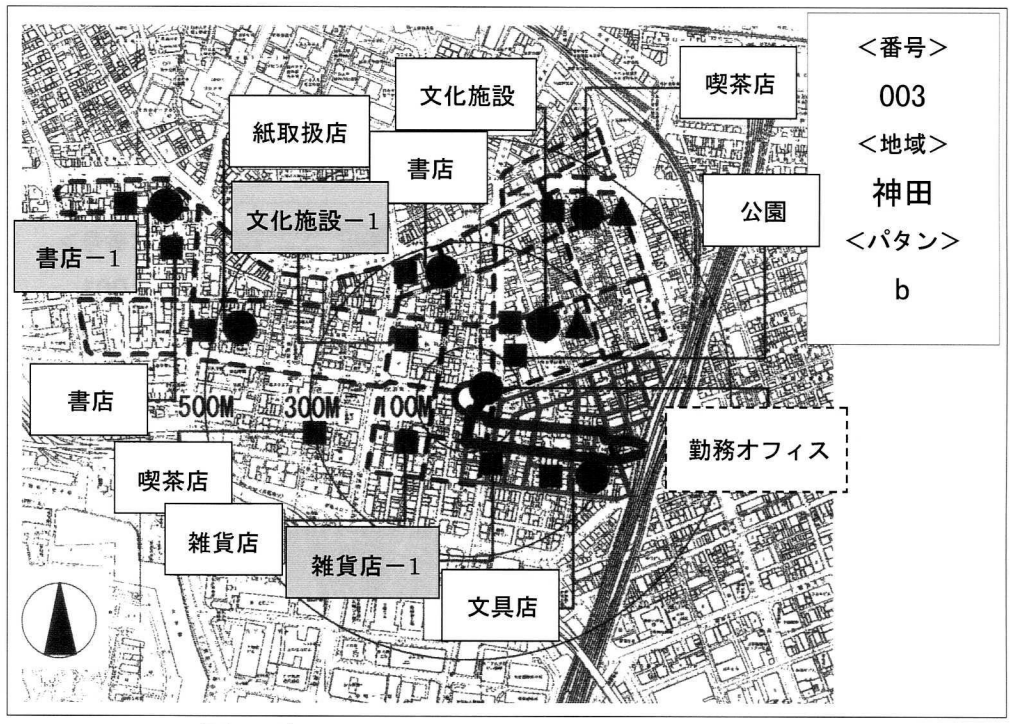


図 4－16　「寄り道する場所」「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」「自分の場所」、および通勤ルート・歩きまわりルートのマップデータの例③（神田）

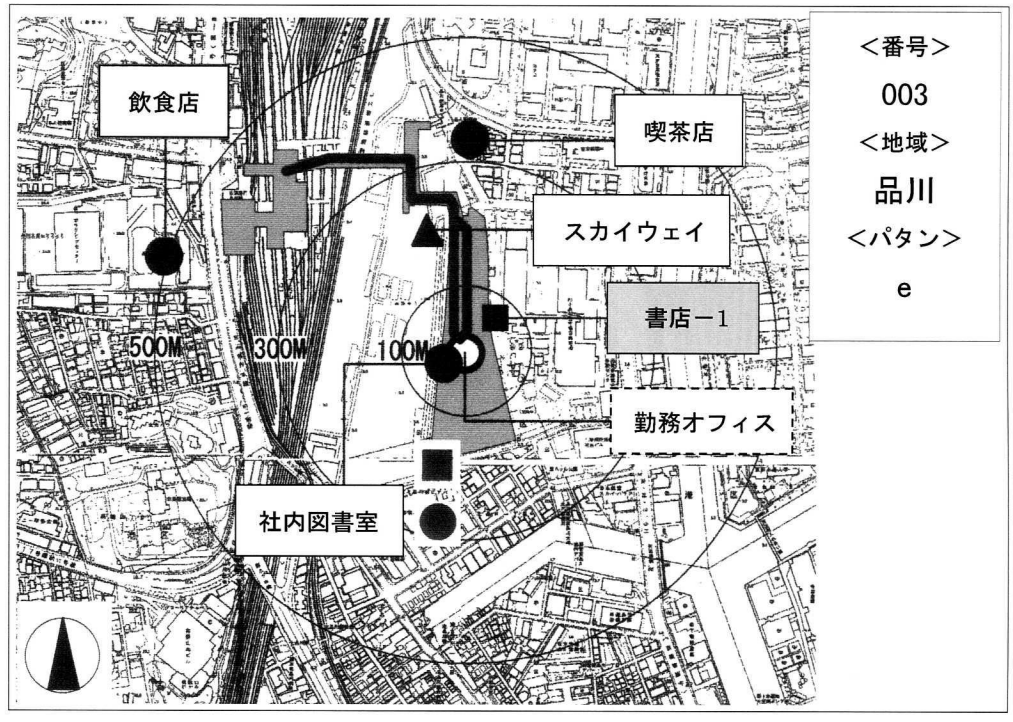


図 4－17　「寄り道する場所」「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」「自分の場所」、および通勤ルート・歩きまわりルートのマップデータの例④（品川）

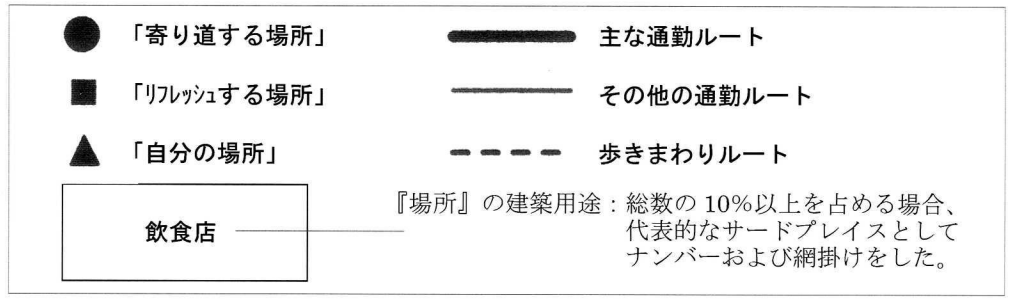


図 4－14～17 の凡例

4.4. 認識された環境変化から見た職場周囲の生活の変容

アンケート項目（10）～（13）（表4－2）の回答を集計し、調査協力者にとっての環境変化の具体的な内容を考察した。考察の過程では、アンケートの回答を紙片に書き写し、図4－1の該当する項目の上に並べ、図4－18～図4－21を得た。

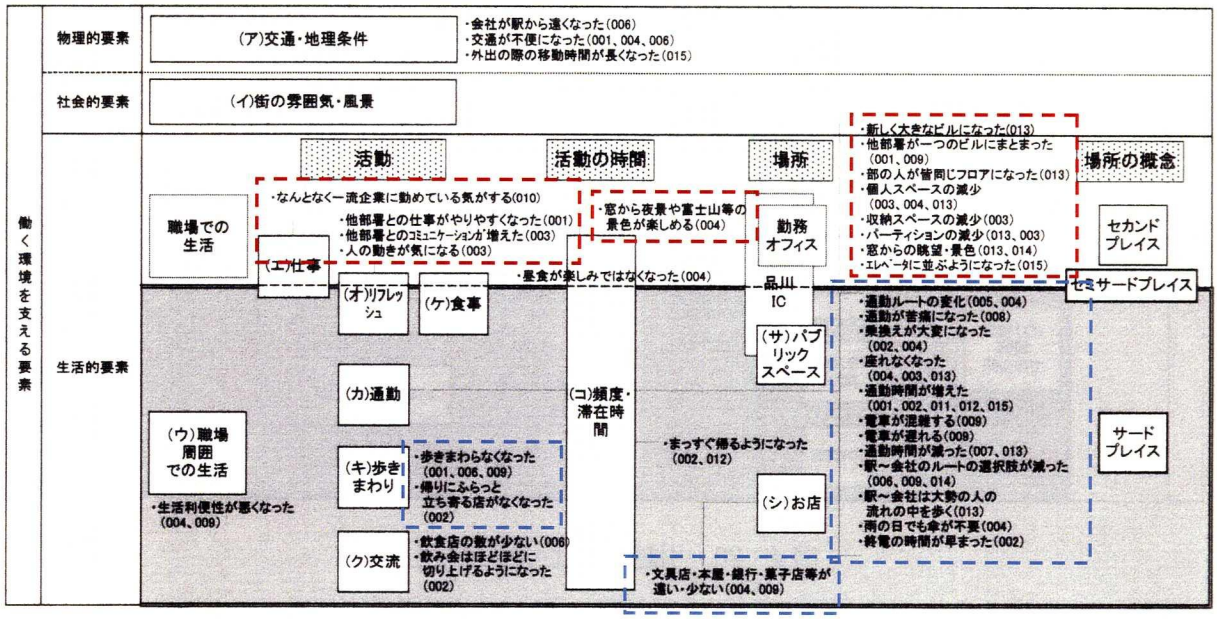


図4－18　引越し直後の変化

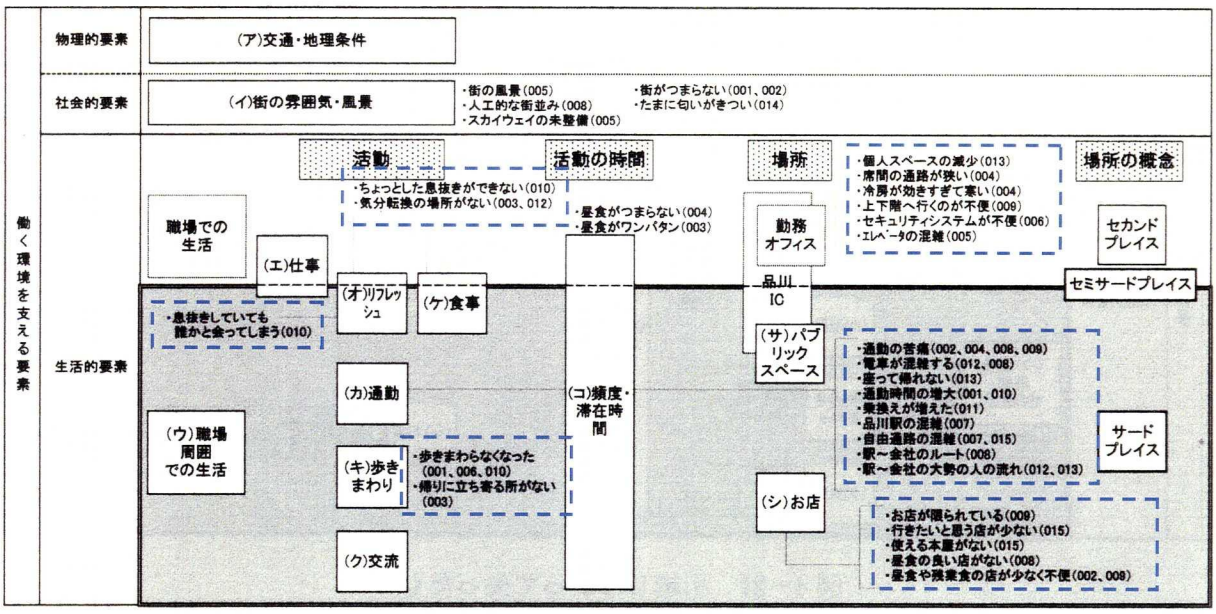
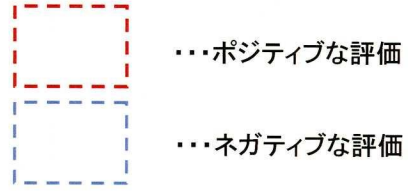


図4－19　引越し直後のストレス



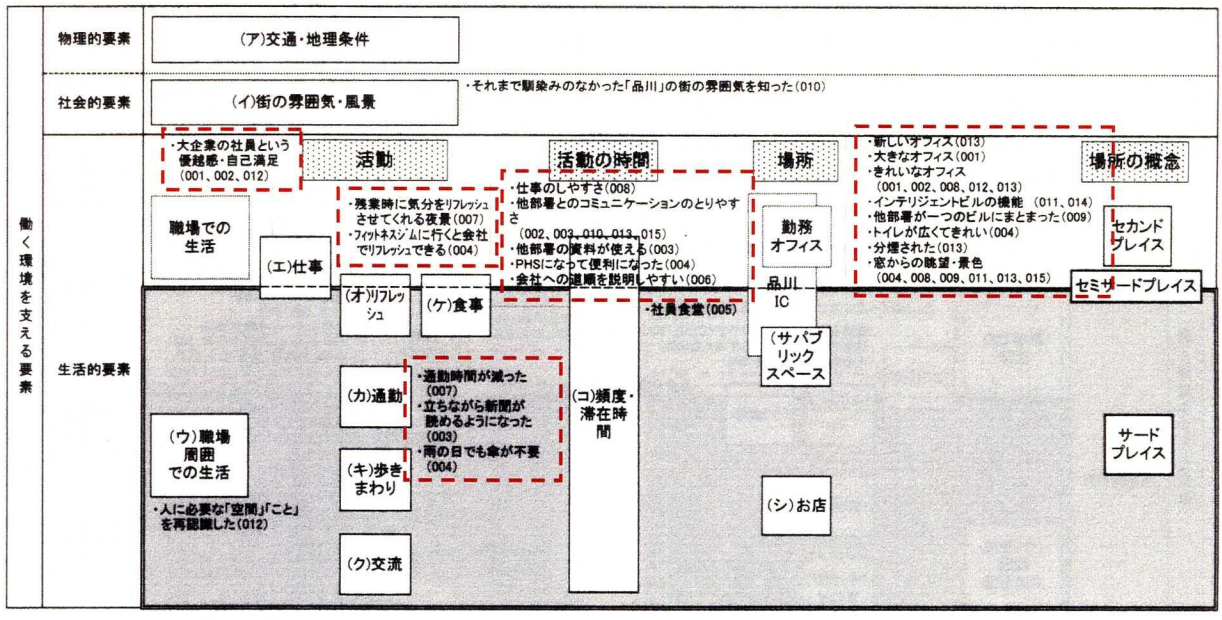


図4−20　引越しによって得たもの

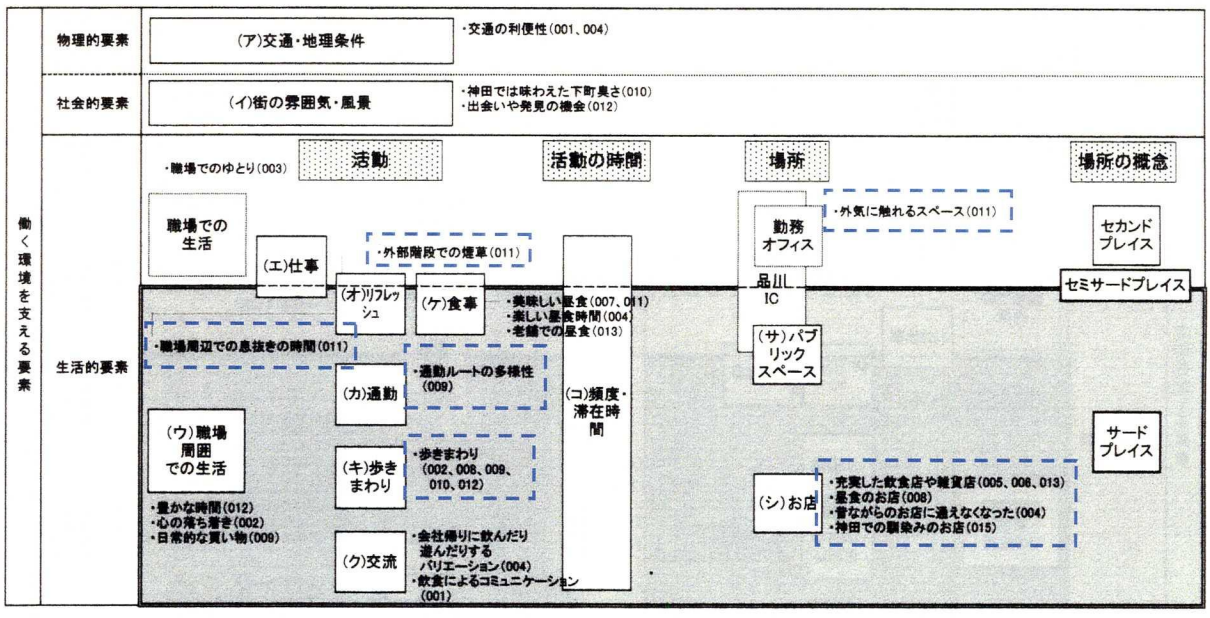
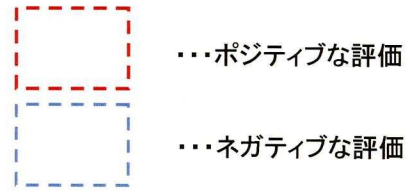


図4−21　引越しによって失ったもの



職場での生活に関しては、「新しい」「きれい」「大規模」（図4－20）などの回答から、品川の勤務オフィスが評価され、また「社員食堂」や「トイレ」などの設備・付帯施設、「眺望」、「（喫煙ルーム設置による完全な）分煙」なども評価されていることがわかる（図4－18および図4－20）。また、業務のしやすさに関しても、「他部署と仕事がやりやすい（図4－18および図4－20）。」「他部署の資料が使える（図4－20）」などと評価され、移転による大規模高層オフィスへの統合は、部署間交流および業務効率の向上に対して一定の効果があったと言える。また、このような変化は、「大企業の社員という優越感・自己満足（図4－18および図4－20）。」という回答に見られるように、神田の勤務オフィスでは感じることのできなかった「オフィスワーカーのプライド」を満足させてくれる、心理的な効果もあったと考えられる。一方で、「個人スペース」や「収納」「パーティション」の不足（図4－18）、「セキュリティシステムが不便」「上下階の行き来がしづらい」「外気に触れられない[注2]（図4－19および図4－21）。」など、大規模高層オフィスに集約化された勤務形態における「生活のしにくさ」も指摘された。

（ｳ）職場周囲での生活に関しては、（ｶ）通勤および（ｷ）歩きまわりに関する不満が多く見られた。「交通が不便」「駅から遠い」など（図4－18および図4－21）、品川の物理的な交通・地理条件の悪さと同時に、「通勤時間の増大」「電車・駅・通勤路の混雑」図4－18および図4－19）などの品川の生活条件の悪さが数多く指摘されている。調査時にはJR品川駅から港南方面へ向かう自由通路が未整備であり、しかも第3章で述べたように、この自由通路が唯一の通勤ルートとなっていたことも、品川における（ｶ）通勤に対する不満を増大させている。しかも、品川は図4－19に見られるように、街の雰囲気・風景の「未整備」「つまらなさ」「人工的なところ」が「ストレス」として感じられている。このような働く環境の物理的要素・社会的要素に、毎日の（ｶ）通勤という生活的要素が重なって品川の職場周囲の生活の質は形成され、その結果、「歩きまわらなくなる（図4－18、図4－19および図4－21）。」という行動となって現れている。

歩きまわり行動とサードプレイスの構築の相補的関係については、既に第3章で述べたが、「文具店・本屋・銀行・菓子店が遠い、少ない（図4－18）。」「使える本屋がない（図4－19）。」「昼食のお店がない（図4－21）。」などの回答に見られるように、職場周囲の（ｼ）お店の減少・不足も大きな変化として認識され、そのために歩きまわらなくなってしまい、またサードプレイスもあまり構築されないという関係がここでも推察できる。

また、勤務時間中のオフィスワーカーにとって大切な（ｵ）ﾘﾌﾚｯｼｭがなかなかできなくなったこと（図4－19および図4－21）や、（ｹ）食事の時間の豊かさやアフターファイブの（ｸ）交流も失われたこと（図4－18、図4－19および図4－21）、さらには、「豊かな時間」「心の落ち着き」なども失われている（図4－21）。

神田から品川への職場移行によって、調査協力者はこのような環境変化を認識しており、働く環境のうち、職場での生活は一部ポジティブな評価が下されているが、職場周囲の生活は概ねネガティブな評価が下されている。

4.5. 個人状況の変化と職場周囲の生活の関係

前項まで、神田から品川への職場移行に伴う職場周囲の『場所構築』の変容を考察し、職場周囲の生活との関係をさぐったが、図4−1に示したように、働く環境の移行は、職場移行以外の変化も含むと考えられる。例えば、所属する部署の業務方針の変化や、それに伴う仕事の忙しさ（業務繁忙度）の変化、さらには同じ勤務オフィス内での部署間の異動などの「職務上の環境変化」は、オフィスワーカーにとって、職場移行に匹敵する変化であると考えられる。また、結婚や出産、転居等の「人生移行的変化[注3]」は、働く環境の変化というよりも、むしろオフィスワーカー側の変化であるが、その変化に働く環境がどこまで対応できるかは重要な課題である。さらに、各々のオフィスワーカーの「生活上重点をおくこと（生活優先度）」によっても、職場周囲での生活の質は形成され得る。

本項では、これら職務移行・人生移行（本論文では、図4−1に示すように、これらを（ｸ）個人状況の変化として扱っている。）など、職場移行以外の変化を調査対象期間とした平成7年〜平成14年の8年間[注5]に渡って考察し、職場周囲の生活、サードプレイス構築との関係をさぐる。なお、考察にあたっては、平成7年〜平成10年の4年間における神田での勤務生活を前半の4年、平成11年〜平成14年の4年間の品川での勤務生活を後半の4年とし、前半から後半への時系列的な変化に着目する。

4.5.1 生活優先度の変化

表4−1のアンケート項目（1）日常生活における活動の優先順位を集計し、神田および品川における優先活動、その変化として、表4−6〜表4−8を得た。表4−2の※2で示したように、アンケートでは日常生活において優先する活動を、「1 会社業務」、「2 会社の人との交流」、「3 会社以外の人との交流」、「4 自分の時間」、「5 家族・恋人との交流」、「6 昼食時間」、「7 アフター5」、「8 通勤時間」、「9 その他」の中から選択し、年度ごとに1位から4位までの順位を記入するよう調査協力者に求めたので、各優先活動は評点化することができた。

表4-6、表4-7から、「1 会社業務」は両地域における最優先される活動であり、次いで「2 家族・恋人との交流」も、両地域で2番目の優先活動であった。これら2つの活動は、オフィスワーカーの生活における欠かせない重要な活動であり、生活の軸であると言える。しかし、3番目に優先される活動は、神田では「2 会社の人との交流」であるが、品川では「4 自分の時間」に変化している。これら4つの活動に「3 会社以外の人との交流」を加えた5つの活動は、ほとんどの調査協力者が概ね3位以上の優先活動に挙げており、オフィスワーカーの生活における基本的な活動であると言える。

表4−8を見ると、「9 その他」、「5 家族・恋人との交流」、「1 会社業務」などの活動は、神田での勤務時より、品川での勤務時において優先度が高くなっている。神田では、3位であった「2 会社の人との交流」は5位まで優先度が下がっている。また、「4 自分の時間」「3 会社以外の人との交流」は優先度は上がっているが、平均評点は下がっている。一方、「

表４－６　日常生活における優先活動（神田）

優先活動	協力者番号															平均	順位	優先活動
	001	002	003	004	005	006	007	008	009	010	011	012	013	014	015			
1会社業務	3.75	3	4	4	1	3.67	2.75	0.5	2.5	4	4	4	4	1	4	3.0780	1	1会社業務
2会社の人との交流	2.75	1	2	2	0	2.67	1	2.25	0.25	1	0	3	3	0.5	3	1.6280	3	2会社の人との交流
3会社以外の人との交流	1	0	0.75	0	4	0	1.75	2.75	0	0	3	0	0	2.5	2	1.1833	5	3会社以外の人との交流
4自分の時間	0	2	2	2	3	0	2	1.25	1.5	3	2	1	0	4	0	1.5833	4	4自分の時間
5家族・恋人との交流	2.25	4	1.25	2	0	2.67	2.25	3.25	2.75	1.5	0	2	0	0	1	1.6613	2	5家族・恋人との交流
6昼食時間	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0.0667	8	6昼食時間
7アフター5	0.25	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	2	0	0.3500	6	7アフター5
8通勤時間	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0.2000	7	8通勤時間
9その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0000	9	9その他
優先活動数	5	4	5	4	3	4	5	5	7	4	4	4	3	5	4	4.4000		優先活動数

注１）　表中の数値は、各優先活動の各年度ごとの順位を、１位＝４点、２位＝3 点、３位＝2 点、４位＝1 点とし、神田における勤務期間の平均評点を出したものである。

注２）　表中の網掛け部分は、平均評点３以上を示す。すなわち、概ね３位以上に出現する優先活動を示す。

表４－７　日常生活における優先活動（品川）

優先活動	協力者番号															平均	順位	優先活動
	001	002	003	004	005	006	007	008	009	010	011	012	013	014	015			
1会社業務	3.5	3.5	4	4	1	3.5	1	0.5	3.5	4	4	4	4	4	4	3.2333	1	1会社業務
2会社の人との交流	1	1	0.67	3	0	2.25	1	0	2.5	0	0	0	1	0.5	1	0.9280	5	2会社の人との交流
3会社以外の人との交流	3.5	0	0.33	0	0	0	0.67	2	0	0	2	3	0.25	0	3	0.9833	4	3会社以外の人との交流
4自分の時間	0	2	2	1	0	2	3.33	1	2.25	2	1	1	1.25	1	2	1.4553	3	4自分の時間
5家族・恋人との交流	2	3.5	3	2	4	1.75	3.33	3.25	1.5	1	3	2	0	0	0	2.0220	2	5家族・恋人との交流
6昼食時間	0	0	0	0	0	0	0	0	0.25	0	0	0	0.5	0	0	0.0500	8	6昼食時間
7アフター5	0	0	0	0	0	0.5	0.67	0	0	0	0	0	0	1.5	0	0.1780	7	7アフター5
8通勤時間	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.75	0	0	0.0500	8	8通勤時間
9その他	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	0	0	2.25	0	0	0.5500	6	9その他
優先活動数	4	4	5	4	2	5	6	5	5	3	4	4	7	4	4	4.4000		優先活動数

注１）　表中の数値は、各優先活動の各年度ごとの順位を、１位＝４点、２位＝3 点、３位＝2 点、４位＝1 点とし、品川における勤務期間の平均評点を出したものである。

注２）　表中の網掛け部分は、平均評点３以上を示す。すなわち、概ね３位以上に出現する優先活動を示す。

表４－８　優先活動の変化

優先活動	協力者番号															平均評点の変化	優先活動
	001	002	003	004	005	006	007	008	009	010	011	012	013	014	015		
1会社業務	−0.3	0.5	0	0	0	−0.2	−1.8	0	1	0	0	0	0	3	0	0.16	1会社業務
2会社の人との交流	−1.8	0	−1.3	1	0	−0.4	0	−2.3	2.25	−1	0	−3	−2	0	−2	−0.70	2会社の人との交流
3会社以外の人との交流	2.5	0	−0.4	0	−4	0	−1.1	−0.8	0	0	−1	3	0.25	−2.5	1	−0.20	3会社以外の人との交流
4自分の時間	0	0	0	−1	−3	2	1.33	−0.3	0.75	−1	−1	0	1.25	−3	2	−0.13	4自分の時間
5家族・恋人との交流	−0.3	−0.5	1.75	0	4	−0.9	1.08	0	−1.3	−0.5	3	0	0	0	−1	0.36	5家族・恋人との交流
6昼食時間	0	0	0	0	0	0	0	0	−0.8	0	0	0	0.5	0	0	−0.02	6昼食時間
7アフター5	−0.3	0	0	0	0	−0.5	0.67	0	−1	0	−1	0	0	−0.5	0	−0.17	7アフター5
8通勤時間	0	0	0	0	0	0	0	0	−1	0	0	0	−1.3	0	0	−0.15	8通勤時間
9その他	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	0	0	2.25	0	0	0.55	9その他
優先活動数	−1	0	0	0	−1	1	1	0	−2	−1	0	0	4	−1	0	0.0000	優先活動数

注１）　表中の数値は、表４－６および表４－７の神田および品川における勤務期間の平均評点の差である。

注２）　表中の薄い網掛け部分は１以上の評点低下を示し、濃い網掛けは１以上の評点上昇を示す。

資格取得のための勉強」「ｽﾎﾟｰﾂｸﾗﾌﾞ」「育児」「健康留意」などの「9 その他」の活動の優先度が上がり、神田での勤務時より、品川での勤務時においては優先活動が多様化していることも伺える。

これら生活優先度の変化は、神田から品川への職場移行によるものと考えるよりも、むしろ「職務上の責任が増す。」「結婚して家庭を持つ。」「会社の人との交流が一段落し、馴染みの間柄になってしまった。」「新たな活動をはじめる。」などの、オフィスワーカーとしての人生移行的変化と考えるのが妥当であり、このようなオフィスワーカー側の変化も、職場移行同様、職場周囲の生活や『場所構築』に影響を与えると考えられる。

4. 5. 2. 業務繁忙度の変化

表 4－1 のアンケート項目 (2) 1 週間の生活パタンを集計し、神田および品川における業務繁忙度、およびその変化として、表 4－9～表 4－11 を得た。

両地域において、残業[注4]時間合計は概ね B、C ランク、休日出勤時間合計は、ほとんどが A ランクであり、一週間に 6～25 時間程度の残業を行い、半日程度の休日出勤業務を行うのが、今回の調査協力者の平均的な業務繁忙度であるが、中には 005 のように突出して業務繁忙度の高い協力者も見られた。

神田において突出して多忙な 005 は、品川においても突出して多忙であるが、休日出勤時間は減少している。神田において比較的多忙な 002、003、004、006、007、012 のうち、品川においても変わらず多忙であるのは 002、004、006、012 であり、003、007 は神田での勤務時より品川での勤務時の方が業務繁忙度が低くなっている。また、008、009 は神田において業務繁忙度が比較的低い群に属していたが、とりわけ業務繁忙度が低くなっている。一方、013、014 は神田での勤務時と品川での勤務時の業務繁忙度の差が激しく、特に 014 は品川において突出して多忙である。

協力者全体としては業務繁忙度は低下している。これは、ほとんどの協力者が既に 0 社において中堅の地位に達している（表 4－1、協力者の年齢構成参照）ことが理由の一つと考えられ、業務繁忙度が高くなった 013、014 は、該当する職務上の年齢に未だ達していないと考えられる。

表 4－9　業務繁忙度（神田）

	協力者番号														
	001	002	003	004	005	006	007	008	009	010	011	012	013	014	015
残業時間合計	13.8	18.5	29	17.5	30	17.5	15	14.5	12.3	12.3	12.5	15.8	7.5	6.3	11.7
ランク	B	C	D	C	D	C	C	B	B	B	B	C	B	B	B
休日出勤時間合計	3	0	0	0	17.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ランク	A	A	A	A	C	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A

注１）　表中の数値は、１週間の平均勤務時間数のうち、残業時間合計および休日出勤時間合計の神田での勤務時における平均値を示す。また、ランクは、A＝0～5 時間、B＝6～15 時間、C＝16～25 時間、D＝26 時間以上を示し、休日出勤時間合計については、A＝0～5 時間、B＝6～11 時間、C＝12 時間以上を示す。

表 4－10　業務繁忙度（品川）

	協力者番号														
	001	002	003	004	005	006	007	008	009	010	011	012	013	014	015
残業時間合計	10	23	5.8	18.8	31.9	17.5	7.5	2.5	6.25	0	12.5	17.5	15.3	27.5	11.5
ランク	B	C	B	C	D	C	B	A	B	A	B	C	C	D	B
休日出勤時間合計	0	0	0	0	5.25	0	0	0	0	0	0	2.33	0	13.75	0
ランク	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	C	A

注１）　表中の数値は、１週間の平均勤務時間数のうち、残業時間合計および休日出勤時間合計の神田での勤務時における平均値を示す。また、ランクは、A＝0～5 時間、B＝6～15 時間、C＝16～25 時間、D＝26 時間以上を示し、休日出勤時間合計については、A＝0～5 時間、B＝6～11 時間、C＝12 時間以上を示す。

表 4－11　業務繁忙度の変化

優先活動	協力者番号														
	001	002	003	004	005	006	007	008	009	010	011	012	013	014	015
残業時間合計	-3.8	4.5	-23	1.3	1.9	0	-7.5	-12	-6.1	-12	0	1.7	7.8	21.2	-0.2
休日出勤時間合計	-3	0	0	0	-12	0	0	0	0	0	0	2.33	0	13.8	0

注１）　表中の数値は、１週間の平均勤務時間数のうち、残業時間合計および休日出勤時間合計の神田での勤務時における平均値を示す。

注２）　表中の薄い網掛け部分は、週 5 時間以上の業務時間減少を示し、濃い網掛けは週 5 時間以上の業務時間増加を示す。

4.5.3. 個人状況の変化と職場周囲の生活の変容

4.5.1. および 4.5.2. で述べた、調査対象期間の 8 年間の生活優先度の変化と業務繁忙度の変化に加え、人生移行的変化（主な出来事、アンケート調査時に個人属性として調査した。）をまとめ、KJ 法的な並べ替えを行って整理し、生活の変容について 5 つの型を見出した（表 4－12)。

<0>変化なしは、「主な出来事」「生活優先度の変化」「優先活動数の変化」「業務繁忙度の変化」ともに、調査対象期間内に全く変化していない型である。<1>人生移行変化型は、結婚や出産などの人生移行的変化が支配的な型であり、「5 家族・恋人との交流」や「9 その他（育児)」などの人生移行的変化に対応した活動の優先度が相対的に高くなるのが特徴である。また、業務繁忙度はいずれも「忙しくない方向」に変化しており、人生移行的変化を優先した結果として、業務量が調整されている形となっている。<3>職務移行変化型は、職務移行的変化が支配的な型であり、とりわけ 014 は業務繁忙度の変化が著しく、それまで「3 会社以外の人との交流」や「4 自分の時間」の優先度が高い生活を送っていたが、「1 会社業務」の優先度が上がり、生活が業務中心に変容している。<4>職場移行変化型は、神田から品川への職場の移転による職場および職場周囲の環境の変化が支配的な型である。神田および品川の物理的・社会的な差異の影響を強く受ける型であり、4.6. の表 4－13 が最もよく当てはまる型である。<5>生活優先度変化型はオフィスワーカー自身が優先する活動が支配的な型であり、生活上のビジョンが生活をリードする型である。例えば、008 は「9 その他（健康管理)」を優先し、013 は「9 その他（資格取得の勉強)」を優先しており、それ以外の人生移行的変化や優先活動数の変化、業務繁忙度などは、あまり生活には影響しない。

オフィスワーカーにとって、結婚・出産などの人生移行変化、職務繁忙度、転勤・出向などの職務移行変化、さらには転居・健康状態などの個人状況の変化は、生活を変容させる重要な要素であり、職場移行に加えて働く環境の移行を構成すると考えられる。

4.5.4. 個人状況の変化とサードプレイス構築の関係

既に 4.3.2. において、協力者の中でも若年である 013、014 は、職場周囲での活動が拡張傾向にあることを述べたが、個人状況の変化は一様ではなく、別々の生活の変容型に分類された（表 4－12)。また、001、009、015 は同じ生活の変容型に分類され、いずれも職場移行変化が生活の変容に対して支配的であるが、その変化のとらえ方は各人各様であり、「よく行く場所」の構築パタン、歩きまわりのパタンも一様ではない（表 4－3、および表 4－4)。さらに、表 4－12 の<4>職場移行変化型においてはサードプレイス構築と職場移行変化との関係が卓越的であるが、それ以外の型においてはサードプレイス構築と個人状況の変化との関係を無視できず、オフィスワーカーと働く環境の双方の変化から、サードプレイス構築はとらえられるべきである。

表 4－12　個人状況の変化から見た生活の変容型

生活の変容型	協力者番号	主な出来事		生活優先度の変化	優先活動数の変化	業務繁忙度の変化
		神田勤務時	品川勤務時			
<1> 変化なし	002	－	－	－	－	－
<2> 人生移行変化型	003	－	結婚 出産→育児	「2会社の人との交流」 が低くなり、 「5家族・恋人との交流」 が高くなった。	－	忙しくなくなった
	007	転居	結婚	「1会社業務」「3会社以外の人との交流」 が低くなり、 「4自分の時間」「5家族・恋人との交流」 が高くなった。	増加	忙しくなくなった
	010	－	出産→育児	「2会社の人との交流」「4自分の時間」 が低くなり、 「9その他（育児）」 が高くなった	減少	忙しくなくなった
	011	結婚	－	「3会社以外の人との交流」「4自分の時間」「7アフター5」 が低くなり、 「5家族・恋人との交流」 が高くなった。	－	－
	005	－	結婚	「3会社以外の人との交流」「4自分の時間」 が低くなり、 「5家族・恋人との交流」 が高くなった。	減少	忙しくなくなった
<3> 職務移行変化型	012	－	－	「2会社の人との交流」 が低くなり、 「3会社以外の人との交流」 が高くなった。	－	－
	014	－	－	「3会社以外の人との交流」「4自分の時間」 が低くなり、 「1会社業務」 が高くなった。	減少	忙しくなった
<4> 職場移行変化型	001	－	－	「2会社の人との交流」 が低くなり、 「3会社以外の人との交流」 が高くなった。	減少	－
	009	結婚	－	「5家族・恋人との交流」「7アフター5」「8昼食時間」 が低くなり、 「1会社業務」「2会社の人との交流」 が高くなった。	減少	忙しくなくなった
	015	－	－	「2会社の人との交流」「5家族・恋人との交流」 が低くなり、 「3会社以外の人との交流」「4自分の時間」 が高くなった。	－	－
<5> 生活優先度変化型	004	転居	－	「4自分の時間」 が低くなり、 「2会社の人との交流」 が高くなった。	－	－
	006	－	－	「4自分の時間」 が高くなった。	増加	－
	008	転居	結婚	「2会社の人との交流」 が低くなり、 「9その他（健康管理）」 が高くなった。	－	忙しくなくなった
	013	－	転居	「2会社の人との交流」「8昼食時間」 が低くなり、 「4自分の時間」「9その他（資格取得の勉強）」 が高くなった。	増加	忙しくなった

4.6. まとめ

本章では、4.3.および 4.4.で職場移行による『場所構築』の変容、職場周囲での生活の変容を考察し、4.5.で職務移行、人生移行などの個人状況の変化をも含めた環境移行とオフィスワーカーの生活の変容、サードプレイス構築との関係を考察した。

職場移行に伴う『場所構築』の変容、職場周囲での生活の変容は表 4－13 の通りである。

神田のような近代的な界隈性を残すまちにある小規模オフィスから、品川のような計画的に再開発された現代的なまちにある大規模高層オフィスへ職場移行した場合、職場の延長的性質を持つセミサードプレイスが職場近くに構築されるが、「自宅でも職場でもない自立した『場所』」である本来のサードプレイスは構築されにくい。また、種々の付帯施設を持つ大規模オフィス内では、ﾘﾌﾚｯｼｭや個人的な使いこなしの他、仕事以外の活動の「持ち込み」も行われる一方、付帯施設を持たない小規模オフィスからは職場周囲のサードプレイスへ仕事の「持ち出し」が行われる。また、オフィスワーカーの「よく行く場所」の構築パタン、および職場周囲の歩きまわりパタンが見出され、いずれも職場移行により活発なパタンが減少し、職場周囲での生活は限定的・自閉的に変容した。さらに、職場周囲で無目的的なぶらぶら歩きができることや通勤ルートが多様であることと、職場周囲のサードプレイス構築との間には相補的な関係があることも明らかになった。

一方、職場移行以外の環境移行である、職務移行、人生移行などの個人状況の変化に伴うオフィスワーカーの生活の変容に関しても、5 つの型が見出された（表 4－12)。オフィスワーカーにとっての「働く環境」は、職場移行によって一様に変容するのではなく、オフィスワーカー側の変化である人生移行的変化、生活優先度の変化、業務繁忙度の変化、などによっても変容する。このように、職場周囲における『場所構築』は、オフィスワーカーと働く環境が相互不可分的に進行・変容する一つの「系」としてとらえられるべきであろう。

表 4－13　職場および職場周囲での生活の変容

			神田	品川
働く環境	勤務オフィス		神田周辺に多数存在する 0社の小規模オフィスビルの一つ	複合再開発「品川インターシティ」 の一部である大規模高層オフィス
	パブリック スペース (PS)		未整備 （勤務オフィスから500M以内に公園×1のみ）	整備されている （勤務オフィスから500M以内に公園×3、 広場×1、PS×2）
	職場周囲		近代的界隈性を残すまち	計画的に再開発された現代的なまち
職場での 生活	セカンドプレイス （勤務オフィス）		－	社員食堂、図書室、ラウンジ等の 付帯施設が「リフレッシュする場所」「自分の場所」 として構築される。
			仕事をサードプレイスへ「持出す」。	仕事以外の活動をセカンドプレイスに「持ち込む」。
職場周囲 での生活	サード プレイス	数	多い	少ない
		種類	多様	限定的（品川IC内が多い）
		主なサードプレイス	飲食店、書店、喫茶店、雑貨店、銀行	飲食店（品川IC内が多い）
		地域特有のサードプレイス	菓子店、文化施設	百貨店、物販店、ホテル
		「1会社業務」で「よく行く場所」	多い 仕事をサードプレイスへ「持出す」	少ない 仕事は職場で行う
		「4自分の時間」で「よく行く場所」	多い 「買い物できる」「居心地が良い」「興味がある」 「ボーッとできる」等の理由	少ない 「楽しい」「用意が済ませられる」 「リフレッシュできる」等の理由
		「2会社の人との交流」で 「よく行く場所」	多い 「美味しい」「リラックスできる」「飲める」等の理由	多い 「飲める」「近い」「美味しい」等の理由
		「3会社以外の人との交流」で 「よく行く場所」	「使いやすい」「会社の人に会わない」 「安い」等の理由	「近い」「便利」「安い」等の理由
		「5家族・恋人との交流」 で「よく行く場所」	「待ち合わせできる」「長居できる」等の理由	「待ち合わせできる」「暇つぶしできる」等の理由
		「6昼食時間」で「よく行く場所」	「美味しい」「充実した食事ができる」等の理由	「自分で見つけた」「リフレッシュできる」等の理由
		「7アフター5」で「よく行く場所」	「交流できる」「買い物できる」等の理由	「雰囲気が良い」「安い」等の理由
		よく行く理由	豊富	画一的
	サード プレイス の 構築	「よく行く場所」の構築パタン	B(5名) 職場で仕事を行い、 職場周囲で会社の人との交流を楽しむ。	A(3名) 職場で仕事を行い、職場周囲に活動を求めない。
			D(4名)、E(2名) Bに加え、自分の時間や家族・恋人等との時間、 昼食時間を楽しみ、仕事を職場から「持出す」。	B(4名) 職場で仕事を行い、 職場周囲で会社の人との交流を楽しむ。
				D(3名) Bに加え、自分の時間を持ち、 仕事を職場から「持出す」。
	歩き まわり	通勤ルート	主な通勤ルート×3、その他の通勤ルート×多数	主な通勤ルート×1
		職場周囲の歩きまわりパタン	a(6名) 職場周囲の広範囲でリフレッシュ・寄り道・個人的な使い こなしを行い、そこへ向かってまっすぐ歩く。	c(4名) 職場から少し離れたところで寄り道を行い、 そこへ向かってまっすぐ歩く。 職場近くでは通勤途中に寄り道する程度で、 リフレッシュ・個人的な使いこなしは行わない。
			b(4名) 職場周囲の広範囲でリフレッシュ・寄り道・個人的な使い こなしを行い、そこへ向かう道以外もぶらぶら歩く。	e(6名) 職場近くの限られた範囲でリフレッシュ・寄り道を 行うが、職場周囲は歩きまわらない。

職場移行

場所構築の変容

注

注１）「よく行く場所」の構築パタンを得る過程では、「よく行く場所」、そこでの活動、およびよく行く理由が記入された協力者全員のマップデータを、「よく行く場所」の場所数・建築用途数をそれぞれ縦軸・横軸とした座標上に並べ、座標上の近傍に位置し、かつそこでの活動の種類が類似しているマップデータを枠で囲む作業を行っている。また、職場周囲の歩きまわりパタンを得る過程でも、通勤ルート・歩きまわりルートおよび「寄り道する場所」「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」「自分の場所」が記入された協力者全員のマップデータを、歩きまわりルートの多さ（範囲）・形状を軸とした模式図の上に並べ、類似しているマップデータを枠で囲み、それぞれの枠内でどのように「寄り道する場所」「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」「自分の場所」が構築されているかを考察している。こうして得られた「よく行く場所」の構築パタンおよび職場周囲の歩きまわりパタンは、それぞれ表 4－3、表 4－4 に示すように、上記の視点から見た「職場周囲での生活像」が分類されており、研究の枠組みである図 4－1 の薄い網掛け部分の「職場周囲での生活」における「原型（パタン）」を示すものでもある。このような考えから、本章では、分類の結果得られたグループを「パタン」と呼び、環境移行に伴う職場周囲での生活の変容を示すために用いた。

注２）神田の勤務オフィスでは、0 社当該部署は 3 フロアに分かれて勤務していたため、上下階の行き来は、エレベータよりも外部階段が用いられていた。1 フロアが 200 ㎡と狭かったこともあり、外気に触れられるスペースである外部階段は、上下階の行き来のほか、貴重な「ﾘﾌﾚｯｼｭする場所」としても構築されていた。さらに、概ね執務フロア内を禁煙としていたため、喫煙者は外部階段を喫煙所として使用しており、そこでﾘﾌﾚｯｼｭ、および交流が図られる場合があった。図 4－21 に見られるように、品川の勤務オフィスでは「外部階段での煙草」は不可能であるが、煙草のためだけでなく、都心のオフィスビルの外部階段は、本来の機能とは別の使いこなし、『場所構築』がされている場合が多い。

注３）山本は、入学、就職、結婚・出産などのライフステージの変化に伴って個人を取り巻く環境が変化することを「人生移行」と呼び、発達心理学者の立場から考察を加えている（文 11）。

注４）本論文において、「残業」は、いわゆる時間外勤務を意味する。0 社当該部署の始業時間は 8 時 30 分であり、終業時間は 17 時 15 分である。したがって、昼食時間の 12 時～13 時を除いた 7 時間 45 分が定時の勤務時間であり、これ以外の勤務は時間外勤務となる。本論文では、アンケートで記入された 1 週間の平均勤務時間数から、7 時間 30 分を差し引いた数値を「残業時間」として取り扱っている。

参考文献

文１）Ray Oldenburg : The Great Good Place, MARLOWE&COMPANY NEW YORK,1999

文２）町村敬志・西澤晃彦：都市の社会学，有斐閣アルマ，2000 年

文３）高橋勇悦，他：21 世紀の都市社会学，学文社，2002 年

文４）磯村英一：都市社会学研究，有斐閣，1959 年

文５）鳴海邦碩，他：都市のリ・デザイン，pp. 141－145，学芸出版社，1999 年

文６）川喜田二郎；発想法，中公新書，1967 年
文７）川喜田二郎；続・発想法，中公新書，1970 年
文８）日本建築学会編：人間 - 環境系のデザイン，pp. 24－26，彰国社，1997 年
文９）佐藤将之，高橋鷹志：園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察～園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究　その１～，日本建築学会計画系論文集 第 562 号，PP151－156，2002 年
文 10）橘弘志，高橋鷹志：地域に展開される高齢者の行動環境に関する研究―大規模団地と既成市街地におけるケーススタディー，日本建築学会計画系論文集　第 496 号，pp. 89－95，1997 年
文 11）山本多喜司・Seymour Wapner　編・著：人生移行の発達心理学，北大路書房，1991 年
文 12）厳爽，石井敏，外山義，橘弘志，長澤泰：グループホームにおける空間利用の時系列的変化に関する考察　「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究（その 1），日本建築学会計画系論文集　第 523 号，pp. 155－161，1999 年
文 13）厳爽，石井敏，橘弘志，外山義，長澤泰：介護体制と入居者の生活構成の関わりに関する考察　「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究（その 2），日本建築学会計画系論文集　第 528 号，pp. 111－117，2000 年
文 14）外山義，厳爽，橘弘志，石井敏，長澤泰：入居者の空間利用の時系列的変化　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 1），日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年
文 15）橘弘志，厳爽，外山義，石井敏，長澤泰：介護体制が入居者の生活に与える影響　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 2），日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年
文 16）厳爽，石井敏，橘弘志，外山義，長澤泰：異なる環境におけるなじみの形態　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 3），日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年
文 17）外山義，厳爽，橘弘志，石井敏，長澤泰：なじみの定着とその様態　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 4），日本建築学会大会学術講演梗概集，1999 年
文 18）橘弘志，厳爽，外山義，石井敏，長澤泰：痴呆レベルと空間利用傾向の関わり　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 3），日本建築学会大会学術講演梗概集，1999 年
文 19）橘弘志，外山義，高橋鷹志：特別養護老人ホーム入居者の個人的領域形成と施設空間構成―個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究　その 2―，日本建築学会計画系論文集　第 523 号，pp. 163－169，1999 年

第５章　オフィスワーカーの生活圏に構築される『場所』

5.1. 本章の目的

前章までは、オフィスワーカーが構築する『場所』のうち、職場（セカンドプレイス）周囲に構築される『場所』をサードプレイスとして収集・考察した。また、職場周囲での生活に焦点を当てたので、オフィスワーカーの平日（勤務日）の生活に限定して研究を進めたと言える。しかし、オフィスワーカーにとっての生活は職場周囲に留まらず、自宅（ファーストプレイス）、自宅周囲、通勤経路である街路や電車等の交通施設、都市の中の様々な寄り道の場所、社外活動や地域活動、余暇活動・旅行など、生活圏全域に展開され、平日（勤務日）だけでなく休日も含まれる。

また、前章までは神田および品川という限定された地域に勤務オフィスを持つ 0 社当該部署に限定して調査・考察を行ったので、結果にはその集団特有の『場所構築』の傾向が含まれることも否めない。

以上のような考えから、本章ではオフィスワーカーの生活圏全域における『場所構築』を、さらに多数のオフィスワーカーから抽出することを試みる。前章同様、まずオフィスワーカーの生活圏にどのような『場所』が構築されているのかを明らかにし、それらの『場所』と自宅（ファーストプレイス）および職場（セカンドプレイス）との位置関係、『場所』を訪れる頻度、『場所』における滞在時間、『場所』に一緒に行く同伴者、などを考察し、オフィスワーカーの都市生活との関係をさぐる。

5.2. 調査対象・調査方法

本章では、オフィスワーカーの生活圏に構築される『場所』を、「居心地の良い場所（または「お気に入りの場所」）」という質問により収集する。既に 2.2.1. および 2.2.6. で述べたように、『場所』における「居心地の良さ」は、その都市の「住み心地の良さ」につながり、これら「居心地の良い場所」は、オフィスワーカーによって「居心地が良い」という意味を付与された空間でもある。

5.2.1. 調査対象

東京圏および大阪圏に居住・勤務するオフィスワーカーを対象として、「居心地の良い場所（または「お気に入りの場所」）」に関するアンケート調査を行った（平成 13 年 7 月～9 月に実施。）。配布は郵送および手渡しによって行い、記入が済み次第、郵送および手渡しによって回収した。記入する所や要する時間等は回答者の自由とした。

5.2.2. 調査方法

調査では、(1) 氏名、住所、現住所に至る居住履歴、などの個人属性を記入してもらい、(2) あなたにとっての「居心地の良い場所（または「お気に入りの場所」）」の名前とその場所の様子を自由記述により記入してもらった（表 5−1）。これらの『場所』は、自宅、職

表5−1　アンケート概要

番号	アンケート項目		回答形式	対応する データシートの項目
(1)	フェイスシート	・氏名・住所・電話(FAX)番号・E-mail Address・性別・年齢・職業・勤務先住所、現住所に至る居住履歴を記入。	自由記述	−
(2)	「居心地の良い場所（またはお気に入りの場所）」の名前とその場所の様子	・自宅、職場以外の場所を記入。 ・「場所は1〜4箇所まで、簡単な文章やイラストで自由に記述」と教示した。 ・「あなたが何をしているか」「周りの様子はこのようだった」等を記入するよう教示した。	自由記述	「場所の名前」 「場所の自由記述表現」
(3)	場所の位置	・自宅・職場・最寄駅・交通機関と場所の位置を略図によって記入。	略図	−
(4)	理由	・どうしてその場所が居心地が良いのかを記入。	自由記述	1. 理由
(5)	情報源	・どのようにしてその場所を知ったのかを記入。	自由記述	2. 情報源
(6)	同伴者	・誰と行くのかを記入。	自由記述	3. 同伴者
(7)	頻度	・どのくらいの頻度で行くのかを記入。	週・月・年単位の回数	4. 頻度
(8)	滞在時間	・1回の滞在時間はどのくらいなのかを記入。	分・時間・日数	5. 滞在時間
(9)	工夫・対処	・その場所をもっと居心地良くするための工夫・対処を記入。	自由記述	6. 工夫・対処

※1　網掛け：本章の考察対象としたアンケート項目

※2　アンケートには、当該都市圏のカラー地図(縮尺12万分の1、A3判)を添付した。

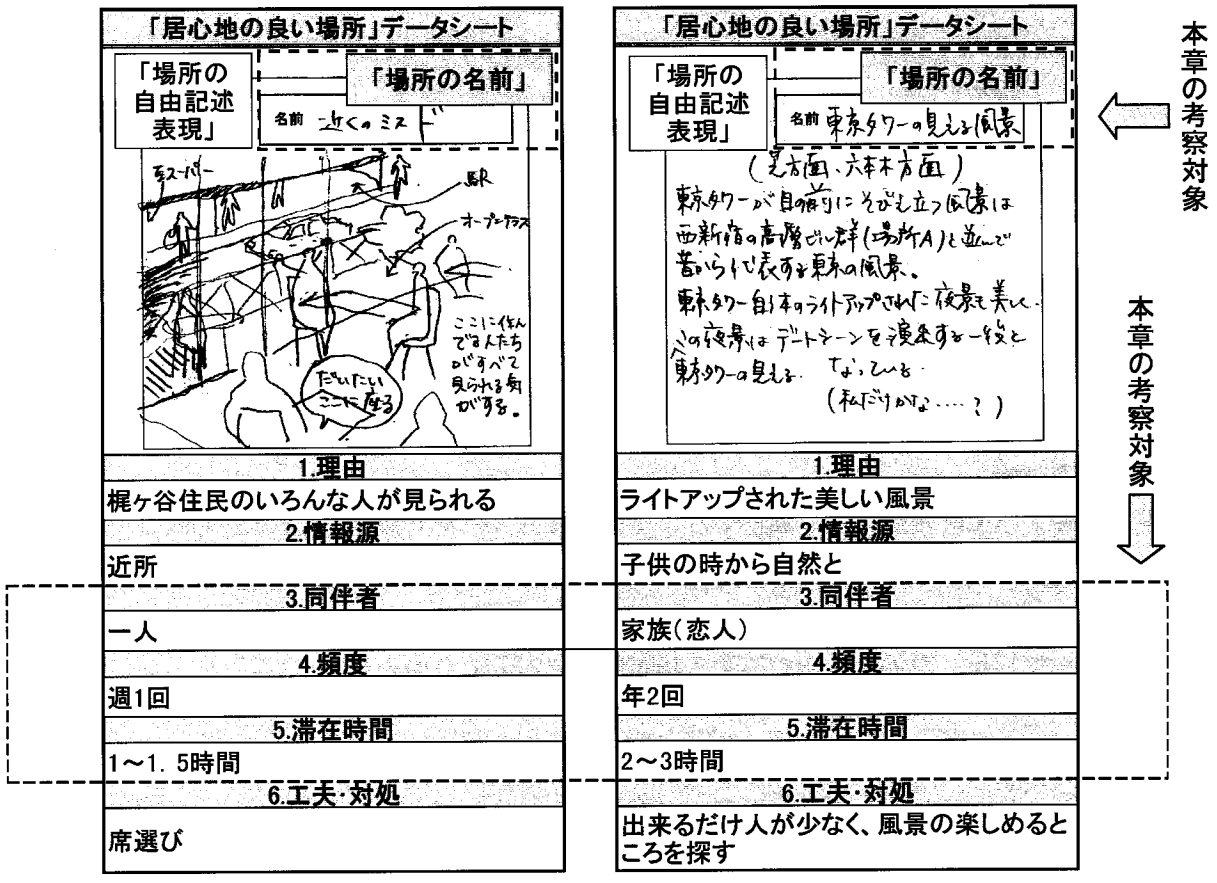


図5−1　「居心地の良い場所」のデータシート

場以外の『場所』とし、1個所から4個所までの数とした。また、(3)「居心地の良い場所」の位置を記入してもらい、自宅・職場との位置関係、訪れる際の交通手段を書きこんでもらった。さらに、「居心地の良い場所」について (4) 居心地が良い理由、(5) 情報源、(6) 同伴者、(7) 頻度、(8) 滞在時間、(9) 工夫・対処などを記入してもらった (表5−1)。調査協力者が「居心地の良い場所」を思い出しやすくするため、アンケートには当該都市圏のカラー地図 (縮尺12万分の1) を貼付した。

5.3. 調査結果と考察

5.3.1. 考察の方法

アンケートは、東京圏・大阪圏で合計287名に配布し、154名 (東京圏100名、大阪圏54名) から回答があった (表5−2)。本調査は、職場 (セカンドプレイス) を持つオフィスワーカーを対象としたので、得られた回答のうち、「自営業」「主婦」「無職」「不明」の職業を除いた「会社員」「公務員」「その他」を考察対象とした (表5−3)。その結果、東京圏90名、大阪圏47名、計137名が考察対象者となった (表5-4)。これらの考察対象者の年齢構成、家族構成、自宅・職場の住所は、それぞれ表5−2、表5−3、表5−4の通りである。年齢は両都市圏・男女とも30代前半が最も多く、次いで20代後半となり、比較的若年のオフィスワーカーが対象となっている。これは、既に3.3.1.で述べた、「比較的若年のオフィスワーカーの方が『場所構築』が活発であろう」との予測によるものである。家族構成は、既婚者・未婚者が東京圏ではほぼ半数づつとなったが、大阪圏では6:4の割合で未婚者が多かった。さらに、両都市圏とも、職場は都市圏の中心 (都心) である東京都・大阪府に位置し、自宅住所も東京都・大阪府に位置する対象者が多かった。

それらの考察対象者の「居心地の良い場所」は、東京圏で307個所、大阪圏で147ヶ所となり、合計454箇所となった。本論文においては、得られた『場所』をできるだけ一体的に扱うという意図から、考察に先だち、「居心地の良い場所」のデータシートを作成した (図5−1)。このうち、本章では「場所の名前」、「3.同伴者」「4.頻度」、「5.滞在時間」を主な考察対象とし、どんな『場所』かを知る上で「場所の自由記述表現」を補助的に参照する。また、アンケートで記入された (3) 場所の位置 (表5−1) からは、「居心地の良い場所」が、生活圏のどの位置に構築されているかを考察した。

表5−2　アンケート配布・回収概要

	配布	回収	回収率
東京圏	194	100	52%
大阪圏	93	54	58%
合計(平均)	287	154	54%

表5−3　アンケート回答者の職業構成

	会社員	公務員	自営業	主婦	無職	その他	不明	合計
東京圏	86	0	1	5	1	4	3	100
	86%	0%	1%	5%	1%	4%	3%	100%
大阪圏	43	3	3	2	1	1	1	54
	80%	6%	6%	4%	2%	2%	2%	100%
合計	129	3	4	7	2	5	4	154
平均	84%	2%	3%	5%	1%	3%	3%	100%

表5−4　考察対象者

	会社員	公務員	その他	合計
東京圏	86	0	4	90
	86%	0%	4%	100%
大阪圏	43	3	1	47
	80%	6%	2%	100%
合計	129	3	5	137
平均	84%	2%	3%	100%

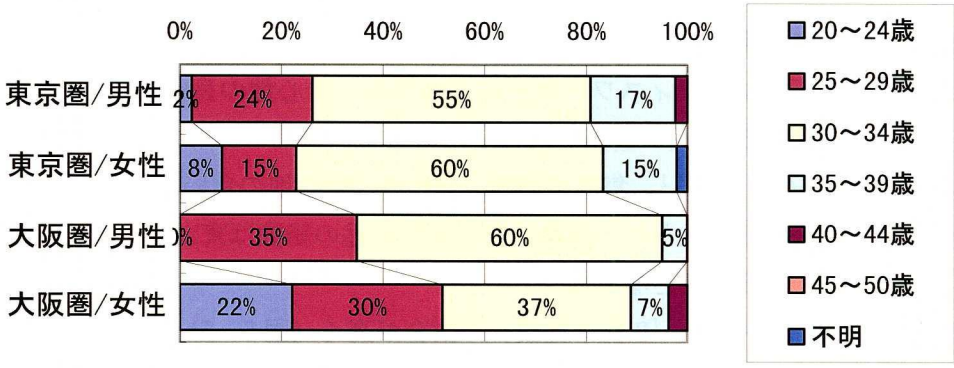


図５－２　考察対象者の年齢構成

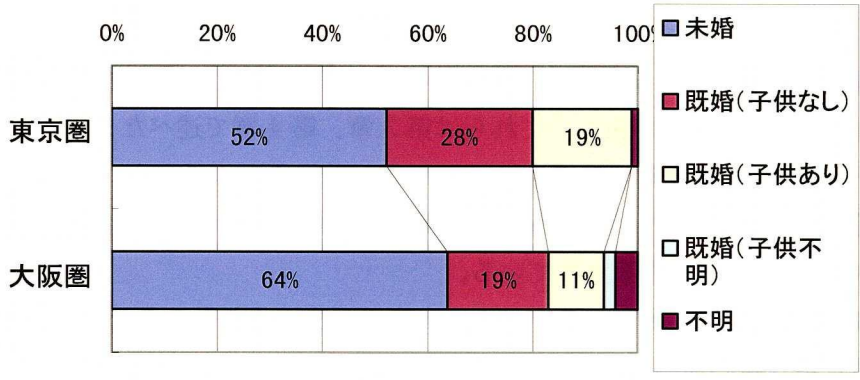


図５－３　考察対象者の家族構成

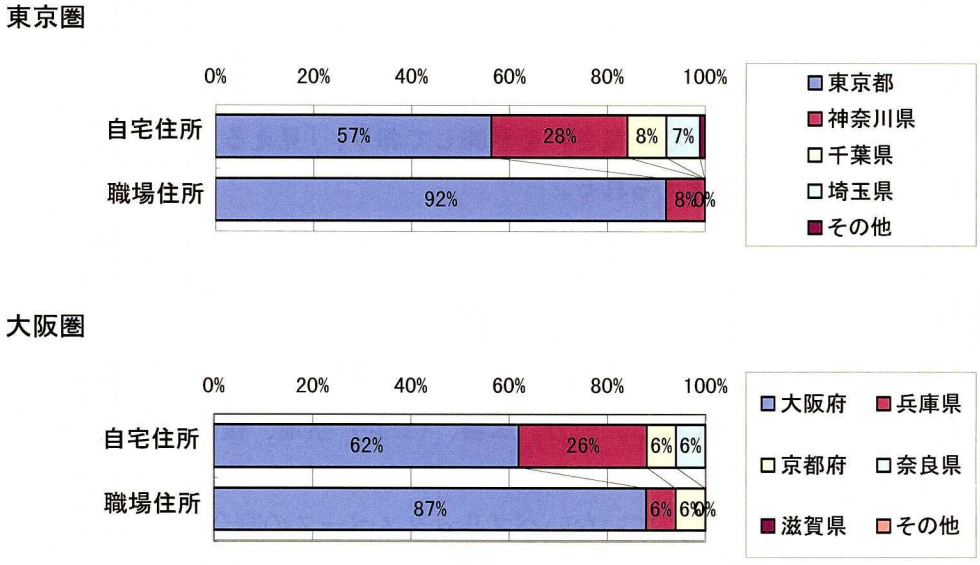


図５－４　考察対象者の自宅および職場の住所

5.3.2. 建築・都市施設用途から見た「居心地の良い場所」

どのような『場所』がオフィスワーカーにとっての「居心地の良い場所」として構築されているのかを把握するため、「場所の名前」に着目し、建築・都市施設用途毎の分類を行い、図5−5、図5−6を得た[注1]。集計の結果、一つの「居心地の良い場所」に複数の建築・都市施設用途を含む場合も見られ、建築・都市施設用途の総数は東京圏で 315 ヶ所、大阪圏で151ヶ所、合計466ヶ所となった。

「A建築物・施設」、および「B都市施設」の割合が高く（図5-5)、特定のサービスや機能を持つ建築物や都市施設などを物理的に整備することは、「居心地の良い場所」の構築に対して一定の役割を担っていることがうかがえる。さらに、「C 自然」も重要な「居心地の良い場所」としての役割があり、数は少ないが、景観や景色などの「D 風景」、自動車の中や電車の中などの「E移動空間」も「居心地の良い場所」として構築されていることがわかった。

「A建築物」では、カフェ、レストラン等の「A3飲食店」や、「A2居酒屋・酒場・バー」、「A6専門物販店」の割合が多く、これらは第3章、第4章で述べたように、職場周囲においてはサードプレイスとして構築されていたが、職場周囲以外でも「居心地の良い場所」として構築されていることがわかる。「A10美術館・博物館」「A14教会・神社・寺院」も「居心地の良い場所」として構築されている。

「B 都市施設」では、オフィスワーカー自身が「歩きまわる」ことを意味する「B2 道」や「B6 街」が「居心地の良い場所」として挙げられ、ここでも歩きまわりと『場所構築』の相補的関係がうかがえる。特に、「B6街」は、ある程度のエリア的な広がりを有する領域が「居心地の良い場所」として構築されており、ある地点に定位した静的な様子ではなく、領域の中を歩きまわる動的な様子が示されている。また、街での活動も複数挙げられることが多い。「B4公園」は、代表的な都市のパブリックスペースであり、オフィスワーカーによる使いこなしが行われている。

「D風景」は、その『場所』に居る「心地良さ」よりも、魅力的な視対象（景色や街並み、人など）が見えることによる「心地良さ」を意味しており、「見える」ことが『場所構築』の大きな要因となっていると考えられる。

「パブリックスペース」および「無料の場所」は、図5-6を見ても「居心地の良い場所」に高い割合で含まれており、「B都市施設」「C自然」「D風景」は、それらの公開性・公共性の程度が「居心地の良い場所」の構築と深く関係していると考えられる。また、「E2電車の中」もパブリックスペースであるが、狭い領域の空間であり、『場所』に居合せる他の人の公共性やモラルに深く関わっている。一方、広場、（公共）空地、複合用途開発、リゾート開発等、計画的に整備されたパブリックスペースの割合は少なく、むしろ街、水辺、川辺・海岸、森・林・丘など、計画されていないパブリックスペースの割合が多い。第 3 章でも述べたように、これらオフィスワーカーの「居心地の良い場所」の候補と考えられるパブリックスペースでありながら、「居心地の良い場所」として構築されにくいパブリックスペ

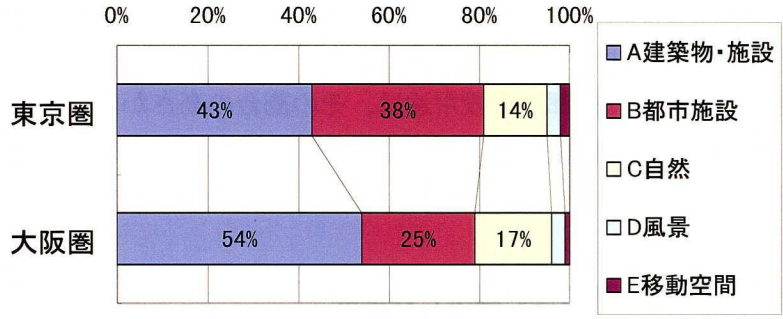
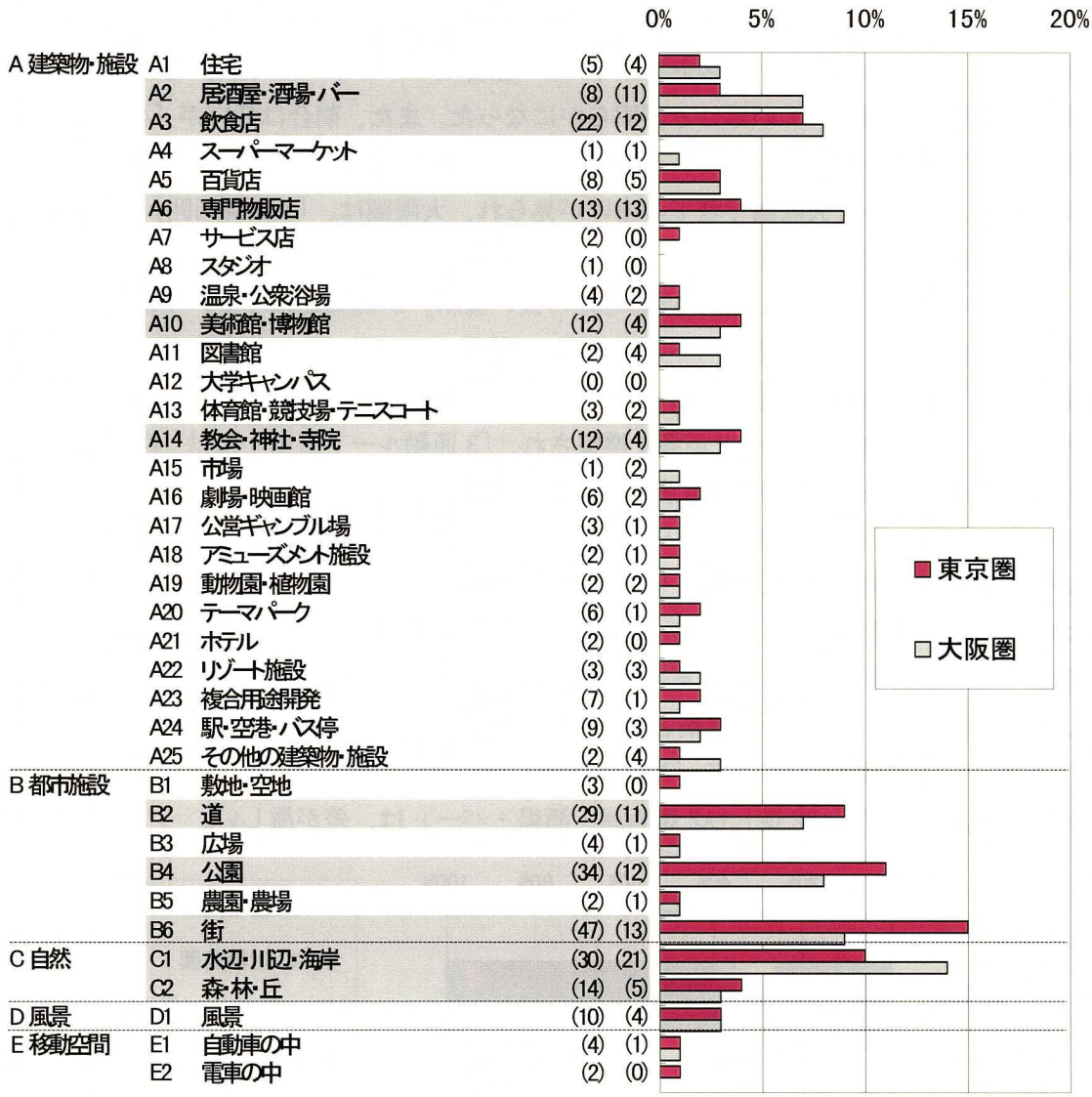


図５－５　「居心地の良い場所」の建築・都市施設用途-1



注 1)　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた建築・都市施設用途の数。
注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた建築・都市施設用途の総数（東京圏 315、大阪圏 151）に対する割合を示す。

図５－６　「居心地の良い場所」の建築・都市施設用途-2

ースの存在も明らかになった。

図 5 - 6 の網掛けされた建築･都市施設用途は、その割合の高さから、代表的な「居心地の良い場所」と考えられる。本章では、これら代表的な「居心地の良い場所」を中心に考察を進める。

5. 3. 3. 生活圏における「居心地の良い場所」の位置

表 5－1 のアンケート項目 (3) で記入された「場所の位置」を示す略図を考察した結果、「居心地の良い場所」は、「1 自宅周囲」「3 通勤ルート近傍」「5 生活圏内のその他」に構築されていることがわかった（図 5 - 7)。これらは、「居心地の良い場所」が構築されやすい生活圏上の位置と言うことができる。中でも「5 その他の生活圏」が最も多く、「居心地の良い場所」は、自宅（ファーストプレイス）・職場（セカンドプレイス）とは全く違う生活圏上の位置に構築されていることが明らかになった。また、割合は低いが「4 実家および実家周囲」も「居心地の良い場所」として構築されている。「居心地の良い場所」の生活圏上の位置は、東京圏と大阪圏で若干の違いが見られ、大阪圏は、「2 職場周囲」「3 通勤ルート近傍」の割合が東京圏に比べて高くなっている。

図 5 - 8～図 5 - 10 は、上述の「居心地の良い場所」が構築されやすい生活圏上の位置である「1 自宅周囲」「3 通勤ルート近傍」「5 生活圏のその他」に構築される「居心地の良い場所」の建築・都市施設を示したものである。「1 自宅周囲」には、「B4 公園」「B2 道」「A3 飲食店」「C2 森・林・丘」などが多く構築され、「3 通勤ルート近傍」には「C1 水辺・川辺・海岸」「A6 専門物販店」「A5 百貨店」「B6 街」「B2 道」などが多く構築され、「5 生活圏内のその他」には、「B6 街」「B2 道」「B4 公園」「C1 水辺・川辺・海岸」などが多く構築されている。中でも特徴的であるのが、「B2 道」はこれら『場所構築』されやすい生活圏上の位置の全てで高い割合を示し、「B6 街」「C1 水辺・川辺・海岸」は「1 自宅周囲」以外の２つの位置で高い割合を示している。東京圏と大阪圏で若干の差が見られ、特に「1 自宅周囲」および「3 通勤ルート近傍」に構築される建築・都市施設用途は、両地域で異なっており、とりわけ「1 自宅周囲」における「A11 図書館」「B6 街」、「3 通勤ルート近傍」における「C1 水辺・川辺・海岸」「B2 道」「A2 居酒屋・酒場・バー」は、差が激しい。

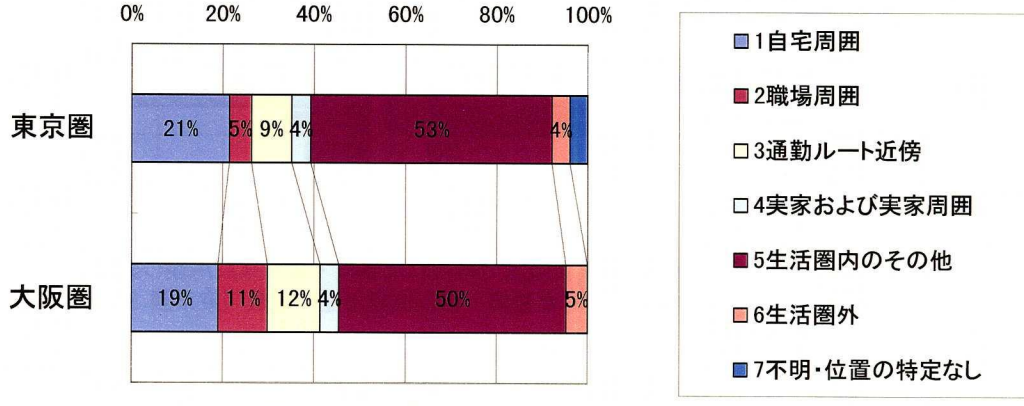
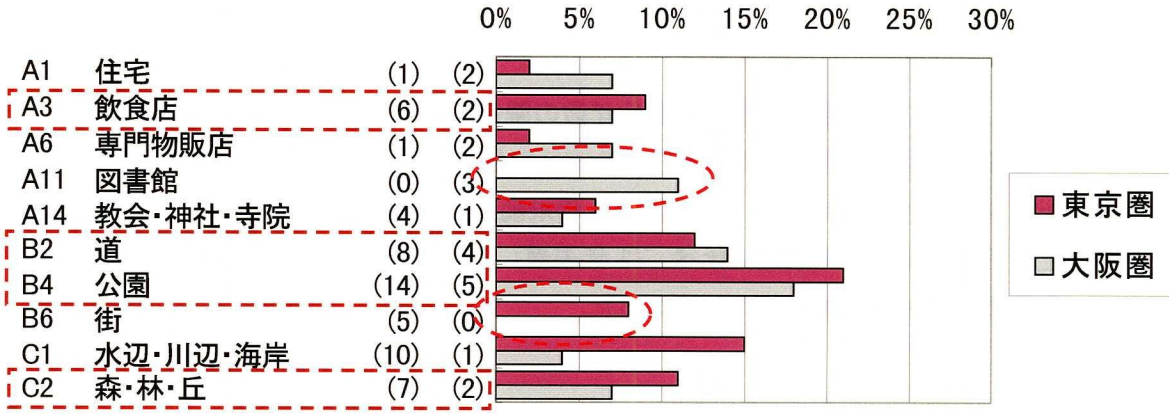


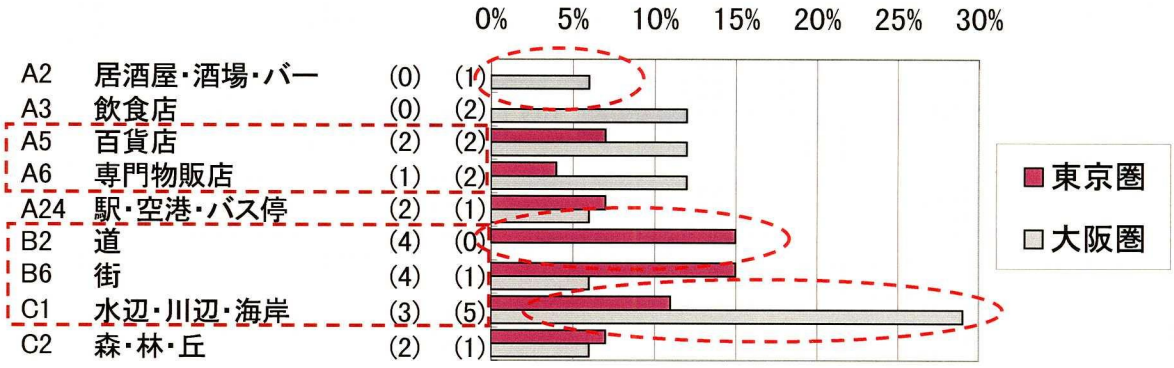
図 5－7　「居心地の良い場所」の位置



注 1)　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で自宅周囲に構築された建築・都市施設用途の数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で自宅周囲に構築された建築・都市施設用途の総数に対する割合を示す。

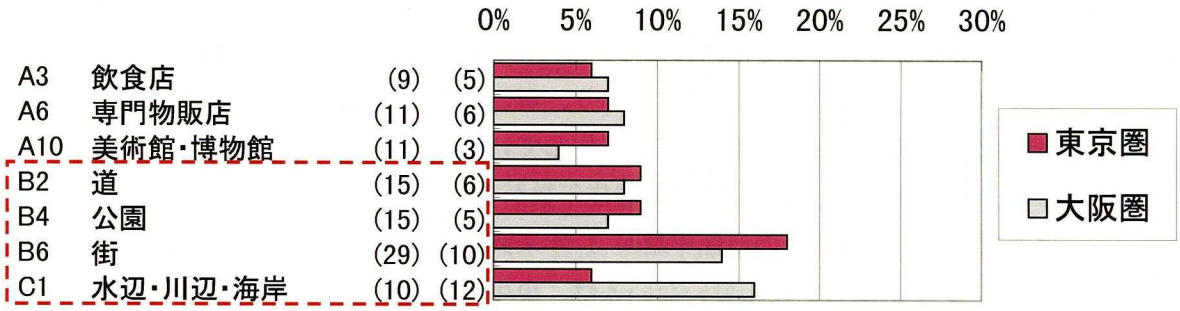
図 5－8　「1 自宅周囲」に構築される「居心地の良い場所」の建築・都市施設用途



注 1)　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で通勤ルート近傍に構築された建築・都市施設用途の数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で通勤ルート近傍に構築された建築・都市施設用途の総数に対する割合を示す。

図 5－9　「3 通勤ルート近傍」に構築される「居心地の良い場所」の建築・都市施設用途



注 1)　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏でその他の生活圏内に構築された建築・都市施設用途の数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏でその他の生活圏内に構築された建築・都市施設用途の総数に対する割合を示す。

図 5－10　「5 その他の生活圏内」に構築される「居心地の良い場所」の建築・都市施設用途

5.3.4.「居心地の良い場所」と居住年数の関係

図5-11は、考察対象者の現住所の市区町村での居住年数を示したものである。「10年以上」「4年以上10年未満」「1年以上4年未満」「1年未満」の4タイプに分類して集計したところ、大阪圏は東京圏に比べ、「1年未満」の新規居住者、および「10年以上」の長期居住者の割合が東京圏に比べて高かった。

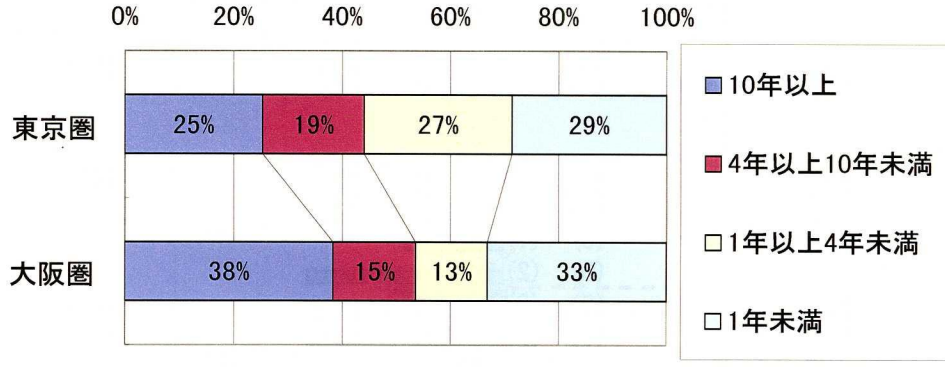


図5−11　現住所の市区町村での居住年数

図5-12、図5−13は、東京圏・大阪圏それぞれの都市圏において、図5-11で用いた4タイプの居住年数別考察対象者の、現生活圏での居住年数、および現生活圏以外での居住年数を示したものである。ここで、現生活圏とは、図5-4における東京圏の1都3県、大阪圏の2府3県を指し、この圏域以外での居住年数を、現生活圏以外の居住年数として集計した。東京圏・大阪圏とも、現住所の市区町村における居住年数は、現生活圏での居住年数に対応して長くなる傾向にある。また、現住所の市区町村に4年以上住んでいる人は、概ね10年以上現生活圏に居住しており、現住所の市区町村に1年未満しか住んでいない人も半数以上が現生活圏に10年以上居住している。さらに、現生活圏以外での居住年数を見ると、東京圏は現生活圏以外での居住年数が10年以上ある人がほとんどであるが、大阪圏は逆に現生活圏以外での居住年数が1年未満の人がほとんどである。しかし、現住所の市町村に4年未満しか住んでいない人は、現生活圏以外で10年以上の居住年数を持つ人が25%ほどおり、本調査の考察対象の居住年数は、大阪圏においては二極化していると言える。

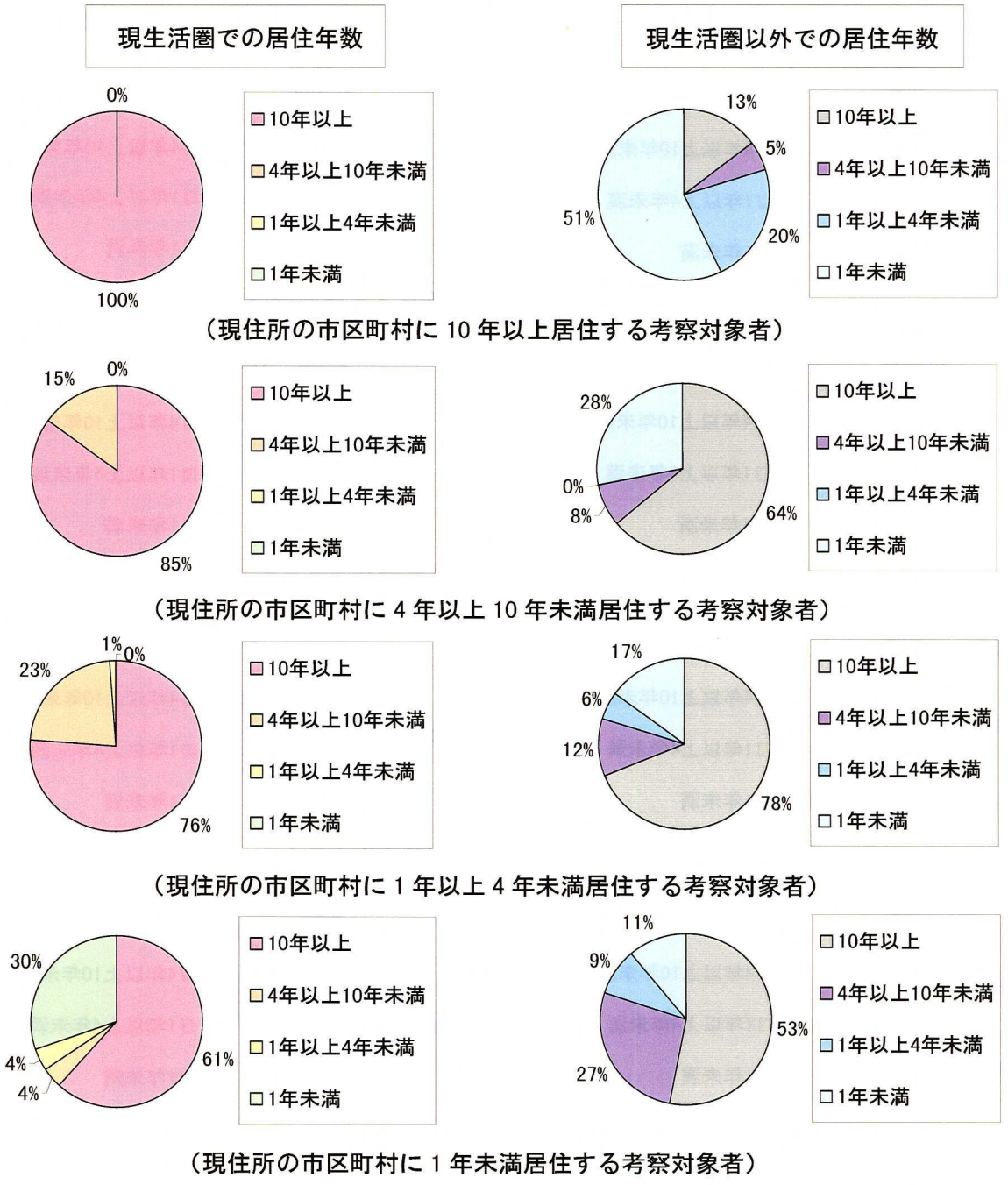


図 5－12　現生活圏での居住年数および現生活圏以外での居住年数（東京圏）

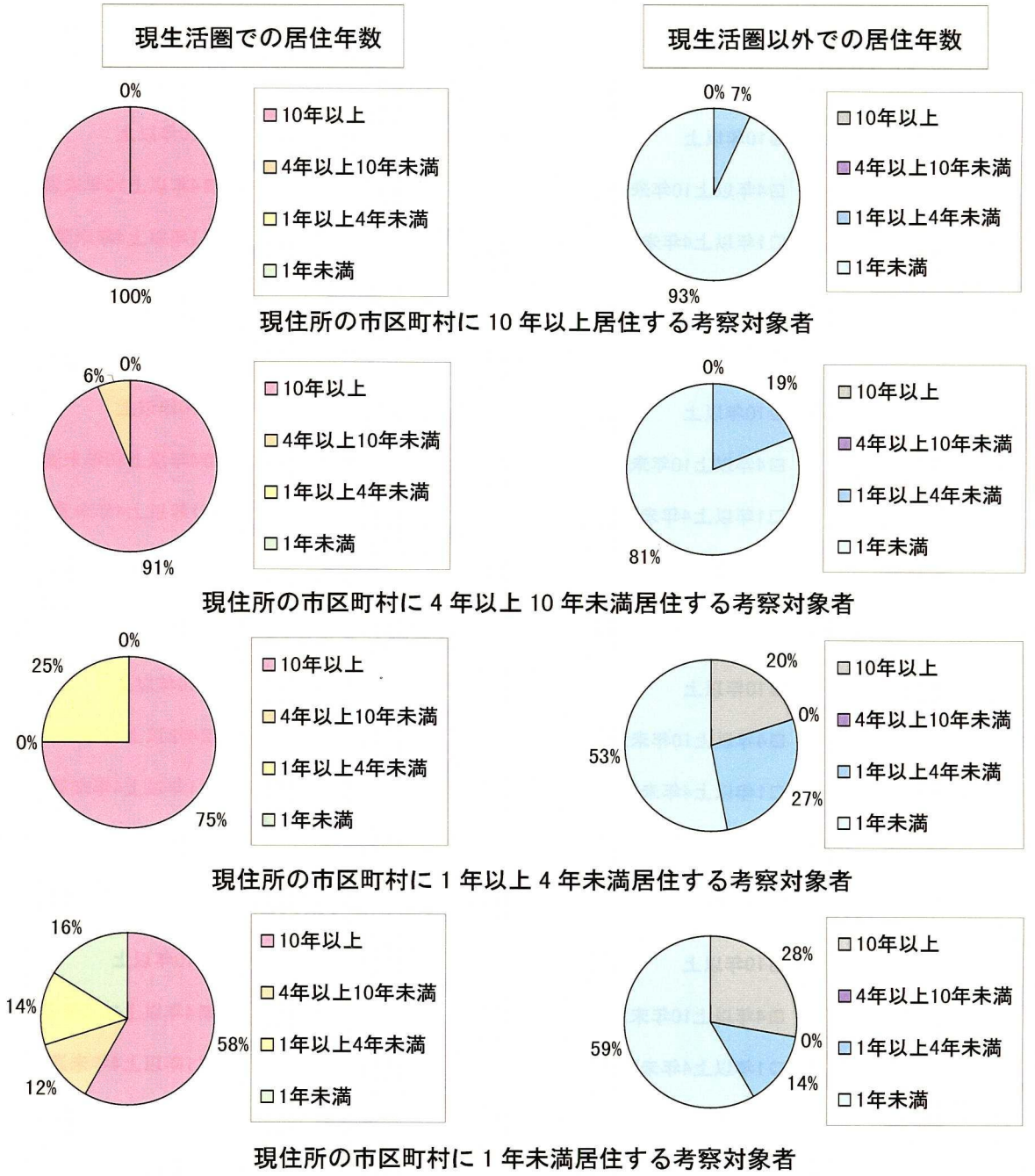


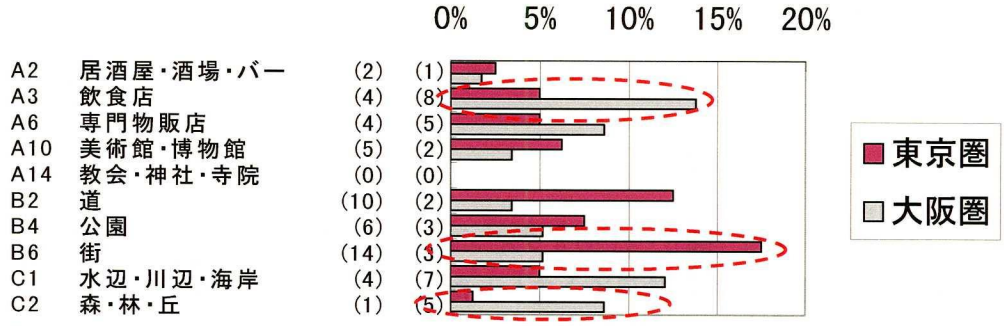
図 5－13　現生活圏での居住年数および現生活圏以外での居住年数（大阪圏）

図5－14～図5－17は、図5－11の4タイプの居住年数別考察対象者が構築する「居心地の良い場所」の建築・都市施設用途を表わしたものである。タイプ別に見るとあまり差がないが、両都市圏の間で構築される建築・都市施設用途のばらつきがある。例えば、居住年数「1年未満」のタイプでは、「A2居酒屋・酒場・バー」「C2森・林・丘」などで差が激しく、居住年数「1年以上4年未満」のタイプでは、「B4公園」「C1水辺・川辺・海岸」「C2森・林・丘」などで差が激しい。居住年数「4年以上10年未満」のタイプは、あまり差が無いが、居住年数「10年以上」のタイプでは「A3飲食店」「B6街」「C2森・林・丘」などで差が激しくなっている。

これらを総合して見ると、生活圏に構築される「居心地の良い場所」の建築・都市施設用途は、現住所の市区町村における居住年数によって一様に左右されると考えるよりも、その都市圏での生活が反映されたものであると見ることができる。つまり、東京圏での10年の居住年数と大阪圏での10年の居住年数では、構築される「居心地の良い場所」が自ずと違い、両都市圏での『場所構築』の特徴を示していると考えられる。

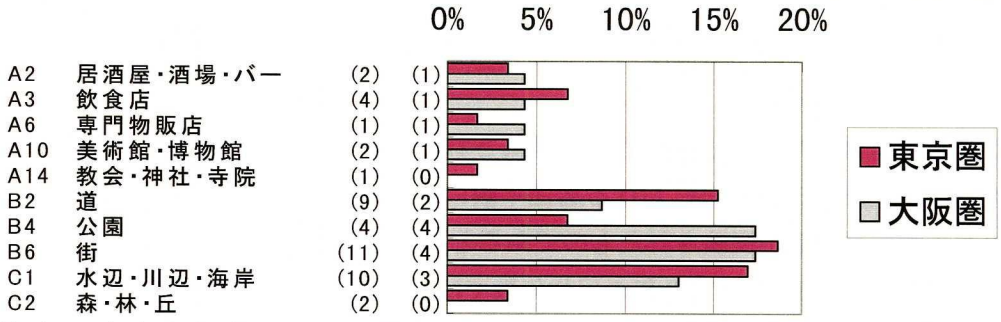
図5－18は、居住年数別に見た「居心地の良い場所」の位置を示している。最も居住年数の少ない「1年未満」のオフィスワーカーは、「1自宅周囲」、「4実家および実家周囲」、「6生活圏外」に「居心地の良い場所」を構築する割合が高い。逆に、最も居住年数の多い「10年以上」のオフィスワーカーは、「5生活圏内のその他」に「居心地の良い場所」を構築する割合が高い。さらに、「1年以上4年未満」のオフィスワーカーは、「2職場周囲」、「3通勤ルート近傍」で「居心地の良い場所」構築の割合が高いのが特徴である。

これらの結果を見ると、「3通勤ルート近傍」「5生活圏内のその他」は、居住年数に対応して『場所構築』の割合が高くなる傾向があるが、「1自宅周囲」「4実家および実家周囲」「6生活圏外」は、逆に『場所構築』の割合が低くなる傾向がある。「2職場周囲」「3通勤ルート近傍」での『場所構築』は、1年以上4年未満までは居住年数に対応して『場所構築』の割合が高くなる傾向があるが、それ以上居住年数が増えると逆に『場所構築』の割合は下がる方向へ転じる。居住年数が長い方が「5生活圏内のその他」に「居心地の良い場所」が構築されやすく、居住年数の短い方が「1自宅周囲」「4実家および実家周囲」「6生活圏外」に「居心地の良い場所」が構築されやすいこと、さらに、居住年数1年以上経過した方が「3通勤ルート近傍」に「居心地の良い場所」が構築されやすいことなどが明らかになった。



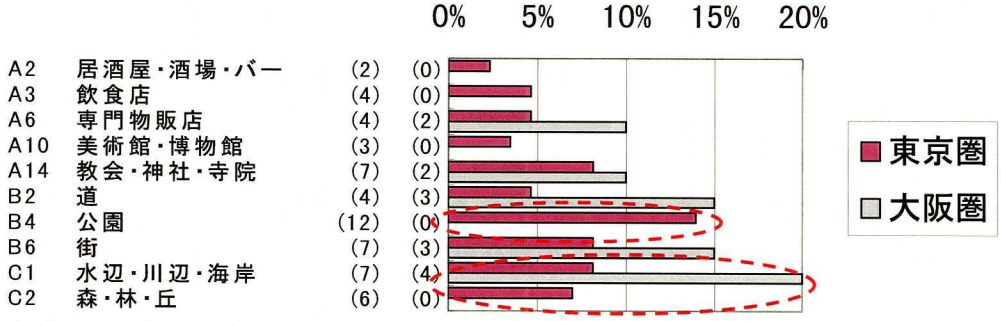
注 1)　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で構築された建築・都市施設用途の数。
注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた居住歴 10 年以上の協力者によって構築された建築・都市施設用途の総数に対する割合を示す。

図 5－14　居住年数 10 年以上の協力者によって構築される場所の建築・都市施設用途



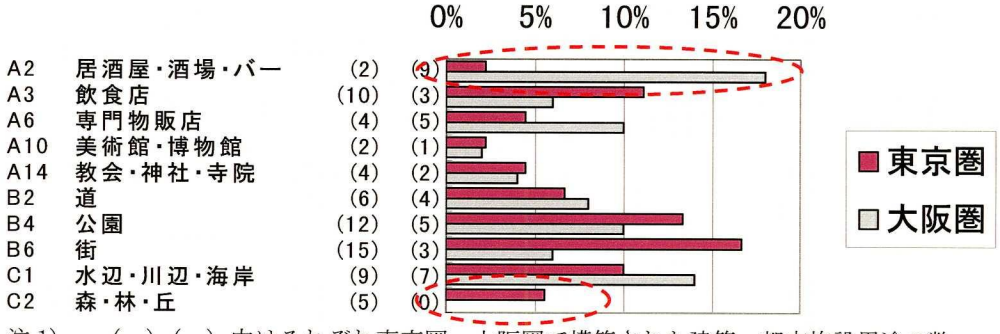
注 1)　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で構築された建築・都市施設用途の数。
注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた居住歴 4 年以上 10 年未満の協力者によって構築された建築・都市施設用途の総数に対する割合を示す。

図 5－15　居住年数 4 年以上 10 年未満の協力者によって構築される場所の建築・都市施設用途



注 1)　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で構築された建築・都市施設用途の数。
注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた居住歴 1 年以上 4 年未満の協力者によって構築された建築・都市施設用途の総数に対する割合を示す。

図 5－16　居住年数 1 年以上 4 年未満の協力者によって構築される場所の建築・都市施設用途



注 1)　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で構築された建築・都市施設用途の数。
注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた居住歴 1 年未満の協力者によって構築された建築・都市施設用途の総数に対する割合を示す。

図 5－17　居住年数 1 年未満の協力者によって構築される場所の建築・都市施設用途

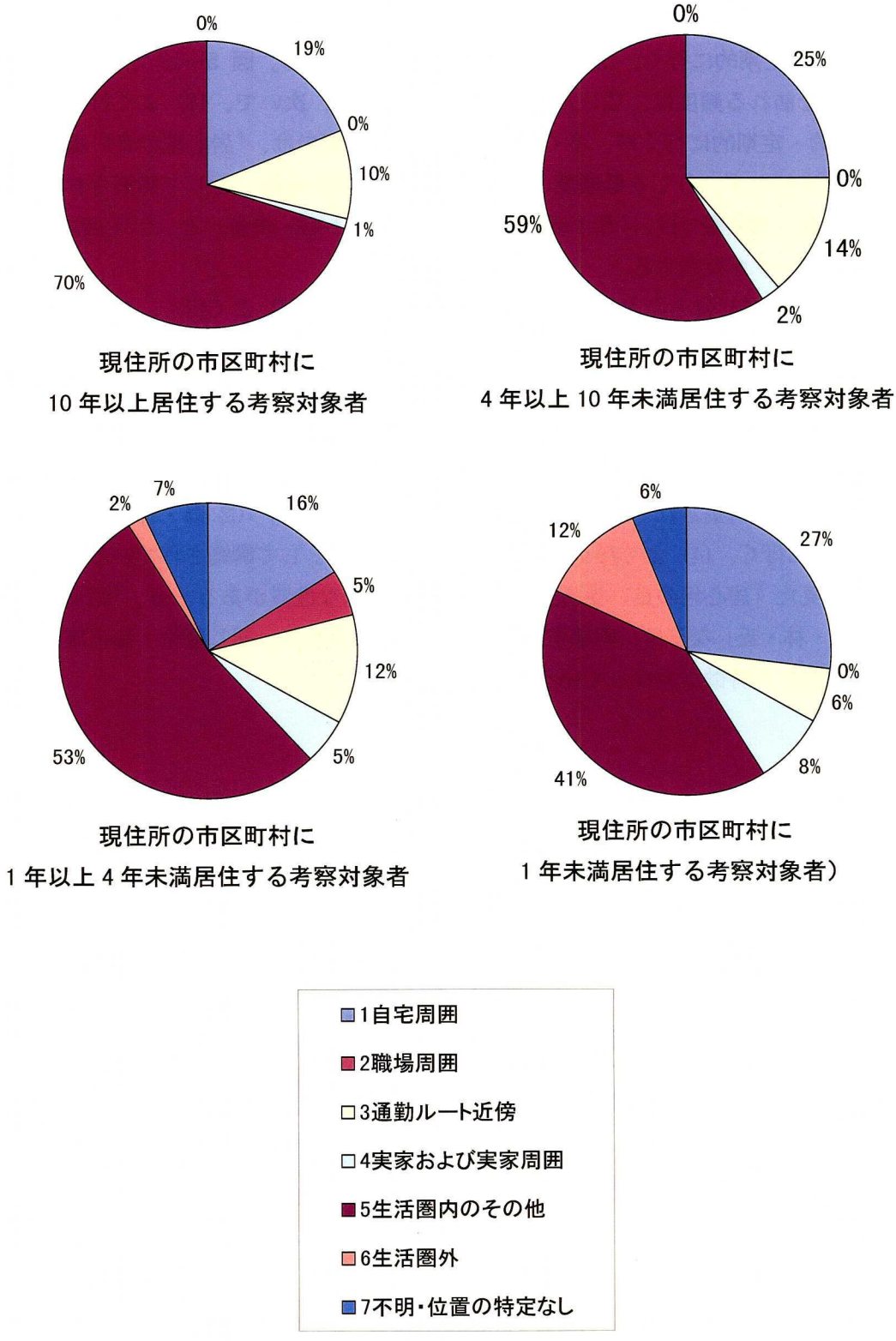


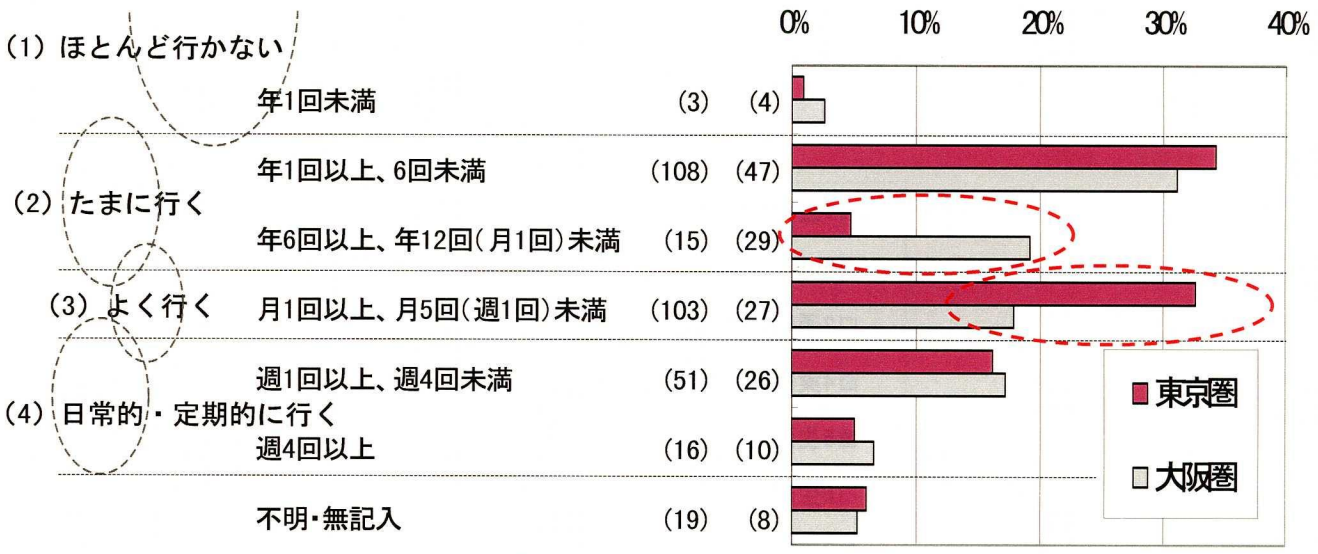
図 5－18　居住年数別に見た「居心地の良い場所」の位置

5.3.5.「居心地の良い場所」を訪れる頻度

図5－19は、「居心地の良い場所」を訪れる頻度を、グラフの縦軸の頻度範囲別に集計したもので、それらの頻度範囲は（1）ほとんど行かない、（2）たまに行く、（3）よく行く、（4）日常的・定期的に行く、などと表現できると考えられる。図5－19から、「居心地の良い場所」を訪れる頻度は、（2）たまに行くが最も多く、次いで、（3）よく行く、および（4）日常的・定期的に行くが、多くなっている。大阪圏では、「居心地の良い場所」にはあまり頻繁に行かず、むしろ低頻度の方が「居心地の良い場所」として構築されるという関係があるが、東京圏では、「月1回以上、月5回（週1回）未満」と「年1回以上、年6回未満」にピークが存在する。

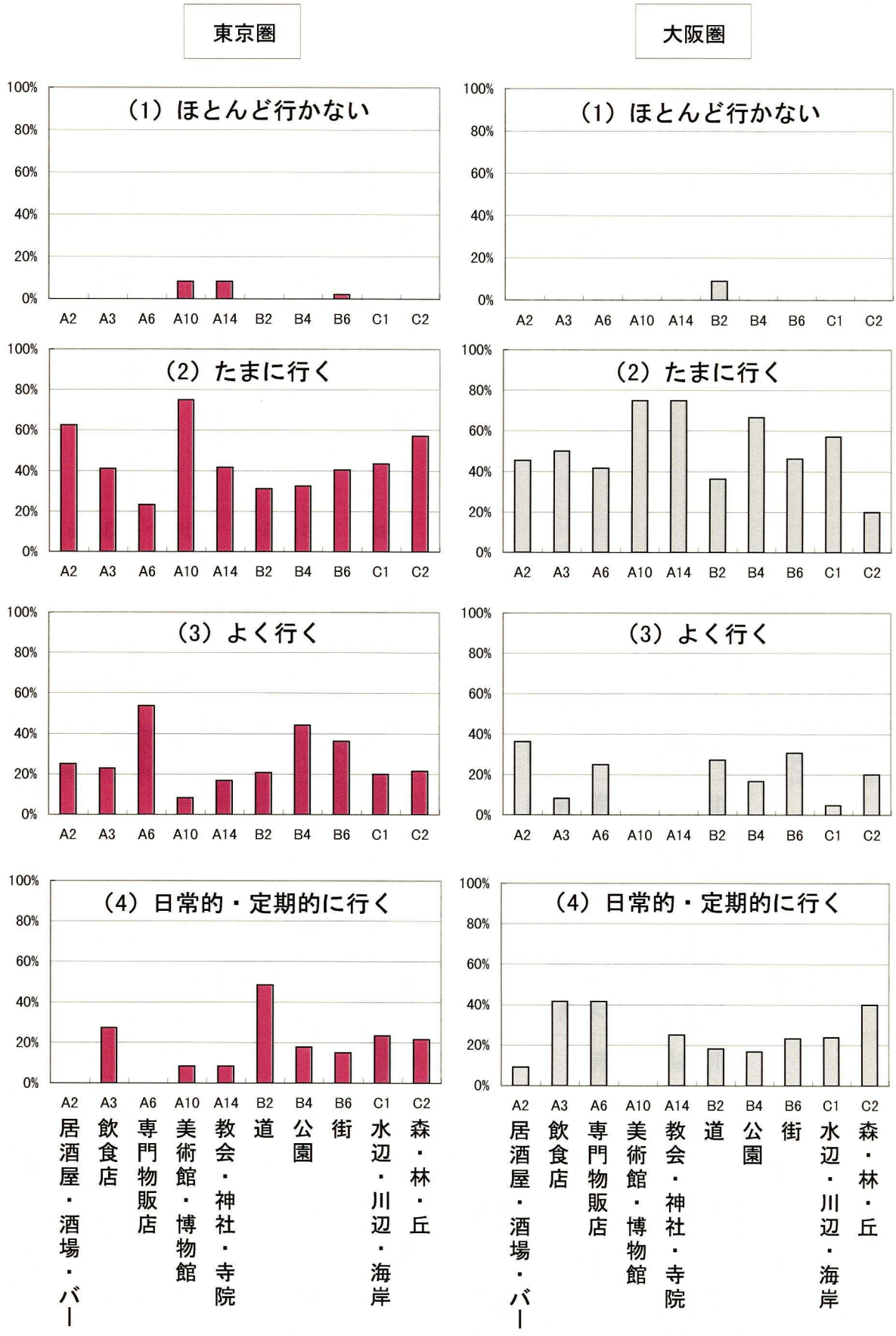
図5－20は、（1）ほとんど行かない、（2）たまに行く、（3）よく行く、（4）日常的・定期的に行く、のそれぞれの頻度に対して、どの代表的な「居心地の良い場所」が対応するかを表わしている。両地域において、「A10 美術館・博物館」「A14 教会・神社・寺院」「A2 居酒屋・酒場・バー」「C1 水辺・川辺・海岸」は、（2）たまに行く「居心地の良い場所」として構築されており、東京圏において「B2 道」は、（4）日常的・定期的に行く「居心地の良い場所」として構築されており、大阪圏において「B4 公園」「C2 森・林・丘」はそれぞれ（2）たまに行く、（4）よく行く「居心地の良い場所」として構築されている。

頻度から見た「居心地の良い場所」は、両地域に共通な性質がある一方、「B2 道」「B4 公園」「C2 森・林・丘」などは、両都市圏の間で頻度の差があり、同じ建築・都市施設用途でも『場所構築』の特徴が異なっていると考えられる。



注1）　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で構築された建築・都市施設用途の数。
注2）　グラフは、東京圏・大阪圏で構築された建築・都市施設用途の総数（東京圏315、大阪圏151）に対する割合を示す。

図5－19　「居心地の良い場所」を訪れる頻度

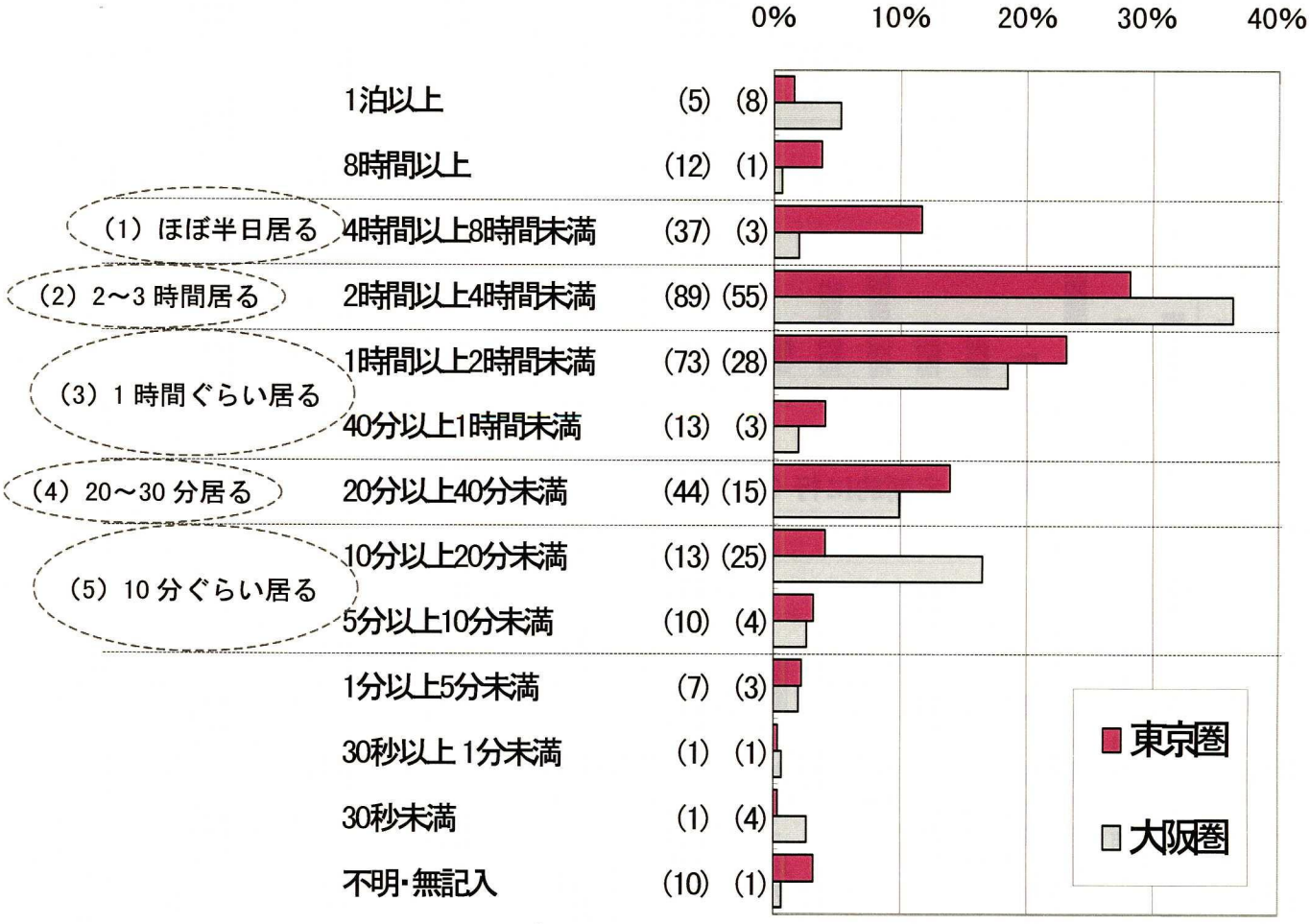


注） グラフは、東京圏・大阪圏で構築された、それぞれの建築・都市施設用途の数（図5－6（P97）参照）に対する割合を示す。

図5－20 「居心地の良い場所」の建築・都市施設と頻度

5.3.6.「居心地の良い場所」における滞在時間

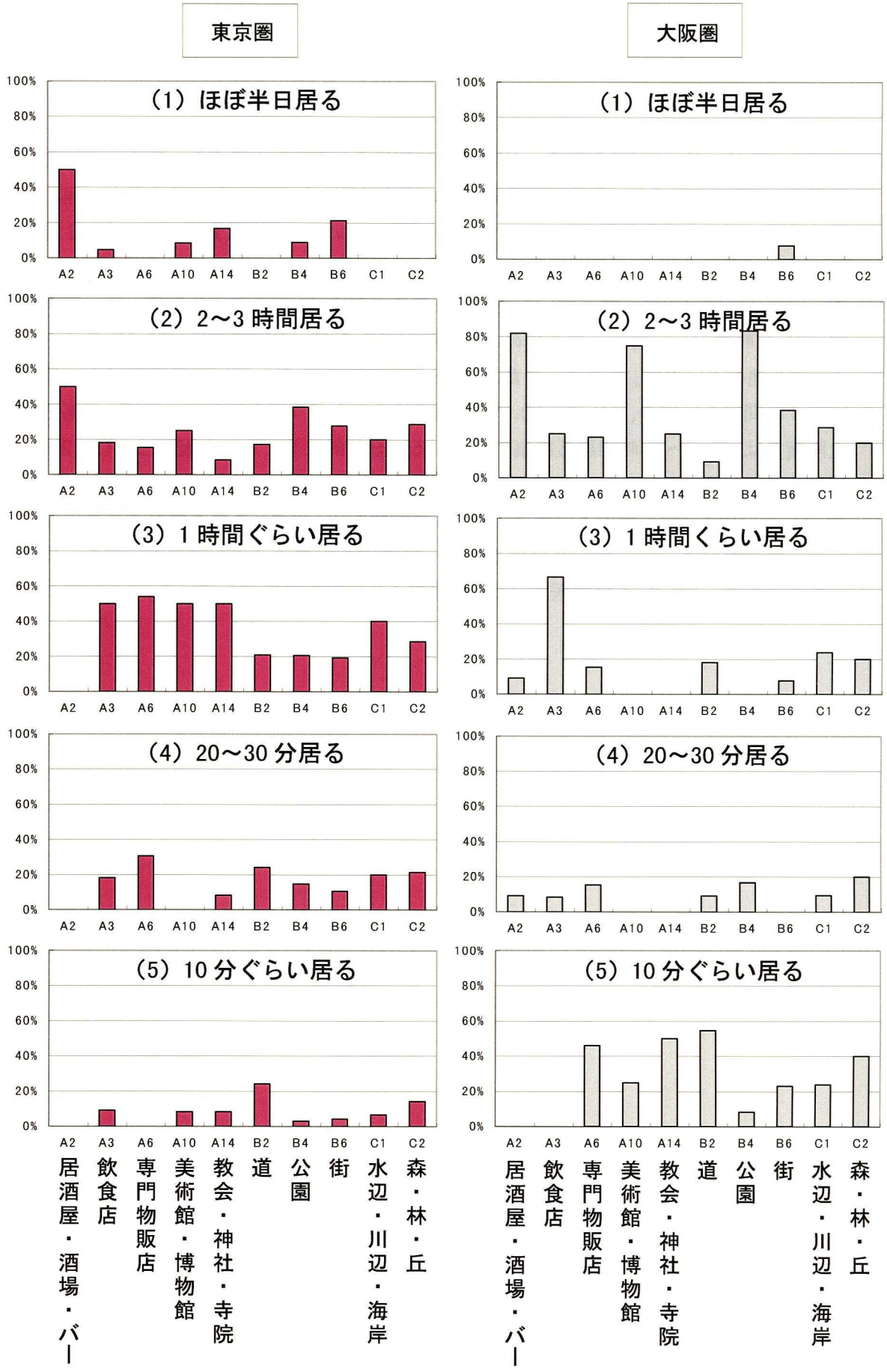
図5－21は、「居心地の良い場所」における滞在時間を、グラフの縦軸の時間範囲別に集計したもので、それらの時間範囲は（1）ほぼ半日居る、（2）2～3時間居る、（3）1時間ぐらい居る、（4）20～30分居る、（5）10分ぐらい居る、などと表現できると考えられる。図5－21から、「居心地の良い場所」における滞在時間は、（2）2～3時間居るが最も多く、次いで、（3）1時間ぐらい居る、（4）20～30分居るが多くなっている。「居心地の良い場所」における滞在時間は、両都市圏ともピークが二つあり、東京圏は（2）2～3時間居ると（4）20～30分居る、大阪圏は（2）2～3時間居ると（5）10分ぐらい居るが多くなっている。



注1）　（　）（　）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で構築された建築・都市施設用途の数。
注2）　グラフは、東京圏・大阪圏で構築された、それぞれの建築・都市施設用途の数（図5－6（P97）参照）に対する割合を示す。

図5－21　「居心地の良い場所」における滞在時間

図5－22は、1）ほぼ半日居る、(2) 2～3時間居る、(3) 1時間ぐらい居る、(4) 20～30分居る、(5) 10 分ぐらい居る、のそれぞれの滞在時間に対して、どの代表的な「居心地の良い場所」が対応するかを表わしている。両地域において、「A3飲食店」は、(3) 1時間ぐらい居る「居心地の良い場所」として構築されているが、他の代表的な「居心地のよい場所」の滞在時間は両都市圏において差が見られる。例えば、「A6専門物販店」は、東京圏では (3) 1 時間ぐらい居る「居心地のよい場所」であるが、大阪圏では (5) 10 分くらい居る「居心地のよい場所」である。また、「B4公園」は東京圏では (2) 2～3時間ぐらい居る、(3) 1時間ぐらい居る、(4) 20～30 ぐらい居るに分かれる「居心地のよい場所」であるが、大阪圏では (2) 2～3 時間居るに集中している。全体的に見ても、大阪圏は、(2) 2～3 時間居る、もしくは (5) 10分ぐらい居るに集中しており、(3) 1時間ぐらい居る、(4) 20～30分くらい居る「居心地のよい場所」が「A3専門物販店」以外、あまり構築されていない。一方、東京圏では、(4) 20～30分居る、(5) 10分ぐらい居る「居心地のよい場所」はあまり構築されず、(2) 2～3時間居る、(3) 1時間くらい居るに集中している。



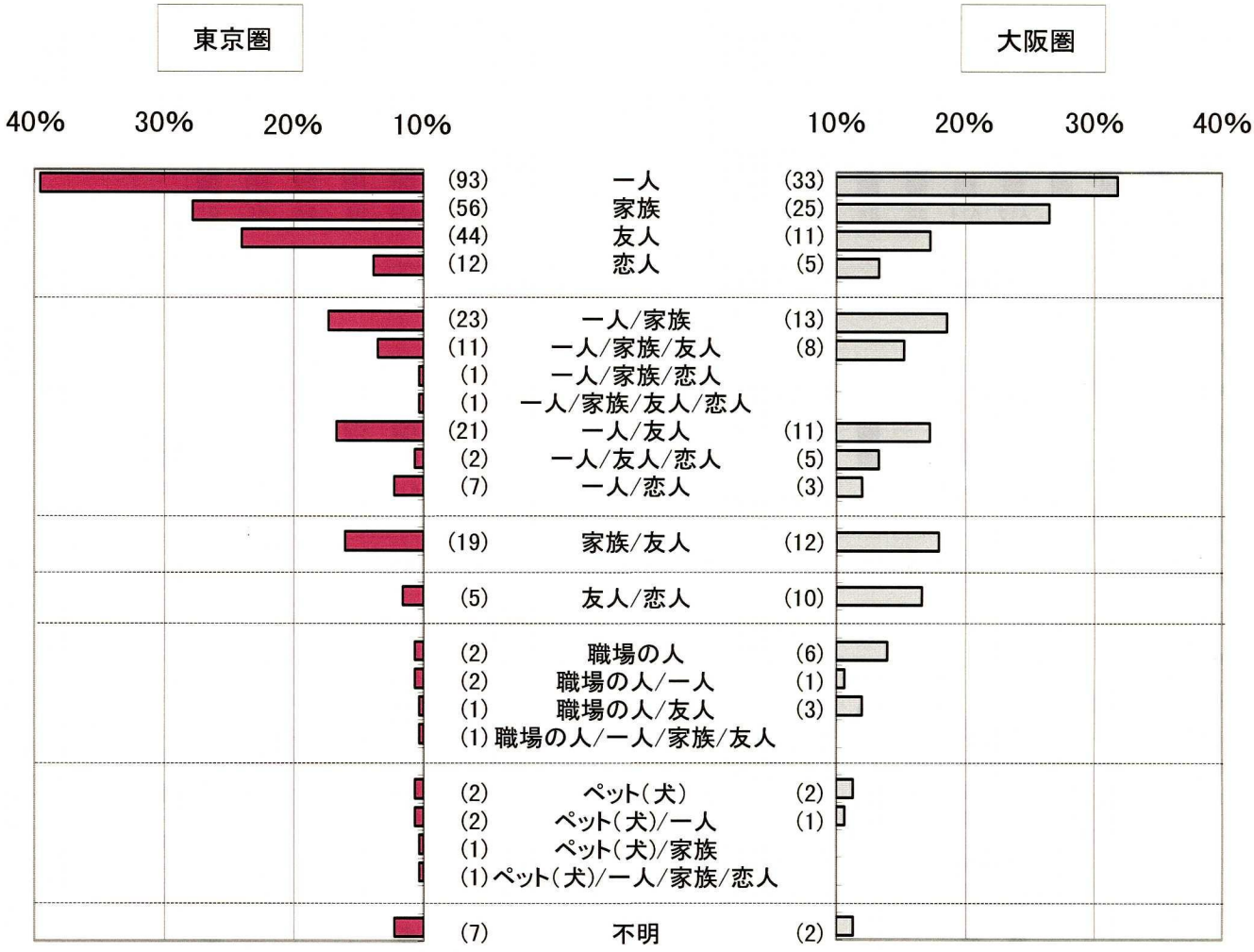
注）　グラフは、東京圏・大阪圏で構築された、それぞれの建築・都市施設用途の数（図 5－6（P97）参照）に対する割合を示す。

図 5－22　建築・都市施設用途から見た「居心地の良い場所」における滞在時間

5.3.7.「居心地の良い場所」における同伴者

図 5-23 は、「居心地の良い場所」における同伴者を示したものである。「居心地の良い場所」へは一人で行く人が最も多い。次いで家族、友人が多く、「居心地のよい場所」における同伴者はある特定の人間関係の人と決まっている。また、その傾向は東京圏で強い。2 種類の人間関係のどちらでも行くと回答した例としては、一人/家族、一人/友人、家族/友人が多く、いづれも大阪圏で割合が高かった（図 5－23）。

結婚しているオフィスワーカーの場合、家族は、自分の両親と兄弟、配偶者、自分の子供も含まれる。図 5-24 は、両都市圏における「家族」の内訳を示したものである。「居心地の良い場所」における同伴者は、大阪圏では家族は配偶者（夫・妻）を指す場合が比較的多く、東京圏では家族は子供および子供を含めた家族みんなを指す場合が比較的多い。



注）　グラフは、東京圏・大阪圏で構築された、それぞれの建築・都市施設用途の数（図 5－6（P97）参照）に対する割合を示す。

図 5－23　「居心地の良い場所」における同伴者

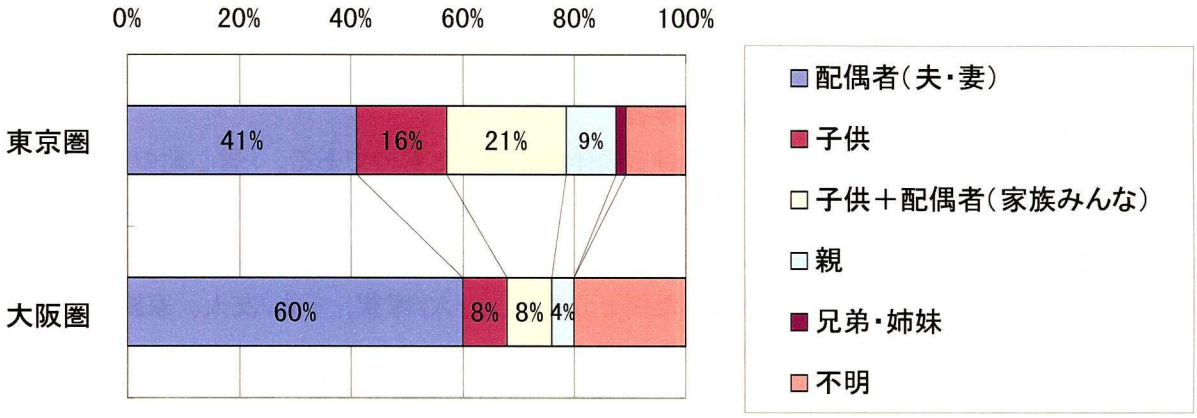
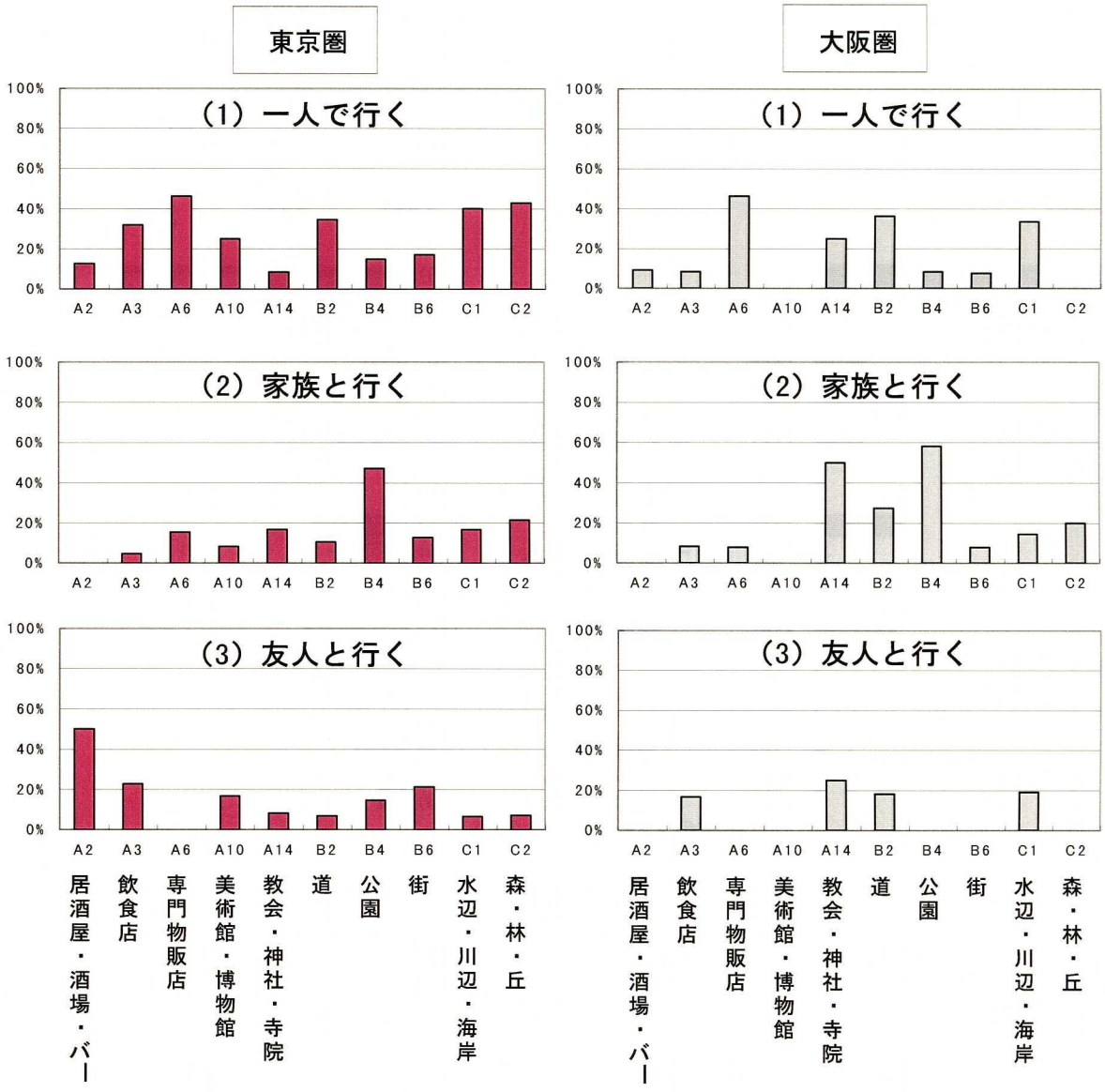


図 5－24　「家族」の内訳



注）　グラフは、東京圏・大阪圏で構築された、それぞれの建築・都市施設用途の数（図 5－6（P97）参照）に対する割合を示す。

図 5－25　「居心地の良い場所」の建築・都市施設用途と同伴者

図 5-25 は、(1) 一人で行く、(2) 家族で行く、(3) 友人と行く、のそれぞれの同伴者に対して、どの代表的な「居心地の良い場所」が対応するかを表わしている。両地域において、「B4 公園」は代表的な (2) 家族で行く場所であり、「A6 専門物販店」は代表的な (1) 一人で行く場所である。また、「A14 教会・神社・寺院」は、大阪圏では (2) 家族で行くに集中しており、「A2 居酒屋・酒場・バー」は東京圏では主として (3) 友人と行く場所であるが、大阪圏ではそうではない、などが特徴的である。

5.4. まとめ

本章では、「居心地の良い場所」の生活圏上の位置の考察から、どのような生活圏上の位置に、どのような「居心地の良い場所」が構築されているかが明らかになった。第 3 章では、職場周囲に構築されるサードプレイスが明らかになり、それらは「飲食店」「書店」「喫茶店」「雑貨店」「文化施設」「ｽｰﾊﾟｰﾏｰｹｯﾄ」「百貨店」などであった (表 3−5) が、オフィスワーカーの生活圏全域を視野に入れれば、職場周囲は「居心地の良い場所」が構築されにくい位置であることがわかった。また、生活圏上の位置により、構築されるサードプレイスの建築・都市施設用途も異なることが明らかになった。

「居心地の良い場所」と居住年数・居住する都市圏との関係も示唆され、頻度・滞在時間・同伴者に着目した考察により、「居心地の良い場所」は、どの程度の頻度で、どの程度の滞在時間、どんな関係の人と行くのか、またそれぞれの「居心地の良い場所」の建築・都市施設用途も明らかになった。

さらに、両都市圏においては、「居心地の良い場所」の構築に差異があることも示された。

本論文では、『場所』を「オフィスワーカーが都市生活の中で、豊かな意味を付与している空間」と定義した (1.3.)。「居心地の良い場所」も、オフィスワーカーにとって「居心地が良い」という意味を付与されているが、本章の考察においては、「居心地が良い」という都市生活上の意味を、建築・都市施設用途による分類によって扱うことの困難性も感じられた。例えば、図 5−1 の「居心地の良い場所」は建築・都市施設用途分類ではそれぞれ「飲食店」「風景」であるが、「飲食店」「風景」などの名詞では、オフィスワーカーが付与する意味を充分に汲み取ることはできず、この点は、「自由記述表現」や「理由」を参照してはじめて明らかにされると考えられる。

第 7 章では「居心地の良い場所」の「自由記述表現」「理由」を考察し、このような課題に取り組むこととする。

注

注１）図５−５、図５‐６を得る過程においては、図５−１の「居心地の良い場所」のデータシートを「場所の名前」に着目して、KJ 法的に並べ替える作業を行った。KJ 方の実践に当たっては、文献１、文献２を参照した。

参考・引用文献

文１）川喜田二郎：発想法,中公新書，1967 年

文２）川喜田二郎：続・発想法,中公新書，1970 年

第６章　『場所構築』のきっかけと環境への働きかけ

6.1. 本章の目的

第 3 章および第 4 章では、職場周囲に構築されるサードプレイスの調査および考察を行い、第 5 章では生活圏に構築される「居心地の良い場所」の調査および考察を行った。これらの調査・考察を通じて、オフィスワーカーが構築する『場所』の概要が明らかになったが、本章では、このような『場所』が、どのようなきっかけ[注1]で構築されるかを考察する。また、構築された『場所』においては、人間と環境の良い関係[注2]が存在すると考えられるが、良い関係を持続[注3]させる行動や、自分なりに使いこなす行動[注4]についても考察を加える。さらに、環境移行後には、新しい環境に慣れることや馴染む[注5]ことが重要であり、積極的に慣れる・馴染むことによって環境との良い関係を作り上げているとも考えられる。本章では、オフィスワーカーが環境との間に良い関係を作り上げる行動を、環境行動論の立場から「環境への働きかけ[注6]」と定義し、調査・考察する。

『場所構築』のきっかけや、環境への働きかけは、どちらもオフィスワーカーの都市生活の質を形成すると考えられ、このような着眼点は、人間―環境関係を環境の側からのみならず、人間の側からもとらえようという考えに基づいている。これらの点を考察し、環境行動論的な知見を抽出することを本章の目的とする。

6.2. 調査対象・調査方法

本章における調査は、第 5 章で行った＜調査 2＞および第 3 章、第 4 章で行った＜調査 1＞であり、調査対象・調査方法とも同様である。すなわち、平成 13 年 7 月～9 月に、東京圏および大阪圏に居住・勤務するオフィスワーカーを対象として行った「居心地の良い場所」に関するアンケート調査と、神田から品川へ平成 11 年 1 月に事務所を移転した 0 社の一部署に対して行ったサードプレイスの調査結果を考察する。

＜調査 2＞では、アンケート項目 (5) にて、どのようにして「居心地の良い場所」を知ったかを質問し、「居心地の良い場所」における情報源を調査している（表 6－1)。この調査結果を考察し、オフィスワーカーが生活圏に「居心地の良い場所」を構築する際のきっかけを明らかにする。

また＜調査 2＞では、アンケート項目 (9) にて、「居心地の良い場所」をもっと居心地良くするための工夫・対処を調査している（表 6－1)。さらに＜調査 1＞では、アンケート項目 (14) ～ (16) において、神田から品川への職場移行後、新しい職場と職場周囲へ慣れたかどうか、慣れるためにかかった時間はどの程度か、慣れるために工夫したことは何か、を調査している（表 6－2)。これらを考察し、「居心地の良い場所」における環境への働きかけ、および働く環境への働きかけを考察する。

表6−1　アンケート概要

番号	アンケート項目		回答形式	対応するデータシートの項目
(1)	フェイスシート	・氏名・住所・電話(FAX)番号・E-mail Address・性別・年齢・職業・勤務先住所、現住所に至る居住履歴を記入。	自由記述	−
(2)	「居心地の良い場所（またはお気に入りの場所）」の名前とその場所の様子	・自宅、職場以外の場所を記入。 ・「場所は1〜4箇所まで、簡単な文章やイラストで自由に記述」と教示した。 ・「あなたが何をしているか」「周りの様子はこのようだった」等を記入するよう教示した。	自由記述	「場所の名前」「場所の自由記述表現」
(3)	場所の位置	・自宅・職場・最寄駅・交通機関と場所の位置を略図によって記入。	略図	−
(4)	理由	・どうしてその場所が居心地が良いのかを記入。	自由記述	1. 理由
(5)	情報源	・どのようにしてその場所を知ったのかを記入。	自由記述	2. 情報源
(6)	同伴者	・誰と行くのかを記入。	自由記述	3. 同伴者
(7)	頻度	・どのくらいの頻度で行くのかを記入。	週・月・年単位の回数	4. 頻度
(8)	滞在時間	・1回の滞在時間はどのくらいなのかを記入。	分・時間・日数	5. 滞在時間
(9)	工夫・対処	・その場所をもっと居心地良くするための工夫・対処を記入。	自由記述	6. 工夫・対処

※1　網掛け：本章の考察対象としたアンケート項目
※2　アンケートには、当該都市圏のカラー地図(縮尺12万分の1、A3判)を添付した。

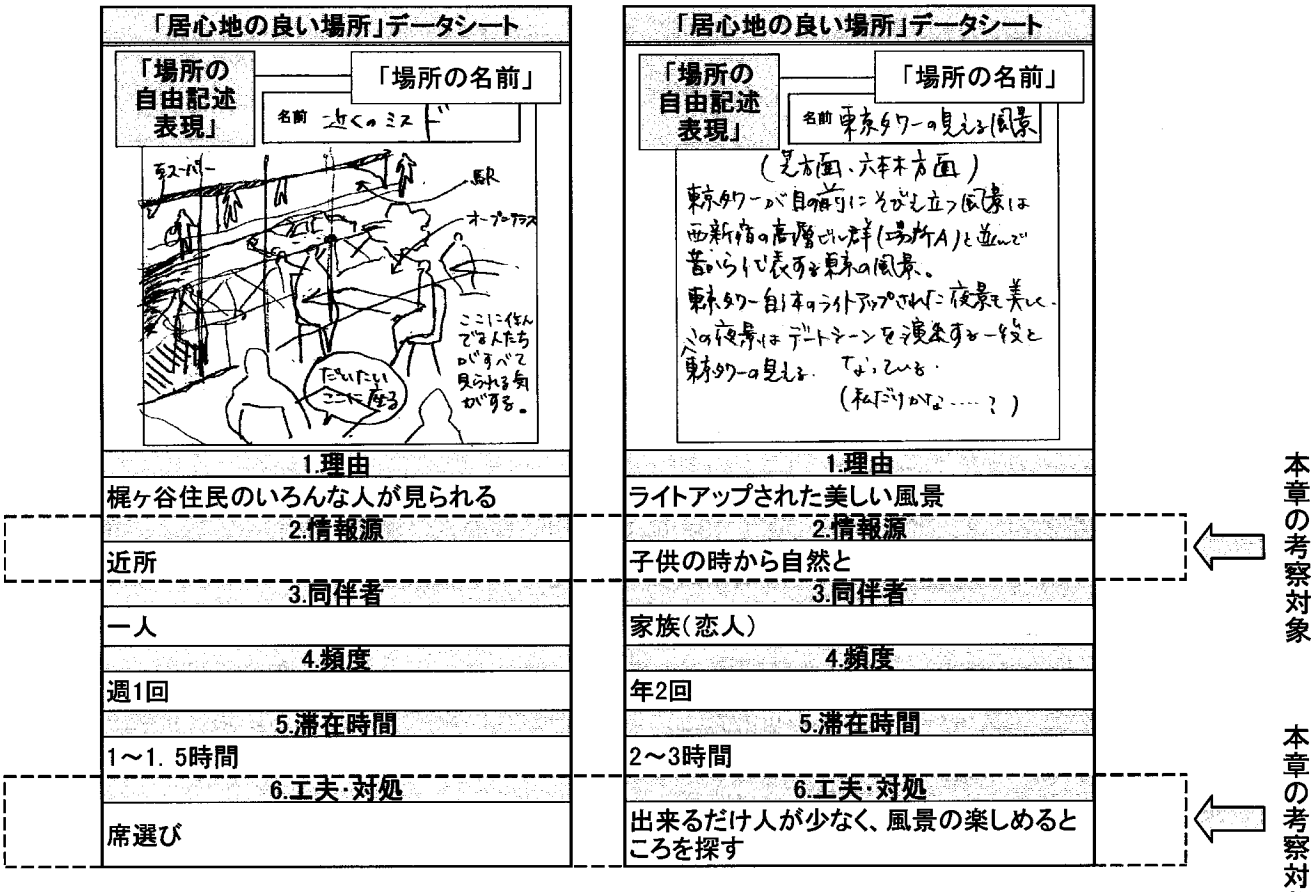


図6−1　「居心地の良い場所」のデータシート

表6−2　本調査におけるアンケートの構成

番号	アンケート項目	回答形式	対応する図6−2の記号
(1)	日常生活における活動の優先順位	各年度ごとに、9つの活動から選択※2	(ウ)
(2)	1週間の生活パタン	1週間の平均勤務時間数を記入	(エ)
(3)	よく行く場所	ベースマップ※3にプロット※4	(コ)
(4)	よく行く理由	自由記述	(コ)
(5)	主な通勤ルート	ベースマップに記入	(キ)
(6)	その他の通勤ルート	ベースマップに記入	(キ)
(7)	歩きまわりのルート・寄り道する場所	ベースマップに記入・プロット	(ク)
(8)	リフレッシュする場所	ベースマップにプロット	(オ)
(9)	自分の場所	ベースマップにプロット	−
(10)	引越し直後の変化	自由記述	(ス)(セ)(ソ)(タ)
(11)	引越し直後のストレス	自由記述	(ス)(セ)(ソ)(タ)
(12)	引越しによって得たもの	自由記述	(ス)(セ)(ソ)(タ)
(13)	引越しによって失ったもの	自由記述	(ス)(セ)(ソ)(タ)
(14)	慣れた/慣れない	自由記述	(チ)
(15)	慣れるためにかかった期間	自由記述	(チ)
(16)	慣れるために工夫したこと	自由記述	(チ)(ツ)

※1　網掛け：本章の考察対象としたアンケート項目
※2　「1会社業務」「2会社の人との交流」「3会社以外の人との交流」「4自分の時間」「5家族・恋人との交流」「6昼食時間」「7アフター5」「8通勤時間」「9その他」から選択
※3　アンケート票には、ベースマップ（縮尺1：2, 500）を添付した
※4　(1)の優先活動ごとに「よく行く場所」をプロット

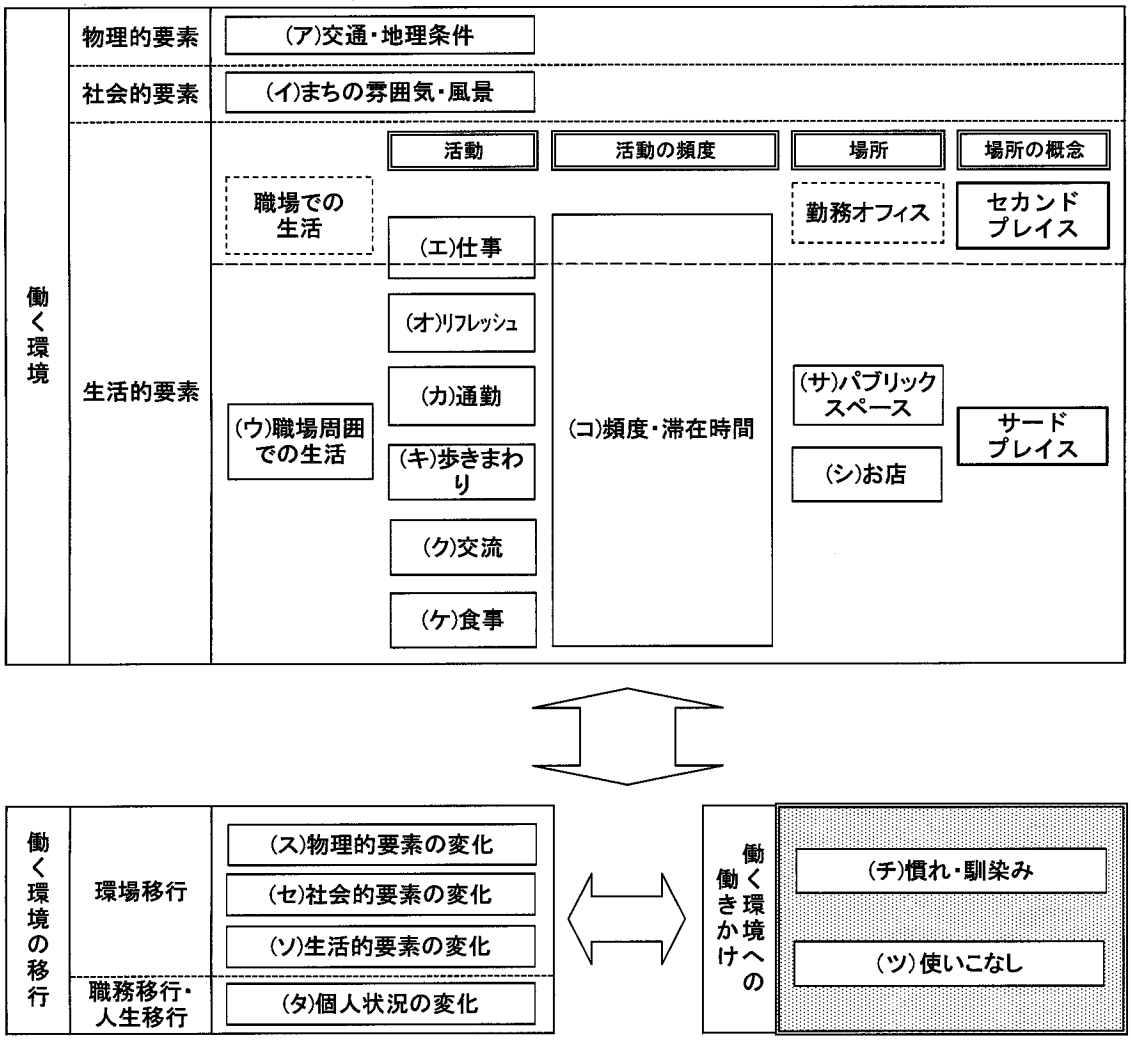


図6−2　働く環境・働く環境の移行・働く環境への働きかけ

6.3. 調査結果と考察

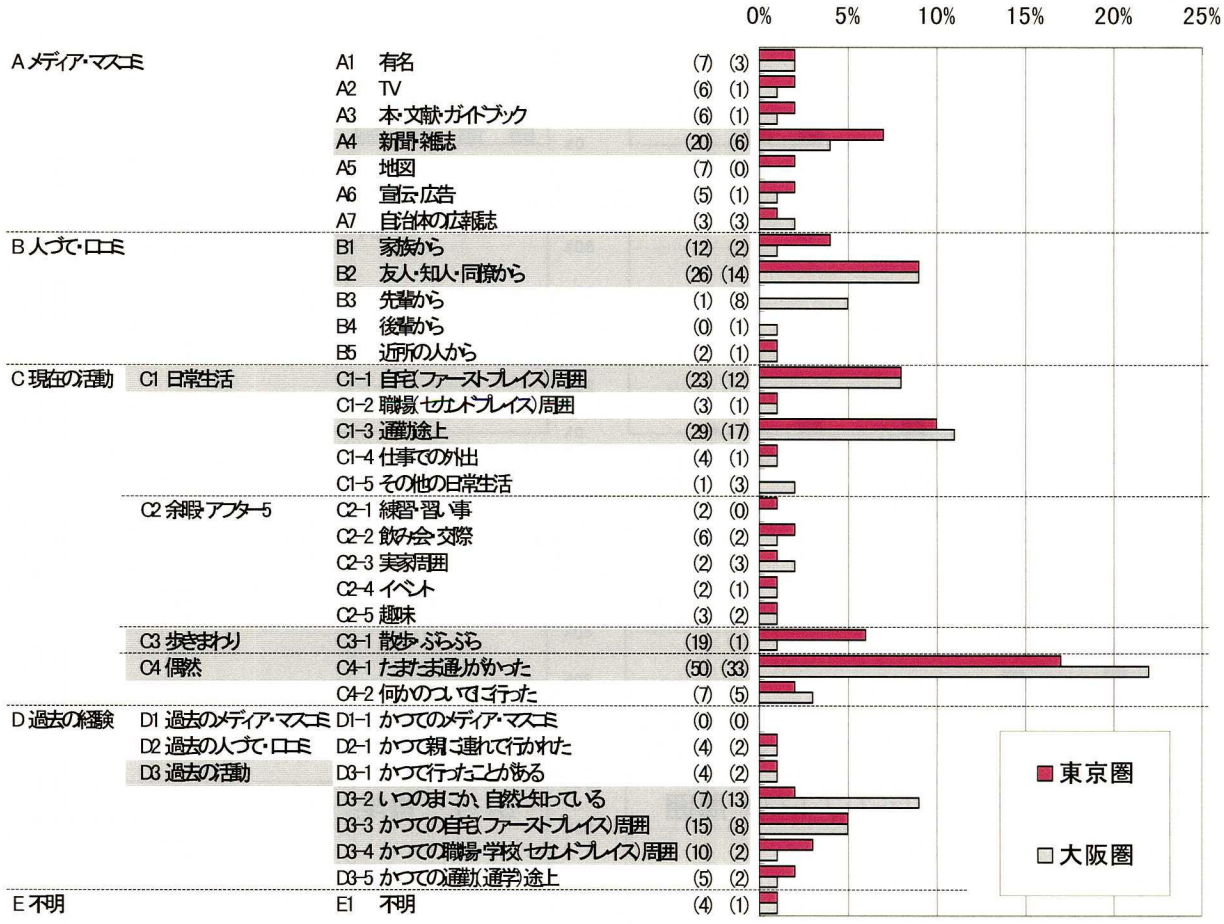
6.3.1. 「居心地の良い場所」を構築するきっかけ

図6-3は、<調査2>の「居心地の良い場所」の情報源を、東京圏・大阪圏それぞれについて集計[注7]した結果である。

「A メディア・マスコミ」は、「A4 新聞・雑誌」から「居心地の良い場所」を知る、「A1 有名」だから知っているなど、各種のメディア（媒体）やマス・コミュニケーションが「居心地の良い場所」の情報源となる場合である。また「B 人づて・口コミ」は、「B2 知人・友人・同僚から」教えてもらったり、「B1 家族から」教えてもらったりして「居心地の良い場所」を知る場合であり、オフィスワーカーの生活環境のうち、「対人的次元[注8]」が情報源になっている場合である。このように、「居心地の良い場所」は「メディア」や「人」を介して構築されることがわかった。

「C 現在の活動」「D 過去の経験」は、「メディア」や「人」を介さず、オフィスワーカー自身の「活動」が情報源となり、直接的に「居心地の良い場所」が構築される場合である。「活動」は、大きく現在と過去に分けられ、現在・過去とも「C1-1 自宅（ファーストプレイス）周囲」や「C1－3 通勤途上」は「居心地の良い場所」を知る重要な情報源となっている。自宅や通勤経路は、オフィスワーカーが日常的に慣れ親しんでいる生活領域であり、このような馴染みのある生活環境においては、「居心地の良い場所」が構築されやすいと考えられる。5.3.3.および図5-7で既に示したように、これらの生活圏上の位置は「居心地の良い場所」が構築されやすい生活圏上の位置でもある。「D3 過去の活動」のうち、「D3－2 いつのまにか、自然と知っている」なども、馴染みのある環境におけるきっかけと考えられる。ただし、「C1-2 職場（セカンドプレイス）周囲」は、同様に馴染みのある環境であるのに、情報源としてはそれほど多くない。これは、5.3.3.および図 5-7 で示したように、「居心地の良い場所」は、職場周囲にはあまり構築されないこととも関係している。

「C1 日常生活」「C2 余暇・アフター5」は、仕事や飲み会・交際など、目的が明確である活動と考えられるが、「C3－1 散歩・ぶらぶら」「C4－1 たまたま通りがかった」などは、無目的的な活動、または本来の目的外の活動と考えられ、これらが「居心地の良い場所」の情報源となっている割合がきわめて高いという結果が示された。既に 3.4.3.で、職場周囲に構築されるサードプレイスと歩きまわり行動は相補的な関係にあり、歩きまわる行動は職場周囲のサードプレイス構築のきっかけとなることについて述べたが、職場周囲以外の「居心地の良い場所」の構築においても、無目的的な歩きまわり行動、さらには本来の目的外、すなわち「偶然」がきっかけとなることが明らかになった。

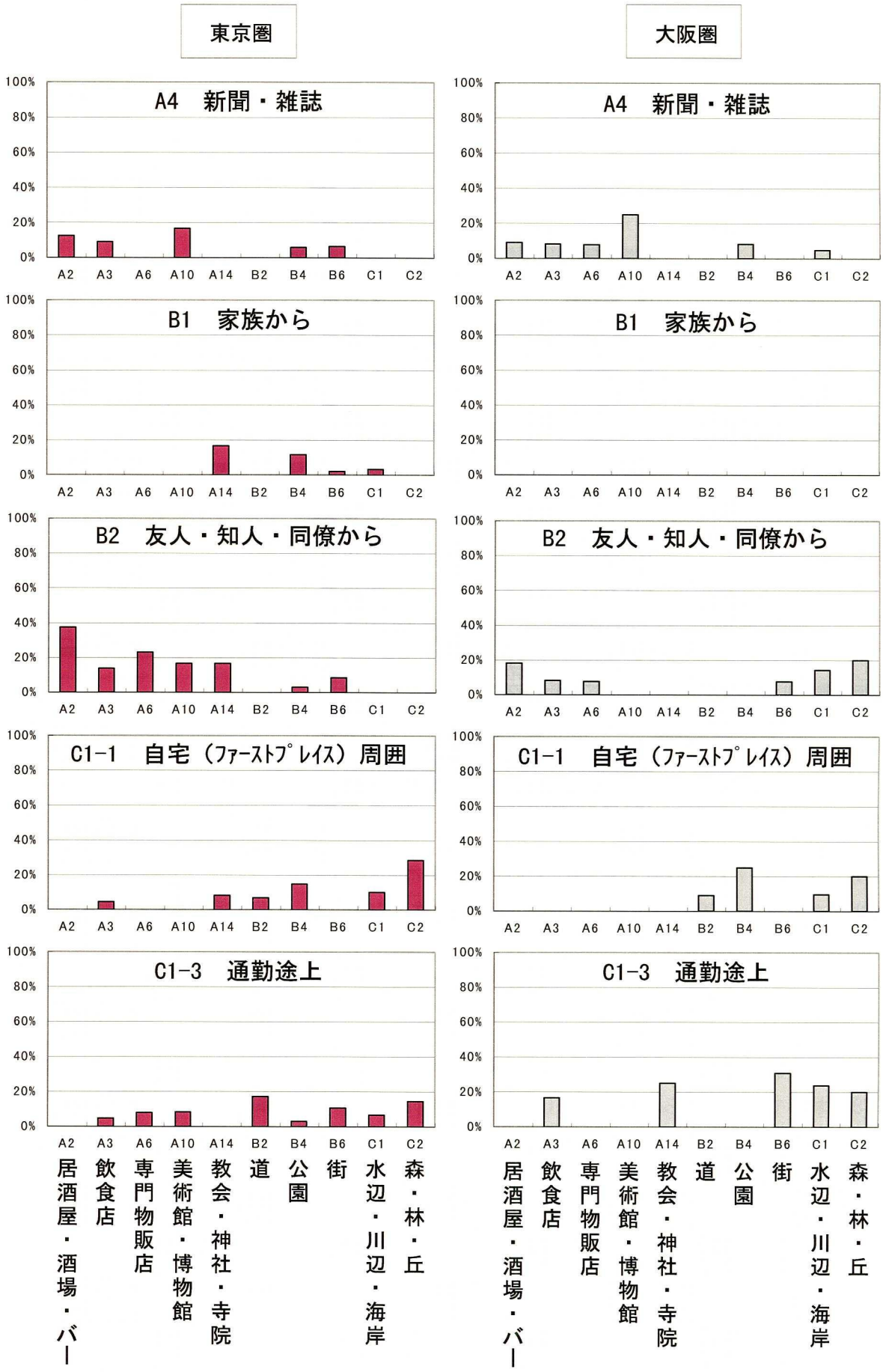


注 1)　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた情報源の数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた情報源の総数（東京圏 295、大阪圏 152）に対する割合を示す。

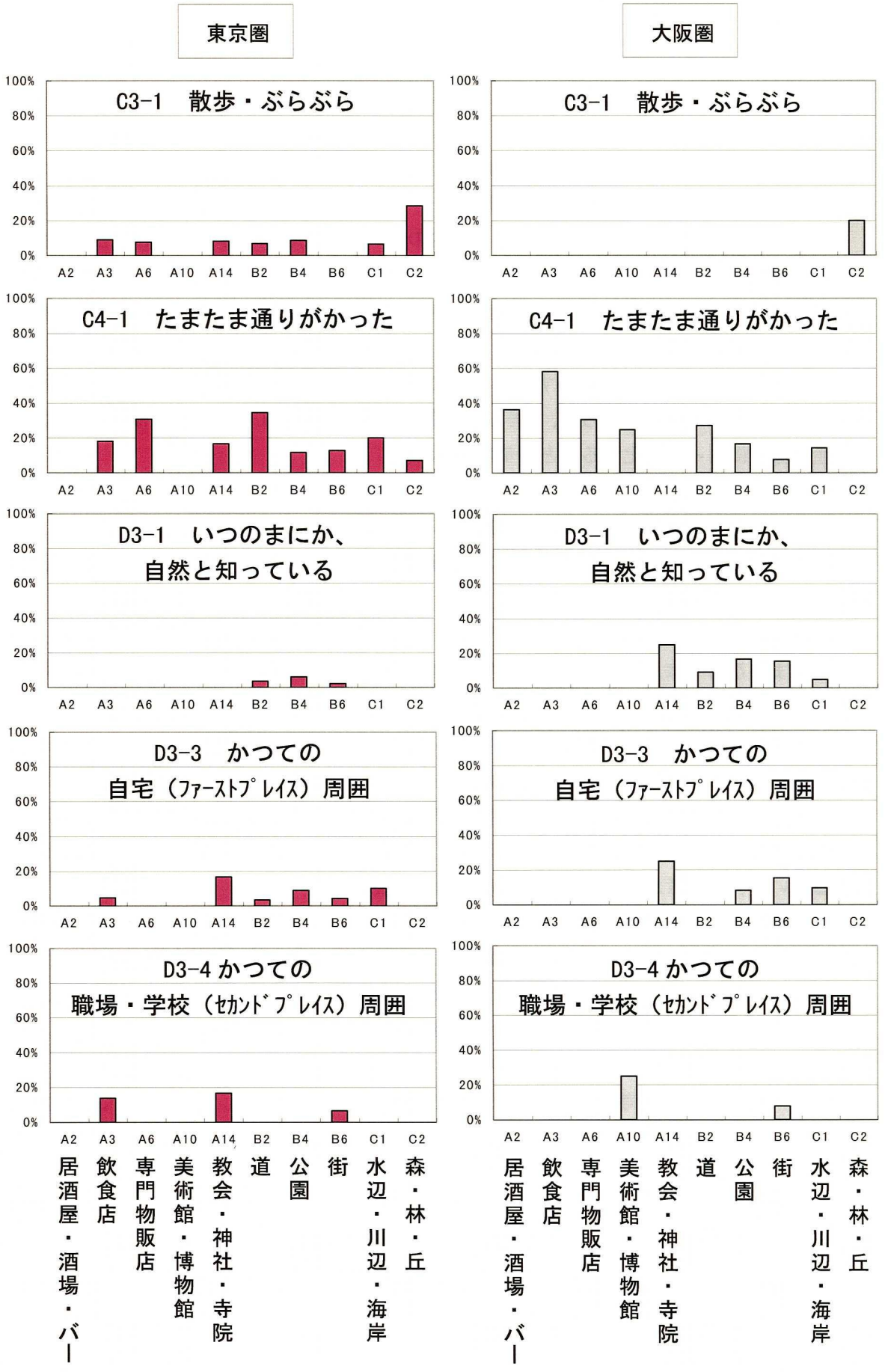
図 6－3　「居心地の良い場所」の情報源

図 6 - 4、および図 6 - 5 は、代表的な「居心地の良い場所」の建築・都市施設用途と、図 6－3 において多く挙げられた情報源(図 6 - 3 の網掛けの項目)の関係を示したものである。「A10 美術館・博物館」は、両都市圏において「A4 新聞・雑誌」をきっかけとして『場所構築』されるが、大阪圏においては、「C4－1 たまたま通りがかった」「D3 - 4 かつての職場・学校（セカンドプレイス）周囲」もきっかけとなっている。また、「B2 友人・知人・同僚から」をきっかけとして「A2 居酒屋・酒場・バー」や「A6 専門物販店」が『場所構築』され、「A6 専門物販店」は他にも「C4－1 たまたま通りがかった」ことをきっかけとしても『場所構築』される。大阪圏では「C4－1 たまたま通りがかった」ことによって構築される代表的な「居心地の良い場所」が多く、「A3 飲食店」はほとんどこのきっかけで構築されている。「A2 居酒屋・酒場・バー」も大阪圏においては「C4－1 たまたま通りがかった」ことによって『場所構築』される割合が多く、東京圏と対照的である。また、大阪圏では「C3－1 散



注）　グラフは、東京圏・大阪圏で構築された、それぞれの建築・都市施設用途の数（図５－６（P97）参照）に対する割合を示す。

図６－４　建築・都市施設用途から見た「居心地の良い場所」の情報源-1



注）　グラフは、東京圏・大阪圏で構築された、それぞれの建築・都市施設用途の数（図5－6（P97）参照）に対する割合を示す。

図6－5　建築・都市施設用途から見た「居心地の良い場所」の情報源-2

歩・ぶらぶら」によって構築される代表的な「居心地の良い場所」は「C2 森・林・丘」のみであり、これも東京圏と対照的である。

このように、オフィスワーカーが「居心地の良い場所」を知るきっかけは、生活環境の中の「メディア」や「人」、そしてオフィスワーカー自身の「活動」であることがわかり、それぞれのきっかけ特有の「居心地の良い場所」が存在することがわかった。「居心地の良い場所」が構築されるプロセスにおいては、生活環境の中の「メディア」「人」、オフィスワーカー自身の「活動」が関与する。さらに、あるきっかけによって構築される場所は、両都市圏によって差異が見られ、「居心地の良い場所」を構築するきっかけは居住・勤務する生活環境によって変化することが示唆された。

6.3.2.「居心地の良い場所」における環境への働きかけ

図 6−6 は、<調査 2>の「居心地の良い場所」における工夫・対処を、東京圏・大阪圏についてそれぞれ集計した結果である。

「e 私物を持ち込む」は最も一般的で、日常よく目にする工夫・対処の例であると言える。持ち込まれるものは、「カメラ」「飲食物」「本」「雑誌」「勉強道具」「おもちゃ」「スポーツ用品」「敷物」「お気に入りのもの」などが挙げられ、それぞれ構築された『場所』の「居心地の良さ」を持続することに貢献している。

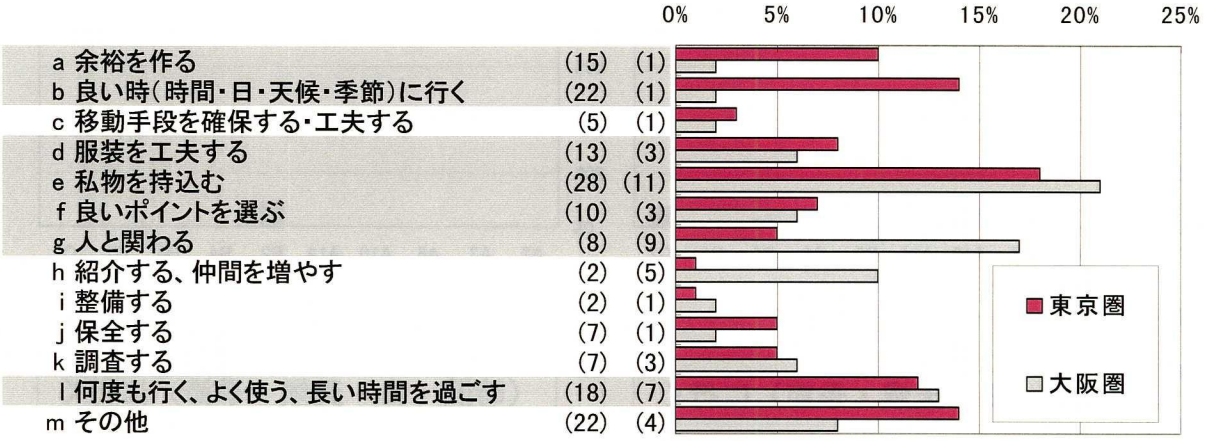
「のんびりする」「深呼吸をする」「何もしない」「疲れないようにする」「体調を整える」「時間に余裕のあるときに行く」などの「a 余裕を作る」も多く挙げられた。これらの工夫・対処には、「積極的に良い心理的状態になる」ことによって、「居心地の良い場所」を構築するという、生活者からの環境への適応行動が存在する。

「リラックスした格好で行く」「軽装で行く」「座れる格好で行く」「冷房対策をする」「流行のファッションで行く」などの「d 服装を工夫する」も多く挙げられた。

「空くいている」「見える」「人目につかない」などの「f 良いポイントを選ぶ」は、「居心地の良い場所」の「可能性」に着目し、さらに居心地の良いポイントを見つけ出していくという『場所構築』の過程を示している。

人間―環境関係の時間的な側面[注9]に着目した工夫・対処として、「何度も行く」「わざわざ行く」「歩き回る」「長い時間過ごす」などの「1 何度も行く、よく使う、長い時間を過ごす」や、「天気の良い時」「空いている時」「早め」「朝方」「夕方」「夜」などを選ぶ「b 良い時（時間・日・天候・季節）に行く」も、重要な工夫・対処の例として挙げられた。第 5 章において、「居心地の良い場所」を訪れる頻度、そこでの滞在時間などの「関係の時間」を考察したが、「居心地の良い場所」における工夫・対処にも「関係の時間」は深くかかわっており、オフィスワーカーが積極的に「関係の時間」に働きかけることによって、これらの「居心地の良い場所」は構築されていると言える。

なお、「a 余裕を作る」「b 良い時（時間・日・天候・季節）に行く」という工夫・対処は、東京圏と大阪圏で割合に差があり、東京圏で目立った。東京圏は大阪圏に比べ、どこへ行



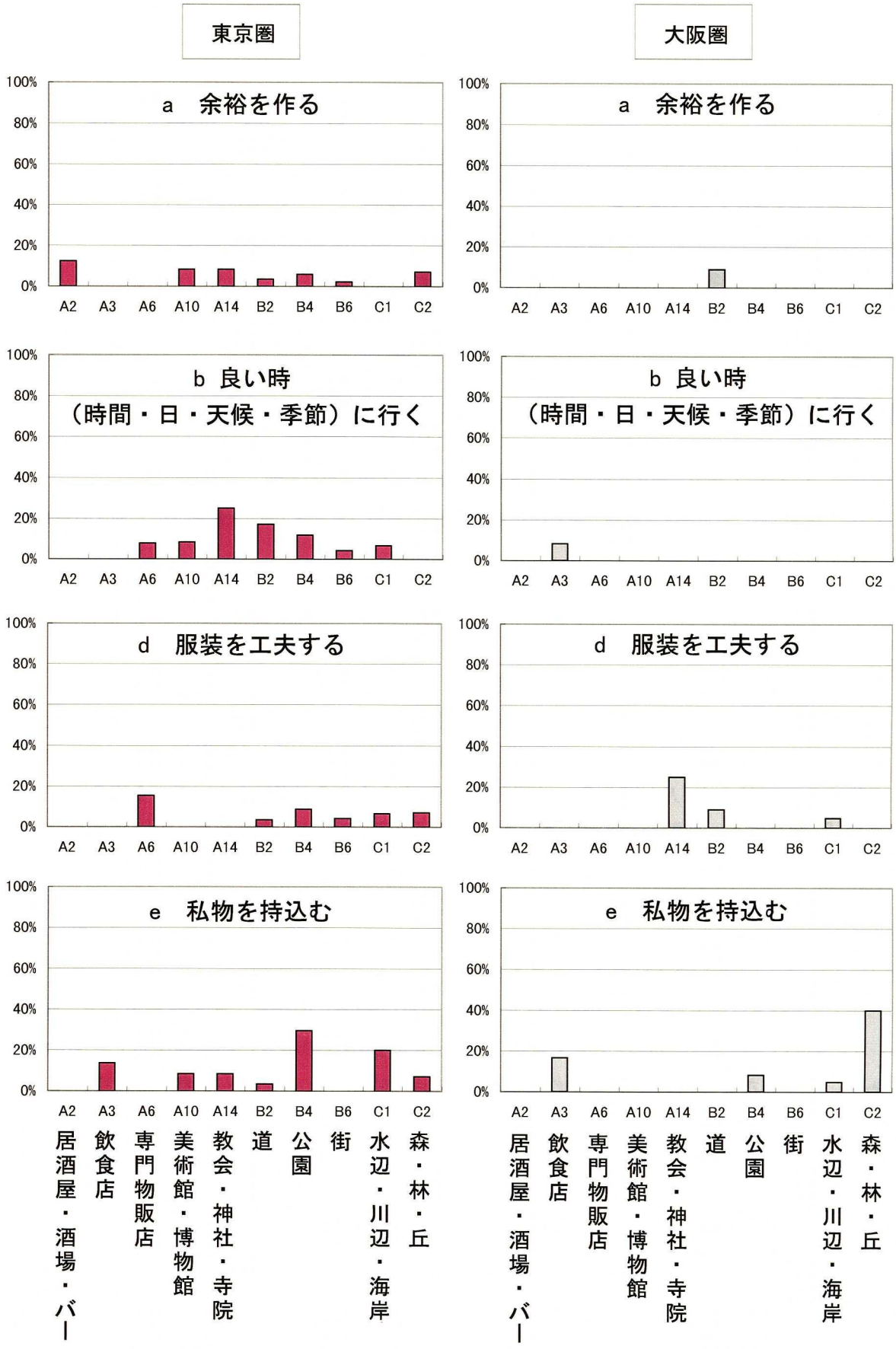
注 1)　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた工夫・対処の数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた工夫・対処の総数（東京圏 159、大阪圏 50）に対する割合を示す。

図 6－6　「居心地の良い場所」における工夫・対処

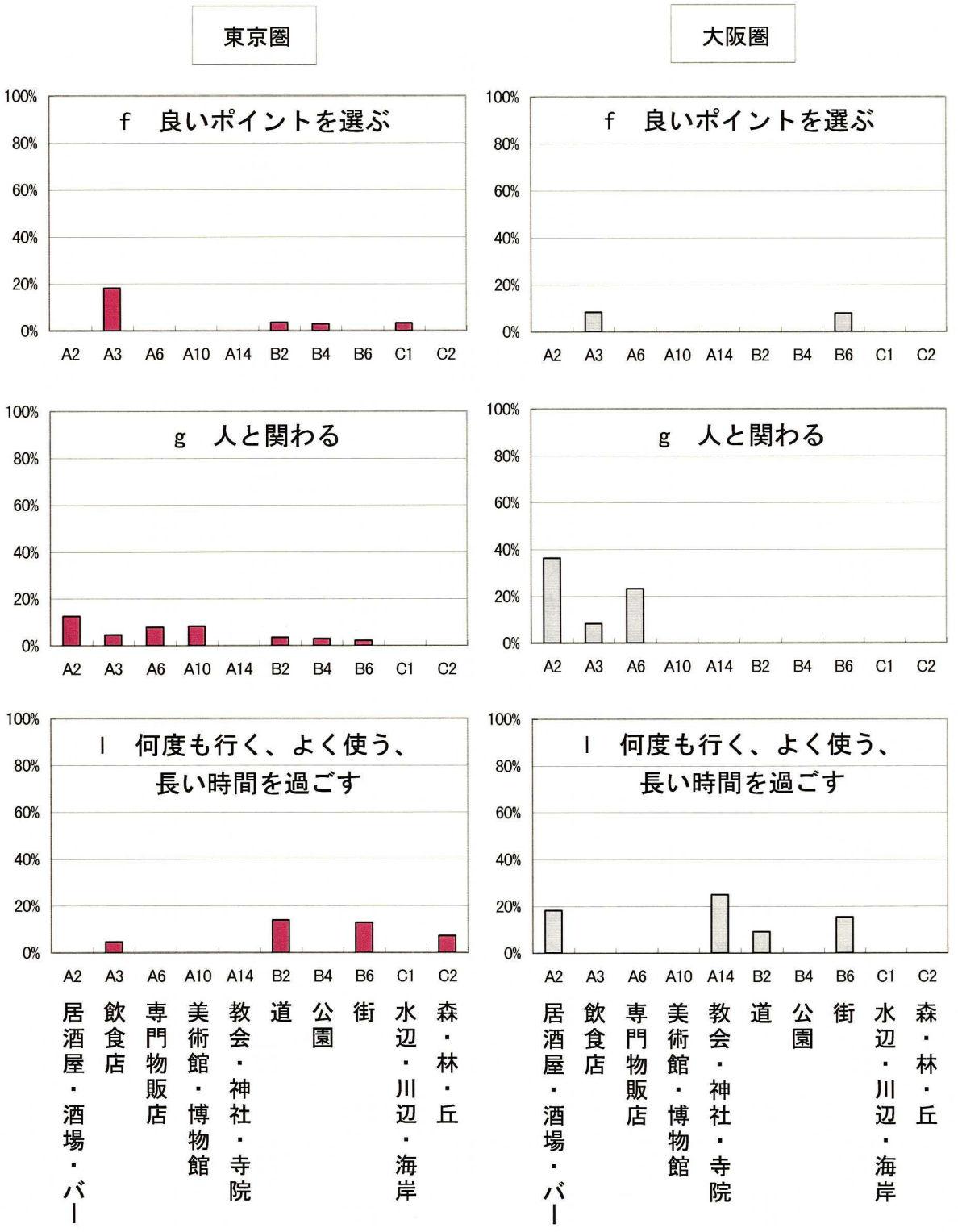
っても人が多く[注10]、そこに居住・勤務するオフィスワーカーは、意識的に余裕を作ったり、良い時間・日を選んだりして、人との調和を図る必要があり、必然的に自分自身を環境に適応させていると考えられる。一方、「友達になる」「仲良くする」「挨拶する」「会話する」「眺める」などの「g 人と関わる」、「紹介する」「良さを知らせる」「メンバーを増やす」などの「h 紹介する、仲間を増やす」も、東京圏と大阪圏で割合に差があり、大阪圏で目立った。大阪圏のオフィスワーカーは、人と関わりを持ち、仲間を増やすなどして「環境の対人的次元の充実」や「馴染みの形成」を図ることで「居心地の良さ」を持続させようとする傾向があることが読み取れ、このような「居心地の良い場所」における環境への働きかけにおいて、両都市圏は対照的であると言える。

図 6 - 7 および図 6 - 8 は、代表的な「居心地の良い場所」の建築・都市施設用途と、図 6－6 において多く挙げられた工夫・対処（図 6 - 6 の網掛けの項目）の関係を示したものである。上述したように、「a 余裕を作る」「b 良い時（時間・日・天候・季節）に行く」「g 人と関わる」などの工夫・対処がなされる「居心地の良い場所」は、両都市圏で対照的である。例えば、「a 余裕を作る」は、東京圏では「A2 居酒屋・酒場・バー」「A10 美術館・博物館」などで見られる工夫・対処であるが、大阪圏では「B2 道」でしか見られない。また、「b 良い時（時間・日・天候・季節）に行く」は、東京圏では主に「A14 教会・神社・寺院」で見られる工夫・対処であるが、大阪圏では「A3 飲食店」でしか見られない。さらに、「g 人と関わる」は、東京圏では「A2 居酒屋・酒場・バー」「A6 専門物販店」「A10 美術館」などに満遍なく見られる工夫・対処であるが、大阪圏では「A2 居酒屋・酒場・バー」に集中的に見られる工夫・対処である。「1 何度も行く、よく使う、長い時間を過ごす」も両都市圏で対照的であり、両都市圏の「B2 道」「B6 街」でこの工夫・対処が見られるが、大阪圏



注） グラフは、東京圏・大阪圏で構築された、それぞれの建築・都市施設用途の数（図5−6（P97）参照）に対する割合を示す。

図6−7 建築・都市施設用途から見た「居心地の良い場所」における工夫・対処-1



注）　グラフは、東京圏・大阪圏で構築された、それぞれの建築・都市施設用途の数（図5－6（P97）参照）に対する割合を示す。

図6－8　建築・都市施設用途から見た「居心地の良い場所」における工夫・対処-2

ではこれらの建築・都市施設用途でより、むしろ「A14 教会・神社・寺院」「A2 居酒屋・酒場・バー」において、この工夫・対処がよく見られる。

「居心地の良さ」を持続させるために行う様々な工夫・対処は、「居心地の良い場所」における人間から環境に対する「働きかけ」であるが、環境に対して一様に働きかけられるものではなく、逆に環境の差異によっても影響を受ける。両都市圏はともにわが国における二大大都市圏であるが、都市生活の質においては種々の差異が存在し、したがって「居心地の良い場所」における環境への働きかけも、両都市圏それぞれの異なった人間―環境関係を反映するものとなっている。

6.3.3.「慣れるための工夫」における働く環境への働きかけ

第 3 章の注２）において、オフィスワーカーは、多年にわたるオフィスライフ、および業務の中で「都市生活スキル」を身につけていることについて述べた。神田から品川への環境移行以後の 3 年 6 ヶ月においても、新環境に対する「都市生活スキル」が身につけられていると考える。また、図 6－2 に見るように、働く環境の移行は、職場移行の他に、職務移行・人生移行などの「(ﾀ) 個人状況の変化」を含み、移行後の新環境においては「(ﾁ) 慣れ」「(ﾂ) 使いこなし」などの「働く環境への働きかけ」が見られると考えられる。

本項では、<調査 1>のアンケート項目番号 (14)（品川の環境に）慣れたかどうか、(15)（品川の環境に）慣れるためにかかった期間、(16)（品川の環境に）慣れるために工夫したこと（表 6－2）を集計し、新環境への慣れから見た働く環境への働きかけを考察する。

図 6－10 は、品川への職場移行後 3 年 6 ヶ月経過した時点での慣れと、慣れるまでにかかった時間を示している。品川の環境について、ほとんどの人が「慣れた」と回答しており、移行後 6 ヶ月で約 6 割の人が、移行後 1 年で約 9 割の人が慣れている。慣れるために必要な期間は、概ね 1 年であると考えられるが、一方で、「3 年 6 ヶ月経過してもまだ慣れない」と回答した人も 2 人居た。

「移行後すぐ慣れた」と回答した 014 と、「3 年 6 ヶ月経過してもまだ慣れない」と回答した 012 は、慣れの点では対照的である。014 は、品川への職場移行後、歩きまわらなくなった（表 4 - 4 および表 4 - 5）が、「よく行く場所」は増えている（図 4－2)。014 同様、「よく行く場所」が増えた 006、013、015 は、いずれも品川の環境には「慣れた」と回答しており、「慣れるためにかかった期間」もそれぞれ「3 ヶ月」「6 ヶ月」「6 ヶ月」と比較的早期に慣れている。また、006、013、015 の歩きまわりの変化は、それぞれ「変わらず歩きまわらない」、「変わらず歩きまわる」「歩きまわるようになった」である。一方、012 は神田同様、品川においても職場周囲を広範囲に歩き回っている（表 4 - 4 および表 4 - 5)。そのため、職場移行後も「寄り道する場所」「自分の場所」はある程度維持されている（図 4－3 および図 4 - 5）が、「よく行く場所」は激減している。第 4 章において、サードプレイス、とりわけ「寄り道する場所」「自分の場所」と歩きまわり行動の相補的関係について示したが、慣れと歩きまわり行動には目立った関係が見られず、むしろ慣れと「よく行く場所」

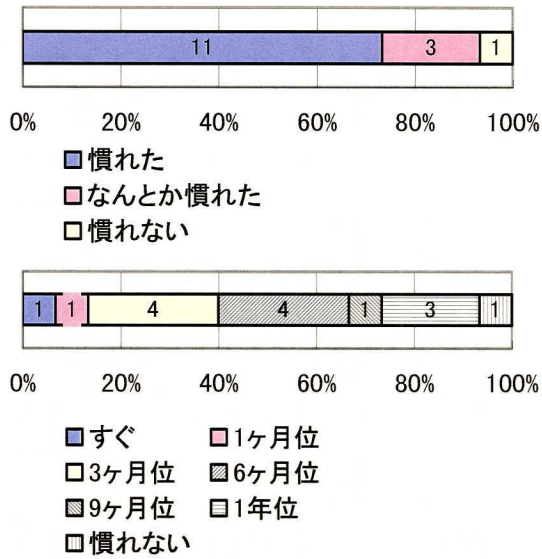


図６－９　職場移行後の慣れと慣れるまでにかかった期間

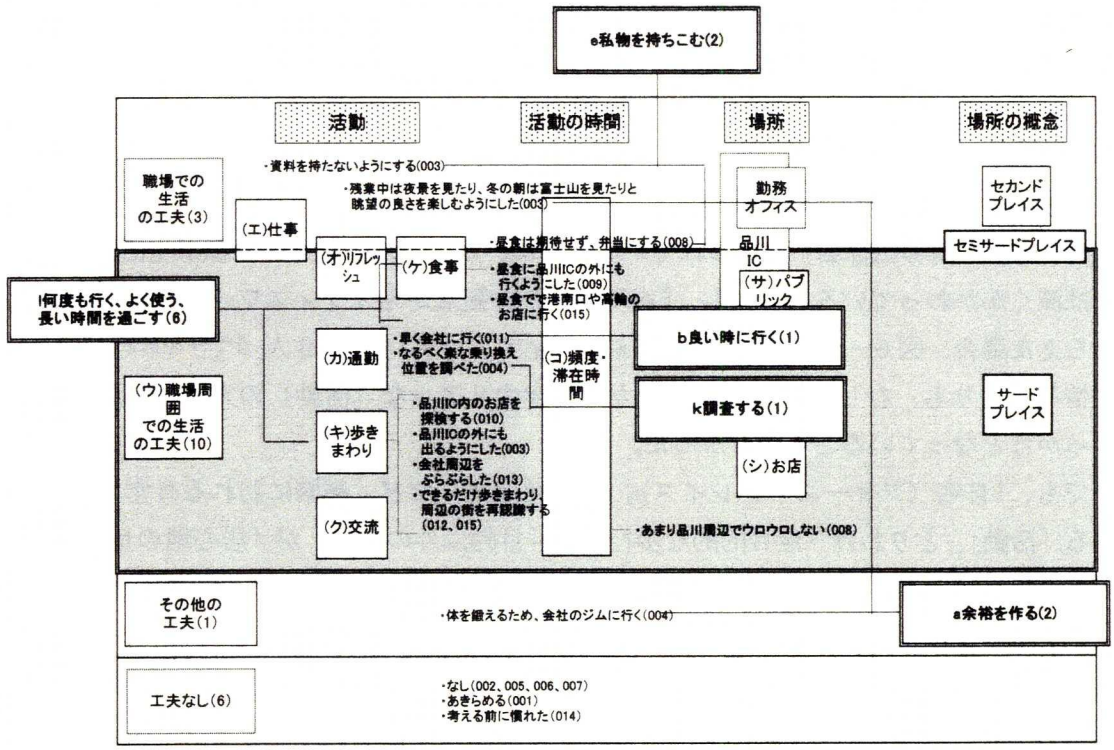


図６－10　慣れるために工夫したこと

の構築に相補的関係がうかがえる。

また、アンケート項目（16）慣れるために工夫したことを集計し、図6−2の働く環境の生活的要素の活動に分類する作業を行ったところ、図 6−10 を得た。さらに、6.3.2.で導かれた「居心地の良い場所」の「居心地の良さ」を持続させる工夫・対処 a〜l を対応させた（図6−10の二重線枠囲み部分）。慣れるために工夫したことは、(ｷ) 歩きまわり、(ｹ) 食事に関するものが突出して多く挙げられた（図 6−10)。これらはほとんどが「l 何度も行く、よく使う、長い時間を過ごす」に分類される工夫である。目的的な歩行および無目的的な歩行はいずれも慣れるための重要な工夫として認識されている。また、「資料を持たない」「昼食に期待せず、弁当を持ってくる」など、自分の私物に工夫を加えることや、「眺望の良さを積極的に楽しむ」「体を鍛える」など、自分自身を環境に適応させようとする工夫も見られる。さらに、「早く会社に行く」「楽な乗換え位置を調べる」などの「b 良い時を選ぶ」「k 調査する」に該当する工夫も見られた。

第4章の表4−3および図4−8に示したように、009は神田では「6昼食時間」のためのサードプレイスを多数構築していたので、職場移行直後の品川においても、職場周囲を歩き回ることにより「6昼食時間」のためのサードプレイスを構築しようとしたと考えられる（図6−10)。しかし、品川の職場周囲ではほとんど構築できず（図4-9)、「6昼食時間」の生活優先度も神田に比べて下がり（表4-8)、歩きまわりのパタンも大きく変化している（表4-4および表4-5)。職場移行直後のオフィスワーカーと働く環境、とりわけ職場周囲の環境には、このような移行変化に関する関係があり、職場周囲の『場所構築』、職場周囲での生活の変容として現れている。

6.4. まとめ

現代社会が「情報化社会」と言われているように、オフィスワーカーの都市生活にも「情報」は深くかかわっている。しかし、『場所構築』の観点からオフィスワーカーの都市生活をとらえた場合、図6−3に見るように「A メディア・マスコミ」「B 人づて・口コミ」などの「情報」よりも、むしろオフィスワーカー自身のリアルな「活動」の方が『場所構築』のきっかけとなっていることがわかった。

中でも、「自宅（ファーストプレイス)」や「通勤路」など、頻繁に訪れる日常的空間における「活動」、とりわけ「無目的的な歩行」や「目的以外の活動」が「居心地の良い場所」構築のきっかけとなっており、日常の都市生活空間がこのようなきっかけを豊かに用意しているかどうかはオフィスワーカーの都市生活の質に深く関わっている。

また、「居心地の良さ」を持続させるための工夫・対処、職場移行後の新環境へ慣れるための工夫など、人間の側からの環境への働きかけが確認された。オフィスワーカーは都市生活において、様々な環境への働きかけを認識し、実践しており、環境への働きかけが行いやすい都市空間であるかどうかもオフィスワーカーの都市生活の質と深く関わっている。

注

注１）本章におけるきっかけとは、『場所』を構築するきっかけを意味し、その『場所』をどのように知ったか、誰から聞いたかという「情報源」や、どのようにして見つけたかという「機会」を指す。

注２）本論文では、人間と環境との「良い関係」は、Krupat の「人々と環境との間に‘良い関係’があれば、人々を幸福で、仕事よくでき、満足を感じるであろう。」という叙述（2.2.7.）に見られる概念に近いものとしてとらえられる。また、本論文で取り扱う『場所』は、オフィスワーカーが生活の中で豊かな意味を付与している空間を指す（1.3.）ので、そこには人間―環境関係のうち、「良い関係」が存在するものと考えられる。

注３）注２で述べたような「良い関係」を持続する行動については、既に西田ら（文 1、文２）が「メンテナンス」という概念を用いて研究を行っている。

注４）生活者が自分の環境を使いこなす行動についても、既に西田ら（文 1、文２）が「カスタマイズ」という概念を用いて研究を行っている。

注５）厳ら（文３～文９）は、痴呆性高齢者を対象に、新しい施設への「なじみ」を研究している。また、同様に、河辺ら（文 10）は都市環境への「なじみ」を研究している。さらに阿部ら（文 11）は、環境移行初期において、生活環境資源を認識することで地域へ「なじむ」ことができると述べ、生活環境資源とは、個人が豊かな生活環境を形成していく上で必要な要素や情報を指すと述べている。

注６）環境への働きかけは、直接的には、環境の物理的な操作（新築や増築）や、作り変え（改修）などを指すが、本論文では、「家具を動かす」などの微小な物理的操作も環境への働きかけに加え、積極的に慣れようとする行動や馴染もうとする行動、さらには時や場合を選んで、自分の身の置き場を決める、など、人間が環境に自らを適合させることも含む。本論文では、＜調査１＞のアンケート項目（16）「慣れるために工夫したこと」や、＜調査 2＞のアンケート項目（8）その場所をさらに居心地良くするための工夫・対処に見られるように、工夫や対処行動を質問することによって、オフィスワーカーから環境への働きかけを抽出することを試みている。

注７）図 6－3「居心地の良い場所」の情報源、および図 6－6「居心地の良い場所」における工夫・対処の集計にあたっては、図 6－1 の「居心地の良い場所」データシートを使用して、これを KJ 法的に並べ替え、類似する情報源および工夫・対処を寄せ集めて「一行見出し」をつけた。さらに、類似する「一行見出し」を寄せ集めて、最終的に A～E の情報源、a～m の工夫・対処を導いている。KJ 法の実践にあたっては、文献 12、文献 13 を参照した。

注８）2.2.7.の図 2－1 において、環境は物理的次元・対人的次元・社会文化的次元の 3 つの次元を持つとされる。「人づて・口コミ」は、オフィスワーカーの生活環境のうち、対人的次元と考えられ、対人的次元が『場所構築』のきっかけとなる例としてとらえられる。

注９）人間－環境関係の時間的側面は、2.2.7.の図 2－1 の「関係の時間」として位置づけられる（文 14）。「b 良い時（時間・日・天候・季節）に行く」「l 何度も行く、よく使う、長い時間を過ごす」などの工夫・対処が多いことは、人間と環境の関係は「時間」によって変容することが、オフィスワーカーの間で認識されていると考えられる。

注 10）この場合の「人」は、「他者」や「他人」を意味している。都市における「他者」や「他人」につ

いて、Fischer（文 15）は「見知らぬ人の存在」を大都市の本質として挙げている。本章の考察により、東京圏のオフィスワーカーは、「他者」をそのまま「他者」として扱い、むしろ自分自身を「絶対的な他者が存在する大都市の環境」に適合させようとする傾向があり、大阪圏のオフィスワーカーは、「他者」をなんとか「顔見知り」の領域に引き込み、「馴染み環境」を作り出そうとする傾向があることがわかった。これは、両都市圏の人間－環境関係の差異を示すものと考えられる。

参考・引用文献

文１）西田徹・大橋昌毅・阿知波修二：新潟市における環境行動的研究　その３　―最適化行動が居住環境に果たす役割と可能性―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年

文２）阿知波修二・西田徹・大橋昌毅：新潟市における環境行動的研究　その４　―育児をきっかけとした生活の拡張に関する研究―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1997 年

文３）厳爽，石井敏，外山義，橘弘志，長澤泰：グループホームにおける空間利用の時系列的変化に関する考察　「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究（その 1），日本建築学会計画系論文集　第 523 号，pp. 155－161，1999 年

文４）厳爽，石井敏，橘弘志，外山義，長澤泰：介護体制と入居者の生活構成の関わりに関する考察　「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究（その 2），日本建築学会計画系論文集　第 528 号，pp. 111－117，2000 年

文５）外山義，厳爽，橘弘志，石井敏，長澤泰：入居者の空間利用の時系列的変化　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 1），日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年

文６）橘弘志，厳爽，外山義，石井敏，長澤泰：介護体制が入居者の生活に与える影響　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 2），日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年

文７）厳爽，石井敏，橘弘志，外山義，長澤泰：異なる環境におけるなじみの形態　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 3），日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年

文８）外山義，厳爽，橘弘志，石井敏，長澤泰：なじみの定着とその様態　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 4），日本建築学会大会学術講演梗概集，1999 年

文９）橘弘志，厳爽，外山義，石井敏，長澤泰：痴呆レベルと空間利用傾向の関わり　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その 3），日本建築学会大会学術講演梗概集，1999 年

文 10）河辺潔・鳴海邦碩・久隆浩：都市界隈における＜なじみ＞に関する基礎的考察～大阪梅田をケーススタディに～，日本建築学会近畿支部研究報告集，1993 年

文 11）阿部美佳子，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：転居初期における生活環境資源認識に関する研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，1999 年

文 12）川喜田二郎：発想法，中公新書，1967 年

文 13）川喜田二郎：続・発想法，中公新書，1970 年

文 14）日本建築学会　編：人間－環境系のデザイン，彰国社，1997 年

文 15）Claude S. Fischer，松本康，前田尚子　訳:都市的体験，未来社，1996 年

文 16）井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉：都市と都市化の社会学（現代社会学 18），岩波書店，1996 年

第７章　『場所』の様態表現に関する基礎的考察

7.1. 本章の目的

1.3. で述べたように、本論文では、オフィスワーカーの都市生活の質を、「生活圏に多くの『場所』をできるか否か、また構築しやすい生活環境であるか否か。」によって形成されるとしている。また 6.4. で述べたように、日常の都市空間に『場所構築』のきっかけが豊かに用意されていることや、環境への働きかけがしやすいことも、「都市生活の質」に深く関わっていると考えられる。

このような『場所構築』のしやすさや、『場所構築』のきっかけが豊かに用意されていること、環境への働きかけがしやすい、などという性質は、環境が備えている「可能性」ととらえることができる。さらに、オフィスワーカーと環境が相互不可分の関係にある『場所』においても、このような「可能性」は『場所』の性質に影響すると考えられる。

本章では、『場所』におけるこのような「可能性」がオフィスワーカーによってどのように認知され、表現されているかを考察する。

また、5.4. で述べたように、オフィスワーカーが『場所』に対して付与する「居心地が良い」という意味は、建築・都市施設用途による分類によって扱うことが難しかったが、本章では「居心地の良い場所」における自由記述表現と理由を考察することによって、オフィスワーカーが付与する意味[注1]を扱い、「居心地の良い場所」における人間-環境関係の考察を行う。

7.2. 調査対象・調査方法

調査は、第 5 章および第 6 章で行った＜調査２＞であり、調査対象・調査方法とも同様である。すなわち、平成 13 年 7 月～9 月に、東京圏および大阪圏に居住・勤務するオフィスワーカーを対象として行った「居心地の良い場所（または「お気に入りの場所」）」に関する調査を考察する。本章は、このうちアンケート項目 (2) (4) による回答を主として考察し、補助的に (6) の回答を参照する（表 7-1)。したがって、「居心地の良い場所」のデータシートでは、「場所の自由記述表現」と「1. 理由（以下、居心地が良い理由と呼ぶ)」を考察し、補助的に「3. 同伴者」を参照する。また、第 5 章で述べたように、調査の結果、東京圏で 306 個所、大阪圏で 148 個所、合計 454 個所の「居心地の良い場所」が得られている。

1.3. で述べたように、本論文では、オフィスワーカーによって構築された『場所』が表現・記述されること、および表現・記述された内容を『場所表現』と定義している。この方法は、研究者側の都合による表現上の制約や誘導的な質問を予め排除でき、「生活者が認知する『場所』の様子」をオフィスワーカーが自由に表現できるという利点がある[注2]。＜調査２＞のアンケート項目 (2)「居心地の良い場所（またはお気に入りの場所)」の名前とその場所の様子では、「あなたが何をしているか。」「廻りの様子はこのようだった。」などを、簡単な文章やイラストで記入するよう教示し、「あなたが何をしているか」「周りの様

子はこのようだった。」などを自由に記述してもらった。このような自由記述文を、本論文では、『場所』の様態表現と定義した（1.3.）。『場所』の様態表現は、オフィスワーカーのみならず、ほとんど全ての都市生活者が行いうる、一般的な表現方法と考えられ、生活者の生活や構築された『場所』の情景などを、基本的なコミュニケーション手段である言語によって生き生きと表現できる。このような特徴を持つ『場所』の様態表現に関する基礎的考察を行うことは、建築および都市の計画者・デザイナーと都市生活者の乖離（GAP）を意識し、解決する上でも重要な建築および都市の計画・デザイン上の視点であると考える。

秋の気配　作詞・作曲・編曲/小田和正

あれがあなたの　好きな場所
港が見下ろせる　小高い公園

あなたの声が　小さくなる
僕は黙って　外を見てる

目を閉じて　息をとめて
さかのぼる　ほんのひととき

こんなことは　今までなかった
僕があなたから　離れてゆく
僕があなたから　離れてゆく

たそがれは　風を止めて
ちぎれた雲はまた　ひとつになる

あの歌だけは　他の誰にも
歌わないでね　ただそれだけ

大いなる　河のように
時は流れ　戻るすべもない

こんなことは　今までなかった
別れの言葉を　探している
別れの言葉を　探している

ああ　嘘でもいいから　微笑むふりをして

僕のせいいっぱいの　やさしさを
あなたは受け止める　はずもない

こんなことは　今までなかった
僕があなたから　離れてゆく

こんなことは　今までなかった
僕があなたから　離れてゆく

詩7−1　アーティストによる『場所』の様態表現の例

（出典：小田和正　自己ベスト，株式会社 BMG ファンハウス，2002 年）

表 7−1　アンケート概要

番号	アンケート項目		回答形式	対応するデータシートの項目
(1)	フェイスシート	・氏名・住所・電話(FAX)番号・E-mail Address・性別・年齢・職業・勤務先住所、現住所に至る居住履歴を記入。	自由記述	−
(2)	「居心地の良い場所(またはお気に入りの場所)」の名前とその場所の様子	・自宅、職場以外の場所を記入。 ・「場所は1〜4箇所まで、簡単な文章やイラストで自由に記述」と教示した。 ・「あなたが何をしているか」「周りの様子はこのようだった」等を記入するよう教示した。	自由記述	「場所の名前」 「場所の自由記述表現」
(3)	場所の位置	・自宅・職場・最寄駅・交通機関と場所の位置を略図によって記入。	略図	−
(4)	理由	・どうしてその場所が居心地が良いのかを記入。	自由記述	1. 理由
(5)	情報源	・どのようにしてその場所を知ったのかを記入。	自由記述	2. 情報源
(6)	同伴者	・誰と行くのかを記入。	自由記述	3. 同伴者
(7)	頻度	・どのくらいの頻度で行くのかを記入。	週・月・年単位の回数	4. 頻度
(8)	滞在時間	・1回の滞在時間はどのくらいなのかを記入。	分・時間・日数	5. 滞在時間
(9)	工夫・対処	・その場所をもっと居心地良くするための工夫・対処を記入。	自由記述	6. 工夫・対処

※1　網掛け：本章の考察対象としたアンケート項目

※2　アンケートには、当該都市圏のカラー地図(縮尺12万分の1、A3判)を添付した。

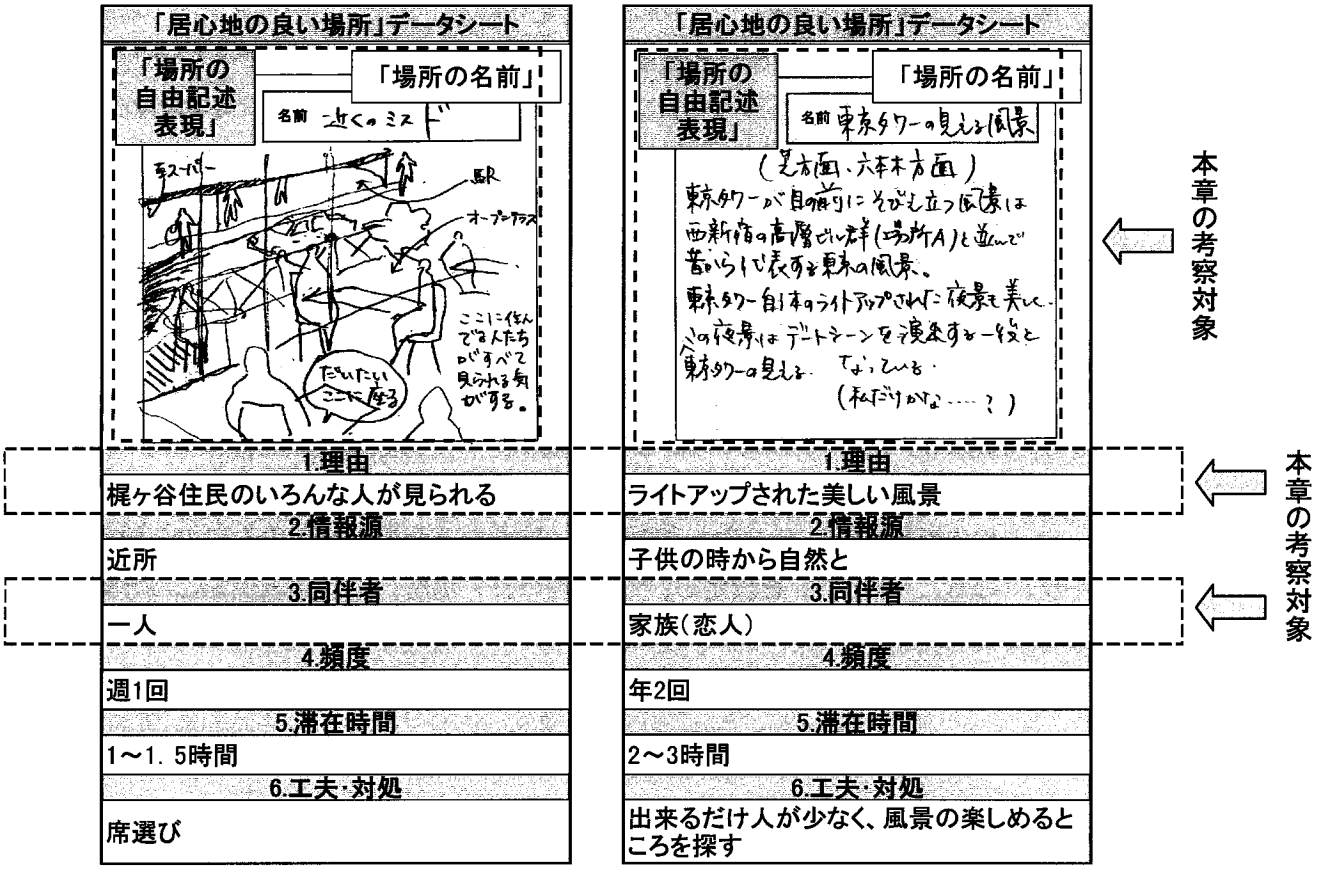


図 7−1　「居心地の良い場所」のデータシート

また、アンケート項目（3）理由では、「どうしてその『場所』が居心地が良いのか」を記入してもらい、居心地が良い理由を収集した。居心地が良い理由は、2.2.8.で述べたように、理由を質問することによって得られた、上位かつ抽象的な評価に関する『場所表現』であり、これを考察することにより、「居心地の良い場所」における評価的な人間―環境関係を抽出する[注3]。

7.3. 調査結果と考察

7.3.1. 考察の方法

収集された『場所』の様態表現は、表 7－1 に示すように、「場所の自由記述表現」は、イラストが付加される場合があったが、大半は文章による表現であり、居心地が良い理由は全て文章による表現であった[注4]。

Canter[注5]によれば、場所は概ね「DO（する）」と「FEEL（感じる）」によって表現されるとされているが、本調査で得られた『場所表現』においては、その枠組みではとらえきれない表現も見られた。例えば「日常の疲れを解消しに行く『場所』」などは、「疲れを解消する」というその場の行為（DO）に留まらず、「その目的のために、高い頻度でわざわざ行く」という日常生活における活動（ACT）がその『場所』から読み取れ、都市生活の質を向上させるためにその『場所』を構築しているとも考えられる。また「ボーッとする『場所』」などは、何かを感じる（FEEL）『場所』ととらえるよりも、忘我的な状態になって（BECOME）いる『場所』ととらえるべきである。さらに「緑が多い『場所』」などは、ヒトの行為や内面的な状態が表現されないにもかかわらず、「モノの状態や性質」のみで「居心地の良い場所」として表現され得る。本論文は、このような『場所』の様態表現も取り扱い、『場所』における人間―環境関係を考察すべきとの考えから、日本語における文法や語法を参照し[注6]、文章表現における主語、述語および修飾語があらわす事態に着目して、語の分類基準を設定した（表 7－3）。

『場所表現』の主語は、大きく「ヒト」と「モノ」に分類でき、「ヒト」は「自分」「同伴者」「他者」「管理者」等がみられ、「モノ」は『場所』の「物的要素」と位置づけられた[注7]。同様に述語は、モノやヒトの動きや状態等の事態を表わすと考えられ、本論文ではヒトの活動、ヒトの内面的状態、ヒトやモノの性質・特徴をそれぞれ表現する語の分類軸として、「する」「なる」「である」を設定し、「居心地の良い場所」の様態表現をこの分類軸によって分類することを試みた。

表7−2　『場所』の記入方法

居心地が良い理由		全回答者：文章のみ			
「場所の自由記述表現」		文章のみ	文章＋イラスト	イラストのみ	無記入
東京圏	場所数	204	92	9	1
	%	67%	30%	3%	0%
	場所合計	306			
大阪圏	場所数	79	59	9	1
	%	53%	40%	6%	1%
	場所合計	148			
全体	場所数	283	151	18	2
	%	62%	33%	4%	0%
	場所合計	454			

表7−3　「居心地の良い場所」の様態表現に用いられる語の分類基準

<table>
<tr><td colspan="3" rowspan="5"></td><td colspan="10">述語および修飾語が表す事態</td></tr>
<tr><td colspan="3">動き（動的事態）</td><td colspan="7">状態（静的事態）</td></tr>
<tr><td colspan="3">ヒトの活動</td><td colspan="4">ヒトの内面的状態</td><td colspan="3">ヒトやモノの性質・特徴</td></tr>
<tr><td colspan="3">「する」</td><td colspan="4">「なる」</td><td colspan="3">「である」</td></tr>
<tr><td>動詞</td><td>形容詞</td><td>様態の副詞</td><td>動詞</td><td>形容詞</td><td>様態の副詞</td><td>動詞</td><td>形容詞</td><td>様態の副詞</td></tr>
<tr><td rowspan="5">主語</td><td rowspan="4">ヒト</td><td>自分</td><td rowspan="4">継続活動動詞
テイル形複合動詞
など</td><td rowspan="4">−</td><td rowspan="4">様態の副詞＋
スル・テイル
など</td><td rowspan="4">状態変化動詞
テイル形複合動詞
感情動詞
など</td><td rowspan="4">感情形容詞など</td><td rowspan="4">様態の副詞＋
スル・テイル
など</td><td rowspan="5">状態動詞など</td><td rowspan="5">属性形容詞など</td><td rowspan="4">−</td></tr>
<tr><td>同伴者</td></tr>
<tr><td>他者</td></tr>
<tr><td>管理者</td></tr>
<tr><td>モノ</td><td>物的要素</td><td colspan="3">−</td><td colspan="3">−</td><td>様態の副詞＋
テイルなど</td></tr>
</table>

7.3.2. 自由記述表現における「する」「なる」「である」

分類作業の結果、自由記述表現は、『場所』の様態以外の内容を表現している場合も見られた（表 7−5)。『場所』の具体的な位置や、自宅・職場からの距離、頻度、滞在時間などが見られた[注8]。

『場所』の様態表現については、物的要素の「である」が最も多く、次いで自分の「する」、自分の「なる」が多く得られた（図 7−4)。同伴者、他者に関しても、同伴者の「である」、他者の「する」「である」などの語がある程度得られた。これら出現度の高い様態表現について、それぞれの語を表計算用ソフトウェア[注9]に入力し、KJ 法的[注10]に似ている語を寄せ集めて、分類・整理し、図 7−2〜図 7 - 8 を得た。

自分の「する」では、風景を眺める・街並みを眺めるなどの「見る」、散歩・ぶらぶら歩くなどの「動く」、遊ぶ・買い物をするなどの「遊ぶ」などの語が多く得られた。自分の「なる」では、ボーッとする・リラックスする・落ち着くなどの「リラックスする」、楽しむ・面白いなどの「楽しむ」などの語が多く得られた。

同伴者の「である」では、居る・居ないという「存在」を示す語が多く得られ、同伴者の有無が『場所構築』に関係することが示された。他者の「する」では、自分と同様に、歩く・遊ぶなどの語が多く得られ、他者の「である」では、「存在」を示す語だけでなく、多いなどの「数量」を示す語が多く得られた。

物的要素に関しては、主語と述語を分けて整理した。主語では、雰囲気・風景・アフォーダンス[注11]などの『場所』の全体的要素や、店・建築物など『場所』の建築的要素に着目した語が得られ、述語では、ある・多いなどの「存在」「数量」を示す語のほか、「見られる」「楽しめる」などの可能表現が多く得られ、これらはヒトの「する」「なる」に対応した『場所のアフォーダンス』に関する語として分類し、「する」「なる」および「である」の双方にカウントした。これらの語は、いずれもヒトの活動や内面の状態、同伴者や他者、モノの状態を表現する日常的に馴染みの深い語である。

図 7−2〜図 7−8 において、特に多く得られた語を、『場所』の様態表現における代表的キーワード（図 7−2〜図 7−8 の網掛け部分の語）として、さらに考察を行った。

表 7－4　自由記述表現における「する」「なる」「である」

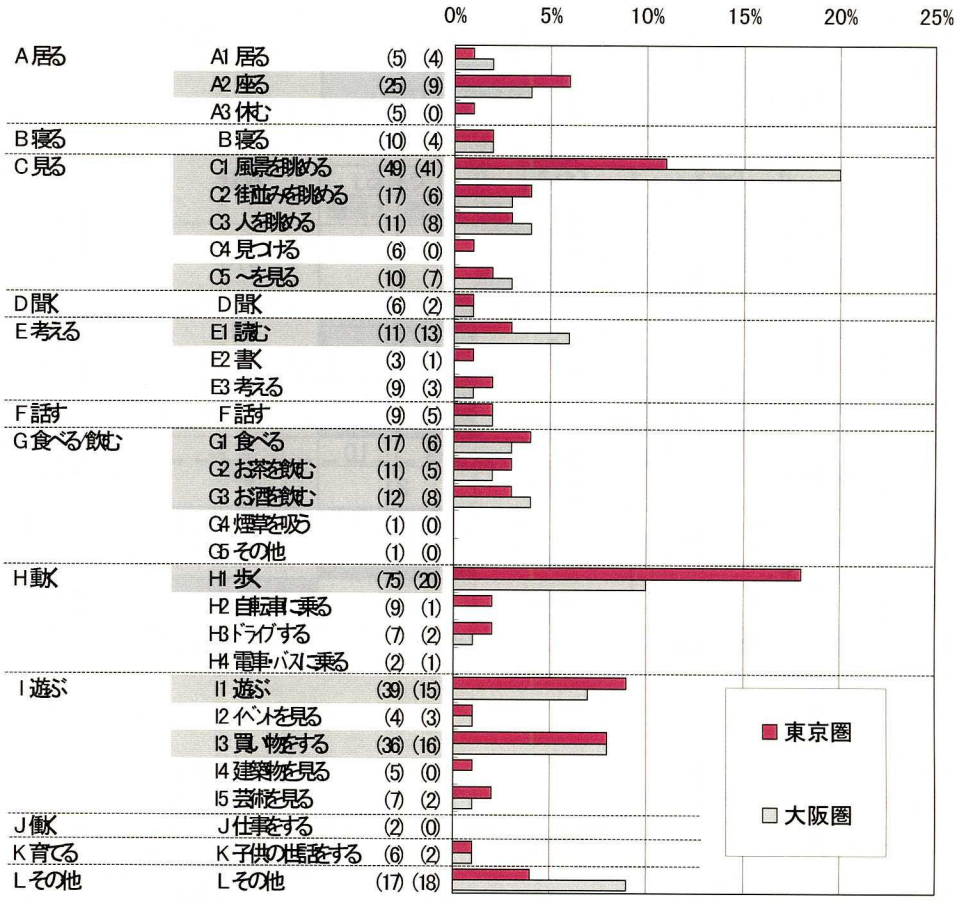
自分の「する」　自分の「なる」

			述語 「する」 東京圏	「する」 大阪圏	「する」	「なる」 東京圏	「なる」 大阪圏	「なる」	「である」 東京圏	「である」 大阪圏	「である」	合計
主語	ヒト	自分	427	202	629	232	109	341	－	－	－	970
		同伴者	1	1	2	0	0	0	50	29	79	81
		他者	59	17	76	7	2	9	54	20	74	159
		管理者	2	5	7	0	0	0	11	10	21	28
	モノ	物的要素	－	－	－	－	－	－	662	374	1036	1036
合計			714			350			1210			2274

同伴者の「である」
他者の「である」
他者の「する」
物的要素の「である」（述語）
物的要素の「である」（主語）

表 7－5　自由記述表現における「する」「なる」「である」以外の表現

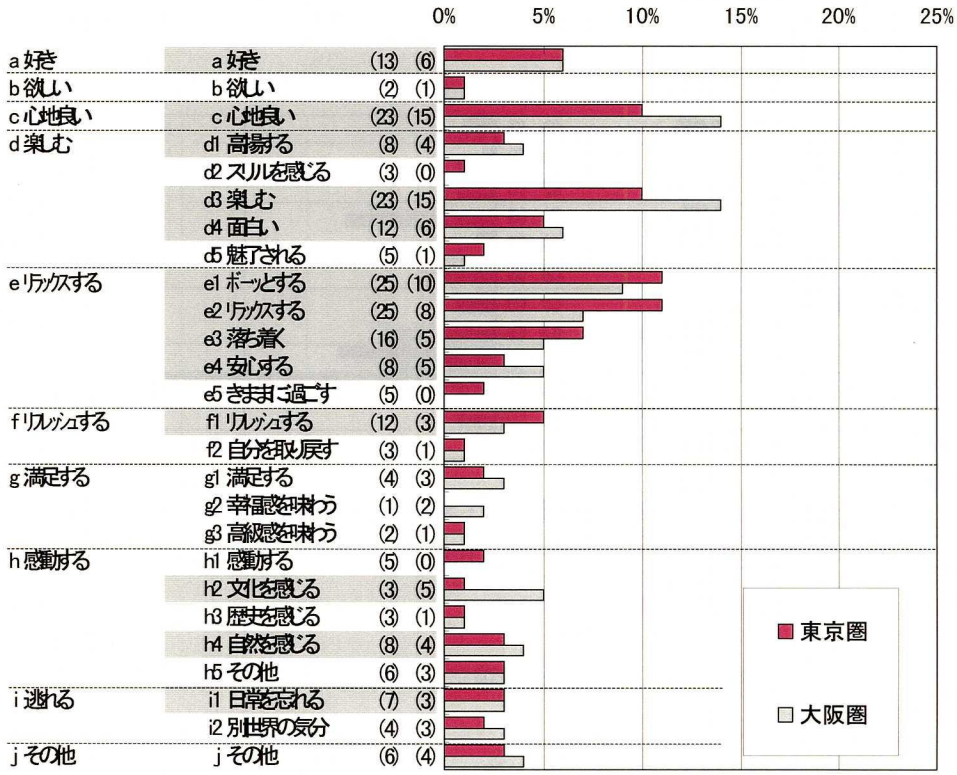
	表現の例	東京圏 語数	東京圏 %	東京圏 語数	東京圏 %	大阪圏 語数	大阪圏 %	大阪圏 語数	大阪圏 %	全体 語数	全体 %	全体 語数	全体 %
場所の位置・距離	「家の近く」「銀座のまん中」「川のそば」など	68	21%	317	100%	63	30%	209	100%	131	25%	526	100%
日常行動	「毎日」「毎週」「通勤途中」「いつも」など	23	7%			11	5%			34	6%		
なじみ	「定番」「いつもの」など	10	3%			4	2%			14	3%		
過去の様態	「昔からある」「子供の時から変わらない」など	18	6%			9	4%			27	5%		
時間の限定・非限定	「朝早く」「夜」「休日」「天気が良い日」など	72	23%			57	27%			129	25%		
頻度	「よく」「時々」「月1回」「毎年」など	17	5%			5	2%			22	4%		
滞在時間	「1～2時間」など	2	1%			0	0%			2	0%		
補足説明	「良い」「お墓がある」など	107	34%			60	29%			167	32%		
		317	100%	317	100%	209	100%	209	100%	526	100%	526	100%



注 1)　（　）（　）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた語数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた自分の「する」の語数（表 7－4（P137）参照）に対する割合を示す。

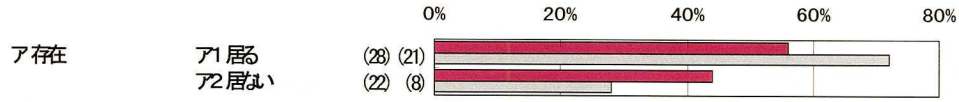
図 7－2　自由記述表現における自分の「する」



注 1)　（　）（　）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた語数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた自分の「なる」の語数（表 7－4（P137）参照）に対する割合を示す。

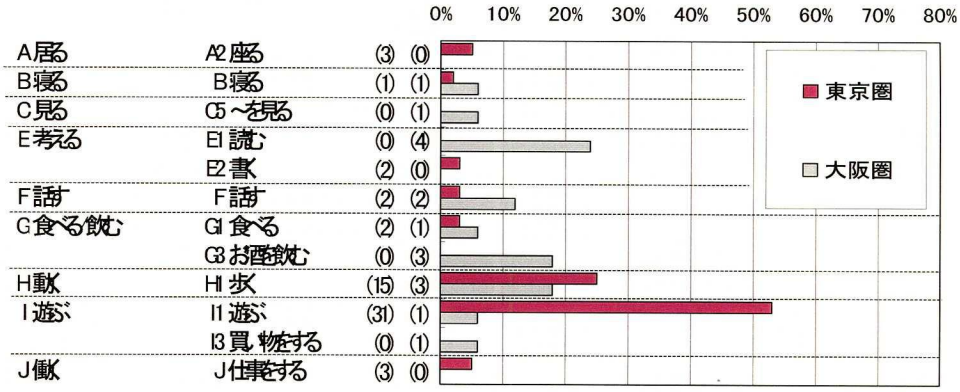
図 7－3　自由記述表現における自分の「なる」



注 1)　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた語数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた同伴者の「である」の語数（表 7－4（P137）参照）に対する割合を示す。

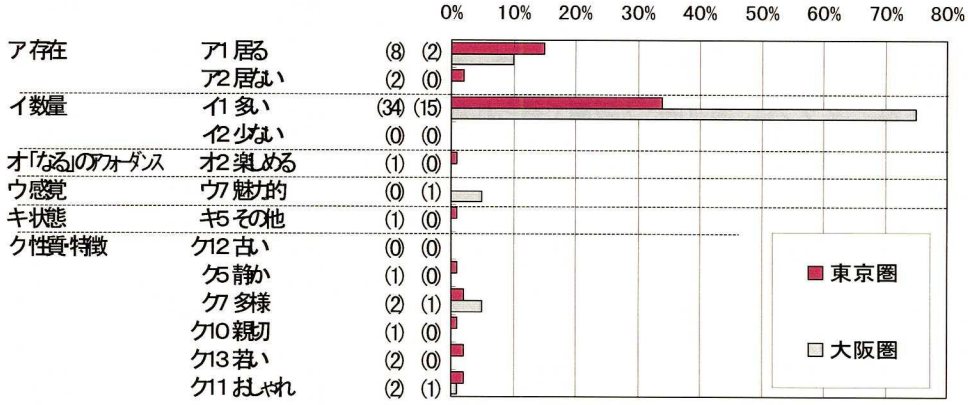
図 7－4　自由記述表現における同伴者の「である」



注 1)　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた語数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた他者の「する」の語数（表 7－4（P137）参照）に対する割合を示す。

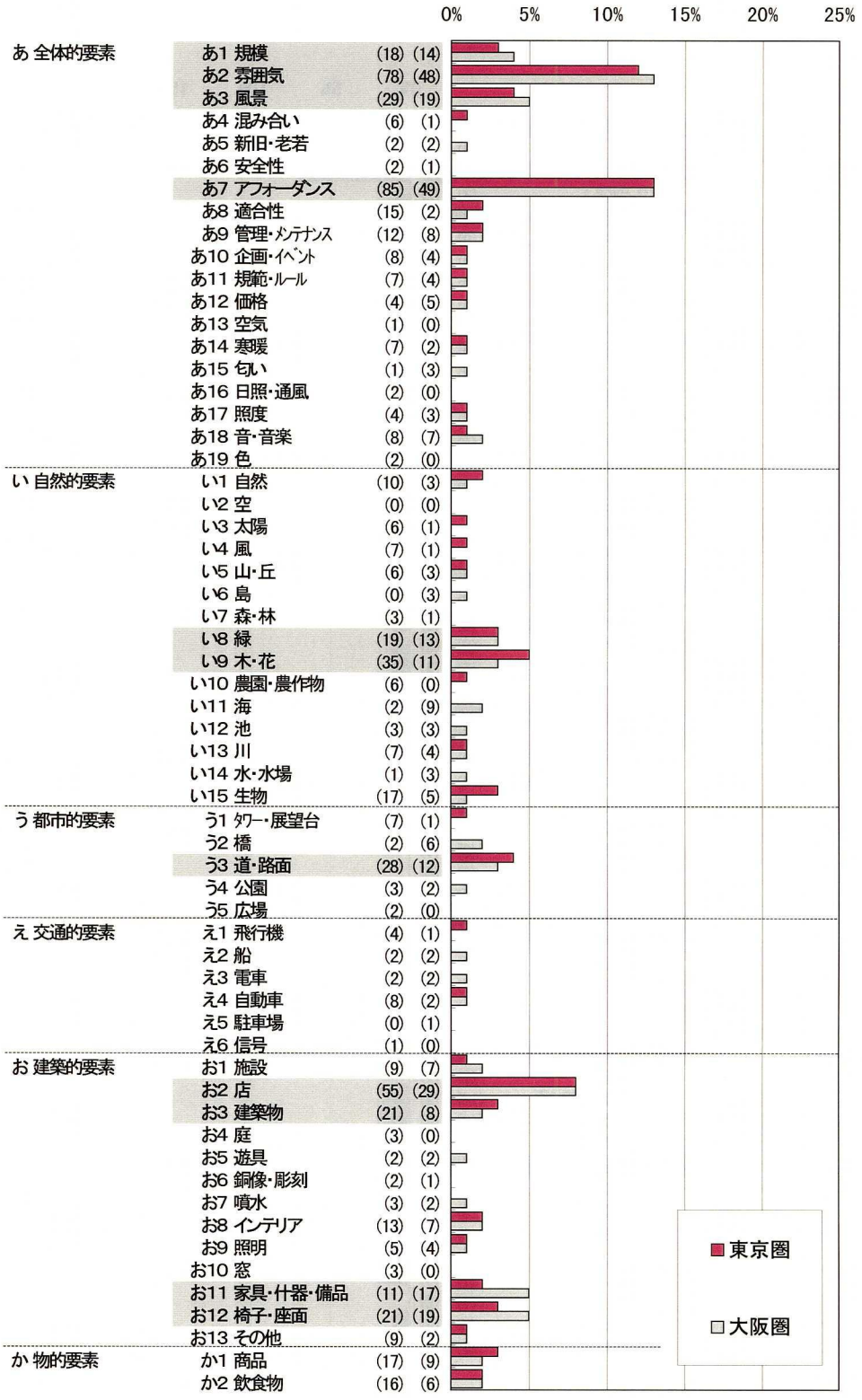
図 7－5　自由記述表現における他者の「する」



注 1)　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた語数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた他者の「である」の語数（表 7－4（P137）参照）に対する割合を示す。

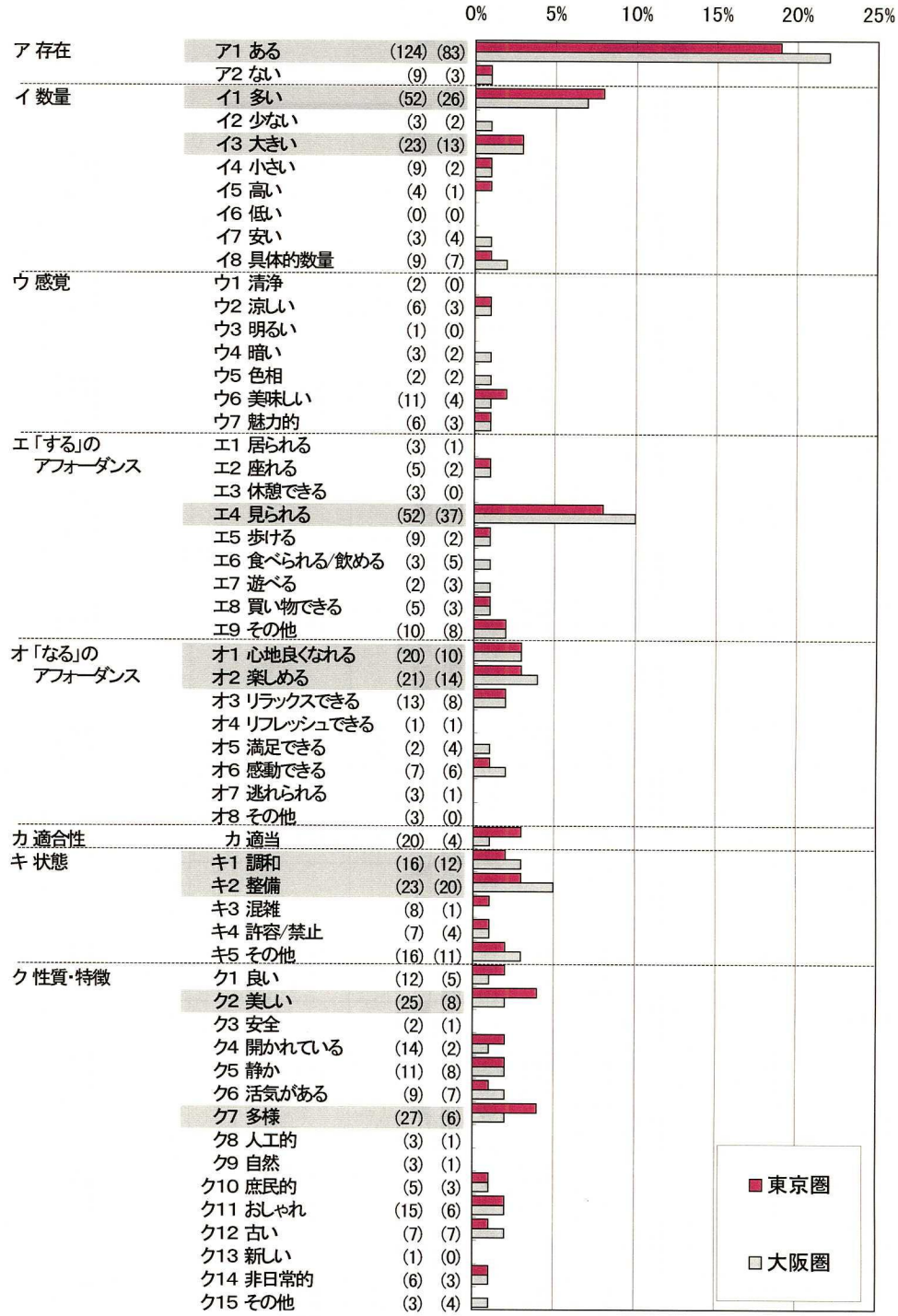
図 7－6　自由記述表現における他者の「である」



注 1)　（ ）（ ）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた語数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた物的要素の「である」（主語）の語数（表 7－4（P137）参照）に対する割合を示す。

図 7－7　自由記述表現における物的要素の「である」（主語）



注 1)　（　）（　）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた語数。

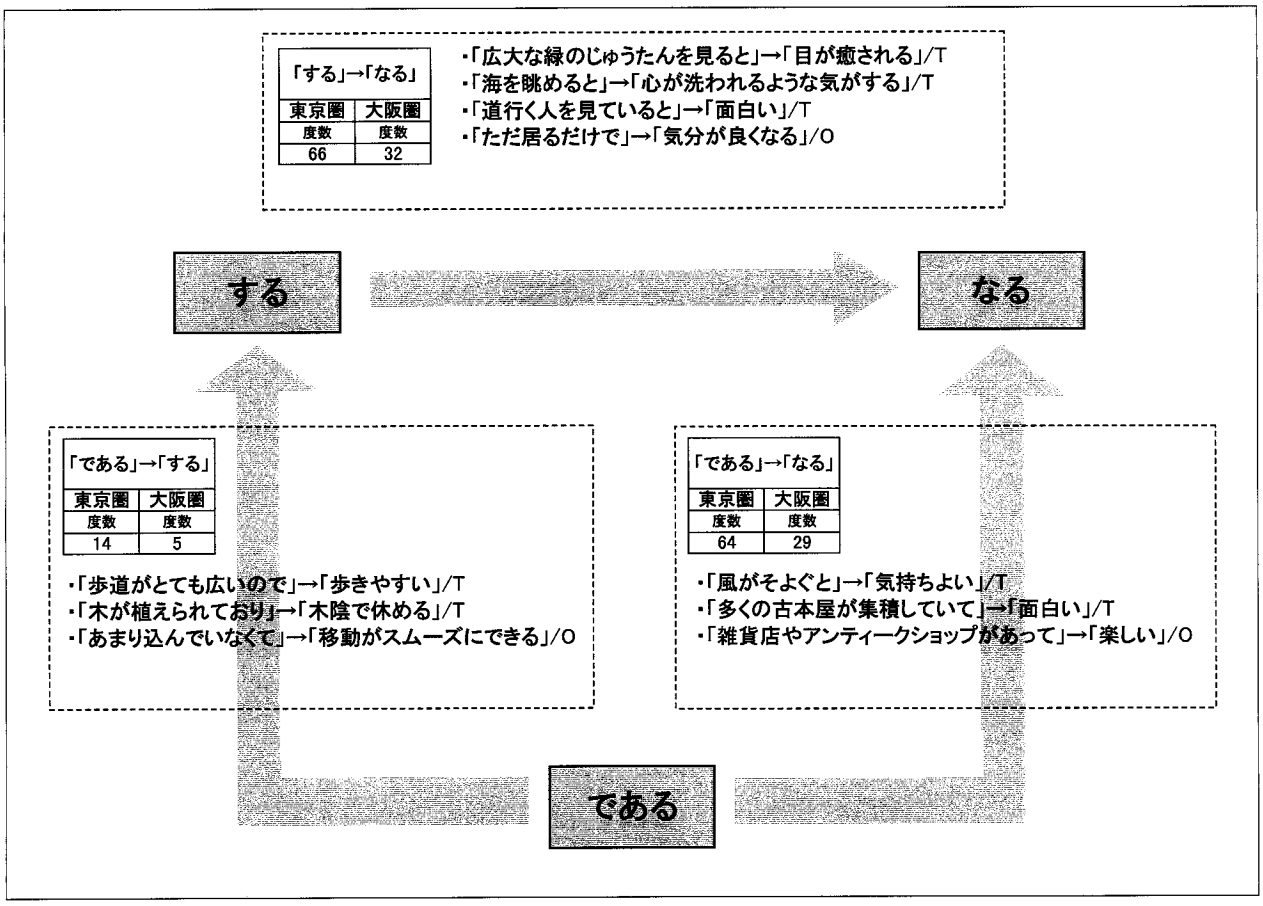
注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた物的要素の「である」（述語）の語数（表 7－4（P137）参照）に対する割合を示す。

図 7－8　自由記述表現における物的要素の「である」（述語）

7.3.3. 代表的キーワードにおける「居心地の良い場所」の人間-環境関係

「居心地の良い場所」の様態は、7.3.2. において得られた語の組み合わせによって表現されるが、『場所』における人間-環境関係を考える上では、語と語の関係を考察する必要がある。また、1.3. で述べたように「居心地の良い場所」における人間－環境関係は、相互不可分な関係を持つと考えられ、これらの分類された語および代表的キーワードによって、どのような「居心地の良い場所」が成立しているのか確認する必要がある[注12]。

語と語の関係については、「前者のために後者が現出する」という意味を示す「ため」「から」「ので」などの接続詞に着目して考察を行い[注13]、図7－9を得た。「する」「なる」「である」間には接続詞によってこのような順序で結ばれる関係があり、「なる」は「する」や「である」の影響から、結果的に現出する上位かつ抽象的的な『場所』の様態と考えられる。



注1)　/T は東京圏のデータ、/0 は大阪圏のデータを示す。

注2)　表の語数は、各タイプ内での語数であり、%は代表的キーワードの総数に対する割合を示す。

図7－9　自由記述表現のキーワード間の接続関係

また、代表的キーワードが含まれる『場所』について、「する」「なる」「である」の組み合わせからみた「居心地の良い場所」のタイプ分類を行った（図 7−10、図 7−11）。図 7−10 は、自分の「する」、自分の「なる」、物的要素の「である」および、それらの組み合わせによって表現される「居心地の良い場所」であり、(1) ～ (7) のタイプが見出された。(1) (3) は、自分の「する」のみ、物的要素の「である」のみによる『場所』の様態表現であり、自分の活動、モノの性質・特徴のみで『場所』の性質が表現され、それぞれ「～する場所」「～である場所」であると言える。(7) は図 7−10 で最も多く得られた「居心地の良い場所」のタイプであり、自分と物的要素の間に多様な関係が見られ、「する」「なる」「である」が一体的に『場所』の性質を形成し、「～で～して～なる場所」と分類できる。

図 7−11 は、同伴者・他者・管理者など、自分以外のヒトに関する表現が含まれる「居心地の良い場所」のタイプである。(8)、(9)、(10) は、自分以外は同伴者のみ、他者のみ、管理者のみの様態が含まれる「居心地の良い場所」のタイプであり、それぞれ同伴者、他者、管理者によってその『場所』の性質が形成されていると考えられ、「同伴者が居る場所」「他者が居る場所」「管理者が居る場所」と言える。(8) においては、同伴者が居ないという「一人」の状態が含まれ、一人であることが『場所』の性質を形成している。その場合は、「一人の場所」と言える。(14) は、同伴者・他者・管理者という自分以外のヒトの様態が強く関係する「居心地の良い場所」であり、周囲のヒトと一体で形成される公共性の高い『場所』であると考えられ、「みんなの場所」と言える。

(2)自分の「なる」のみ

～該当例なし～

「～なる場所」

・「キャンパスの建物入り口に、低めの階段がたくさんあり、座りやすい。 車が通らないので落ち着く。」（東京大学(本郷)/T）
・「夜に行ってぶらぶら歩いたり、座ったりしてのんびりする。前は海、左はTDL、右はお台場、東京タワーも見えてちょっといい感じ。」（葛西臨海公園/T）
・「(略)ベンチが多いので、座ってボーッとできる。」（桂川の土手/O）

・「遠くに見えるみなとみらいの風景や、反対の山の風景を見ながら、風がそよぐと 気持ちいい。(略)」（家の近くの高台/T）
・「通勤電車の中から見える桜を、毎年楽しみにしている。（桜の季節の中央線/T）
・「通勤に利用する。(略)のんきでローカルな路面電車だが、ほのぼのした気持ちになれる。」（阪堺電車/O）
・「ボーッとしたり、ビール飲んだり、ウインドサーフィンを眺める。夕日がきれい。たまに魚がはねている。」（検見川浜/T）
・「海側が木のデッキで歩きやすく、海風がさわやか。東京タワーとレインボーブリッジが眺められる。屋形船がこれに加わると、東京の下町らしさが感じられて、面白い風景だと思う。」（デックス東京ビーチ/T）
・「(略)川と橋が見えて、ゆっくりできる。」（三条大橋のスターバックス/O）
・「風景を見る(イラスト。)緑が多く、昔ながらの建物があり、都会の中に居ながら、ノスタルジックな気分になれる。」（中ノ島の川辺/O）

・「有名な会社とか、様々な景色が見られて、走っているだけで、観光しているみたい。」（首都高速/T）

「～で～して～なる場所」

(7)自分の「する」×自分の「なる」×物的要素の「である」

			東京圏 語数	東京圏 %	大阪圏 語数	大阪圏 %
自分の「する」						
	A2	座る	7	28%	1	11%
	C1	風景を眺める	23	47%	13	32%
	C2	街並みを眺める	8	47%	1	17%
	E1	読む	2	18%	4	31%
	G1	食べる	6	35%	3	50%
	G2	お茶を飲む	3	27%	1	20%
	H1	歩く	19	25%	4	20%
	I1	遊ぶ	13	33%	3	20%
	I3	買い物をする	7	19%	4	25%
自分の「なる」						
	c	心地良い	7	30%	6	40%
	d1	高揚する	4	50%	2	50%
	d3	楽しむ	11	48%	7	47%
	d4	面白い	4	33%	4	67%
	e1	ボーッとする	10	40%	3	30%
	e2	リラックスする	12	48%	3	38%
	e3	落ち着く	4	25%	0	0%
	e4	安心する	1	13%	2	40%
	f1	リフレッシュする	3	25%	1	33%
	h2	文化を感じる	1	33%	3	60%
	h4	自然を感じる	4	50%	2	50%
物的要素の「である」(主語)						
	あ2	雰囲気	21	27%	18	38%
	あ3	風景	10	34%	8	42%
	あ7	アフォーダンス	37	44%	18	37%
	い9	木・花	9	26%	3	27%
	う3	道・路面	4	14%	5	42%
	お2	店	18	33%	10	34%
	お3	建築物	7	33%	2	25%
	お11	家具・什器・備品	4	36%	0	0%
	お12	椅子・座面	4	19%	4	21%
物的要素の「である」(述語)						
	ア1	ある	27	22%	18	22%
	イ1	多い	11	21%	10	38%
	イ3	大きい	4	17%	3	23%
	エ4	見られる	24	46%	9	24%
	オ1	心地良くなれる	6	30%	3	30%
	オ2	楽しめる	11	52%	7	50%
	キ1	調和	0	0%	3	25%
	キ2	整備	7	30%	2	10%
	ク2	美しい	7	28%	2	25%
	ク7	多様	10	37%	0	0%

・「本を読む(イラスト)。足が疲れるけど、夏は涼しくて家に居るより快適。」（古本屋/O）

・「皇居のお堀に面した、ガラスをたくさん使ったレストランで、皇居の緑と公園の水(噴水)を見ながら、お食事をする。」（和田倉噴水公園/T）
・「(略)窓の外にもみじがあり、涼しげ。風が心地良く、落ち着く。ゆったり座り、食べている。」（深川の深川丼の店/T）
・「いかにも大阪と言う感じ。特にグリコマーク。パワフルさを感じる。道端でたこ焼きが食べられたり、お祭り気分を味わえる。」（アメリカ村、心斎橋かいわい/O）

・「店内がある程度広くて、開放感がある。本があって、コーヒー一杯でゆっくり出来る。」（喫茶店下高井戸コロラド/T）

・「町がレジャーランドみたいな作りで、かわいい雑貨屋、洋服屋があるので、ただ歩いているだけで、楽しい。」（自由が丘/T）
・「老舗のそばや、甘味処、お菓子屋が多く点在していて、散策にちょうど良い。 古い家屋が歴史の古さを感じられて、趣がある。」（淡路町かいわい/T）

・「水族園も楽しい。海を眺めると、心が洗われるような気がする。」（葛西臨海公園、他/T）
・「とにかく楽しい。乗りものに乗る。」（ユニバーサルスタジオ・ジャパン/O）

・「会社帰りにちょっと立ち寄り。仕事が終わった開放感。お買い物。」（無印(京橋)/O）

・「(略)通学・通勤で川の上を往復している。(略)富士山が見えるとちょっと嬉しい。」(多摩川/T)

・「(略)たくさんの本、低いベンチも設置されている。落ち着いて選べるし、気持ちがゆったりする。」（池袋ジュンク堂/T）
・「(略)たくさんの種類のバラが植えてある。(略)水上バスも楽しい。」（中ノ島バラ園/O）

・(略)「いわくありげな独特の雰囲気。迷宮的。(略)使える店が意外に多い。意外性があり、面白い。(略)」（大阪駅前第一～第四ビル/O）

「～で～なる場所」

(6)自分の「なる」×物的要素の「である」

			東京圏 語数	東京圏 %	大阪圏 語数	大阪圏 %
自分の「なる」						
	c	心地良い	5	22%	2	13%
	d1	高揚する	0	0%	1	25%
	d4	面白い	3	25%	1	17%
	f1	リフレッシュする	3	25%		0%
	h2	文化を感じる	1	33%	1	20%
物的要素の「である」(主語)						
	い8	緑	4	21%	1	8%
	い15	生物	0	0%	2	40%
	お3	建築物	1	5%	2	25%
物的要素の「である」(述語)						
	オ1	心地良くなれる	4	20%	2	20%
	オ2	楽しめる	8	38%	4	29%
	ク2	美しい	5	20%	0	0%

・「(略)きれいなお店、カフェ等が多く、品の良い感じ。街全体が居心地良い雰囲気。緑も多い。」（二子玉川/T）
・「(略)全体的に開けていて、気分爽快。」（有明テニスの森公園/T）

・「桜の季節、屋台などがたくさん出て、お祭り気分が味わえる。」（造幣局の通りぬけ/O）
・「いろんなものが売られていて、面白い。」（ドン・キホーテ/T）

・「常設・企画ともに展示が面白い。開放感のあるカフェが居心地が良い。緑もきれい。」（原美術館/T）
・「小さいかわいいおみせがちょこちょこあって、(略)楽しい。古い建物が、今も実際に使われていて、古き良き文化の香りがする。」（神戸の元町）

・「日常の疲れと、イライラ感を解消しにいく場。何も考えずにボーッとでき、 またリラックスもできる。次の日からの活力を蓄える場。」（溝口のマッサージ店/T）

・「サントリーホールやカラヤン広場が文化的な感じがする。オープンカフェも良い。都会の中のオアシスといった感じで落ち着く。」（アーク森ビル/T）
・「(略)交通の便が良く、周辺もいろいろなお店があり、中も快適で、面白い出し物が多い。」（シアタードラマシティ/O）

「～して～なる場所」

(4)自分の「する」×自分の「なる」

			東京圏 語数	東京圏 %	大阪圏 語数	大阪圏 %
自分の「する」						
	E1	読む	3	27%	1	8%
自分の「なる」						
	d1	高揚する	2	25%	0	0%
	e4	安心する	1	13%	1	20%

・「他人の音が聞こえないくらい集中して読む、書く、暗記する。(略)」（図書館(資料室)/T）
・「横浜支店から本社へ行く時、車中での読書は気持ちが良い。特に、最初読書、最後に昼寝が最高。」（昼間の電車の中/T）

・「会社帰りに寄るのが楽しい。買い物はいつでも楽しいし、なんとなく心が弾む。」（新宿のデパート/T）

・「自宅より徒歩5分の公園。特別何があるわけでもないが、子供の頃から行きなれているので、行くとほっとする。」（金岡公園/O）

「～する場所」

(1)自分の「する」のみ

			東京圏 語数	東京圏 %	大阪圏 語数	大阪圏 %
自分の「する」						
	G2	お茶を飲む	0	0%	1	20%
	I1	遊ぶ	2	5%	4	27%
	I3	買い物をする	10	28%	3	19%

・「ぶらぶらする。お茶する。買い物する。」（東京都国立駅前/O）

・「昼寝。フリスビーやキャッチボールをする。」（豊中市千里中央公園/O）
・「テニスをする。」（大阪市西淀川区中島公園/O）

・「アクセサリーを眺める。自分がつけたシーンを想像し、空想の世界へ入る。」（西武百貨点バカラショップ/T）
・「(略)ホームズアンダーウェアへ行く。」（恵比寿/T）
・「ITOYAをぐるぐる廻る。」（銀座ITOYA/T）
・「映画のチケットを買うとき。」（映画館の入り口/T）
・「会社が江里や休日に、よく買い物に行く。」（新宿高島屋/T）
・「毎週、食料品の調達に出かける。」（武蔵新城商店街/T）

「～で～する場所」

・「少し早めに来て映画券を購入し、席が座れないことはないから、時間になったら行く。テイクアウトできる食事のお店もたくさんあるので、持ち込んで食べる。」（イクスピアリにある映画館/T）
・「(略)ふかふかのソファで休憩できるので、買い物の間に必ず立ち寄るスポット。(略)いつもほぼ座れるのも、お気に入りの理由。(略)」（玉川高島屋SCグランパティオ/T）

・「土手に座りこんでいる。対岸に国府台の森が見える。」（江戸川の土手/T）
・「府民の森にあるログハウスから大阪の街が見える。(略)」（府民の森/O）
・「土手にベンチがある。夕日が見える。」（四谷/T）
・「晴れた日に通勤電車から見える海と淡路島。空気が澄んでいる日はとてもきれい。」（通勤電車の中/O）
・「東京タワーが目の前に聳え立つ風景は、昔から東京を代表する風景。東京タワー自体のライトアップされた夜景も美しく、デートシーンを演出する一役となっている(略)」（東京タワーが見える風景/T）
・「大阪空港、大阪・神戸が見渡せる。淀川、PL花火も鑑賞できて、静か。」（中山桜台の土手/O）

・「日蓮宗総本山の大きいお寺さん。(略)散歩がてらぶらぶら行き、甘酒とかを飲む。」（池上本門寺/T）
・「休日の日中に、よく喫茶店に行く。(略)」（江坂/O）

・「散歩。ショッピング。お茶。(略)木がいっぱい。ベンチ多数。おしゃれなお店。」（自由が丘マリクレール通り/T）

・「会社帰りに自転車で通ると、リバーシティ・有楽町の夜景がきれい。 休日も開放感があって良い。」（勝関橋/T）
・「美味しい食べ物屋が多い。路地に入ると専門店があったりする。この間はかりんとうやを見つけた。やたら祭りが多い。」（浅草雷門周辺/T）
・「食事をしたり、ただ中に入ってみたりする。明治期に建ったクラシカルな建物で、落ち着いた雰囲気。(略)」（ホテルニューグランド/T）
・「視界の端から端までスクリーンと言う席が選び放題。(略)」（映画館(シネコン)/O）

(5)自分の「する」×物的要素の「である」

			東京圏 語数	東京圏 %	大阪圏 語数	大阪圏 %
自分の「する」						
	A2	座る	5	20%	2	22%
	C1	風景を眺める	11	22%	8	20%
	C2	街並みを眺める	4	24%	1	17%
	G2	お茶を飲む	4	36%	1	20%
	I3	買い物をする	8	22%	0	0%
物的要素の「である」(主語)						
	あ3	風景	12	41%	4	21%
	お2	店	12	22%	1	3%
	お3	建築物	5	24%	0	0%
	お11	家具・什器・備品	1	9%	4	24%
	お12	椅子・座面	6	29%	2	11%
物的要素の「である」(述語)						
	イ1	多い	12	23%	3	12%
	イ3	大きい	4	17%	3	23%
	エ4	見られる	18	35%	9	24%
	ク2	美しい	6	24%	3	38%

(3)物的要素の「である」のみ

			東京圏 語数	東京圏 %	大阪圏 語数	大阪圏 %
物的要素の「である」(主語)						
	い9	木・花	1	3%	3	27%
	お2	店	7	13%	9	31%
	お3	建築物	2	10%	4	50%
物的要素の「である」(述語)						
	キ1	調和	4	25%	1	8%
	キ2	整備	3	13%	7	35%
	ク2	美しい	1	4%	5	63%

「～である場所」

・「古い建物(石作り)が立ち並び、所々に内部を改装して、おしゃれな店舗がある町並み。」（元町居留地/O）
・「もみじがとてもきれい。」（常寂光寺/O）
・「一区画が大きな邸宅が並び、整然としていて、美しい。周囲と調和している。自然と一体感あり。」（近所の町並/T）
・「落ち着いた雰囲気の店。(略)」(定食屋「志乃」/T)
・「自然と都市が融合。」（お台場/T）
・スーパーとホームセンターとファミレスと軽く食べるところが一つの敷地内にある。」（関西スーパー大大和店/O）

・「祇園の白川沿いで、片側が町屋で、対岸が石畳のところ。桜が川沿いに植えてある。夜はライトアップされて、とてもきれい。」（祇園の白川あたり/O）
・「(略)桜の木がたくさんあって、春になると本当にきれい。」（住吉大社宿院頓宮/O）

注1） /Tは東京圏のデータ、/0は大阪圏のデータを示す。
注2） 表の語数は、各タイプ内での語数であり、%は代表的キーワードの総数に対する割合を示す。
注3） ハッチは20%を超える語数。

図7－10　代表的キーワードによる「居心地の良い場所」のタイプ－1

「同伴者が居る場所」／「一人の場所」

(8)同伴者の様態

		東京圏 語数	東京圏 %	大阪圏 語数	大阪圏 %
同伴者の「である」					
ア1	居る	14	50%	14	67%
ア2	居ない	16	73%	2	25%

・「個室感覚で飲める居酒屋さん。(略)自分たちの話は聞こえるが、他人のは聞こえにくい。」
(ぞんぶん(新宿3丁目付近の店)/T)
・「バンドの練習スタジオ。ドラムをたたいている。」(Studio 24/T)
・「(略)友達と話をしたり、テレビを見たりもする。」(自遊空間(漫画喫茶)/T)

・「買い物ついでに、家族でぼんやり海を眺めたり、寄ってくる鳩にえさをやったり、
ゆっくり時間が流れる場所」(ATCの海辺の空間/O)
・「(略)子供とのびのびと時間を過ごしたい時に役に立つ場所。」(東京都現代美術館/T)
・「子供と昼寝やボール遊び」(馬見丘陵公園/O)
・「道路沿いにベンチとテーブルが並べてある。(略)子供とひなたぼっこしに行く。」
(MY CAL明石のベンチ)
・「二人でベンチ(イラスト)でボーッとする。」(駒沢公園/T)
・「ホテルから見える海を見ながら、二人で座って(イラスト)語ると落ち着く。」
(タラサ志摩/O)

・「(略)犬を連れて散歩をする。」(多摩自然遊歩道/T)
・「愛犬の散歩コース。(略)晴れ・雨・曇りによって、様々な景色を見ることができる。
自分のペースを取り戻せるだけでなく、昔にタイムスリップしたような感覚。
自然を体で感じられるって、心から気持ち良い。」
(田が広がる真ん中の道(コンクリート)/O)
・「犬の散歩コースに使っていた、何もない原っぱ。青空を一人占めできる。」
(自宅からちょっと歩いた原っぱ/O)

・「(略)音楽を聞きながら一人でドライブする。」(湾岸道路/T)
・「一人で車を運転している時は、他のわずらわしいことを考えないでいられる。(略)」
(自分の車の中/T)
・「休日の夜道を一人、自転車で(イラスト)デザートを買いに行く。」(近所のｽｰﾊﾟｰ/T)

「同伴者と他者が居る場所」

(11)同伴者の様態×他者の様態

		東京圏 語数	東京圏 %	大阪圏 語数	大阪圏 %
同伴者の「である」					
ア1	居る	12	43%	3	14%
ア2	居ない	6	27%	2	25%
他者の「する」					
F	話す	0	0%	1	50%
G3	お酒を飲む	0	0%	1	33%
H1	歩く	6	40%	0	0%
他者の「である」					
ア1	居る	2	25%	0	0%
イ1	多い	10	29%	2	13%
ク7	多様	2	100%	0	0%
ク11	おしゃれ	0	0%	1	100%

・「一人(イラスト)。太った豆腐屋のオヤジ、
焼き鳥屋のおばちゃん。」
(二子新地商店街/T)
・「私一人で出かけるときの定番。(略)人も
多いけれど(略)結構平気。」
(新宿南口かいわい/T)
・「(略)必ず一人になれる。(略)鳥が生息
している。(略)鳥の鳴き声も静けさの中で
響くので、とても落ち着く。」
(葛西臨海公園鳥類園/T)

・「(略)たまに奥さんとレイトショーを見に
行く。適度に人が来ている。」
(109シネマズ港北/T)
・「子供と一緒に、ベビーカーや自転車で廻る。
(略)男女問わず、たくさんの人が居る。(略)
散歩している人(略)いろいろな人が居る。」
(グリーンロード/T)
・「子供を連れて週末散歩に行く。たくさんの
子供達が遊んでいる。(略)」
(たけのこ公園/T)
・「子連れでも気軽に行ける美術館。似たような親子が多く、知らない人とお話することがあったり。
(略)」
(いわさきちひろ美術館)

・「友人とカウンターで(略)たわいのない話をしている。全て満席でにぎやか。」
(新宿の居酒屋/T)
・「友人と一緒か、一人でお酒を飲む、雑談など。周りは同様、お酒を飲む、雑談など。(略)」
(カラスlnあばらや/O)
・「(略)おしゃれな感じの人も多く、(略)一人で本を読んだり、または友人と楽しい語らいで
過ごしたり、(略)」(ARTE/O)

・「(略)川原は犬の散歩や子連れの人でいっぱい。(略)私も犬の散歩の一人。(略)川には鯉が
泳ぎ、早朝には鷺がいることもある。」(小金井野川川原/T)

「同伴者と管理者が居る場所」

(12)同伴者の様態×管理者の様態

		東京圏 語数	東京圏 %	大阪圏 語数	大阪圏 %
管理者の「である」					
ア1	居る	0	0%	1	33%

・「一人でも数人でも、ゆったり落ち着く。
赤いユニフォームを着たおばちゃん店員が十数人。(略)」
(船場センター地下の純喫茶/O)

・「楕円形の大きい丸テーブル。その中で店員さんが
てきぱき働いている。一人で居てもまったく気にならない
ないし、(略)」(イノダコーヒー三条店/O)

「みんなの場所」

(14)同伴者の様態×他者の様態×管理者の様態

		東京圏 語数	東京圏 %	大阪圏 語数	大阪圏 %
同伴者の「である」					
ア2	居ない	0	0%	3	38%
管理者の「である」					
ア1	居る	0	0%	1	33%
ク10	親切	2	100%	0	0%
他者の「する」					
F	話す	1	50%	0	0%
G3	お酒を飲む	0	0%	1	33%
他者の「である」					
ア1	居る	0	0%	1	50%
ク7	多様	0	0%	1	100%

・「手作りのケーキやランチメニューが美味しくて、たまにママ同士息抜きに行く。子供が騒いでも温か
く見守ってくれる雰囲気があり、店員もとても親切。(略)」(ラグラス/T)

・「京都市芸の学生が中に居て話し相手。常連さん、たまにいい年のおっちゃん。一人とか二人でまった
りと飲む。最近、生ビール導入。お家みたいにほっとする場所(略)」(木屋町Violin/O)
・「関大の学生とか、サラリーマンとか、おじいさんとか、ヤンキーとか。ころころかわるマスター。主に一
人で午前まで飲む。電車が通ると映らないテレビ、水道なし、電気パクリ、トイレは裏の川。(略)」
(壹津百味亭/O)
・「友人と一緒か、一人でお酒を飲む。周りは同様お酒を飲む。大体空いていて、一人で居ることが多
い。カウンターの店で、店員は3～4人。」(Cue's Bar/O)

(9)他者の様態

		東京圏 語数	東京圏 %	大阪圏 語数	大阪圏 %
他者の「する」					
E1	読む	0	0%	4	100%
F	話す	1	50%	1	50%
G3	お酒を飲む	0	0%	1	33%
H1	歩く	9	60%	3	100%
I1	遊ぶ	25	81%	1	100%
他者の「である」					
ア1	居る	6	75%	1	50%
イ1	多い	24	71%	12	80%
ク11	おしゃれ	2	100%		0%

「他者が居る場所」

・「私は読書、書籍の購入。周りは同様に読書。(略)椅子・机が設置してあり、座って本が読めるので便利。」
(ジュンク堂書店アバンザ店/O)

・「私は勉強、読書、手紙を書いていることが多い。周りは雑談しているか、一人の人は読書。」
(God Mountain(喫茶店)/O)
・「(略)家族連れなどがたわいのない話をして通りすぎていくのを、ベンチに座ってボーッと眺める。」
(根津神社/T)

・「(略)犬の散歩の人。(イラスト)」(明石の大蔵海岸/O)
・「(略)犬の散歩の人。(イラスト)」(淀川河川敷/O)
・「公園ではないのに犬を散歩させている人が居たり、子供連れの人が居たり。なんか和む感じ。
掃除も行き届いていてきれい。」(恵比寿ガーデンプレイス/T)
・「(略)来ている人達も、ここに安らぎを求めて歩いている感じがする。」(根津朝倉彫塑館/T)

・「(略)外人の子供がよく遊んでいて、その景色は外国に居る気分になる。」(広尾の公園/T)
・「整備された公園のベンチでお弁当を食べながら、魚釣りをしている人や通行人をぼんやり見ている。」
(菊名池公園/T)
・「(略)他にもバーベキュー、ジョギング、サイクリング、釣りをする人も居る。」(多摩川の川原/T)
・「(略)他にも散歩する人やスポーツを楽しむ人も居て、そういう人を見るのも楽しい。」
(絵画館前の銀杏並木と明治神宮外苑/T)
・「(略)親子がキャッチボールをしていたり、マラソンをしている人が居たり、サンドイッチをバスケットに入れて
レジャーシートを敷いて食べていたりする。犬もたくさん散歩している。(略)」(航空公園/T)

・「(略)おしゃれな若い人も多く、その人ごみにまぎれているだけでもウキウキする。」(表参道/T)
・「人が多く、活気がある。(略)」(お台場/T)
・「(略)おばあちゃんから赤ちゃんまで、たくさんの人が来ていて、人間ウォッチングが楽しい。」(極楽温泉/O)

「管理者が居る場所」

(10)管理者の様態

		東京圏 語数	東京圏 %	大阪圏 語数	大阪圏 %
管理者の「である」					
ア1	居る	1	100%	1	33%
ウ7	魅力的	3	100%	3	100%
ク10	親切	0	0%	1	100%

・「礼儀正しい対応。確かな腕。」(船橋の床屋ミスノ/T)
・「(略)いつものマスター。」(下北沢の喫茶店/T)
・「(略)お店の人もマニアック」(中野駅周辺ブロードウェイ/T)
・「(略)マスター夫婦もすごくいい人達でお気に入り。」(カフェセロ弾きのゴーシュ/O)
・「歯医者さんは親切で、感じが良い。」(賀来歯科/O)

「他者と管理者が居る場所」

(13)他者の様態×管理者の様態

～該当例なし～

注１）/T は東京圏のデータ、/0 は大阪圏のデータを示す。
注２）表の語数は、各タイプ内での語数であり、%は代表的キーワードの総数に対する割合を示す。
注３）ハッチは 20%を超える語数。

図７－11　代表的キーワードによる「居心地の良い場所」のタイプ－2

7.3.4. 居心地が良い理由における「する」「なる」「である」

居心地が良い理由についても同様に分類・整理を行った結果、表7−6、表7−7、および図7−12〜図7−17を得た。表7−6は、得られた『場所』の様態表現を示しており、自由記述表現と比較して、自分の「なる」が著しく多く得られ、逆に他者の「する」や物的要素の「である」は少なくなっている。物的要素の「である」は、自由記述表現同様、最も多く得られている。居心地が良い理由についても『場所』の様態以外の表現が見られ、『場所』の位置・距離が大半を占めている。自宅（ファーストプレイス）や職場（セカンドプレイス）、通勤ルート上などから近いことや、都市生活上便利な位置にあることは、それだけで『場所構築』の理由になり得ることを示している。また、得られた代表的キーワードの構成を見ると、物的要素の「である」の主語では、雰囲気・アフォーダンス・風景・緑などが多く、述語では、ある・多い・見られる・リラックスできる・美しい・静かなどが多く得られた。特にアフォーダンスは突出して多く得られている（図7−16、および図7−17）。

さらに、自由記述表現と同様に、居心地が良い理由についても、代表的キーワードが含まれる『場所』について、「する」「なる」「である」の組み合わせからみた「居心地の良い場所」のタイプ分類を行った（図7-18、および図7-19）。「居心地が良い理由」のタイプにおいても「〜なれる場所」「〜で〜なれる場所」など、「なる」を含むタイプが多い。7.3.3.で述べたように、「なる」は「する」や「である」と比較して、上位かつ抽象的な『場所』の様態であり、「なる」を含むタイプが多いことは、居心地が良い理由による「居心地の良い場所」のタイプが、評価的な意味合いを持っていることと符合する。また、同伴者・他者・管理者など、自分以外のヒトに関する表現が含まれる「居心地の良い場所」のタイプも見出され、「〜と過ごす」「〜な他者や管理者が居る」ことが『場所』の性質を形成し、自分以外のヒトの様態が積極的に評価されている。

表7−6　居心地が良い理由における「する」「なる」「である」

自分の「する」　自分の「なる」

			述語						合計
			「する」		「なる」		「である」		
			東京圏	大阪圏	東京圏	大阪圏	東京圏	大阪圏	
主語	ヒト	自分	83	55	199	97	−	−	434
			138		296		−		
		同伴者	2	0	2	1	11	14	30
			2		3		25		
		他者	3	0	7	0	24	11	45
			3		7		35		
		管理者	0	0	0	0	2	4	6
			0		0		6		
	モノ	物的要素	−	−	−	−	359	204	563
			−		−		563		
合計			143		306		629		1078

同伴者の「である」

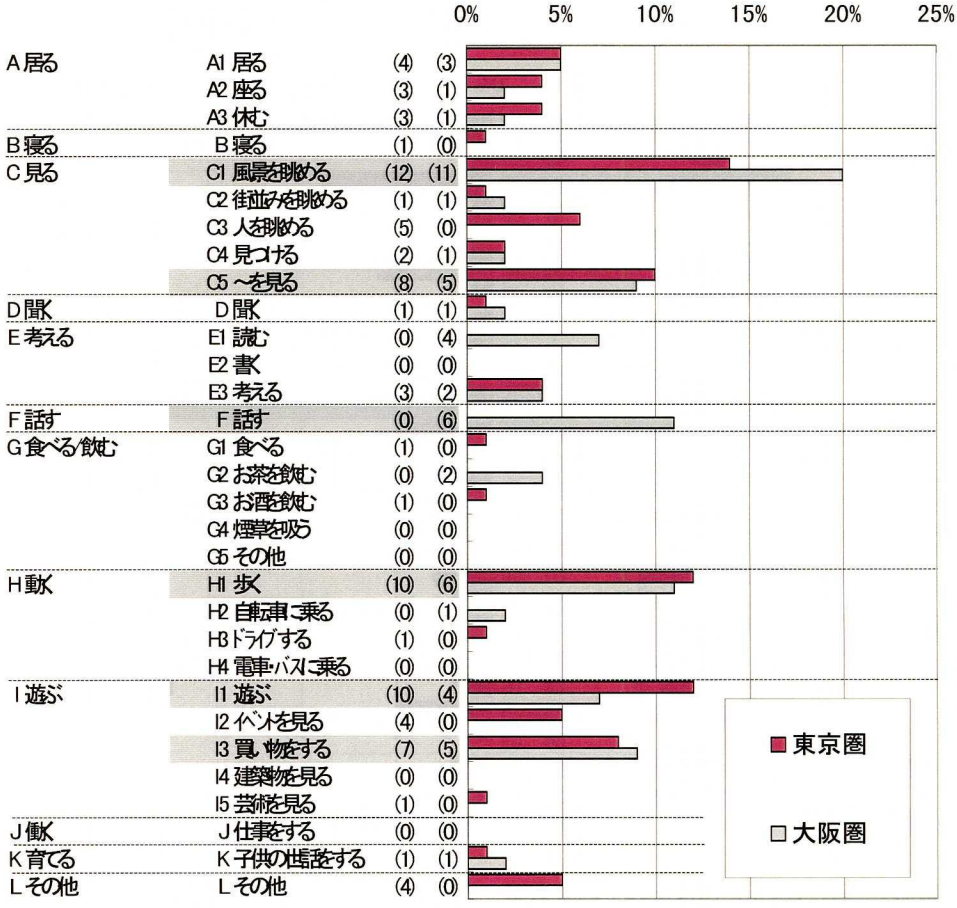
他者の「である」

物的要素の「である」（述語）

物的要素の「である」（主語）

表7−7　居心地が良い理由における「する」「なる」「である」以外の表現

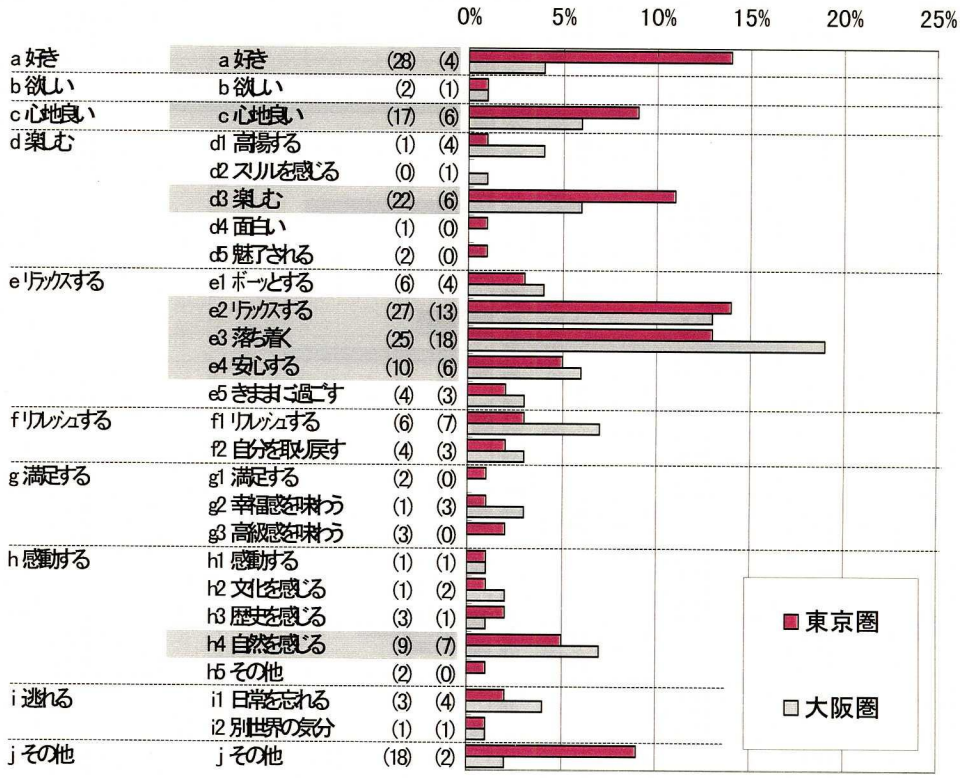
	表現の例	東京圏				大阪圏				全体			
		語数	%	語数	%	語数	%	語数	%	語数	%	語数	%
場所の位置・距離	「家から近い」「会社に近い」など	16	48%	33	100%	16	53%	30	100%	32	52%	61	100%
場所の知名度	「トレンディスポット」「あまり知られていない」など	2	6%			0	0%			0	0%		
日常行動	「生活の風景の一部」など	1	3%			0	0%			1	2%		
過去の様態	「子供の時からの風景」「住みやすかった」など	2	6%			2	7%			4	7%		
時間の限定・非限定	「春」「アジサイの時期」「どんな天気でも」など	4	12%			6	20%			10	16%		
頻度	「年に一度」など	0	0%			1	3%			1	2%		
補足説明	「良い」「行ける」「都会にしては」など	8	24%			5	17%			13	21%		
		33	100%	33	100%	30	100%	30	100%	61	100%	61	100%



注 1)　（　）（　）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた語数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた自分の「する」の語数（表 7－6（P150）参照）に対する割合を示す。

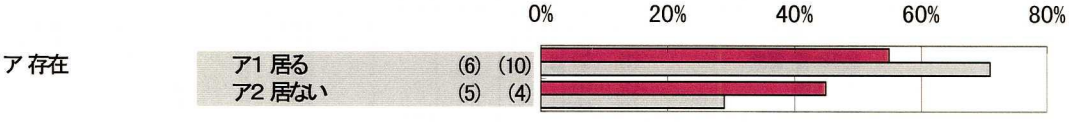
図 7－12　居心地が良い理由における自分の「する」



注 1)　（　）（　）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた語数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた自分の「なる」の語数（表 7－6（P150）参照）

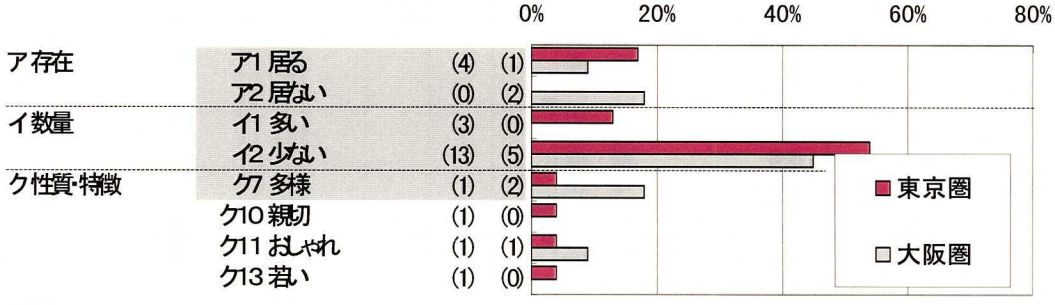
図 7－13　居心地の良い理由における自分の「なる」



注 1)　（　）（　）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた語数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた同伴者の「である」の語数（表 7－6（P150）参照）に対する割合を示す。

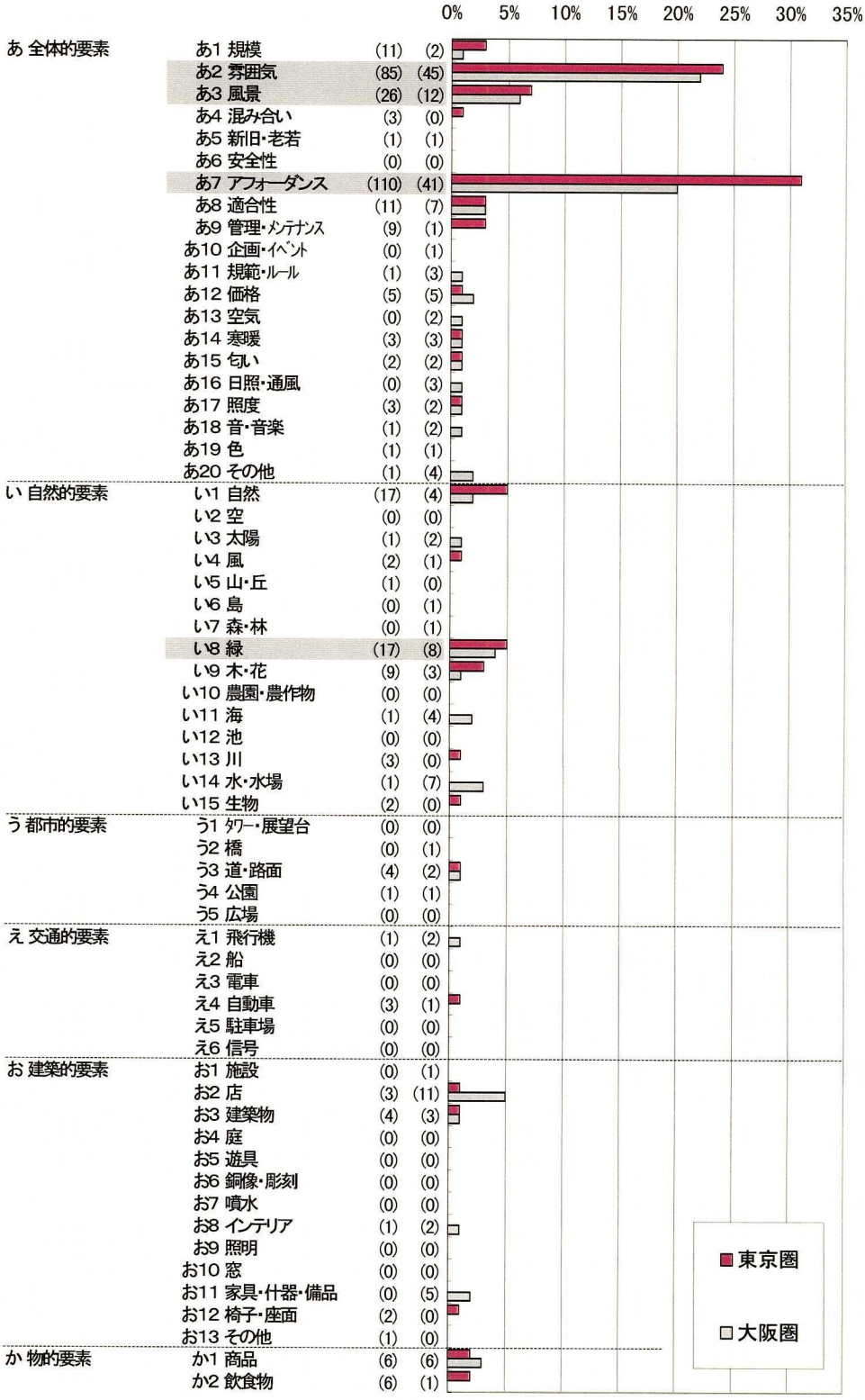
図 7－14　居心地の良い理由における同伴者の「である」



注 1)　（　）（　）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた語数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた他者の「である」の語数（表 7－6（P150）参照）に対する割合を示す。

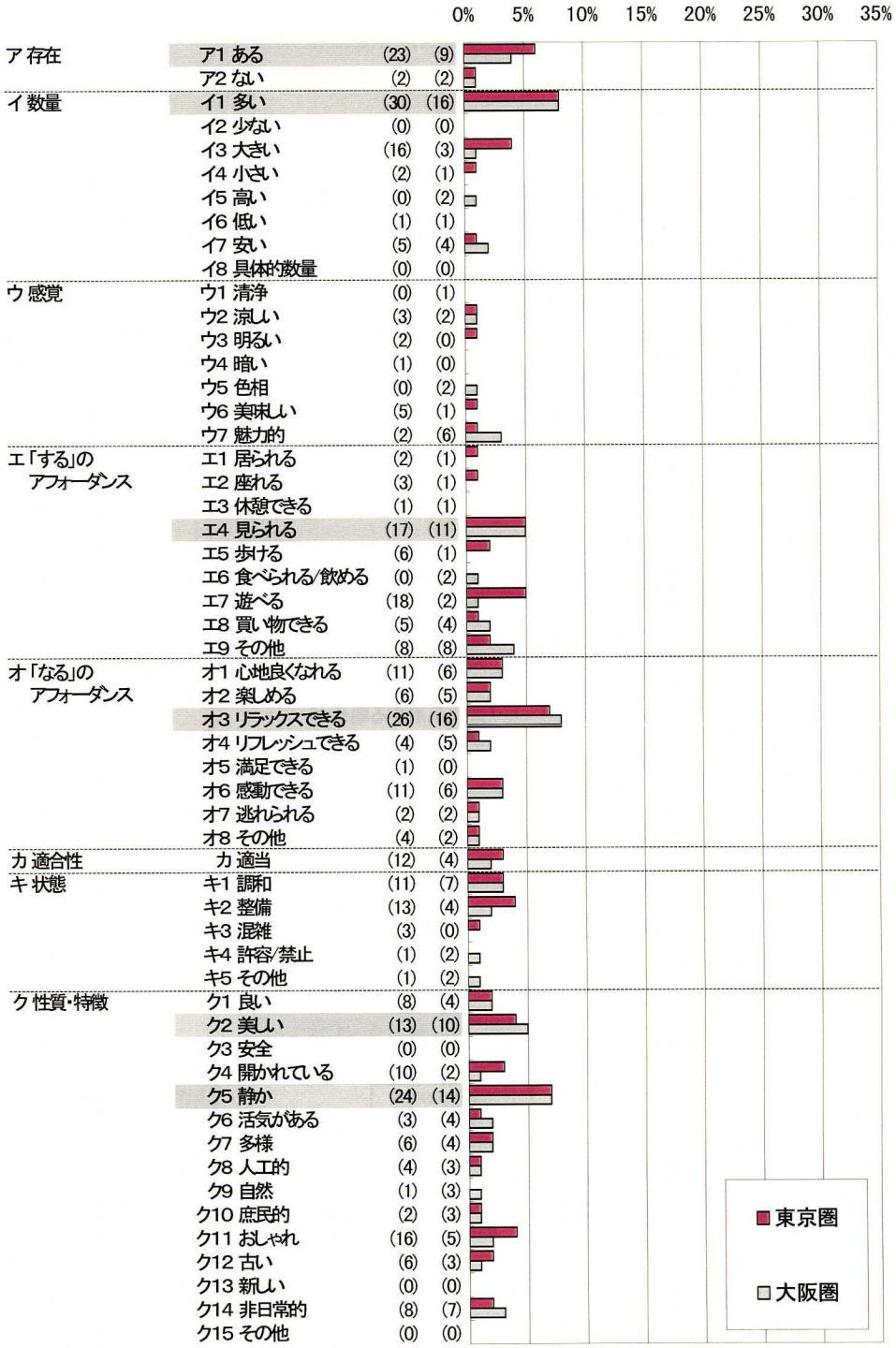
図 7－15　居心地の良い理由における他者の「である」



注 1)　（　）（　）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた語数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた物的要素の「である」（主語）の語数（表 7－6（P150）参照）に対する割合を示す。

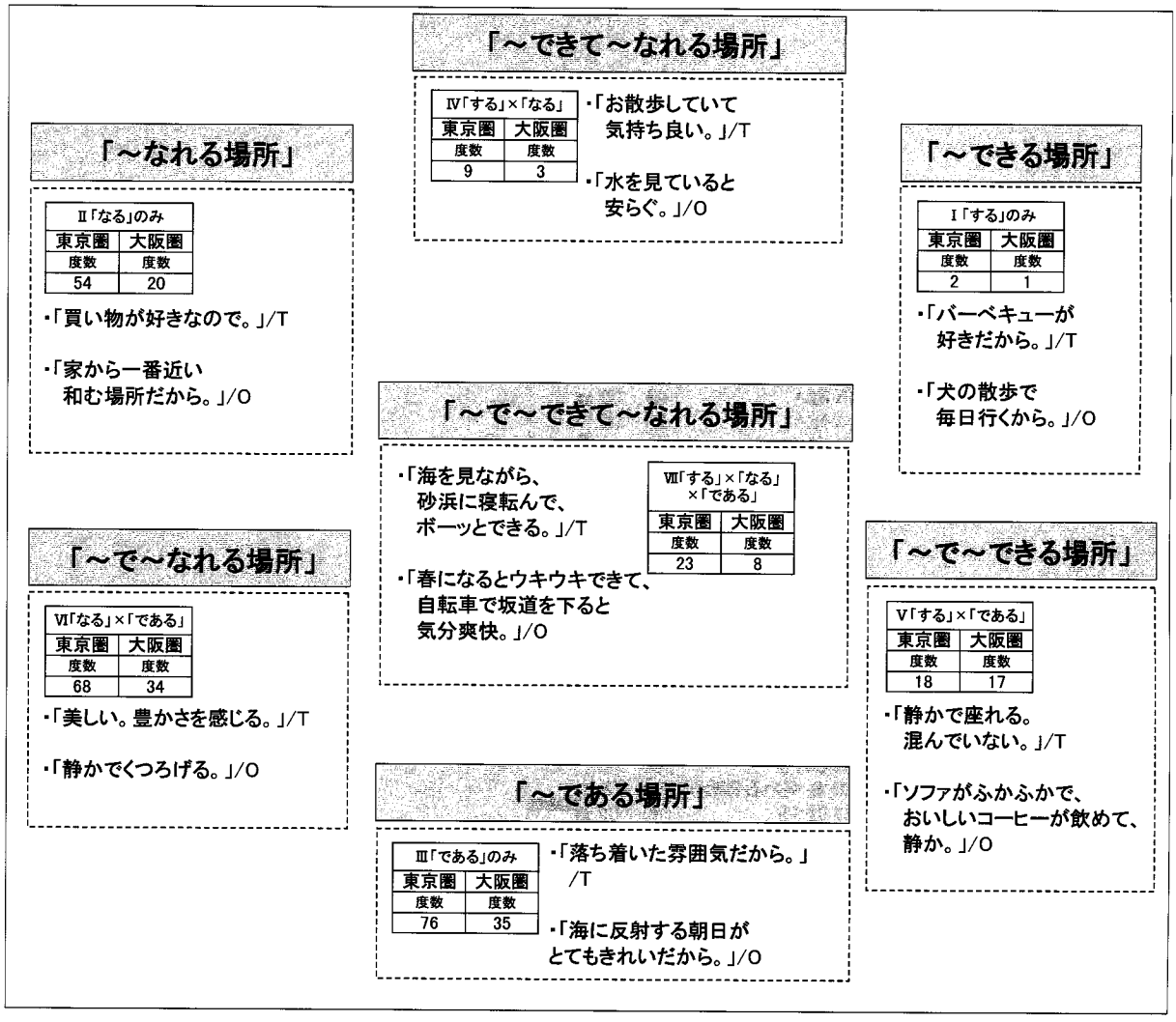
図 7－16　居心地の良い理由における物的要素の「である」（主語）



注 1)　（　）（　）内はそれぞれ東京圏・大阪圏で得られた語数。

注 2)　グラフは、東京圏・大阪圏で得られた物的要素の「である」（述語）の語数（表 7－6（P150）参照）に対する割合を示す。

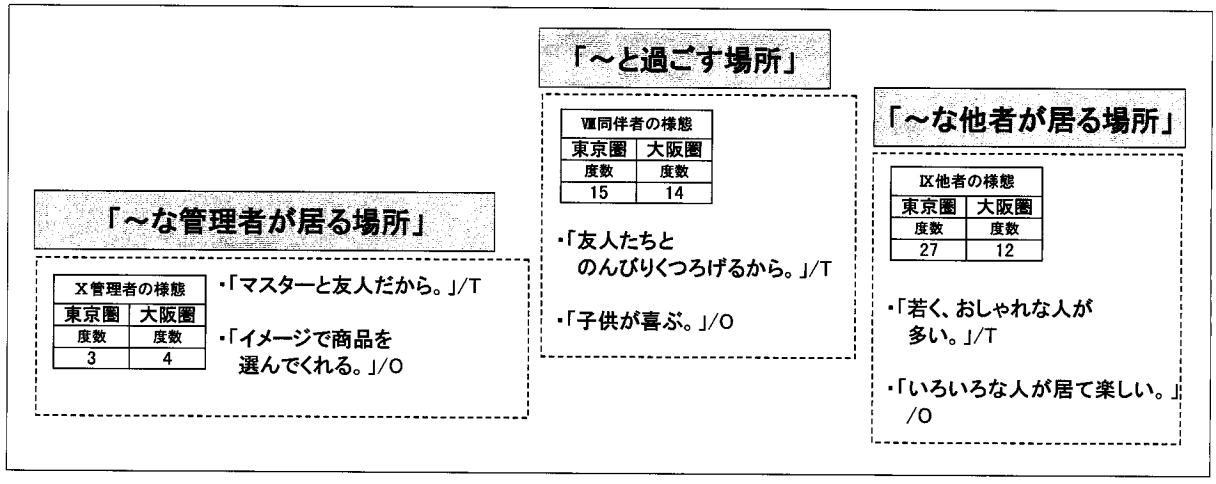
図 7－17　居心地の良い理由における物的要素の「である」（述語）



注1)　/Tは東京圏のデータ、/0は大阪圏のデータを示す。

注2)　表の語数は、各タイプ内での語数であり、%は代表的キーワードの総数に対する割合を示す。

図7－18　居心地が良い理由による「居心地の良い場所」のタイプ-1



注1)　/Tは東京圏のデータ、/0は大阪圏のデータを示す。

注2)　表の語数は、各タイプ内での語数であり、%は代表的キーワードの総数に対する割合を示す。

図7－19　居心地が良い理由による「居心地の良い場所」のタイプ-2

7.3.5. 『場所』の様態表現における『場所のアフォーダンス』

このように、『場所』の自由記述表現、および居心地が良い理由について、「する」「なる」「である」の分類軸を設定して考察を行ったところ、ヒトとモノの両方を主語として取り得る『場所のアフォーダンス』に関する表現が得られ、特に居心地が良い理由において多く得られた。6.4.において、活動や工夫のしやすさが『場所構築』のしやすさや都市生活の質を形成していることを述べたが、これらのしやすさも「可能性」の一種と考えることができ、『場所のアフォーダンス』ととらえることができる。『場所』の様態表現においても、自分の「する」「なる」と物的要素の「である」の関係で表現される『場所のアフォーダンス』を見出すことができ、特に理由による『場所』の様態表現から多く得られることがわかった。

『場所のアフォーダンス』表現は、自由記述表現の述語からは、「エ 4 見られる」「オ 1 心地良くなれる」「オ 2 楽しめる」が多く得られ、居心地が良い理由の述語からは、「エ 4 見られる」「オ 3 リラックスできる」が多く得られた。これらは、オフィスワーカーが、構築された「居心地の良い場所」に見出している主要な『場所のアフォーダンス』であると言える。特に、居心地が良い理由による「居心地の良い場所」のタイプは、それぞれの「居心地の良い場所」のタイプにおける『場所のアフォーダンス』を分類したものと解釈できる。オフィスワーカーが「居心地の良い場所」に付与する意味は、建築・都市施設用途による分類では取り扱うことが難しかったが、本章で「居心地の良い場所」の自由記述表現および居心地が良い理由を考察することにより、『場所』の記述や評価に関するキーワードの体系を得ることができ、オフィスワーカーが『場所』に付与する意味を考察する方向性を示すことができた。

7.4. まとめ

本章では、「する」「なる」「である」の分類軸を設定し、「居心地の良い場所」表現を考察することで、「居心地の良い場所」の記述および評価に関するキーワードを得ることができ、「居心地の良い場所」のタイプ分類を行うことができた。タイプ分類からは、「居心地の良い場所」における人間-環境関係を読み取ることができ、これは、建築・都市施設用途による分類では見出せない、オフィスワーカーが『場所』に付与する意味の体系であると言える。

自由記述表現からは、主に「居心地の良い場所」の記述に関するキーワードの体系、および「居心地の良い場所」のタイプが得られ、居心地が良い理由からは「なる」を多く含む、「居心地の良い場所」の評価に関するキーワードの体系、および評価的な「居心地の良い場所」のタイプが得られた。

オフィスワーカーが構築する『場所』の記述や評価は、『場所』の様態表現のキーワード、および『場所のアフォーダンス』を用いて説明でき、そのように表現される『場所』を生

活圏の中に多数構築できることは、オフィスワーカーの都市生活の質の向上に直接的に貢献すると考えられる。

建築および都市の計画者・デザイナーが、あらかじめ建築・都市施設用途や機能を設定し、計画・デザインすることは一般的な方法であり、これまで一定の成果を挙げて来た。また計画者・デザイナーは、時として「斬新」「特徴的」「個性的」な空間を計画・デザインするという特殊な職能（わざ）も求められてもいる。しかし、1.1.2.で述べたように、「計画者の想定しない使われ方」に代表される、計画者・デザイナーと都市生活者の乖離（GAP）が未だ問題になっている。本章で得た知見はただちに建築および都市の計画・デザインに適用され得るものではないが、建築および都市の計画・デザインの際には、現実的な生活者であるオフィスワーカーによる『場所』の様態表現に関する基礎的知見が取り入れられ、オフィスワーカーがふんだんに『場所のアフォーダンス』を発見でき、多くの多様な『場所』を構築できる都市環境が実現されるべきであると考える。

注

注１）「居心地の良い場所」に対してオフィスワーカーが付与する意味は多様であるが、まずは「居心地が良い」という包括的な意味であり、そのような評価であるととらえることができよう。2.2.8.で述べたように、オフィスワーカーに「居心地の良い場所」を訊ねることによって『場所』を収集し、考察を行うことは、「オフィスワーカーによって認知された『場所』」を考察対象としていることに他ならない。本論文では、1.3.で述べたように、「認知された『場所』」が表現されているものを『場所表現』と呼び、「場所の名前」、『場所』の自由記述表現、居心地が良い理由などの回答が含まれる。このうち、「あなたが何をしているか。」「まわりの様子はこんなふうだった。」などが表現されることを『場所』の様態表現と呼んでいる。

注２）この調査方法は、このような利点を持つ反面、「調査協力者の負担が大きい」という欠点も併せ持っている。この点を勘案して、できる限り分かりやすいアンケートの構成・表現を心がけて調査を行ったところ、5.3.1.で述べたように、回収率は比較的高かった。

注３）林田（文１、文２）は、認知心理学的な調査手法によって、人々の景観評価の階層性を明らかにし、被験者に評価する理由を聞くことにより、上位かつ抽象的な評価が得られるとしている。

注４）近年では、建築および都市の計画・デザインの現場において、画像・映像・描画やCADが頻繁に用いられるが、そのような状況においても言語は未だ重要な記述・伝達手段であり、オフィスワーカー自らが、言語という最も簡便な方法で表現した『場所』を考察することは、建築および都市の計画・デザインにおける作り手と生活者の接点を確保し、1.1.2.で述べた建築および都市の計画者・デザイナーと都市生活者の間に存在する乖離（GAP）を解消する上でも意義があると考える。

注５）2.2.6.で述べたように、Canter（文３）は、場所を「行為と物理的形態が溶け合う一連の体験」ととらえ、場所の記述には「その場所に対してどう感じる（feel）か」「その場所で何をする（do）か」という２つの構成要素があり、互いに関連していると述べている。

注６）文献４および文献５を参照し、表７－３を導いた。

注７）高橋（文６）は、「環境には「物理的次元（自然・人工物）」「対人的次元（種々の集まり）」「社会文化的次元（規範・制度・慣習）」の３つの次元がある。」と述べている。本論文においても、「物理的次元」に相当する「物的要素に関する表現」、「対人的次元」に相当する「同伴者・他者・管理者に関する表現」に着目して『場所表現』の考察を行った。「社会文化的次元」に関しては、オフィスワーカーが構築する「居心地の良い場所」を扱ったので、特定かつ一部の「社会文化的次元」に焦点をあてたと言える。

注８）これらの「環境の時間的側面」などの項目は、既に第５章で考察した項目であるが、自由記述表現にこれらが含まれていることは、調査協力者であるオフィスワーカーによって、これらの項目が認識されており、構築された『場所』の性質と関係が深いことの現われと考えられる。

注９）表計算ソフトウェアとして、Microsoft 社製 Excel を使用し、語の並べ替えはソート機能を使用した。この方法は、既に室ら（文７）によって、評価用語の選定を目的として、自由記述文の分析に適用されている。

注10）KJ法の実践にあたり文献８、文献９を参照した。ただし、表計算ソフトウェアを使用したことなど、

完全なKJ法とは言えず「KJ法的」と記した。

注11) アフォーダンスはJames J. Gibson(文10)による造語であり、「環境が動物に提供する価値(文11)」「環境が備えている行動的ポテンシャル(文12)」「環境の中に実在する、知覚者が能動的に発見する意味や価値(文13)」などと解釈されているが、研究の対象・目的等によって用法に若干の違いがある。本論文では、1.3. で述べたように、オフィスワーカーが生活環境の中に「～できる」「～という気持ちになれる」などの「可能性」を発見し、その「可能性」を使いこなすことで『場所』が構築されている場合、この意味での「可能性」を『場所のアフォーダンス』と呼んでいる。

注12) 高橋(文14)は「これからのアメニティ評価においては(物理的環境・対人的環境・社会文化的環境)の3つの次元を等しくかつ次元相互の影響まで考慮に入れることが絶対的条件になろう。」と述べ、アメニティ評価の絶対条件として「物理的環境」「対人的環境」「社会文化的環境」とそのバランスを強調している。また、舟橋(文15)は、人間－環境関係を考える上で、「関係の様態」「関係の質」「関係の時間」があり、「関係の様態」として(建築)決定論から(相互)浸透論までが存在するとしている。『場所』の様態を議論する場合、『場所』を次元や要素に分類して考察することは重要であるが、一方で『場所』を成立させている本質は、要素や次元間のバランスや、相互浸透的な人間と環境の関係性であり、それらが一体となって『場所』が現出していると考えられる。本論文においては、以上の見地から一端キーワードに分類しながらも、表現された『場所』が持つ一体的な性質が、キーワードによってどのように表現されているのかを確認するため、改めて統合作業・タイプ分類を行った。

注13) 既に、室ら(文7)が、自由記述文の接続詞に着目して、入語・出語の分析を行っている。

参考・引用文献

文1) 稲田直樹, 近江隆, 北原啓司, 林田大作：河川景観評価構造の解明におけるレパートリーグリッド法の有用性　認知心理学的手法を用いた河川景観評価構造の解明(その1), 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東) F-1, pp137-138, 1993年

文2) 林田大作, 近江隆, 北原啓司, 稲田直樹：サブキーワードにおける個人の評価構造モデルの解明　認知心理学的手法を用いた河川景観評価構造の解明(その2), 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東) F-1, pp139-140, 1993年

文3) David Canter, 宮田紀元・内田茂　訳：場所の心理学, pp74－75, 彰国社, 1982年

文4) 益岡隆志・田窪行則：基礎日本語文法 - 改訂版 - , くろしお出版, 1992年

文5) 影山太郎：動詞意味論, くろしお出版, 1996年

文6) 日本建築学会編：人間環境系のデザイン, pp24, 彰国社, 1997年

文7) 室恵子, 須永修通, 伊藤直明：居住環境を対象とした評価用語の選定に関する基礎的検討, 心理評価の抽出方法に関する研究(3), 日本建築学会計画系論文報告集, No.524, pp61 - 68, 1999年

文8) 川喜田二郎：発想法, 中公新書, 1967年

文9) 川喜多二郎：続・発想法, 中公新書, 1970年

文10) James J. Gibson, 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻　訳：生態学的視覚論, サイエンス社,

1985 年
文 11) 佐々木正人：アフォーダンス－新しい認知の理論，pp60，岩波書店，1994 年
文 12) 日本建築学会編：建築・都市計画のための空間計画学，pp81，井上書院，2002 年
文 13) 日本建築学会編：人間環境学，pp66，朝倉書店，1997 年
文 14) 高橋鷹志：現代のエスプリ 327，pp56－64，至文堂，1994 年
文 15) 舟橋國男：建築決定論と相互浸透論,すまいろん季刊通巻第 63 号，財団法人住宅総合研究財団，2002 年
文 16) 間宮陽介：同時代論，岩波書店，1999 年
文 17) 鈴木毅：人の「居方」からの環境デザイン，建築技術，1993 年 07，09，1994 年 02，04，06，08，10，12，1995 年 02，04，06，10，12
文 18) 隅谷維子，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：環境との関わり方からみた場所の意味とその構造に関する研究，1999 年日本建築学会近畿支部梗概集
文 19) 松本康寛，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：他者との関係に着目した居方と都市の場所に関する研究，2000 年日本建築学会近畿支部梗概集
文 20) 岩田紀：快適環境の社会心理学，ナカニシヤ出版，2001 年

第８章　総括および今後の課題

8.1. 各章の要約

第 1 章では、本論文の導入部として、現代のわが国の都市生活において日常的に感じる「場所が無い」という感覚とその段階について触れ、建築および都市の計画・デザインの立場から、計画者・デザイナーと都市生活者の乖離（GAP）が存在することを示した。しかし、環境行動論的視点に立つと、そのような状況においてもなお、生活環境の中に「可能性」を発見し、使いこなし、意味づけることによって『場所』を作る、『場所構築』という都市生活者の行動が見られ、とりわけオフィスワーカーは子供や高齢者に比べてこの傾向が強いとの考えから、本論文においてオフィウワーカーの『場所構築』を中心的に取り扱うことを示した。また、サードプレイス、アフォーダンスなどの概念・用語を取り上げ、『場所構築』との関係を示した。

第 2 章では、建築および都市の計画・デザイン、および環境行動論の視点から既往研究を整理し、参照しながら本研究に関する主な論点を述べた。また、本研究で取り組むべき４つの課題を示した。

第 3 章では、オフィスワーカーが構築する『場所』のうち、職場（セカンドプレイス）周囲に構築される『場所』をサードプレイスと位置づけて調査・考察した。東京都心の対照的な二つの職場（神田、および品川）周囲に構築されるサードプレイスは、二つの職場周囲の物理的・社会的な環境の差異の影響を受け、対照的な様相を呈したが、一方で共通するサードプレイスも見られ、オフィスワーカーの基本的なサードプレイスも明らかになった。また、職場周囲のサードプレイス構築と職場周囲の歩きまわり行動の相補的関係性も示すことができた。職場周囲には、広場や公開空地などのパブリックスペースが整備されているが、これらはオフィスワーカーのサードプレイスとして構築されることが少なく、この点は建築および都市の計画・デザイン上の課題として抽出された。

第 4 章では、第 3 章に引き続き、神田から品川へ職場移行したオフィスワーカーの『場所構築』の変容に焦点をあてて考察を行った。職場周囲のサードプレイス構築、および歩きまわり行動を個人単位に考察し、それぞれのパタンとその特徴を見出し、『場所構築』がどのように変容したかを、職場周囲の生活との関係を念頭に整理した。また、働く環境は、職場移行だけではなく、職務移行・人生移行などの個人状況の変化などオフィスワーカー側の変化も関係するとの考えから、これらの要因も論点に加え、環境移行と『場所構築』の変容、生活の変容を総合的に考察した。

第 5 章では、職場周囲に構築される『場所』から、オフィスワーカーの生活圏に構築される『場所』へと調査・考察対象の範囲を広げ、東京圏・大阪圏という、わが国における二大都市圏に居住・勤務するオフィスワーカーの「居心地の良い場所」を調査・収集し、考察した。考察から、オフィスワーカーの代表的な「居心地の良い場所」が明らかになり、それらの生活圏上の位置、居住年数との関係を明らかにした。また、「居心地の良い場所」を訪れる頻度、「居心地の良い場所」における滞在時間、同伴者と『場所構築』との関係も明らかにした。

第6章では、「居心地の良い場所」構築のきっかけと、環境への働きかけを考察した。主な『場所構築』のきっかけはオフィスワーカー自身の活動であり、無目的的な歩きまわりや目的外の活動などがきっかけとなっていることを示し、構築された『場所』における種々の環境への働きかけとその内容を明らかにした。また、これらのきっかけによって構築される『場所』、これらの働きかけが見られる『場所』も示した。これらの環境行動論的要因は、東京圏と大阪圏で差異が認められ、両都市圏における人間―環境関係の特徴が示された。また、第3章・第4章で取り扱った職場移行のケースを再度取り上げ、職場移行後の新環境へ慣れるための工夫に見られる働く環境への働きかけを考察し、「居心地の良い場所」における環境への働きかけとの比較を行った。

第7章では、オフィスワーカーによる「居心地の良い場所」の様態表現を取り扱い、言語学的知見を参照して「する」「なる」「である」という分類軸を設定し、『場所表現』を考察した。自由記述文の考察により『場所』の様態表現のキーワードが得られ、『場所』の記述に関するキーワードの体系として整理された。また、「居心地の良い場所」における人間－環境関係が考察でき、「居心地の良い場所」のタイプ分類が可能となった。さらに、居心地が良い理由の考察の考察からも『場所』の様態表現のキーワードが得られ、『場所』の評価に関するキーワードの体系として整理され、評価的な「居心地の良い場所」のタイプ分類が可能となった。『場所のアフォーダンス』に関するキーワードは自由記述表現、居心地が良い理由の双方から得られ、特に居心地の良い理由からが多く得られた。本章で行った『場所』の様態表現に関する基礎的考察は、『場所』における人間－環境関係や、『場所のアフォーダンス』を考察する一つの方向性を示すものである。

第8章は、各章の要約を行い、本研究の成果を確認し、今後の展開と課題を示した。

8.2. 本研究の成果

本研究の成果は、以下の8点に集約される。

①計画的に開発された現代的なまちと、下町的な界隈性を残す近代的なまちにおける職場周囲のサードプレイス、およびサードプレイス構築が明らかになった。オフィスワーカーは、職場周囲に「よく行く場所」「寄り道する場所」「リフレッシュする場所」「自分の場所」などのサードプレイスを構築しており、これらはオフィスワーカーの職場周囲での生活の質を形成している。

②職場周囲における歩きまわり行動とサードプレイス構築との相補的関係性が示された。特に、自由な歩きまわり行動は「寄り道する場所」や「自分の場所」などの構築と相補的な関係を有している。

③職場移行に伴う職場周囲のサードプレイス構築の変容が明らかになった。下町的な界隈性を残す近代的なまちから計画的に開発された現代的なまちへ職場移行した場合、職場周囲のサードプレイス構築は縮小傾向にあり、職場周囲には職場の延長的な性質

を持つセミサードプレイスが構築されやすい。また、小規模かつ単一機能の勤務オフィスが前者の環境に存する場合、「セカンドプレイスからサードプレイスへの仕事の持ち出し」が見られ、大規模かつ複合機能のオフィスビルが後者の環境に存する場合、「サードプレイスからセカンドプレイスおよびセミサードプレイスへの仕事以外の活動の持込み」が見られる。

④オフィスワーカー側の変化である個人状況の変化の視点から、働く環境の移行、および生活の変容がとらえられた。オフィスワーカーにとっての働く環境は、物理的・社会的・生活的要素から構成され、それらの移行は職場移行だけでなく、職務移行・人生移行などの個人状況の変化も含まれる。

⑤オフィスワーカーの生活圏に構築される「居心地の良い場所」および、頻度・滞在時間・同伴者との関係が明らかになった。また、東京圏と大阪圏におけるこれらの要因の差異も示された。

⑥「居心地の良い場所」構築のきっかけと、構築された「居心地の良い場所」における環境への働きかけ、働く環境における環境への働きかけが明らかになった。また、東京圏と大阪圏におけるこれらの要因の差異も示された。

⑦「居心地の良い場所」の様態表現において、「する」「なる」「である」の分類軸は、人間－環境関係を考察し、記述された「居心地の良い場所」のタイプ分類を行う上で有用であることを確認した。

⑧同様に、本分類軸が『場所のアフォーダンス』を考察し、評価的な「居心地の良い場所」のタイプ分類を行う上でも有用であることを確認した。

8.3. 今後の課題と展開

以下に今後の課題と展開の概要を示す。

①本論文では、まず『場所構築』が活発な都市生活者を調査・考察すべきとの考えから、都市生活者の中でも若年のオフィスワーカーが構築する『場所』を中心的に扱った。しかし、都市はもとよりオフィスワーカーのみの生活の場ではなく、異なる年齢・職業・立場・文化の人々が入り混じっており、都市の公共的な『場所』を議論する場合、『場所構築』が活発な都市生活者が構築する『場所』が『場所構築』が活発でない都市生活者にとってどのような意味を持つのかを議論する必要がある。すなわち、さらに幅広い年齢層のオフィスワーカーの『場所構築』、およびオフィスワーカー以外の都市生活者の『場所構築』を調査・考察する必要がある。

②本論文では、職場（セカンドプレイス）周囲における『場所構築』、および職場移行に伴う『場所構築』の変容を調査・考察したが、自宅（ファーストプレイス）周囲においてもの『場所構築』は活発であると考えられ、自宅周囲における『場所構築』、および転居に伴う『場所構築』の変容を調査・考察する必要がある。

③本論文では、東京都港区港南（品川）を「計画的に開発された現代的なまち」のケーススタディとして調査・考察したが、調査時においては品川のまちは整備途中であった。まちの整備が完了した後には、職場周囲の『場所構築』および職場周囲での生活もさらに変容していると考えられ、継続的・二次的な調査・考察が求められる。

④本論文では、オフィスワーカーの生活圏に構築される『場所』として、「居心地の良い場所（または「お気に入りの場所」）」を調査・考察したが、オフィスワーカーが都市生活を送る上では、「居心地の悪い場所（または「気に入らない場所」）」も現実には存在すると考えられる。「居心地の悪い場所」の調査・考察を行い、「居心地の良い場所」との比較などから、『場所構築』に関するさらに幅広い知見の抽出を行う必要がある。

⑤本論文では、東京圏および大阪圏に居住・勤務するオフィスワーカーの「居心地の良い場所」の調査・考察を行い、両都市圏における人間－環境関係の差異を示したが、居住地・職場、年齢、性別、家族構成、ライフスタイルなどのオフィスワーカーの個人属性と『場所構築』との関係を詳細に論じることは出来なかった。この点について、さらに踏み込んだ調査・考察が求められる。

⑥本論文は、「する」「なる」「である」の分類軸を設定し、『場所』の様態表現に関する基礎的な考察を行ったが、抽出されたキーワードに対して数量的な扱いを施すことによって、さらに説明力の高い、有用な『場所』の様態表現の構造が把握される可能性を持っている。この視点での検討が求められる。

⑦本論文では、オフィスワーカーの『場所』の様態表現の基礎的考察から、『場所』における人間－環境関係や『場所のアフォーダンス』の考察の方向性を示した。今後、具体的かつ個別の『場所』における人間－環境関係や『場所のアフォーダンス』に関する発展的かつ詳細な考察が求められる。

⑧さらに、生態学的に観察・収集される『場所』と、本論文で得た認知され、表現された『場所』との関係性を議論し、特に『場所のアフォーダンス』が実際に構築されている『場所』において如何なる効果をもたらしているかなどの実証性を検討する必要がある。『場所のアフォーダンス』を操作することによる都市生活への影響は、未だ理論的段階であり、実証的研究の蓄積が望まれている。建築および都市の計画・デザインは、もとより実践であるが、都市生活の質の向上を目指すという目的があったとしても、理論を安易に適用することは、建築および都市の計画者・デザイナーと生活者の間に存する乖離（GAP）を深めることにもなりかねない。この点は、本論文の範疇をはるかに超えたものであるが、長期的な課題と展開の方向としてここに記したい。

参考・引用文献一覧

研究業績

参考・引用文献一覧

1）日本建築学会　編：人間－環境系のデザイン，彰国社，1997年

2）Gary T. Moore, D. Paul Tuttle, Sandra C. Howell，小林正美　監訳，三浦研　訳：環境デザイン学入門　その導入過程と展望，鹿島出版会，1997年

3）舟橋國男：環境行動論の視点から，建築雑誌/Vol.112，No.1407，pp.008－011，日本建築学会，1997年

4）舟橋國男：建築決定論と相互浸透論，すまいろん季刊通巻第63号，pp.34-38，財団法人住宅総合研究財団，2002年

5）鈴木毅：人の「居方」からの環境デザイン，建築技術，1993年07，09，1994年02，04，06，08，10，12，1995年02，04，06，10，12

6）日本建築学会編：建築・都市計画のための空間計画学，井上書院，2002年

7）日本建築学会編：建築・都市計画のための空間学事典，井上書院，2000年

8）高橋鷹志：現代のエスプリ327，至文堂，1994年

9）高橋鷹志，長澤泰，西出和彦　編：環境と空間，朝倉書店，1997年

10）日本建築学会編：人間環境学，pp66，朝倉書店，1997年

11）日本建築学会編：環境心理調査手法入門，技報堂出版，2000年

12）日本建築学会　環境工学委員会環境心理生理小委員会，建築計画委員会環境行動研究小委員会：第5回　環境心理生理・環境行動研究小委員会　「合同研究会“まち”環境へのまなざし」　配布資料，2002年

13）Gordon Cullen，北原理雄　訳：都市の景観，鹿島出版会，1975年

14）Christopher Alexander，平田翰那　訳：パタン・ランゲージ，鹿島出版会，1984年

15）Jan Gehl，北原理雄　訳：屋外空間の生活とデザイン，鹿島出版会，1990年

16）Clare Cooper Marcus and Carolyn Francis，湯川利和・湯川聰子　訳：人間のための屋外環境デザイン，鹿島出版会，1993年

17）Clare Cooper Marcus and Wendy Sarkissian，湯川利和　訳：人間のための住環境デザイン，鹿島出版会，1989年

18）Irwin Altman，Setha M. Low：Place Attachment　(Human Behavior and Environment vol.12)，Plenum Pless，1992

19）Jon Lang，高橋鷹志　監訳，今井ゆりか　訳：建築理論の創造　環境デザインにおける行動科学の役割，鹿島出版会，1992年

20）Herman Hertzberger，森島清太　訳：都市と建築のパブリックスペース，鹿島出版会，1995年

21）多木浩二：生きられた家　経験と象徴，岩波現代文庫，1984年

22）中村雄二郎：場所トポス，弘文堂思想選書，1988年

23）伊東豊雄：アンドロイド的身体が求める建築，季刊思潮1988NO.1＜場所＞をめぐって，思潮社，1988年

24) Yi-Fu Tuan, 小野有五・阿部一　訳：トポフィリア　人間と環境，せりか書房，1992 年
25) Yi-Fu Tuan, 山本浩　訳：空間の経験，ちくま学芸文庫，1993 年
26) Edward Relph, 高野岳彦，阿部隆，石山美也子　訳：場所の現象学，ちくま学芸文庫，1999 年
27) 間宮陽介：同時代論，岩波書店，1999 年
28) 齋藤純一：公共性，岩波書店，2000 年
29) 金森修：漏れた心、溜まる場所，感性哲学２　「住む」の哲学，日本感性工学会感性哲学部会
30) Dolores Hayden, 後藤春彦，篠田裕見，佐藤俊郎　訳：場所の力，学芸出版社，2002 年
31) 木田元，栗原彬，野家啓一，丸山圭一郎：コンサイズ 20 世紀思想事典　第 2 版，三省堂，1997 年
32) 土居義武監修：建築キーワード，住まいの図書館出版局　住まい学体系 099，星雲社 1999 年
33) Kurt Lewin, 猪股佐登留　訳：社会科学における場の理論，誠信書房，1956 年
34) Edward T. Hall, 日高敏隆・佐藤信行　訳：かくれた次元，みすず書房，1970 年
35) S. A. Mednic, J. Higgins and J.Kirschenbaum　著，外林大作，島津一夫編著：心理学概論　行動と経験の探究，誠信書房，1979 年
36) David Canter, 宮田紀元・内田茂　訳：場所の心理学，彰国社，1982 年
37) W.H.Ittelson, H.M.Proshansky, L.G.Rivlin, G.H.Winkel, 望月衛・宇津木保　訳：環境心理の応用，彰国社，1977 年
38) David Canter:デイヴィド・カンターが語る環境心理学の発展，建築雑誌/Vol.116, No.1467, 日本建築学会，2001 年
39) Edward Krupat, 藤原武弘　訳：都市生活の心理学　環境と人間行動シリーズ２，西村書店，1994 年
40) 菅俊夫　編著：環境心理の諸相，八千代出版，2000 年
41) 山本多喜司・Seymour Wapner　編・著：人生移行の発達心理学，北大路書房，1991 年
42) 岩田紀：快適環境の社会心理学（現代応用社会心理学講座２），ナカニシヤ出版，2001 年
43) James J. Gibson, 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻　訳：生態学的視覚論，サイエンス社，1985 年
44) 複雑系の科学と現代思想　アフォーダンス；佐々木正人、松野孝一郎、三嶋博之，青土社，1997 年
45) 佐々木正人：アフォーダンス－新しい認知の理論，岩波書店，1994 年
46) Edward S. Reed, 細田直哉　訳，佐々木正人　監修：アフォーダンスの心理学　生態心理学への道，新曜社，2000 年
47) 佐々木正人：知覚はおわらない　アフォーダンスへの招待，青土社，2000 年
48) Ulric Neisser, 古崎敬・村瀬旻　訳：認知の構図，サイエンス社，1978 年
49) 太田信夫，多鹿秀継：認知心理学：理論とデータ，誠信書房，1991 年
50) 道又爾，北崎充晃，大久保街亜，今井久登，山川恵子，黒沢学：認知心理学，有斐閣アルマ，2003
51) 小橋康章：決定を支援する（認知科学選書 18），東京大学出版会，1988 年
52) Donald A. Norman, 野島久雄　訳：誰のためのデザイン?　認知科学者のデザイン原論，新曜社認知科学選書，1990 年
53) 上野直樹　編著：状況のインターフェース，金子書房，2001 年

54) 上野直樹：仕事の中での学習　状況論的アプローチ，東京大学出版会，1999 年
55) William H. Whyte，柿本照夫　訳：都市という劇場，日本経済新聞社，1994 年
56) Ray Oldenburg : The Great Good Place，MARLOWE & COMPANY New York，1999
57) Ray Oldenburg：国際シンポジウム　新・都市の時代―都市のリ・デザイン/行ってみたい都市の形成―　報告書，財団法人千里文化財団，2002 年
58) 高橋勇，他：21 世紀の都市社会学，学文社，2002 年
59) 磯村英一：都市社会学研究，pp. 68-92，有斐閣，1959 年（鈴木広，高橋勇悦，篠原隆弘　編集：リーディングス日本の都市 7　都市，pp. 38-50，東京大学出版会，1985 年より）
60) 鳴海邦碩，他：都市のリ・デザイン，学芸出版社，1999 年
61) 若林幹夫：都市のアレゴリー，INAX 出版，1999 年
62) 若林幹夫：都市の比較社会学，岩波書店，2000 年
63) 町村敬志・西澤晃彦：都市の社会学，有斐閣アルマ，2000 年
64) John Clammer，橋本和孝，堀田泉，高橋英博，善本裕子：都市と消費の社会学　現代都市・日本，ミネルヴァ書房，2001 年
65) 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉：都市と都市化の社会学（現代社会学 18），岩波書店，1996 年
66) Claude S. Fischer，松本康，前田尚子　訳:都市的体験，未来社，1996 年
67) 小石原はるか：スターバックスマニアックス，小学館文庫，2001 年
68) 宮台真司：まぼろしの郊外：成熟社会を生きる若者たちの行方，朝日新聞社，1997 年
69) 川喜田二郎：発想法,中公新書，1967 年
70) 川喜田二郎：続・発想法,中公新書，1970 年
71) 益岡隆志・田窪行則：基礎日本語文法 - 改訂版 - ，くろしお出版，1992 年
72) 影山太郎：動詞意味論，くろしお出版，1996 年
73) 舟橋國男：環境行動研究におけるトランザクショナリズムに関する一考察―理論の概要並びに建築計画学との関係―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1989 年
74) 舟橋國男：環境行動研究におけるトランザクショナリズムに関する考察，日本建築学会近畿支部研究報告集，1989 年
75) 横山勝樹，高橋鷹志：空間図式の研究　その１．＜場所＞の概念による空間図式のモデル化，日本建築学会計画系論文報告集，No. 395，pp. 19 - 30，1989 年
76) 横山勝樹，今井ゆりか，高橋鷹志：建築空間の認知における方位概念の考察　空間図式の研究　その 3，日本建築学会計画系論文報告集，No. 448，pp. 81-89，1993 年
77) 李威儀，鈴木毅，高橋鷹志：台北龍山寺と周辺地域における居方・コミュニケーションの質の考察　都市空間のなかの居場所に関する研究　その 1，日本建築学会計画系論文報告集，No. 468，pp. 133 - 141，1995 年
78) 李威儀，鈴木毅，高橋鷹志：台北市興隆公園における社会的コンタクトの考察　都市空間のなかの居場所に関する研究　その 2，日本建築学会計画系論文報告集，No. 475，pp. 109 - 117，1995 年

79) 李威儀：居場所としての公共的外部空間における日・台比較考察　都市空間の中の居場所に関する研究その7，日本建築学会大会学術講演梗概集，1996年
80) 柳沢要：小学校オープンスペースにおける児童の行動領域形成について　児童の行動場面から見た空間解析に関する研究　その1，日本建築学会計画系論文報告集，No.424，pp.31 - 42，1991年
81) 柳沢要：小学校における児童と物理的環境相互の関連に関する考察　児童の行動場面から見た空間解析に関する研究　その2，日本建築学会計画系論文報告集，No.435，pp.51 - 58，1991年
82) 辻内理枝子，松田好晴，大野隆造：他者の位置による居場所選択行動の変動　―公共空間における他者の占有領域の知覚に関する研究（その1）―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1998年
83) 渡辺曜子，井上千恵，中山茂樹，服部岑生：共用空間における入居者の居場所と行為の分析―「選択性」から見た高齢者生活施設の共用空間計画に関する研究（その 1）―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1998年
84) 中村拓郎，西村信也，鈴木一也：居場所選択に見る生徒の生徒の行動特性について－打瀬中学校（教科教室型）・聖篭中学校（特別教室型）のケーススタディ　その1，日本建築学会大会学術講演梗概集，1999年
85) 鈴木一也，西村信也，中村拓郎：居場所選択に見る生徒の生徒の行動特性について－打瀬中学校（教科教室型）・聖篭中学校（特別教室型）のケーススタディ　その2，日本建築学会大会学術講演梗概集，1999年
86) 橘弘志，古賀紀江，外山義：特別養護老人ホームにおける痴呆性高齢者の経時的変化にみる居場所の形成と喪失―痴呆性高齢者の居住環境に関する研究（その2）―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1999年
87) 橘弘志，高橋鷹志：地域に展開される高齢者の行動環境に関する研究―大規模団地と既成市街地におけるケーススタディー，日本建築学会計画系論文集　第496号，pp.89－95，1997年
88) 大橋昌毅，西田徹：新潟市における環境行動的研究，日本建築学会大会学術講演梗概集，1996年
89) 西田徹：犬の散歩を通してみる地域空間の価値　新潟市における環境行動的研究　その2，日本建築学会大会学術講演梗概集，1997年
90) 西田徹・大橋昌毅・阿知波修二：新潟市における環境行動的研究　その3　―最適化行動が居住環境に果たす役割と可能性―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1998年
91) 阿知波修二・西田徹・大橋昌毅：新潟市における環境行動的研究　その4　―育児をきっかけとした生活の拡張に関する研究―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1997年
92) 西田徹・稲井智子：新潟市における環境行動的研究　その4　―郊外に居住する大学生の生活の拡張について―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1998年
93) 稲井智子・西田徹：新潟市における環境行動的研究　その5　―ちょうどいい関係の構築とそれが果たす役割―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1999年
94) 杉本陽子・柳沢要：パブリックスペースの環境行動―人の定位空間を読み解く―，日本建築学会大会学術講演梗概集，2000年
95) 李乙圭・田村昭弘・中込千穂・大橋渉：パブリックスペースにおける環境行動研究　1―山下公園のイ

メージと物的環境のアフォーダンスについて―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年
96) 大橋渉・中込千穂・李乙圭・田村明弘：パブリックスペースにおける環境行動研究　2―日常生活における山下公園の価値，日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年
97) 古賀紀江，橘弘志，外山義：施設（特別養護老人ホーム）と在宅における痴呆性高齢者の環境行動比較―痴呆性高齢者の居住環境に関する研究（その 1）―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1999 年
98) 土田亜紀，今井正次，中井隆幸，永野陽子：環境移行による物品領域の変化　小児病棟におけるケーススタディ，日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年
99) 橋本都子，翠川智子，高橋公子，大石経子，高橋鷹志，児平亜由子，宮城紀子：在宅高齢者の日常生活と地域環境との関わり　生活圏の環境行動に関する研究（1），日本建築学会大会学術講演梗概集，1997 年
100) 翠川智子，橋本都子，高橋公子，大石経子，高橋鷹志，児平亜由子，宮城紀子：在宅高齢者の対人関係と生活像　生活圏の環境行動に関する研究（2），日本建築学会大会学術講演梗概集，1997 年
101) 橋本都子，高橋鷹志：都市単身居住における行動場面の多層性―都市居住の機能と役割の再考―，人間・環境学会第 9 回発表論文集，人間・環境学会，2002 年
102) 永峰麻衣子，小谷部育子，高橋鷹志，橋本都子，岩佐明彦：「現代東京人」の居場所について―都市単身居住者の環境行動に関する研究―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1999 年
103) 永峰麻衣子，西出和彦，高橋鷹志：単身者の生活環境と仕事場所との関わり―オランダ・RANDSTAD エリアにおける調査研究―，人間・環境学会第 9 回発表論文集，人間・環境学会，2002 年
104) 西田和代，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：小学校空間における場所の価値に関する研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，1998 年
105) 隅谷維子，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：環境との関わり方からみた場所の意味とその構造に関する研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，1998 年
106) 隅谷維子，鈴木毅,木多道宏，舟橋國男：好きな場所にみる環境との関わり方の研究，人間・環境学会第 6 回発表論文集，人間・環境学会，1998 年
107) 松本康寛，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：他者との関係に着目した居方と都市の場所に関する研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，2000 年
108) 横田昌也，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：転居後の住環境構築の様相とそれに関わる情報環境に関する研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，1998 年
109) 阿部美佳子，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：転居初期における生活環境資源認識に関する研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，1999 年
110) 坂田義康：生活環境情報の構造と認識特性に関する研究―案内行動におけるプロトコル分析を通して―，大阪大学大学院建築工学専攻　建築・都市計画論領域　研究室年報，2001 年
111) 小貫勅子，外山義，大村虔一：屋外空間における着座行為に関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集，1998 年
112) 佐藤将之，高橋鷹志：園児の関係構築と共存する遊び集合についての考察～園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究　その１～，日本建築学会計画系論文集 第 562 号，PP.151－156，2002

年
113) 渡辺秀俊，高橋鷹志，太田真折：人間－環境系における着座姿勢の働きに関する研究　その2　外部空間における休息姿勢，日本建築学会大会学術講演梗概集，1996年
114) 小林茂雄，荻原史郎，中村芳樹，村松陸男：路上行動の行いやすさに与える環境要因と対人的要因，日本建築学会計画系論文報告集，No.515，pp.97 - 103，1999年
115) 古賀紀江・橘弘志・外山義：施設（特別養護老人ホーム）と在宅における痴呆性高齢者の環境行動比較―痴呆性高齢者の居住環境に関する研究（その1）―，日本建築学会大会学術講演梗概集，1999年
116) 厳爽，石井敏，外山義，橘弘志，長澤泰：グループホームにおける空間利用の時系列的変化に関する考察　「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究（その1），日本建築学会計画系論文集　第523号，pp.155－161，1999年
117) 厳爽，石井敏，橘弘志，外山義，長澤泰：介護体制と入居者の生活構成の関わりに関する考察　「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究（その2），日本建築学会計画系論文集　第528号，pp.111－117，2000年
118) 外山義，厳爽，橘弘志，石井敏，長澤泰：入居者の空間利用の時系列的変化　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その1），日本建築学会大会学術講演梗概集，1998年
119) 橘弘志，厳爽，外山義，石井敏，長澤泰：介護体制が入居者の生活に与える影響　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その2），日本建築学会大会学術講演梗概集，1998年
120) 厳爽，石井敏，橘弘志，外山義，長澤泰：異なる環境におけるなじみの形態　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その3），日本建築学会大会学術講演梗概集，1998年
121) 外山義，厳爽，橘弘志，石井敏，長澤泰：なじみの定着とその様態　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その4），日本建築学会大会学術講演梗概集，1999年
122) 橘弘志，厳爽，外山義，石井敏，長澤泰：痴呆レベルと空間利用傾向の関わり　痴呆性老人のグループホーム環境へのなじみに関する研究（その3），日本建築学会大会学術講演梗概集，1999年
123) 橘弘志，外山義，高橋鷹志：特別養護老人ホーム入居者の個人的領域形成と施設空間構成―個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究　その2―，日本建築学会計画系論文集　第523号，pp.163－169，1999年
124) 河辺潔・鳴海邦碩・久隆浩：都市界隈における＜なじみ＞に関する基礎的考察～大阪梅田をケーススタディに～，日本建築学会近畿支部研究報告集，1993年
125) 讃井純一郎，乾正雄：レパートリーグリッド発展手法による住環境評価構造の抽出―認知心理学に基づく住環境評価に関する研究（1）―，日本建築学会計画系論文報告集，No.367，pp.15 - 22，1986年
126) 讃井純一郎，乾正雄：個人差および階層性を考慮した住環境評価構造のモデル化　認知心理学に基づく住環境評価に関する研究（2）―，日本建築学会計画系論文報告集，No.374，pp.55 - 60，1986年
127) 稲田直樹，近江隆，北原啓司，林田大作：河川景観評価構造の解明におけるレパートリーグリッド法の有用性　認知心理学的手法を用いた河川景観評価構造の解明（その1），日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）F-1，pp137-138，1993年

128) 林田大作，近江隆，北原啓司，稲田直樹：サブキーワードにおける個人の評価構造モデルの解明　認知心理学的手法を用いた河川景観評価構造の解明（その 2），日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）F-1，pp139-140，1993 年

129) 乾正雄，中村芳樹，窪田豊信，丸山玄，李眞淑：オフィスの快適性評価に関する研究，日本建築学会計画系論文報告集，No. 399，pp. 29 - 35，1989 年

130) 志水英樹，鈴木信弘，山口満：駅前広場における景観の多様性と好ましさに関する研究，日本建築学会計画系論文報告集，No. 445，pp. 63 - 71，1993 年

131) 室恵子，須永修通，伊藤直明：言語選択法と評定尺度法による温熱環境評価の比較　心理評価の抽出方法に関する研究（1），日本建築学会計画系論文報告集，No. 489，pp. 81 - 88，1996 年

132) 室恵子，須永修通，伊藤直明：温熱環境評価における言語選択報の有効性に関する検討　心理評価の抽出方法に関する研究（2），日本建築学会計画系論文報告集，No. 511，pp. 61 - 67，1998 年

133) 室恵子，須永修通，伊藤直明：居住環境を対象とした評価用語の選定に関する基礎的検討，心理評価の抽出方法に関する研究（3），日本建築学会計画系論文報告集，No. 524，pp. 61 - 68，1999 年

134) 山内一晃，吉田勝行：建築形態構成における「概念語」と「形態語」の関係性について，日本建築学会計画系論文報告集，No. 559，pp. 137 - 144，2002 年

135) 李善永，宗方淳，永田久雄：高齢者と若年者による駅階段の視覚的評価に関する研究，日本建築学会計画系論文報告集，No. 552，pp. 85 - 92，2002 年

136) 金栄□，高橋鷹志：隙間型集合住宅における環境と行動の相互浸透関係の考察，日本建築学会計画系論文報告集，No. 473，pp. 51 - 59，1995 年

137) 林田大作：認知心理学的手法を用いた河川景観評価構造の解明，東北大学修士学位論文，1993 年

研究業績

審査付き論文

(1) 林田大作，舟橋國男，木多道宏：職場周囲に構築されるサードプレイスに関する研究—神田地域・品川地域の比較分析—，日本都市計画学会学術研究論文集　No. 38－3, pp433-438, 2003 年 11 月

(2) 林田大作，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：環境移行に伴う職場周囲の場所構築の変容に関する研究—神田地域から品川地域への職場移行をケーススタディとして—，日本建築学会計画系論文集　第 576 号，pp67-74, 2004 年 2 月

(3) 林田大作，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：『場所』の様態表現に関する基礎的分析—都市生活者の「居心地の良い場所」に見る人間－環境関係の研究—，日本建築学会計画系論文集

海外発表論文

(1) Daisaku Hayashida, Takeshi Suzuki, Michihiro Kita, Kunio Funahashi: Study on People-Environment Relationship through Expressions of "Comfortable Places" in Cities, Proceedings of the 34th Annual Conference of The Environmental Design Research Association, pp229, Minneapolis, USA, May, 2003

学術集会発表

(1) 林田大作，近江隆，北原啓司，湯本修：最大仰角と距離を用いた景観シーン分析　—広瀬川の景観構造　その 1—, 日本建築学会大会学術講演梗概集(東北) F-1, pp237-238, 1991 年 9 月

(2) 稲田直樹，近江隆，北原啓司，林田大作：河川景観評価構造の解明におけるレパートリーグリッド法の有用性　認知心理学的手法を用いた河川景観評価構造の解明（その 1），日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）F-1，pp137-138，1993 年 9 月

(3) 林田大作，近江隆，北原啓司，稲田直樹：サブキーワードにおける個人の評価構造モデルの解明　認知心理学的手法を用いた河川景観評価構造の解明（その 2），日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）F-1，pp139-140，1993 年 9 月

(4) 林田大作，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：「居心地の良い場所」表現に見る人間-環境関係の研究　～東京近郊の社会人の事例から～，日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）E-1，pp991-992，2002年8月

(5) 林田大作，鈴木毅，木多道宏，舟橋國男：「居心地の良い場所」表現に見る環境行動の研究　～場所を知る「きっかけ」と「使いこなし」の分析～，人間・環境学会第　回大会発表論文，人間・環境学会誌　第15号Vo.8　No.1，p41，2002年10月

(6) 林田大作，舟橋國男，鈴木毅，木多道宏：職場周囲における場所の構築に関する研究～神田から品川への職場移行をケーススタディとして～，日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）E-1，pp1131-1132，2003年9月

付録

＜調査 1＞　本調査アンケートシート・配布資料
＜調査 2＞　アンケートシート・配布資料

<調査 1>

□ 調査のご説明

ご多用中、本調査にご協力いただきまして、誠にありがとうございます。

<内容物一覧>

① 調査のご説明(本紙)

② 調査票

③ ベースマップ A(神田)

④ ベースマップ B(品川)

⑤ 品川インターシティ SHOP&RESTAURANT

⑥ シール(金・銀・オレンジ・ピンク・ブルー・茶・黒)

⑦ 研究発表梗概等

本調査では、

・ 神田での日常生活、および品川での日常生活

(「③ベースマップ A」および「④ベースマップ B」の範囲内での日常生活)

・ 平日(月～金、および土・日の出勤時)における日常生活

をお伺いいたします。

本紙をお読みになったら、次に「②調査票」にご記入下さい。
なお、お手数ですが、赤・青・黄のマーカー(蛍光ペン)をご用意下さい。

本調査にご記入いただいた内容は、建築・都市計画の研究以外には使用せず、特に氏名・住所等の個人情報を無断で公表することは絶対に致しません。

(連絡先)
大阪大学大学院 工学研究科 建築工学専攻
建築デザイン学講座 建築・都市計画論領域
林田大作
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2－1
TEL/FAX 06-6879-7642 06-6879-7641
E-mail hayasida@arch.eng.osaka-u.ac.jp

調査票

※1　記入例をご参照下さい。

※2　毎年のご記入をお願いいたします。ただし、変化がない場合は、「同じ」で結構です。

※3　「記入」とは、鉛筆・ペン等で書き入れることのほか、マーカーで線を引くことを含み、「プロット」とはシールを貼ることを意味します。

お名前

番号	年	（ご説明）	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年
			平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年
	月		1　6　12	1　6　12	1　6　12	1　6　12	1　6　12	1　6　12	1　6　12	1　6　12
1	出来事	・当時～現在の出来事をご記入下さい。 （就職・退職、異動、転居、結婚、出産、生活スタイルの変化、等）		アトランタオリンピック		長野オリンピック フランスワールドカップ 品川へ引越し	2000年問題	シドニーオリンピック		ソルトレイクシティオリンピック 韓国・日本ワールドカップ
2	担当業務等 （部署・担当業務・ワークグループ・幹事・委員、等）	・当時～現在の部署・担当業務・ワークグループ・幹事・委員、等をご記入下さい。								
3	習い事・社会活動、等	・平日、定期的に行う習い事や社会活動、等があればご記入下さい。								
4	日常生活上 重点をおいていること （日常生活の目的）	・以下から4つ選択し、記入して下さい。 ①会社の業務 ②会社の人との交流 ③会社以外の人との交流 ④自分の時間 ⑤家族との交流 ⑥ランチタイム ⑦アフター5 ⑧通勤時間・通勤距離 ⑨その他（具体的に）	1位 2位 3位 4位	1位 2位 3位 4位	1位 2位 3位 4位	1位 2位 3位 4位	1位 2位 3位 4位	1位 2位 3位 4位	1位 2位 3位 4位	1位 2位 3位 4位
5	1週間の生活パタン	・「1出来事」や「2担当業務等」（特に残業・休日出勤の有無）を参照し、1週間の生活パタンをご記入下さい。	6:00 12:00 18:00 24:00 月 火 水 木 金 土 日	6:00 12:00 18:00 24:00 月 火 水 木 金 土 日	6:00 12:00 18:00 24:00 月 火 水 木 金 土 日	6:00 12:00 18:00 24:00 月 火 水 木 金 土 日	6:00 12:00 18:00 24:00 月 火 水 木 金 土 日	6:00 12:00 18:00 24:00 月 火 水 木 金 土 日	6:00 12:00 18:00 24:00 月 火 水 木 金 土 日	6:00 12:00 18:00 24:00 月 火 水 木 金 土 日

＜調査1＞

6	よく使った場所 よく行った場所	・「4日常生活上重点をおいていること」で選択した4つの項目ごとに、「よく使った場所」「よく行った場所」をいくつでも良いので、ベースマップにプロットして下さい。	1位→「金シール」 2位→「銀シール」 3位→「オレンジシール」 4位→「ピンクシール」							
7	理由	・その場所を「よく使った」「よく行った」理由として考えられることを、簡単に記入して下さい。	1位 2位 3位 4位	1位 2位 3位 4位	1位 2位 3位 4位	1位 2位 3位 4位	1位 2位 3位 4位	1位 2位 3位 4位	1位 2位 3位 4位	1位 2位 3位 4位
8	主な通勤ルート	・上記の時期にかかわらず、通勤ルート（行き・帰りの経路）として主に使った・使う道をベースマップに「赤マーカー」で記して下さい。	ベースマップに記入→「赤マーカー」							
9	その他の通勤ルート	・同様に、通勤ルートとして使ったことのある道をベースマップに「青マーカー」で記して下さい。	ベースマップに記入→「青マーカー」							
10	「散歩」「ぶらぶら」 ・「立ち寄り」「寄り道」	・上記の時期にかかわらず、一人、複数にかかわらず、「散歩」「ぶらぶら」したルートをベースマップに「黄マーカー」で記し、「立ち寄り」「寄り道」した場所をプロットして下さい。	ベースマップに記入→「黄マーカー」、ベースマップにプロット→「ブルーシール」							
11	「仕事をさぼる場所」 「気分転換する場所」	・上記の時期にかかわらず、一人、複数にかかわらず、「仕事をさぼった」、「気分転換した場所」をプロットして下さい。	ベースマップにプロット→「茶シール」							
12	「自分の場所」	・上記の時期にかかわらず、一人、複数にかかわらず、「自分の場所」と思える場所、「自分なり」の使いこなしができる場所、「自分」になれる場所、「自分」を取り戻す場所、「自分」にとって特別な意味がある場所、等があればプロットして下さい。	ベースマップにプロット→「黒シール」							
13	引越し直後の「変化」	・引越し直後、日常生活上最も大きな変化は何ですか？								
14	引越し直後の「ストレス」 「嫌なこと」	・引越し直後、日常生活上最も大きな「ストレス」や「嫌なこと」は何ですか？								
15	引越しによって得たもの	・引越しによって得たものは何ですか？								
16	引越しによって失ったもの	・引越しによって失ったものは何ですか？								
17	もう慣れましたか？									
18	慣れるにはどのくらいかかりましたか？									
19	慣れるために「工夫したこと」や「こうしようと決めたこと」はありますか？									

ご協力ありがとうございました。

<調査1>

〈調査 1〉
神田駿河台三丁目
神田小川町
神田美土代町
YMCA
神田錦町
神田多町
神田司町
神田須田町
東京電機大学
東京電気大学
共立女子高校・大学
共立講堂
明治大学
日本大学
日本大学芸術学部
錦華公園
東京国立近代美術館
平川濠
大手濠
清水濠
蔵王
御皮製
中屋酒店
大黒屋

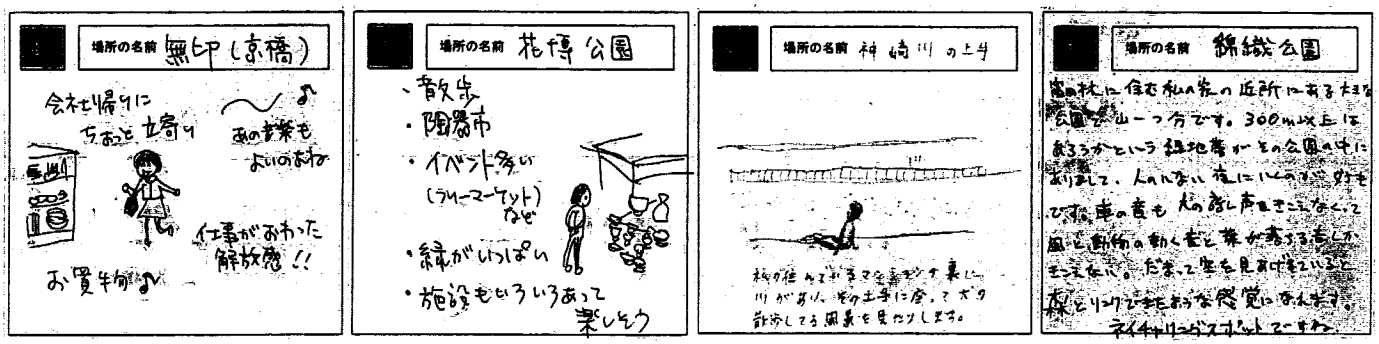
〈調査 1〉

<調査 2>

□ アンケートのご説明

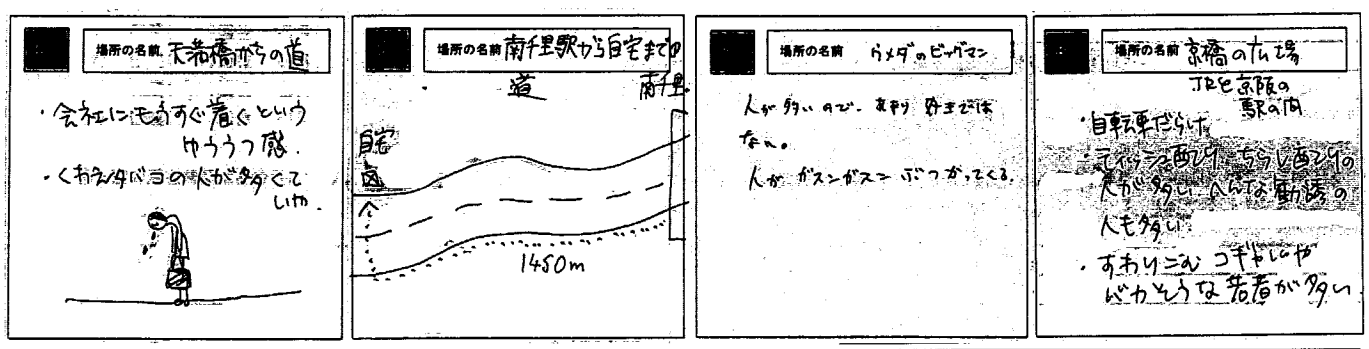
ご多用中、アンケートにご協力いただきまして、誠にありがとうございます。
私たちは、まちに暮らす人が楽しく生き生きと暮らせるように、まちでやりたいことをどんどんできるように、建築デザイン・都市デザインを見直す研究を行っています。

まちの暮らしを楽しむ上で、「ここは居心地がいいな～。」「いい感じだな～。」「ここは、とっておきのナイススポット！」「ここはわたしの場所！」などと感じる場所はありませんか？
そのような、あなた自身の「居心地の良い場所」「お気に入りの場所」を、実体験をもとにリアルに教えていただきたいのです。



「居心地の良い場所」「お気に入りの場所」の例

また逆に、まちに暮らす上で、「ここは居心地が悪いな～。」「せっかくの場所なのに惜しいな～。」「こういうことがあると行きたくなくなるな～。」「ここはわたしの場所じゃない！」などと感じる場所はありませんか？
そのような、あなた自身の「居心地の悪い場所」「気に入らない場所」も、実体験をもとにリアルに教えていただきたいのです。



「居心地の悪い場所」「気に入らない場所」の例

いずれも、「まちでのあなたの生活・行動」を想像しながら、自由に表現してみてください。

<調査 2>

□ ご回答にあたって

A3 版のカラー地図を添付いたしました。あなたのまちでの生活・行動を想像する際に、ご自由にお使いください。（もちろん、地図に入っていない場所をお答えいただいても結構です。）

「いちいち前のページに戻らないで答えたい。」という方のために、本アンケートはクリップ止めになっています。どうぞ、一度バラバラにして答えてみてください。ページ番号があるので、バラバラになっても大丈夫です。

「4 つも浮かばない！」という方は、 3 つでも 2 つでも結構です。

30～40 分くらいお時間のあるときに、落ち着いてご回答いただく方が良いと思います。仕事の合間の「リフレッシュタイム」や「ボーッとする時間」に、飲み物片手に気楽に答えてください。

お手数とは存じますが、よろしくおねがい致します。

なお、本アンケートにご記入いただいた内容は、建築・都市計画の研究以外には使用せず、特に氏名・住所等の個人情報を無断で公表することは絶対に致しませんのでご安心下さい。

（連絡先）

大阪大学大学院　工学研究科　建築工学専攻
建築デザイン学講座　建築・都市計画論領域

林田大作

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘２－１
TEL/FAX　06-6879-7642　06-6879-7641
E-mail　hayasida@arch.eng.osaka-u.ac.jp

<調査 2>

<ご氏名・現住所等についてお聞きします。>

ご氏名 _____

現住所 _____(都・道・府・県)_____(市・郡)_____(区・町・村)

_____

現住所に住み始めて(　　)年(　　)ヶ月

電話・FAX _____

E-mail Address _____

性別 □男性 □女性

年齢 _____歳

職業 □学生 □会社員 □公務員 □自営業 □主婦 □無職 □その他

勤務先(通学先) _____(都・道・府・県)_____(市・郡)

(前住所までの住所履歴を簡単に教えてください。)

(　　)歳から(　　)歳まで

_____(都・道・府・県)_____(市・郡)_____(区・町・村)に住んだ。

(　　)歳から(　　)歳まで

_____(都・道・府・県)_____(市・郡)_____(区・町・村)に住んだ。

(　　)歳から(　　)歳まで

_____(都・道・府・県)_____(市・郡)_____(区・町・村)に住んだ。

(　　)歳から(　　)歳まで

_____(都・道・府・県)_____(市・郡)_____(区・町・村)に住んだ。

(　　)歳から(　　)歳まで

_____(都・道・府・県)_____(市・郡)_____(区・町・村)に住んだ。

(　　)歳から(　　)歳まで

_____(都・道・府・県)_____(市・郡)_____(区・町・村)に住んだ。

(　　)歳から(　　)歳まで

_____(都・道・府・県)_____(市・郡)_____(区・町・村)に住んだ。

(　　)歳から(　　)歳まで

_____(都・道・府・県)_____(市・郡)_____(区・町・村)に住んだ。

(　　)歳から(　　)歳まで

_____(都・道・府・県)_____(市・郡)_____(区・町・村)に住んだ。

以前、現住所と同じ市町村に住んだことはありますか？ □ある □ない

＜調査 2＞

＜「居心地の良い場所」「お気に入りの場所」についてお聞きします。＞

①あなたにとって、

「まちの中で、居心地の良い場所」
「まちの中で、お気に入りの場所」

を、4つ教えてください。

・自宅と職場（学校）以外の場所でお答えください。
・自宅や職場（学校）の近所でも、都心やその他のまちでも結構です。
・屋内でも屋外でも結構です。
・平日・休日を問わず、まちでのあなたの生活・行動を思い起こして、自由にお答えください。

その場所の名前をお書きください。（名前が無い場合は空欄で結構です。）
また、その場所で「あなたが何をしているか。」「周りの様子はこんなふうだった。」等を、簡単な絵や文章で、自由に表現してください。

場所A	名前

場所B	名前

場所C	名前

場所D	名前

※）自宅と職場（学校）以外の場所で、「居心地の良い場所」「お気に入りの場所」が思い浮かばない場合は、⑨へお進みください。

<調査 2>

②その場所はどこにありますか？

以下の「地図の例」と「記号の凡例」を参照して、簡単な地図を書いてください。

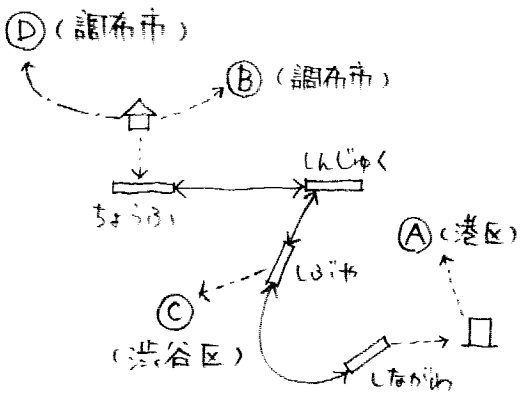
・最初に、自宅（現住所）と勤務先（通学先）を書き、交通手段を書き込んでください。

・次に、場所 A～場所 D のだいたいの位置と所在地（市・郡・区までで結構です。）を書き込んで下さい。

・最後に、場所 A～場所 D へ行くときの交通手段を書き込んでください。

・東西南北の方向や、実際の距離は、正確でなくて結構です。

地図の例



記号の凡例

自宅（現住所）
勤務先（通学先）
駅・バス停等
Ⓐ 場所 A （所在地）
Ⓑ 場所 B （所在地）
Ⓒ 場所 C （所在地）
Ⓓ 場所 D （所在地）

<交通手段>
電車・地下鉄・バス等の公共交通機関で行く
徒歩・自転車で行く
車・バイクで行く

※場所 A～場所 D の（所在地）は、市・郡・区までで結構です。

あなたの地図

<調査 2>

③どうしてその場所が、「居心地の良い場所」「お気に入りの場所」なのですか？

場所 A

場所 B

場所 C

場所 D

④どのようにしてその場所を知りましたか？（誰かに教えてもらった、たまたま通りがかった、〇〇雑誌で知った、通勤・通学路上にある、等）

場所 A

場所 B

場所 C

場所 D

⑤誰と行きますか？（一人、家族、友人、恋人、等）

場所 A

場所 B

場所 C

場所 D

⑥どのくらいの頻度で行きますか？

場所 A	□週(　　)回位	□月(　　)回位	□年(　　)回位	□もう行かない
場所 B	□週(　　)回位	□月(　　)回位	□年(　　)回位	□もう行かない
場所 C	□週(　　)回位	□月(　　)回位	□年(　　)回位	□もう行かない
場所 D	□週(　　)回位	□月(　　)回位	□年(　　)回位	□もう行かない

⑦1 回の滞在時間はどのくらいですか？

場所 A

場所 B

場所 C

場所 D

⑧その場所を、あなたにとってもっと居心地良くするために、何か工夫・対処したことはありますか？

場所 A

場所 B

場所 C

場所 D

<調査 2>

<「居心地の悪い場所」「気に入らない場所」についてお聞きします。>

⑨あなたにとって、

「まちの中で、居心地の悪い場所」
「まちの中で、気に入らない場所」

を、4つ教えてください。

・実際に行ったことがある場所をお答えください。
・自宅と職場(学校)以外の場所でお答えください。
・自宅や職場(学校)の近所でも、都心やその他のまちでも結構です。
・屋内でも屋外でも結構です。
・平日・休日を問わず、まちでのあなたの生活・行動を思い起こして、自由にお答えください。

その場所の名前をお書きください。(名前が無い場合は空欄で結構です。)
また、その場所で「あなたが何をしているか。」「何かをしたかったけど出来なかった。」「周りの様子はこんなふうだった。」等を、簡単な絵や文章で、自由に表現してください。

場所A	名前	場所B	名前

場所C	名前	場所D	名前

※)自宅と職場(学校)以外の場所で、「居心地の悪い場所」「気に入らない場所」が思い浮かばない場合は、このアンケートは終了です。最終ページへお進みください。

<調査 2>

⑩その場所はどこにありますか？

以下の「地図の例」と「記号の凡例」を参照して、簡単な地図を書いてください。

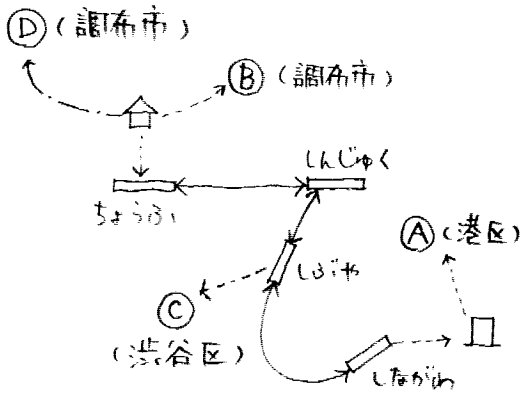
・最初に、自宅（現住所）と勤務先（通学先）を書き、交通手段を書き込んでください。

・次に、場所 A～場所 D のだいたいの位置と所在地（市・郡・区までで結構です。）を書き込んで下さい。

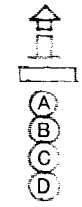
・最後に、場所 A～場所 D へ行くときの交通手段を書き込んでください。

・東西南北の方向や、実際の距離は、正確でなくて結構です。

地図の例



記号の凡例



自宅（現住所）
勤務先（通学先）
駅・バス停等
Ⓐ 場所 A （所在地）
Ⓑ 場所 B （所在地）
Ⓒ 場所 C （所在地）
Ⓓ 場所 D （所在地）

<交通手段>

→ 電車・地下鉄・バス等の公共交通機関で行く
--→ 徒歩・自転車で行く
—·—→ 車・バイクで行く

※場所 A～場所 D の（所在地）は、市・郡・区までで結構です。

あなたの地図

<調査 2>

⑪どうしてその場所が、「居心地の悪い場所」「気に入らない場所」なのですか？

場所 A

場所 B

場所 C

場所 D

⑫その場所について、「もっとこうしたらいい」というお考えがあればお書きください。

場所 A

場所 B

場所 C

場所 D

⑬どのようにしてその場所を知りましたか？（誰かに教えてもらった、たまたま通りがかった、○○雑誌で知った、通勤・通学路上にある、等）

場所 A

場所 B

場所 C

場所 D

⑭誰と行きますか？（一人、家族、友人、恋人、等）

場所 A

場所 B

場所 C

場所 D

⑮どのくらいの頻度で行きますか？

場所 A	□週（　　）回位	□月（　　）回位	□年（　　）回位	□もう行かない
場所 B	□週（　　）回位	□月（　　）回位	□年（　　）回位	□もう行かない
場所 C	□週（　　）回位	□月（　　）回位	□年（　　）回位	□もう行かない
場所 D	□週（　　）回位	□月（　　）回位	□年（　　）回位	□もう行かない

⑯一回の滞在時間はどのくらいですか？

場所 A

場所 B

場所 C

場所 D

<調査 2>

⑰その場所を、あなたにとって少しでも居心地良くするために、何か工夫・対処したことはありますか？

場所 A

場所 B

場所 C

場所 D

アンケートは以上です。
ご協力、本当にありがとうございました。

なお、研究の都合上、同様の調査をぜひ継続して行いたい場合がございます。
その際には、こちらからご連絡させていただきますが、ご協力いただけますでしょうか？
簡素な調査に努めますので、ぜひ、今後ともご協力をよろしくお願いいたします。

□YES　□NO

※本アンケートについてご意見・ご要望がございましたらご遠慮なくお書きください。

謝　辞

本研究は、大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻、建築・都市計画論領域において、舟橋國男教授の綿密なるご指導のもと、完成に到ったものです。平成12年の夏に、本研究室の門をたたき、平成13年春の博士後期課程入学以来、3年余りにわたり、終始温かいご指導とご鞭撻を賜りました。ここに深甚なる感謝の意を表します。

大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻柏原士郎教授、吉田勝行教授には、本論文の校閲の労をおとり頂き、大変有益かつ貴重なご助言をいただきました。心より感謝の意を表します。

本研究室の公私にわたる様々な場面で、常に本質的かつ高いレベルでご意見を下さった鈴木毅助教授、広い視野でのご助言を下さった木多道宏助教授には、本論文の校閲に加え、大変なご負担とご厚意をいただきました。また、李斌助手には、研究の客観性をご示唆頂き、川端修技官には研究の技術的な側面や研究環境に関する多くのご指導・ご助言をいただきました。深く感謝の意を申し上げます。さらに、建築・都市計画論に関して様々な議論を闘わせ、若さとバイタリティーで常に私を鼓舞してくれた研究室の博士後期課程・博士前期課程・学部学生の皆様にも厚くお礼を申し上げます。

大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻吉村英祐助教授、同環境工学専攻、鳴海邦碩教授、澤木昌典助教授、岡絵理子助手、および両研究室の博士後期課程の皆様には、研究室や学科の枠を超えた広範な視点でのご指導を頂き、また研究に関する情報交換・意見交換を行う機会を与えていただきました。ここに記して感謝の意を表します。

合同ゼミや学術大会などの学外活動においては、和歌山大学足立啓教授、大阪市立大学森一彦助教授、そして平成14年11月に急逝された京都大学外山義教授に、大変有益なご助言をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

本論文は、都市生活においてオフィスワーカーが構築する『場所』を研究したものですが、その背景には私自身の約8年にわたる東京での都市生活とオフィスワークにおける様々な「実感」があります。中でも大きな「実感」のひとつは、「なんとかやりくりすること」でした。一方で、建築や都市を計画・デザインすることが、本来は都市生活の質にダイレクトに貢献していなければならないのに、計画者・デザイナーの立場からも、都市生活者の立場からも、その手応えがあまりにも乏しいことに「いらだち」も感じていました。

本論文の調査に当たり、私と同様に「なんとかやりくり」しながらも、同時に「いらだち」も感じている多くのオフィスワーカーのご協力を仰ぎました。中には多大なご負担をおかけした場面もあったと思います。しかし、大多数のオフィスワーカーは快く調査に応じていただき、実に詳細に、都市生活において構築する『場所』を教えていただきました。これを研究する者の責任は当然重く、同時にこの問題に対する関心の高さを感じずにはいられませんでした。調査に応じていただきましたオフィスワーカーの皆様には、改めて御礼申し上げます。

また、本論文は東北大学および同大学院博士前期課程在籍時から持っていた、建築および都市の研究姿勢を踏襲するものでもあります。当時、「建築や都市を心理学的に考えたい」という素朴な意図に、「研究」という形と方法を与えていただき、積極的なご支援をいただいた、東北大学大学院都市・建築学専攻近江隆教授、弘前大学大学院地域社会研究科北原啓司教授には、博士前期課程修了後も一貫して「研究」に対する姿勢をご指導いただき、また多くの激励のお言葉をいただきました。ここに改めて感謝の意を表します。

本論文は、第 8 章に記したように多くの課題を抱え、今後の展開の必要性があるものと自覚しています。本論文は、この意味で一つのターニングポイントに過ぎず、これまでご指導・ご鞭撻いただいた数多くの方々のご恩に報いるためにも、今後とも益々研究に邁進したいと考えています。

末筆ながら、私の転進に対して深い理解を示してくれて、精神的・経済的に私の研究生活を支援してくれた妻いずみに、深く感謝の意を表します。彼女の理解と協力無くしては、本論文は完成はおろか、着手すらできなったことと思います。心から、「ありがとう」。

2003 年 12 月

Daisaku, HAYASHIDA

林田大作